福 岡 市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ

博 多

－ 高速鉄道関係調査(3) －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第156集

1 9 8 7

福 岡 市 教 育 委 員 会

福 岡 市

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ

博 多

－ 高速鉄道関係調査(3) －

福岡市埋蔵文化財調査報告書第156集

1 9 8 7

福 岡 市 教 育 委 員 会

序

福岡市教育委員会では、交通局の委託を受け、昭和51年以来路線内遺跡の調査と出土遺物の整理を行って参りました。発掘調査は完了しましたが、出土遺物の整理作業は現在も継続しています。

本書は昭和54年に実施した地下鉄１号線関係の博多遺跡群の調査について報告するものです。

旧博多部は中世における大陸文化流入の門戸として日本史上特異な発達をとげ、貿易陶磁を初めとする多量かつ多様な出土遺物がそれを物語っています。

この報告書が埋蔵文化財への認識を深める一助となり、また研究資料としても活用いただければ幸甚に思います。

発掘調査から資料整理に至るまで、交通局をはじめ、指導委員の先生方など多くの人々の御協力に対し深甚の敬意を表するものであります。

昭和62年３月31日

福岡市教育委員会

教育長　佐藤　善郎

例　　言

1．本報告書は、福岡市交通局（旧高速鉄道建設局）が福岡市教育委員会に委託した、高速鉄道（地下鉄）建設地内における埋蔵文化財発掘調査の報告書の第６冊目で、「福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告　Ⅵ」とする。博多遺跡群における高速鉄道関係調査の第３集めである。

2．博多遺跡群をめぐる歴史の上で不可欠な遺跡である「袖ノ湊」に関する、文献史からの研究成果の一部を、「博多袖湊関係史料(1)― 地誌編 ―」として付編に収録した。玉稿を寄せていただいた、神奈川県立金沢文庫　福島金治氏、福岡大学　佐伯弘次氏に謝意を表したい。

3．題字は、故筑紫豊先生の揮毫による。

4．本文中で用いている貿易陶磁の分類は、すべて「博多出土貿易陶磁分類表」（福岡市高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　博多 1984年　別冊）に拠っている。

5．本文の遺物実測図中に示したグラフは、土師皿、杯類の計測グラフであり、まとまった出土状態をもつ遺構について主に掲げた。実線が糸切底、破線がヘラ切底を示し、縦軸が器高、横軸が底径、口径をそれぞれ半径で表している。

6．今回報告する地下鉄祇園町工区Ｅ・Ｆ・Ｇ区の発掘調査は、浜石哲也を中心に折尾学、池崎譲二が担当し、福岡市教育委員会文化課諸氏の協力を得た。

7．本文の編集と執筆は、折尾、浜石と協議の上、池崎と森本朝子が分担して行った。

8．遺構の実測は、浜石、池崎、信行千尋、日野孝司、大橋隆司、岩切幹嘉、井手透、吉田健一、大野淳一郎、上山千重、山口美矢、樋口一明、柴田喜瑞、坂本真二、香月聡が行った。

9．遺物の実測とトレースは、森本、田崎真理、入江のり子、撫養久美子、池崎が行った。

10．写真撮影は現場関係を折尾、浜石、池崎、白石公高、宮島成昭が、遺物写真は木村厚子、萩尾朱美の協力を得て白石が担当した。

11．遺物、図面整理には以下の方々の手を煩した。

木村厚子、溝口美津代、里村寿子、山田由美子、江藤百合子、有島美江、伊藤裕子、楢崎多佳子、田尻寿麻子、今村淳子、田子森牧子、豆田陽子、下尾美成子、撫養久美子、近藤聡子、的場由利子、能美須賀子、竹下ひろみ、西原年枝、古谷宏子、萩尾朱美、安武智子、森本朝子、田崎真理、入江のり子、西嶋南紗子、日高さゆり、浜砂美津代

本 文 目 次

第１章　地下鉄路線内遺跡調査の経過…… 3
第２章　博多遺跡群における発掘調査概要…… 4
第３章　祇園町工区Ｅ・Ｆ・Ｇ区の調査…… 7
１．調査の経過……7
２．調査の組織……8
３．Ｅ区の調査……9
1)　遺構と遺構出土の遺物…… 9
2)　Ｅ区遺構外出土の遺物…… 54
４．Ｆ区の調査……63
1)　遺構と遺構出土の遺物…… 63
2)　Ｆ区遺構外出土の遺物…… 89
５．Ｇ区の調査……100
1)　遺構と遺構出土の遺物……100
2)　Ｇ区遺構外出土の遺物……131
６．まとめ……139
付編　博多袖ノ湊関係史料集 (1) 地誌編

挿　図　目　次

Fig. 1　高速鉄道路線内遺跡地図（1／75,000）…… 2
Fig. 2　博多遺跡群地形図……折込み
Fig. 3　博多遺跡群地下鉄1号線関係調査区全体図（1／1,000）……折込み
Fig. 4　E・F・G区遺構全体図（上部検出遺構）……折込み
Fig. 5　E・F・G区遺構全体図（下部検出遺構）……折込み
Fig. 6　E・F・G区土層図……折込み
Fig. 7　101号土壙出土遺物…… 9
Fig. 8　103号土壙…… 10
Fig. 9　103号土壙出土遺物…… 11
Fig. 10　104号土壙出土遺物…… 12
Fig. 11　105・106号土壙出土遺物…… 13
Fig. 12　107号土壙と107号土壙出土遺物…… 14
Fig. 13　108・153号土壙と108号土壙出土遺物…… 15
Fig. 14　109・120号土壙と109号土壙出土遺物…… 16
Fig. 15　110号土壙と110号土壙出土遺物…… 17
Fig. 16　112・113・114・119・121号土壙…… 19
Fig. 17　112・113・114号土壙出土遺物…… 20
Fig. 18　115号土壙と115・117号土壙出土遺物…… 21
Fig. 19　117号土壙…… 22
Fig. 20　118号土壙出土遺物…… 23
Fig. 21　119号土壙出土遺物…… 24
Fig. 22　120・121号土壙出土遺物…… 25
Fig. 23　122・123号土壙出土遺物…… 26
Fig. 24　124・125号土壙と125号土壙出土遺物…… 27
Fig. 25　105・126号土壙と126号土壙出土遺物…… 28
Fig. 26　129・130号土壙と129号土壙出土遺物…… 30
Fig. 27　131・168号土壙と131号土壙出土遺物…… 31
Fig. 28　133号土壙と137号土壙出土遺物…… 32
Fig. 29　141・143・146・148号土壙出土遺物…… 33
Fig. 30　146・150・151号土壙…… 34
Fig. 31　152・156号土壙と150・152・156号土壙出土遺物…… 36

Fig. 32 157号土壙と157号土壙出土遺物 …… 38
Fig. 33 158・159号土壙と158号土壙出土遺物 …… 39
Fig. 34 160・161・164・166号土壙 …… 40
Fig. 35 160・161号土壙出土遺物 …… 41
Fig. 36 162号土壙出土遺物 …… 42
Fig. 37 167号土壙と165・166・167号土壙出土遺物 …… 43
Fig. 38 168・169号土壙出土遺物 …… 44
Fig. 39 11・12号溝出土遺物 (1) …… 46
Fig. 40 12号溝出土遺物 (2) …… 47
Fig. 41 12号溝出土遺物 (3) …… 48
Fig. 42 12号溝出土遺物 (4) …… 49
Fig. 43 12号溝出土遺物 (5) …… 50
Fig. 44 12号溝土層断面図 …… 51
Fig. 45 E区遺構外出土遺物 (1) …… 55
Fig. 46 E区遺構外出土遺物 (2) …… 56
Fig. 47 E区遺構外出土遺物 (3) …… 57
Fig. 48 E区遺構外出土遺物 (4) …… 58
Fig. 49 E区遺構外出土遺物 (5) …… 59
Fig. 50 E区遺構外出土遺物 (6) …… 60
Fig. 51 201号土壙と201号土壙出土遺物 …… 63
Fig. 52 203・209・216・219・228号土壙と203号土壙出土遺物 (1) …… 64
Fig. 53 207号土壙と203号(2)・204・207号土壙出土遺物 …… 65
Fig. 54 208号土壙と208号土壙出土遺物 (1) …… 66
Fig. 55 214・217・220号土壙と208号土壙出土遺物 (2) …… 67
Fig. 56 210・214号土壙出土遺物 …… 69
Fig. 57 215号土壙と215・216号土壙出土遺物 …… 71
Fig. 58 217号土壙出土遺物 (1) …… 72
Fig. 59 217号土壙出土遺物 (2) …… 73
Fig. 60 210・218号土壙と218号土壙出土遺物 …… 74
Fig. 61 219号土壙出土遺物 …… 75
Fig. 62 220号土壙 …… 76
Fig. 63 220・224・225号土壙出土遺物 …… 77
Fig. 64 227号土壙と227・228号土壙出土遺物 …… 78

Fig. 65 229号土壙出土遺物 …… 79
Fig. 66 231・236号土壙と231号土壙出土遺物 (1) …… 80
Fig. 67 231号土壙出土遺物 (2) …… 81
Fig. 68 234号土壙と232・233・234号土壙出土遺物 …… 83
Fig. 69 236号土壙出土遺物 …… 84
Fig. 70 237号土壙と237号土壙出土遺物 …… 85
Fig. 71 239号土壙と239号土壙出土遺物 (1) …… 86
Fig. 72 239号土壙出土遺物 (2) …… 87
Fig. 73 241号土壙出土遺物と21・23号溝出土遺物 …… 88
Fig. 74 F区遺構外出土遺物 (1) …… 90
Fig. 75 F区遺構外出土遺物 (2) …… 91
Fig. 76 F区遺構外出土遺物 (3) …… 92
Fig. 77 F区遺構外出土遺物 (4) …… 93
Fig. 78 F区遺構外出土遺物 (5) …… 94
Fig. 79 F区遺構外出土遺物 (6) …… 95
Fig. 80 F区遺構外出土遺物 (7) …… 96
Fig. 81 F区遺構外出土遺物 (8) …… 97
Fig. 82 301・302・303・304・306・310号土壙出土遺物 …… 101
Fig. 83 313号土壙と312・313号土壙出土遺物 …… 102
Fig. 84 315・316号土壙出土遺物 …… 104
Fig. 85 324・326号土壙出土遺物 …… 105
Fig. 86 327号土壙と327号土壙出土遺物 …… 107
Fig. 87 332号土壙と332号土壙出土遺物 …… 109
Fig. 88 334号土壙と334・335・336号土壙出土遺物 …… 110
Fig. 89 336・337号土壙 …… 111
Fig. 90 337・338号土壙出土遺物 …… 112
Fig. 91 339号土壙と339号土壙出土遺物 …… 114
Fig. 92 341・344・349号土壙と341・344号土壙出土遺物 …… 115
Fig. 93 358号土壙と345・352・357・358号土壙出土遺物 (1) …… 117
Fig. 94 358号土壙出土遺物 (2) …… 118
Fig. 95 359号土壙と359号土壙出土遺物 …… 119
Fig. 96 362号土壙と362号土壙出土遺物 …… 120
Fig. 97 363・365号土壙出土遺物 …… 121

Fig. 98 366号土壙と366号土壙出土遺物 …… 123
Fig. 99 368号土壙と368・370・371号土壙出土遺物 …… 124
Fig. 100 373号土壙と373号土壙出土遺物 …… 126
Fig. 101 374号土壙と374号土壙出土遺物 …… 127
Fig. 102 378・379号土壙と375・378号土壙出土遺物 …… 128
Fig. 103 31・32号溝とPit 出土遺物 …… 130
Fig. 104 G区遺構外出土遺物 (1) …… 132
Fig. 105 G区遺構外出土遺物 (2) …… 133
Fig. 106 G区遺構外出土遺物 (3) …… 134
Fig. 107 G区遺構外出土遺物 (4) …… 135
Fig. 108 G区遺構外出土遺物 (5) …… 136
Fig. 109 G区遺講外出土遺物 (6) …… 137
Fig. 110 A～G区検出主要溝概念図 …… 140

表 目 次

Table. 1 地下鉄路線内遺跡調査一覧表 …… 3
Table. 2 博多遺跡群調査地点一覧 …… 6

写真図版目次

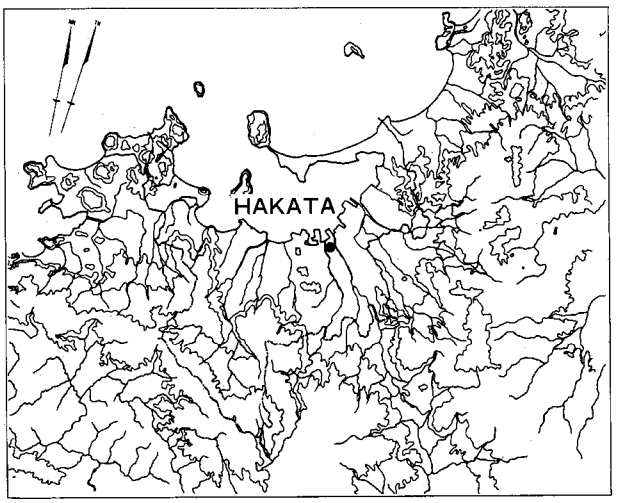
PL. 1　吉州天目碗（G区遺構外出土）
PL. 2　青白磁灯明台（G区362号土壙出土）
PL. 3　博多遺跡群周辺航空写真
PL. 4　博多眺望（博多駅上空より）
PL. 5－1　下水管移設立会調査風景
2　中間杭布掘立会調査風景
PL. 6－1　祇園町工区遠景（北から）
2　G区調査風景（南東から）
PL. 7－1　E区調査風景（東から）
2　E区12号溝調査風景（南から）
PL. 8－1　103号土壙（東から）
2　113号土壙（西から）
PL. 9－1　114号土壙（南西から）
2　117号土壙（北から）
PL. 10－1　12号溝全景（南から）
2　12号溝土層断面（南から）
PL. 11－1　F区調査風景（南から）
2　F－Ⅰ区遺構全景（南東から）
PL. 12－1　F－Ⅱ区遺構全景（南東から）
2　F－Ⅲ区遺構全景（南東から）
PL. 13－1　F－Ⅲ区21号溝（北東から）
2　237号土壙、馬骨検出風景
PL. 14－1　237号土壙上面、馬骨出土状況（南西から）
2　237号土壙下面、馬骨出土状況（南西から）
PL. 15－1　G－Ⅰ区上部遺構全景（北西から）
2　G－Ⅰ区下部検出遺構全景（北西から）
PL. 16－1　G－Ⅱ区下部遺構全景（北西から）
2　G－Ⅲ区下部遺構全景（北西から）
PL. 17－1　311号土壙（南西から）
2　313号土壙（南から）
PL. 18－1　316号土壙（北から）

2　332号土壙（北から）
PL.　19－1　334号土壙（西から）
2　335号土壙（北から）
PL.　20－1　337号土壙（北西から）
2　337号土壙、墨書白磁出土状況（北西から）
PL.　21－1　341号土壙（北から）
2　341号土壙土層断面（西から）
3　341号土壙、ガラス玉出土状況（西から）
PL.　22－1　357号土壙（東から）
2　358号土壙（北から）
PL.　23－1　362号土壙（西から）
2　362号土壙土層断面（北から）
3　362号土壙、灯明台出土状況（北東から）
PL.　24－1　373号土壙（南から）
2　374号土壙（北から）
PL.　25－1　31号溝（東から）
2　31号溝（南から）
PL.　26　103・104・105・107・108・109号土壙出土遺物
PL.　27　110・111・112・113・114・115号土壙出土遺物
PL.　28　117・118・119・120・121号土壙出土遺物
PL.　29　122・123・125・126・129・131号土壙出土遺物
PL.　30　131・138・141・143・146・148・150・156号土壙出土遺物
PL.　31　157・158・160・161・162・165・166・167・168号土壙出土遺物
PL.　32　12号溝・E区遺構外出土遺物
PL.　33　E区遺構外・203・204・207・208号土壙出土遺物
PL.　34　208・214・215・216・217・218号土壙出土遺物
PL.　35　218・219・220号土壙出土遺物
PL.　36　224・227・228・231・232・236号土壙出土遺物
PL.　37　237・239号土壙・F区遺構外出土遺物
PL.　38　F区遺構外・301・306号土壙出土遺物
PL.　39　313・315・316・327・336・337号土壙出土遺物
PL.　40　338・339・341・345・357・358号土壙出土遺物
PL.　41　358・362・363・365・366号土壙出土遺物

PL. 42　366・373・374・375・378号土壙・G区遺構外出土遺物
PL. 43　G区遺構外出土遺物
PL. 44　出土遺物墨書集成 (1)　E区
PL. 45　出土遺物墨書集成 (2)　E区
PL. 46　出土遺物墨書集成 (3)　E区
PL. 47　出土遺物墨書集成 (4)　E・F区
PL. 48　出土遺物墨書集成 (5)　F・G区
PL. 49　出土遺物墨書集成 (6)　G区
PL. 50　出土遺物墨書集成 (7)　G区

博多遺跡群

― 地下鉄路線内の調査(3) ―



遺跡略号　ＨＫＴ
遺跡調査番号　7833

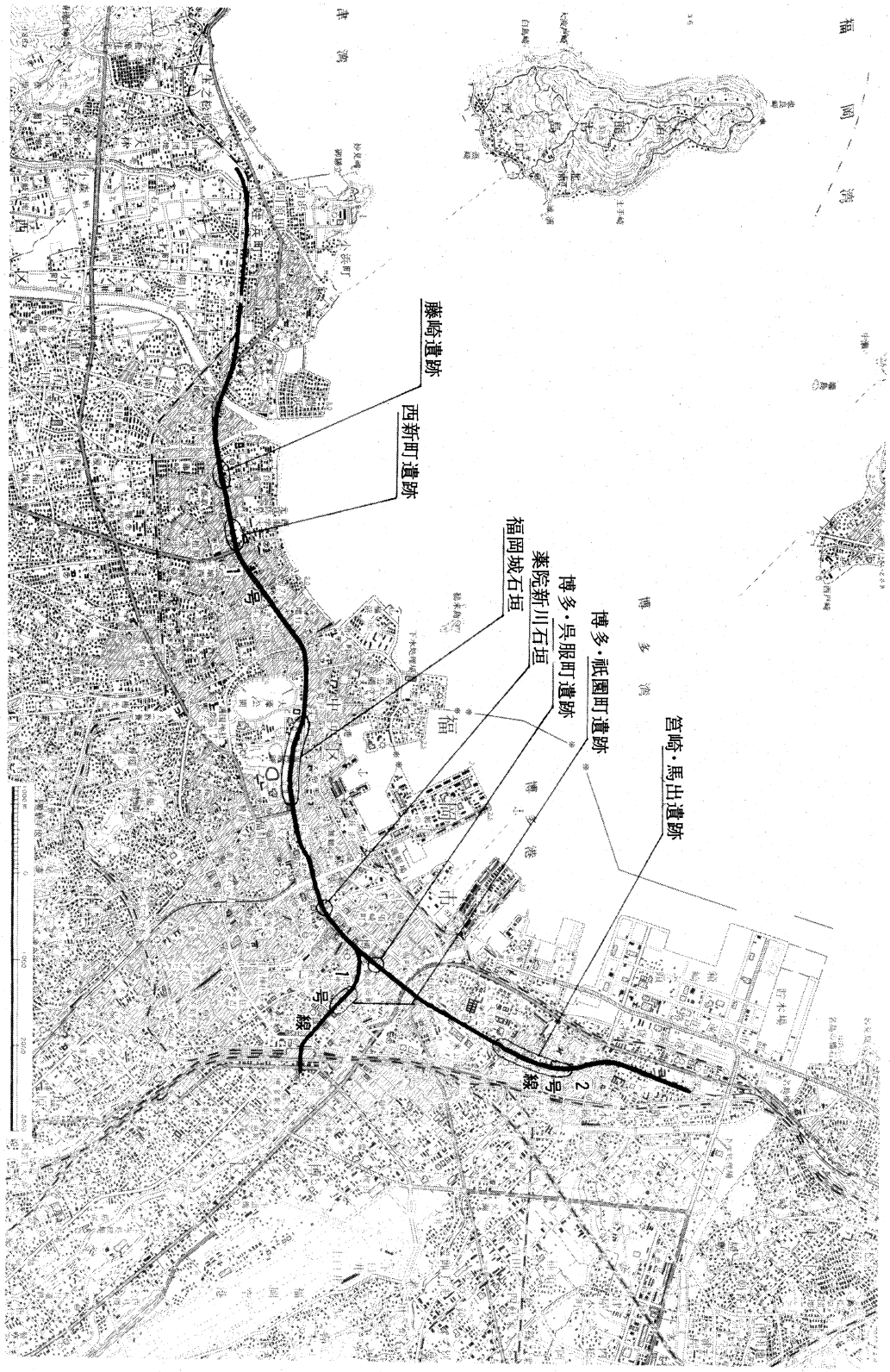


Fig. 1　高速鉄道路線内遺跡地図　(1/75,000)　原図 国土地理院5万分の1地形図「福岡」

第１章　地下鉄路線内遺跡調査の経過

昭和51（1976）年８月に地下鉄路線内遺跡の調査として、西新町遺跡の調査にまず着手した。以後、地下鉄工事各工区の発注とともに、下表のように各遺跡の発掘調査が進められ、昭和59（1984）年４月の博多遺跡群における祇園駅Ｐ－２出入口地点の調査をもって、路線内遺跡の調査は完了した。

この間、地下鉄工事も順調に進行し、昭和58（1983）年３月の１号線の開通に続き、昭和61（1986）年１月には、２号線箱崎九大前駅まで、更に同年11月には貝塚駅までの２号線全線が営業運転を開始し、今やまさに福岡市における交通網の大動脈として、市民にとって不可欠の足としてその機能を発揮している。今後更に福岡空港までの延長も具体化し、都市交通体系の花形として、その存在はますます脚光を浴びることになろう。

この地下鉄開通という具体的な成果とともに、発掘調査で得られた考古学的な成果も、福岡市の歴史的重要性を明らかにする上で極めて価値の高いものであった。これらについては下記の如く順次発掘調査報告書を作成しているところであり、Ⅶをもって完結する予定である。

高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告書

Ⅰ	『藤崎遺跡』　福岡市埋蔵文化財調査報告第62集		1981
Ⅱ	『西新町遺跡』	第79集	1982
Ⅲ	『福岡城址　内掘外壁石積の調査』	第101集	1983
Ⅳ	『博多　高速鉄道関係調査（１）』	第105集	1984
Ⅴ	『博多　高速鉄道関係調査（２）』	第126集	1986
Ⅵ	『博多　高速鉄道関係調査（３）』	第156集	1987

Teble　1　地下鉄路線内遺跡調査一覧表

遺跡名＼項		所在地	時代	性格	調査期間	調査面積	備考
藤崎遺跡		西区藤崎西区役所前	弥生時代	共同墓地	昭和52年４月～同53年６月	4,925㎡	
（防墨工区）		西区防墨前	弥生時代～古墳時代	生活址群	昭和52年12月～同53年４月	920㎡	藤崎と西新町に入る
西新町遺跡		西区修猷館高校前	〃	共同墓地・住居址群	昭和52年８月～同53年４月	6,230㎡	
福岡城内堀・石垣		中央区荒戸・大手門・平和台・赤坂	江戸時代	堀石垣	昭和52年12月～同53年９月	14,900㎡	
福岡城薬院新川石垣		中央区天神（旧県庁前）	〃	武家の町と博多町人街とを分けた石垣	昭和52年３月～同53年６月	500㎡	
博多遺跡群	呉服町工区	博多区・土居町・呉服町・蓮池（旧電車通り）	平安～室町時代	中世の港町	昭和52年11月～同53年５月	200㎡	
	店屋町工区	博多区御供所町東長寺前	〃	中世の博多の街	昭和52年12月～同53年12月	1,832㎡	
	祇園町工区	博多区馬場新町	〃	〃	昭和52年２月～同53年12月	4,500㎡	
	博多駅前工区	博多区博多駅前	鎌倉～室町時代	〃	昭和52年12月～同53年８月	4,500㎡	
筥崎馬出遺跡		東区筥崎宮参道・馬出	鎌倉時代～室町時代	筥崎宮前街	昭和52年４月～同53年12月	約5,000㎡	

第２章　博多遺跡群における発掘調査概要

博多遺跡群（Fig.　２）は、福岡市博多区に所在し、那珂川と石堂川（御笠川、旧比恵川）の沖積作用によって生じた沖の浜、博多浜（櫛田浜）と呼ばれる二つの砂丘（洲）に立地しており、旧那珂郡に属す。近世城下町としての「福岡」に対する商業都市「博多」の指し示す地域とほぼ等しく、これはとりもなおさず中世港湾都市の中心域を占めていたものと思われる。

博多が日本における海外先進文化流入の門戸として果たした役割の重要性については、主に文献史学の立場から多くの先覚が言及されており、他言を要しない。また考古学的立場からも中山平次郎、岡崎敬氏らをはじめとする研究がなされている。しかしながら、昭和40年代までは本格的な調査が行なわれておらず、博多遺跡群の内容、広がり等は具体的に把握することが困難な状況であった。

博多における本格的な発掘調査の嚆矢となったのは地下鉄１号線店屋町工区の調査（章末文献３）であった。その予想を上回る成果をもとに、各種開発に係る発掘調査体制は整備され、現在まで、Tab.　２に示すように多くの発掘調査が行なわれてきた。その結果、博多における考古学的な視座を点から線へ、更に面から立体にまで広げることが可能になりつつある。しかし各調査の整理作業は充分に進行しておらず、それらのまとめはこれからのことであるが、その概要を記しておきたい。

博多遺跡群は平安時代末から戦国時代までを中心とし、更には江戸時代を経て現代に到るまでの都市遺跡としての性格がまず挙げられる。しかし遺跡としては弥生時代中期まで溯り、甕棺墓地の形成や、集落も見られる。古墳時代には前方後円墳(28次)や方形周溝墓(17、27次)をはじめ、古墳時代初頭の集落址や墓地が見られる。奈良時代～平安時代の律令期については良好な遺構は多くないものの、石帯、帯金具をはじめ須恵器、土師器、越州窯青磁、長沙窯陶器、製塩土器等が地点によっては多く出土しており官衙的施設の存在も推定されている。このように博多遺跡群は弥生時代から現在まで、連綿として人々の生活が営まれてきた複合遺跡である。

博多における歴史地理的な変遷も、文献史学、地理学方面との連繋もあり、徐々に明らかにされつつある。「袖の湊」に関しては「袖の湊平清盛整備説」とともに「袖の湊呉服町交差点説」がほぼ定説となっていたが、地下鉄関係の呉服町交差点の調査では、11～12世紀代の建物、側溝、墓などが検出され、「袖の湊呉服町交差点説」は否定された。しかしその周辺の調査（16、29次）では、交差点の東西に低湿地があり、15～16世紀頃に徐々に埋め立てられていたことが明らかにされ、Fig.　２の等高線に見られるように、沖の浜側に通じる陸橋のような地形をなしていたことが明らかになった。現在のところ両側の入江状低湿地が「袖の湊」跡と考え易い。また沖の浜の形成時期も碇石の出土したこと（５次）によって、奈良、平安時代と推察される。

出土遺物は調査地点によっては諸相に変化があるものの、その種類、量ともに豊富であり、

人々の豊かな生活ぶりを彷佛させるに充分である。なかでも中国製品を中心とする貿易陶磁の量と種類の多さは特筆すべきであり、国際貿易都市博多の性格を見事に代弁しているといえる。浙江・福建・広東省を中心にそれらの産地も様々である。これら貿易陶磁の中には墨書をもつ例が少なからず含まれ、中国人姓と認められるものも多い。これらは地点毎に姓の偏りがあり、中国商人の居留地であった「宋人百堂」「大唐街」などの伝承を裏付けるものである。また、白磁を山の如く廃棄した地点（14次）や、同種の青磁碗、皿を大量に一括廃棄した井戸（店屋町工区出入口２・３）など、陶磁器を取り扱っていたと思われる商人の存在をうかがわせる出土状態も見られる。

長期にわたる都市遺跡であり、人々のエネルギッシュな営みによって様々な遺構が刻まれている。井戸および廃棄物処理土壙の密度は凄まじく、複雑に互いに切り合って、遺構、遺物の把握を困難なものにしており、町屋等の建物群は殆んど復元されていないのが実情である。しかしながら、溝および道路等については比較的明瞭に把えられている。35次調査では幅６ｍ程の両側に側溝をもつ室町～戦国期の道路が出土し、少なくとも６回の道路改修が行なわれていることが明らかになっている。また、町割りに関すると思われる溝、道路等も各地点で見られ、現在までのところ、鎌倉時代末までの南北の町割、35次調査の道路に見られる町割、戦国時代末以降の太閤町割と、３回の町割の変遷が推定される。

博多遺跡群関係埋蔵文化財調査報告書　（Table. 2 の報告書番号に一致する）

1	『博多Ⅰ』	福岡市埋蔵文化財調査報告書第66集	1981
2	『博多Ⅱ－図版編』	第86集	1982
3	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅳ　博多（１）』	第105集	1984
4	『博多Ⅲ』	第118集	1985
5	『博多Ⅳ』	第119集	1985
6	『博多Ⅴ』	第120集	1985
7	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅴ　博多（２）』	第126集	1986
8	『博多Ⅵ』	第144集	1986
9	『高速鉄道関係埋蔵文化財調査報告Ⅵ　博多（３）』	第156集	1987
10	『博多Ⅶ』	第147集	1987
11	『博多Ⅷ』	第148集	1987
12	『博多Ⅸ』	第149集	1987
13	『博多Ⅹ』	第150集	1987
14	『中部地区埋蔵文化財報告Ⅱ』	第146集	1987

Table.2　博多遺跡群調査地点一覧(昭和62年３月現在)

公共事業関係

符号	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(㎡)	調査期間	報告書	備　　考
A	7725	地下鉄建設	御供所町	1,412	77.12～78.11	3.7	店屋町工区
B	7833	〃	御供所町外	4,500	79.３～12	9	祇園町工区
C	7835	〃	店屋町、上呉服町外	200	78.11～79.５		呉服町工区
D	7949	〃	博多駅前一丁目外	4,500	79.12～80.８		駅前工区
E	8037	〃	上呉服町	100	81.3		呉服町換気塔
F	8038	〃	冷泉町、祇園町	435	80.10～12	3	祇園駅2･3号出入口
G	8148	〃	御供所町	70	81.9		祇園駅4号出入口
H	8149	〃	祇園町	184	81.10～11		祇園駅5号出入口
I	8150	〃	上呉服町、中呉服町 綱場町、店屋町	380	81.４～５		呉服町出入口
J	8435	〃	博多駅前二丁目	215	84.４		祇園駅Ｐ2出入口
K	8224	道路拡幅	上呉服町	630	82.11～83.３		築港線１次
L	8331	〃	〃	564	84.２～９		築港線２次
M	8404	〃	〃	417	85.２～12		築港線３次
N	8527	〃	御供所町	383	85.12～86.６		築港線4次
O	8653	〃	〃	380	86.10.１～87.２.10		築港線5次

民間事業関係

次	調査番号	調査原因	所在地(博多区)	調査面積(㎡)	調査期間	報告書	備　　考
1	7810	納骨堂建設	御供所町･東長寺境内	360	78.11～79.１		本調査
2	7928	ビル建設	店屋町99	約100	79.４		立会、土層図作成
3	7929	納骨堂建設	祇園町･萬行寺境内	240	79.11		本調査
4	7930	ビル建設	冷泉町７－１	1,100	79.12～80.３	1.2	本調査
5	7931	ビル建設	下呉服町346	10	79.12		試掘調査、地表下4.5mから礎石出土
6	7932	ビル建設	冷泉町155他	640	80.3～4		本調査
7	8023	ビル建設	祇園町130	210	80.6～8		本調査
8	8024	本堂建設	御供所町･東長寺境内	600	80.8～10		本調査
9	8025	ビル建設	下呉服町75		80.9		試掘調査
10	8026	ビル建設	冷泉町474－9	54	80.12	1	本調査
11	8027	ビル建設	御供所町３－30		80.12		試掘調査
12	8127	ビル建設	中呉服町152、153		81.6		試掘調査
13	8128	ビル建設	駅前１丁目121～127	30	81.7		トレンチ調査
14	8129	ビル建設	店屋町４－15	255	81.7～9		本調査
15	8130	駐車場建設	上呉服町569	100	81.8		試掘調査
16	8131	ビル建設	店屋町246～248	150	81.9		本調査
17	8132	ビル建設	駅前１丁目98	910	81.11～82.２	4	本調査
18	8156	ビル建設	駅前２丁目８－14	10	82.1		試掘調査
19	8323	社務所建設	櫛田神社境内	200	83.4		本調査
20	8324	ビル建設	駅前１丁目99	980	83.4	4	本調査
21	8325	ビル建設	駅前１丁目18－１	150	83.5	4	本調査
22	8327	ビル建設	冷泉町189他	840	83.9	4	本調査
23	8334	本堂建設	龍宮寺境内	約300	84.2		本調査
24	8433	ビル建設	冷泉町１－１	250	84.4～5	5	本調査
25	8434	ビル建設	祇園町１－１	100	84.5～6	6	本調査
26	8506	ビル建設	上呉服町34	134	85.5～6	8	本調査
27	8507	ビル建設	祇園町１－11	350	85.5～6	14	本調査
28	8508	ビル建設	御供所町70－２	1,800	85.5～8	10	本調査
29	8509	ビル建設	綱場町22－67	330	85.7～9	11	本調査
30	8605	ビル建設	御供所町36,37,38,39	495	86.5～7	12	本調査
31	8606	ビル建設	御供所町65、66	190	86.5～7	13	本調査
32	8608	ビル建設	祇園町21－１	約1,000	86.5～7		本調査
33	8618	ビル建設	祇園町8他	898	86.7～11		本調査
34	8645	ビル建設	冷泉町238－2外	40	86.10～11		本調査
35	8648	ビル建設	上呉服町56	655	86.11～		本調査

Fig. 2 博多遺跡群地形図(1/600)　　博多遺跡

博多遺跡群範囲
調査地点(記号・数字はTab. 2に一致)
現在の等高線

第３章　祇園町工区、Ｅ・Ｆ・Ｇ区の調査

１．調査の経過

博多遺跡群における地下鉄１号線関係の調査は、昭和51(1976)年12月に行った試掘調査の結果、店屋町工区、祇園町工区の両工区を本調査の対象とした。博多駅前工区については、博多遺跡群の推定範囲よりはずれるかと思われたが、遺跡群南端の確認と遺跡の立地する砂丘の状況把握のために工事中立会し、土層図を作成することとなった。店屋町工区はシールド工法によるため、遺構面に影響を与える竪坑部、薬液注入部のみが対象とされたが、祇園町工区についてはオープンカット工法によるため、全面を調査対象とした。本調査に先行して、昭和　年　月に下水管移設工事の立会調査(PL.　５)や、土留側壁柱のガイドウォール工事、中間抗埋設物確認坪掘り等の立会調査(PL.　５)を行ない、本調査のための基礎データの集積につとめた。

祇園町工区は、祇園駅舎部と地下鉄一般路線部工事区とからなり、駅舎部で幅約18.5ｍ、一般部のせまい部分で幅約10ｍで総延長300ｍに及ぶ。調査の便宜上、路線を20ｍを基本として、店屋町工区からアルファベット順にＡ～Ｓに区分した（Fig. ３)。このほか本体部工事終了後、祇園駅舎４号出入口、５号出入口、Ｐ－２出入口の調査も行なった。これらの調査区のうち、Ｊ～Ｌ区は交差点内であり昼間の道路占用が不可能であることから夜間調査を余儀なくされ、またＬ～Ｓ区は旧博多駅舎および、旧鹿児島本線のプラットホームにあたる部分であることから攪乱がひどく、一部調査不能の区もあった。

今回報告する祇園町工区Ｅ・Ｆ・Ｇ区は、祇園駅舎部にあたり、現地表面の標高はほぼ５ｍ前後を計る。博多区御供所町に所在し昭和36年に旧国鉄博多駅が現在地に移転するまで、駅前商店街として賑わっていたところである。発掘調査はＧ・Ｆ・Ｅ区の順に行なったが、店屋町工区調査の経験によって調査日数をかなり要すると判断し、工事工程との調整から同時に２ヶ所の調査を並行して行うこととした。また、交差点部分の夜間調査区も長期間を要し、昼夜間並行調査の日々も続くという厳しい面があった。このため、調査員の勤務時間について労使協議の上変更を行ない、埋蔵文化財係の職員諸氏の協力を得て、昼夜間交替で調査を行うこととなった。Ｆ・Ｇ区については地下鉄工事占用地内の調査であったが、Ｅ区については、主要幹線道路である県道博多停車場東本町線内にあたるため、道路覆鋼ののち、半分づつを占用し覆鋼桁の下で調査を行った。

それぞれの調査区は２列の中間杭によってⅠ～Ⅲ区に大分し、それぞれを４ｍを基準に細区分している。また遺構最下面である地山白色砂層の標高は3.5ｍ前後であり、現地表面との比高1.5ｍと浅く、表土攪乱層を機械で除去したのち、上部、下部のほぼ２面に分けて調査を行なった。浅い包含層の中に、多くの遺構が営まれており、遺構の残存状態は良好でない。

2．調査の組織

福岡市交通局―調査委託

交通事業管理者　西津　茂美

理　　事　岩佐　辰生　　松原　弘和

総務部長　松本　健　　**総務課長**　溝川　常博

工事部長　川原　隆幸　　**工事課長**　川口　広恭

技術部長　角　　能裕　　**設計課長**　萩原　兼秀

計画課長　徳田　昭実

計画第１係長　斉藤　頼敏

福岡市教育委員会―調査主体

教育長　佐藤　善郎

文化部長　河野　清一　　**埋蔵文化財課長**　柳田　純孝

埋蔵文化財課第１係長　折尾　学

事務担当　松延好文・岸田隆生

調査担当　折尾　学・浜石哲也・池崎譲二

調査協力　飛高憲雄・塩屋勝利・山崎純男・力武卓治・井沢洋一・山崎龍雄
下村　智・大庭康時・小畑弘巳

前　任　古村澄一・戸田成一・西津茂美・志鶴幸弘・清水義彦・井上剛紀・甲能貞行
三宅安吉・木村義一・岡島洋一・古藤国生

調査協力団体　地下鉄祇園町工区担当　三井建設株式会社九州支店　高木建設株式会社

発掘調査参加者　白石公高・信行千尋・日野孝司・海津静江・真鍋秀子・緒方チヨエ・清水文代・高宮ノブエ・森永史子・藤タケ・高田ヒサノ・大歯みつ子・黒木アサノ・安部サエ子・永田恭子・真鍋恵美子・杉村文子・安部国恵・真鍋政江・斉藤小春・横溝恵美子・横溝ヨシノ・柴田スマ子・吉野清蔵・都島重雄・緒方寿・大橋隆司・大野淳一郎・松本俊介・池田昌徳・柴田喜瑞・坂本真二・岡田智明・安川雅敏・横尾明彦・樋口一明・城川英二・阿部穂高・楠橋伸二・清水由美子・森京子・小水辰美・鷭明伸・原優子・山口美矢・上山千重・岡村裕・吉田昌代・山部陽一・平川昭一・境弘己・詫間敏博・岡真一郎・江崎孝志・清瀬智仁・国友達也・瀬口恵介・井手透・岩切幹嘉・森順子・緒方良親・清水百枝・長尾慎一郎・田中章二・川口義典・小川活章・田代昌子

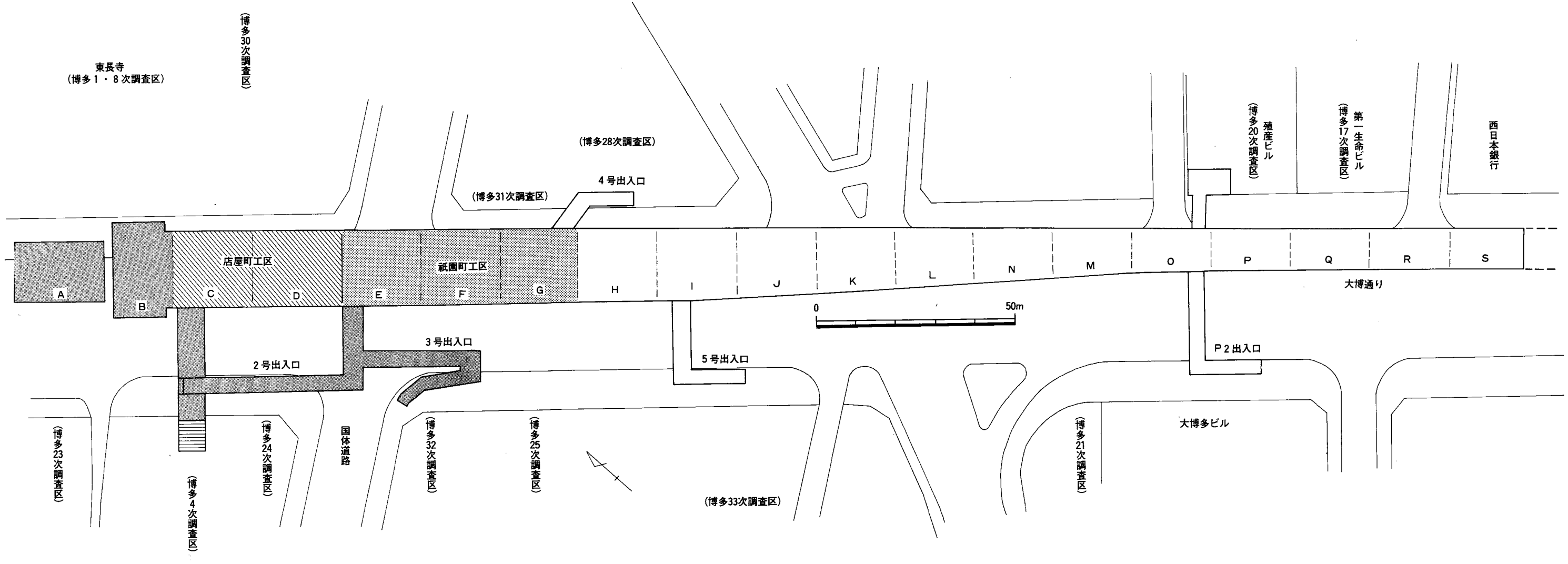


Fig. 3　博多遺跡群地下鉄1号線関係調査区(店屋町・祇園町工区)全体図(1/1000)

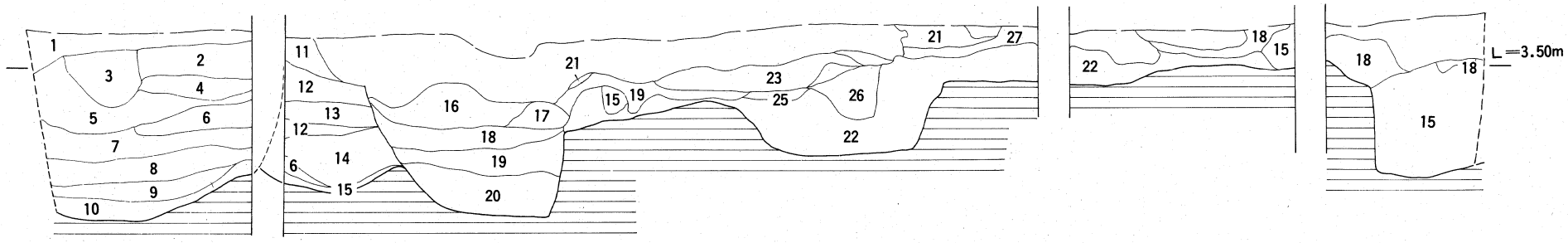
Fig.4　祇園町工区E・F・G区遺構全体図（上部検出遺構）

Dは土壙
Mは溝

Fig.5　祇園町工区E・F・G区遺構全体図(下部検出遺構)

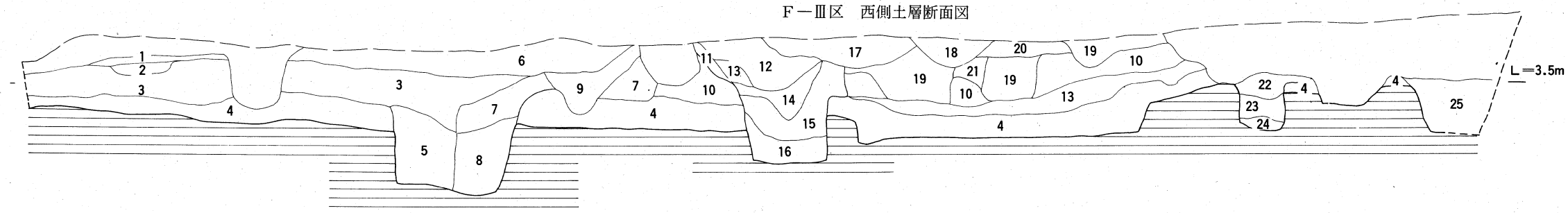
□は近世以降の遺構
Dは土壙
Mは溝

E－Ⅲ区西側土層断面図



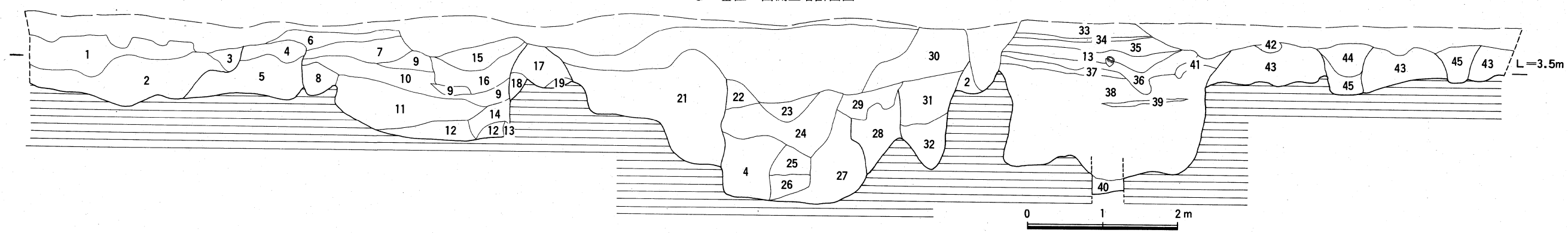
1．褐色砂質土
2．褐色～黒褐色砂
3．炭化物を含む明褐色砂質土
4．炭化物を含む黄褐色砂
5．炭化物少量を含む茶褐色砂質土
6．炭化物を含む茶褐色砂
7．炭化物少量含む灰黒色砂質土
8．炭化物を含む灰色砂
9．粘土を含む灰黒色砂質土
10．粘土を含む灰色細砂
11．粘土を含む黒褐色砂
12．粘土を含む黄褐色砂
13．黒褐色粘土
14．炭化物を多く含む黒色粘土
15．よごれた砂
16．褐色砂
17．黄褐色砂
18．茶褐色砂
19．暗褐色粘質砂
20．黒褐色粘質砂
21．明褐色砂
22．黄白色砂
23．炭化物を含む茶褐色粘質砂
24．暗褐色砂
25．粘土を含む褐色砂
26．黄褐色粘質砂

F－Ⅲ区　西側土層断面図



1．茶褐色粘質土と茶褐色砂との互層
2．粘質のある灰味をおびた灰褐色土
3．炭化物を少量含むやや暗い茶褐色土
4．明茶褐色砂
5．黒色粘質土
6．炭化物、焼土を含む明茶褐色粘質土
7．茶褐色砂質土
8．黒色砂を少量含む黄白色砂
9．炭化物を含む黒褐色砂質土
10．茶褐色砂
11．やや暗い茶褐色砂
12．炭化物、焼土を含む明茶褐色土
13．暗茶褐色砂
14．白色砂をはさむ黒褐色砂質土
15．暗灰色砂層をはさむ黒褐色砂質土
16．黒色土と黄白色砂との互層
17．粘性のある明茶褐色土
18．焼土を含む黒色粘質土
19．炭化物を含むやや粘性のある暗茶褐色土
20．炭化物、焼土を含むやや明るい黒褐色土
21．暗茶褐色土
22．黒味の強い茶褐色砂
23．白味の強い茶褐色砂
24．炭化物を多量に含む黒色土
25．黒褐色砂と暗茶褐色砂との互層

G－Ⅲ区　西側土層断面図



1．炭化物少量含む灰黒色細砂
2．暗褐色細砂
3．灰色砂
4．灰褐色砂
5．明褐色細砂
6．炭化物を含み粘性のある暗褐色砂
7．炭化物を多量に含む灰黒色粘質砂～褐色砂
8．炭化物を含む暗褐色細砂
9．赤褐色砂
10．灰黒色砂と赤褐色砂の互層
11．黒色土、灰黒色土、褐色細砂の互層
12．よごれた褐色砂
13．灰黒色粘質砂
14．黄褐色～黄色砂
15．炭化物、焼土を多く含む灰黒色粘質砂
16．灰色砂
17．鉄分を含む暗褐色砂
18．褐色細砂
19．鉄分を含む赤褐色砂
20．灰黒色粘質砂
21．灰黒色砂、褐色砂、黄色砂などの互層
22．灰黒色砂と黄色砂の互層
23．灰褐色粘質砂
24．黄褐色砂が混じる灰黒色粘質砂
25．灰黒粘質砂と黄色砂の互層
26．赤灰色砂
27．黄色砂が混じる灰黒色粘質砂
28．よごれた黄色砂
29．灰黒色粘質砂を含む黄褐色砂
30．やや赤味をおびる暗褐色砂
31．灰黒色砂と白色砂の互層
32．灰白色砂
33．黄褐色粘質土
34．黒色粘質土
35．黄灰色粘質土
36．暗黄灰色砂
37．暗灰色砂
38．白色砂、黒色粘質砂、暗褐色砂の互層
39．黄色砂
40．灰色細砂
41．黒褐色粘質砂
42．暗黄色粘土
43．暗褐色砂
44．灰黒色砂と黄色粘土が混じる
45．黒褐色砂

Fig. 6　E・F・G区土層図

３．Ｅ区の調査

Ｅ区は地下鉄１号線祇園町工区の北西端にあたり、前年度報告した店屋町工区Ｄ区に接続する。地下鉄路線と国体道路との交差部分にほぼ合致する。幅18.2ｍ、長さ24ｍの調査面積436.8㎡である。発掘調査の必要性と、道路供用を続けねばならぬ幹線道路であることから、路面覆工を先行して行ない、発掘調査は道路の半分を占用して２回に分けて覆工桁下で行うことになった（PL.　7）。Ｇ、Ｆ区ののち10月１日より11月８日まで、馬場新町夜間調査地点と昼夜並行して行なわれた。覆鋼板開閉の関係上、Ｆ－Ⅱ－ａ区の一部にもＥ区の遺構番号が付してある。なお、桁懸け作業のため表土の除去は深くなり、上下２面に分けての調査はできず１面で処理している。

１）遺構と遺構出土遺物

101号土壙　(Fig.　7　PL.　44)　Ｅ－Ⅰ－ｃ区検出遺構、0.8ｍ×0.55ｍの長円形で深さ0.8ｍを計る。図示した遺物は内面に櫛描文をもち高台の高い白磁碗で、高台内に花押の墨書がある。この花押は103、104、110号土壙をはじめ、周辺調査区に多く集中して出土している。遺物はやや多い。計測可能な土師小皿は２点あり、いずれも糸切底で口径９㎝、器高0.9～1.2㎝である。12世紀後半に位置づけられよう。廃棄物処理用土壙か。

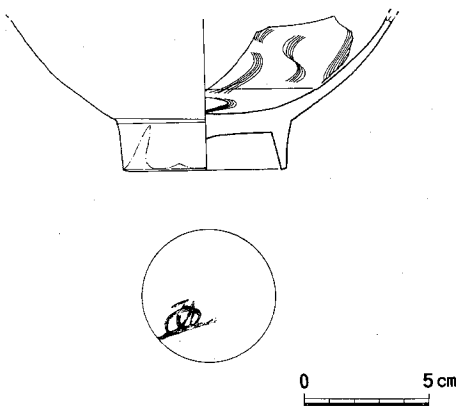


Fig. 7　101号土壙出土遺物

102号土壙　Ｅ－Ⅰ－ｄ区検出の不定形土壙である。遺物は少量であるが奈良時代土師器や須恵器に、白磁片、陶器片、土師皿片が混じる。13世紀代に位置づけられるが性格不明。

103号土壙　(Fig.　8・9　PL.　8・26)　Ｅ－Ⅰ－ｃ区検出遺構。土留壁に切られ全体形不明。12号溝を切る。現存径でも4.5ｍを計る大きな掘方で、2.3ｍと深い。２段のテラスをもち、井戸の可能性が強い。掘方部分の下位に一辺50㎝弱の砂岩切石が２個置かれていた。遺物は白磁４点、青磁８点と磁器類が少ないのに比べ、中国製陶器類は破片数で144点と多い。古窯系の陶器も４点みられる。土師皿類も多くみられ、計測表に示すとおりいずれも糸切底である。図示した遺物は１が101号土壙例と同じ墨書をもつ白磁碗である。２は逆台形の高台を削り出す天目碗で、胎はセメント様の磁質で、見込の天目釉は澱青釉風の発色をなし美しく流れている。３は磁灶窯系の小型の盤で、胎は多量の砂粒を含み粗いが薄手である。４は同じく

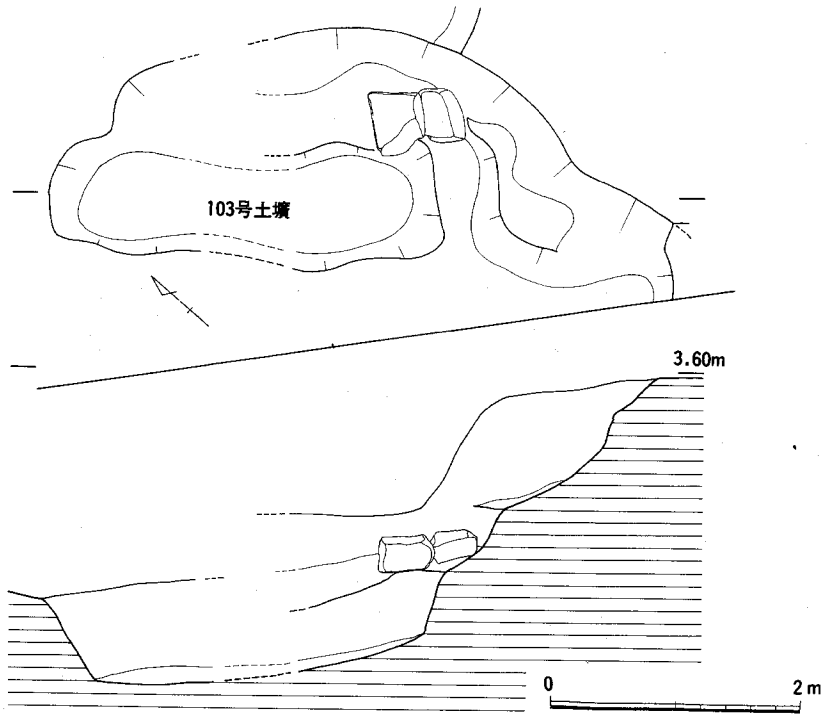


Fig. 8　103号土壙

小口瓶であるが胎は精良である。5は準A群に属す四耳壺、6は磁灯窯系の深い盤で内面にベージュ色不透明釉がかかる。底部および口縁部に目跡が残される。このほか陶器B群の灯明台破片も見られる。井戸廃棄後に廃棄物処理に用いられたものか。14世紀前半頃に位置づけられる。

104号土壙　(Fig. 10　PL. 26・44)　E－Ⅱ－c区検出の近世土壙である。近世の陶磁や七輪などとともに少量の中世以前の遺物も混在する。図示した遺物は、1が18世紀代に位置づけられる焼塩壺で外面体部に刻印が見られるが器壁が荒れ判読できない。内面底に粘土塊を詰めて底部を塞いだもので、細かな布目圧痕を残す。2、3はヘラ切底土師杯で、ほぼ同形同大のものが他に3点出土している。4は101号、103号土壙例と同じ花押墨書をもつ白磁碗である。

105号土壙　(Fig. 11・25　PL. 26・44)　径0.6mの円形の掘方をもつ近世の廃棄物処理用土壙である。浅い土壙中に多量の遺物がぎっしり詰められている。1、2は肥前系の近世染付で外底に呉須書きの印が見られる。3は櫛描文をもつ同安窯系青磁碗、4は蛇ノ目高台の越州窯系青磁碗、5、6は白磁碗、7が同高台付皿である。8、9は黒粒を含み灰色の胎をなす半磁質の陶器で灰オリーブ色の透明釉を上面にかけている近世の器蓋である。産地は不明。10

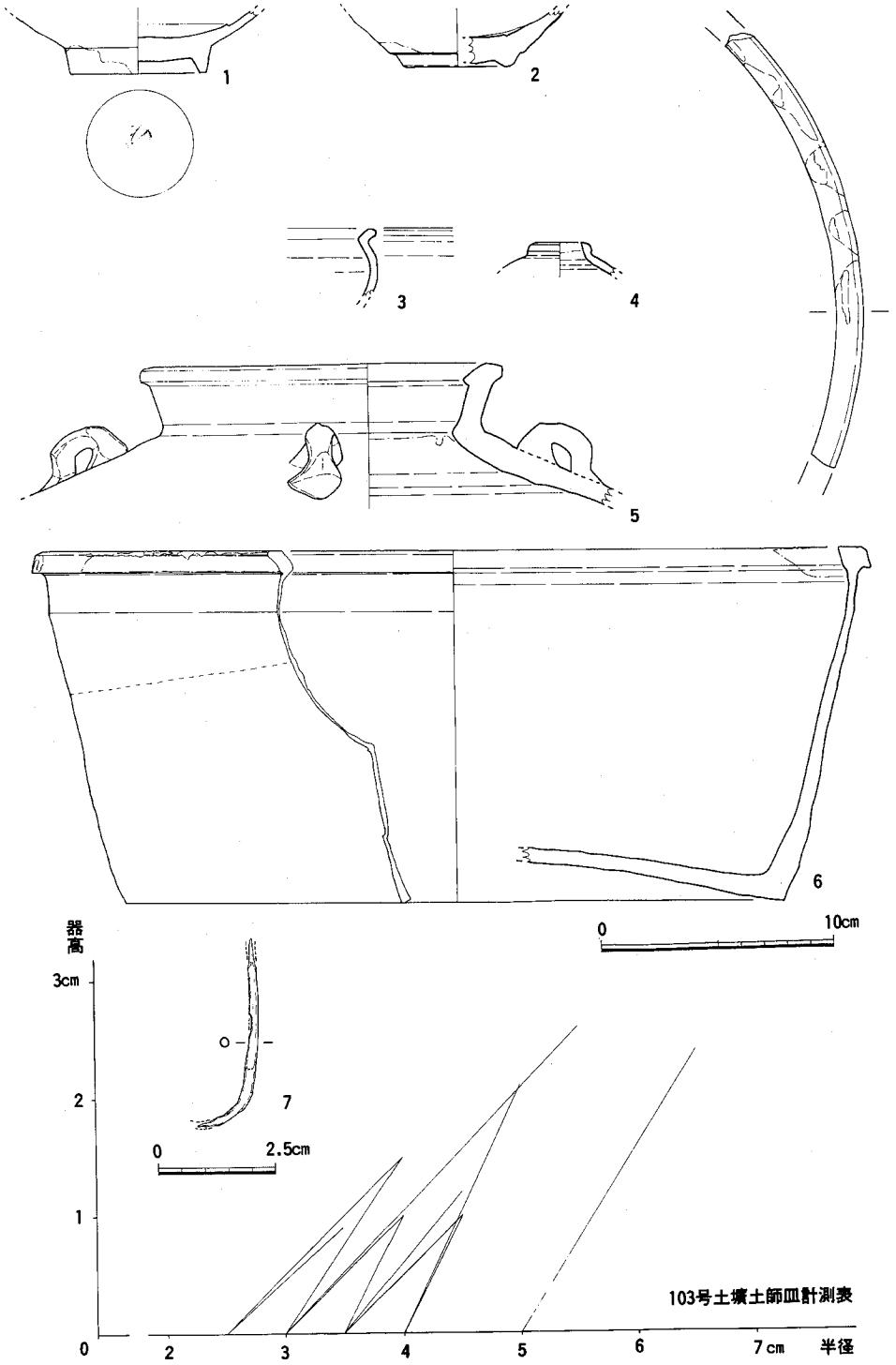


Fig. 9　103号土壙出土遺物

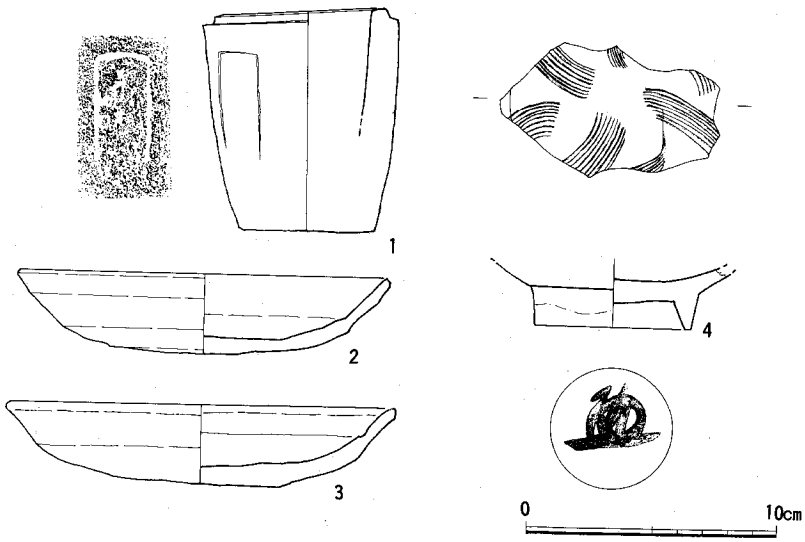


Fig.10　104号土壙出土遺物

はＣ群の陶器鉢であるが、胎はＢ群に近く硬質である。11は陶器Ｃ群の捏鉢である。12はＣ群陶器で、四耳付長壺である。内外面に艶やかな茶褐釉がかけられている。口縁端部に重ね焼きの目跡が残されている。口縁部が上方に極端に伸びる例は博多ではあまり見られない。13もＣ群の壺である。口縁は平坦に近く、上面に砂状の目跡が推定４箇所につけられる。内外面に光沢のある緑茶褐色の釉がかけられている。口縁内側には重ね焼の器壁が付着している。14はヘラ切底土師皿であるが焼成は硬質で瓦器に近い。この他白磁鉄絵の鉢も見られる。

106号土壙　(Fig. 11)　Ｅ－Ⅰ－ｄ区検出の近世の廃棄物処理用土壙である。遺物は少ないが、肥前系の染付皿の完形品が出土している。

107号土壙　(Fig. 12　PL. 26・44)　Ｅ－Ⅱ－ｄ区検出の井戸である。一部を中間杭攪乱に切られるが、長軸3.6ｍ、短軸3.3ｍの卵形の大きな掘方をもつ。底面に径0.8ｍの水溜掘方が穿たれている。木桶組枠の痕跡が残っている。遺物は瓦片、陶器片等を中心に多量出土しているが、その大部分は内部からの出土である。図示した遺物は１が龍泉窯青磁碗で高台内露胎部に墨書が見られるが判読できない。２は白磁碗で見込釉を輪状に削りとり、中央部が凹む。３は磁灶窯系の広鍔口縁の大盤で、内面には黄釉下に鉄絵を施し、口縁端直下と直上に白いアルミナの目跡が付着している。４はＣ群の捏鉢１に属する陶器で、内外面に濃オリーブ色の不透明釉がかかる。土師皿類は計測表に示すとおり全て糸切底で、器高の高い小皿も見られる。14世紀半ばに位置づけられよう。

108号土壙　(Fig. 13　PL. 26)　Ｅ－Ⅱ－ｃ区検出遺構で、12号溝、153号土壙を切る。遺構は２分割の調査区境にかかって全体形は明確でない。12号溝の壁中位まで掘り込まれている。遺物は少なく、実測可能のものとしては片切彫花文をもつ白磁皿が見られる程度である。土師皿類が見られず時期の判断は困難であるが、13世紀以降である。性格は明確でない。

109号土壙　(Fig. 14　PL. 26)　Ｅ－Ⅰ－ｄ区検出遺構で、120号土壙を切る。近世の井

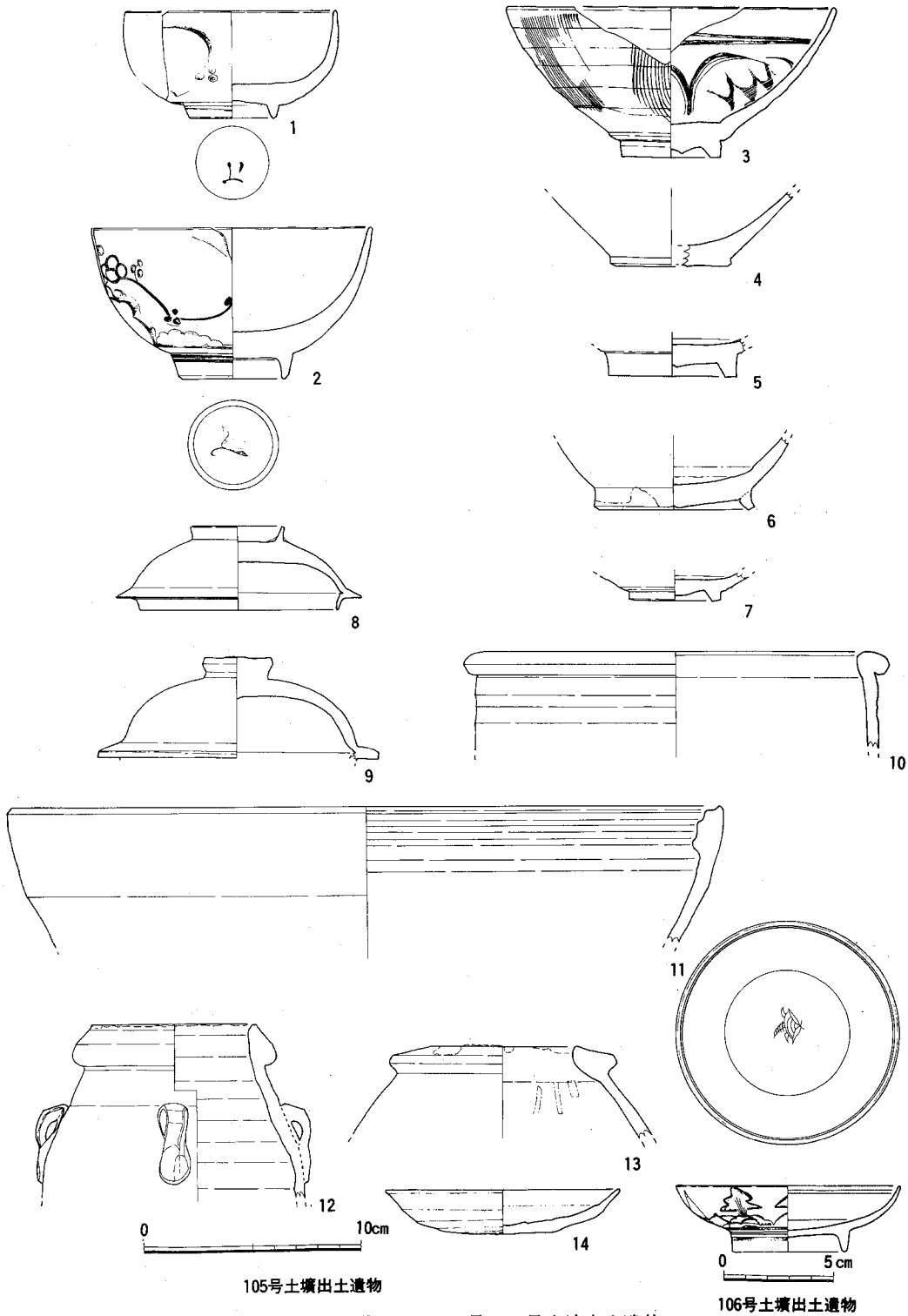


Fig.11　105号,106号土壙出土遺物

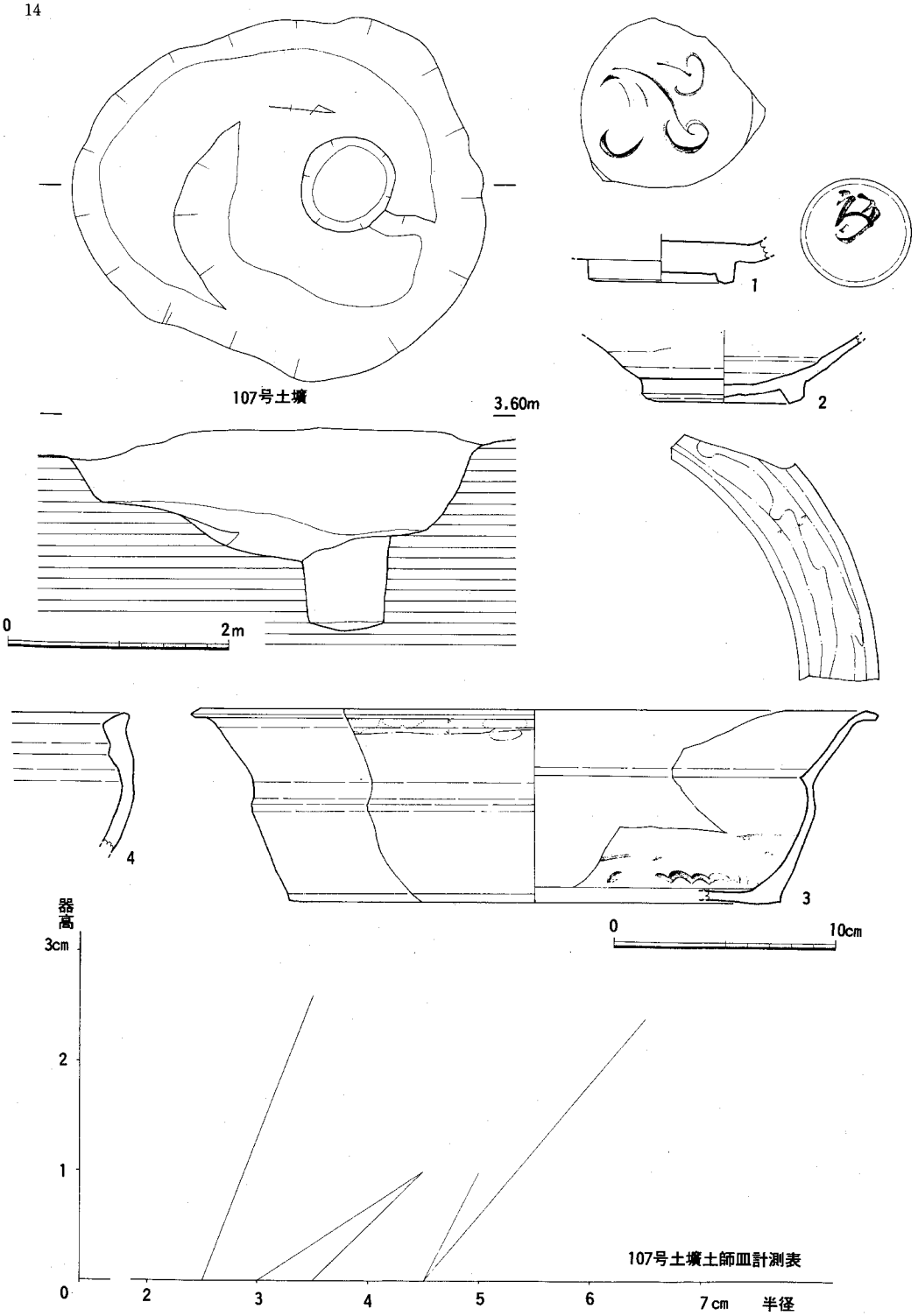


Fig.12　107号土壙と107号土壙出土遺物

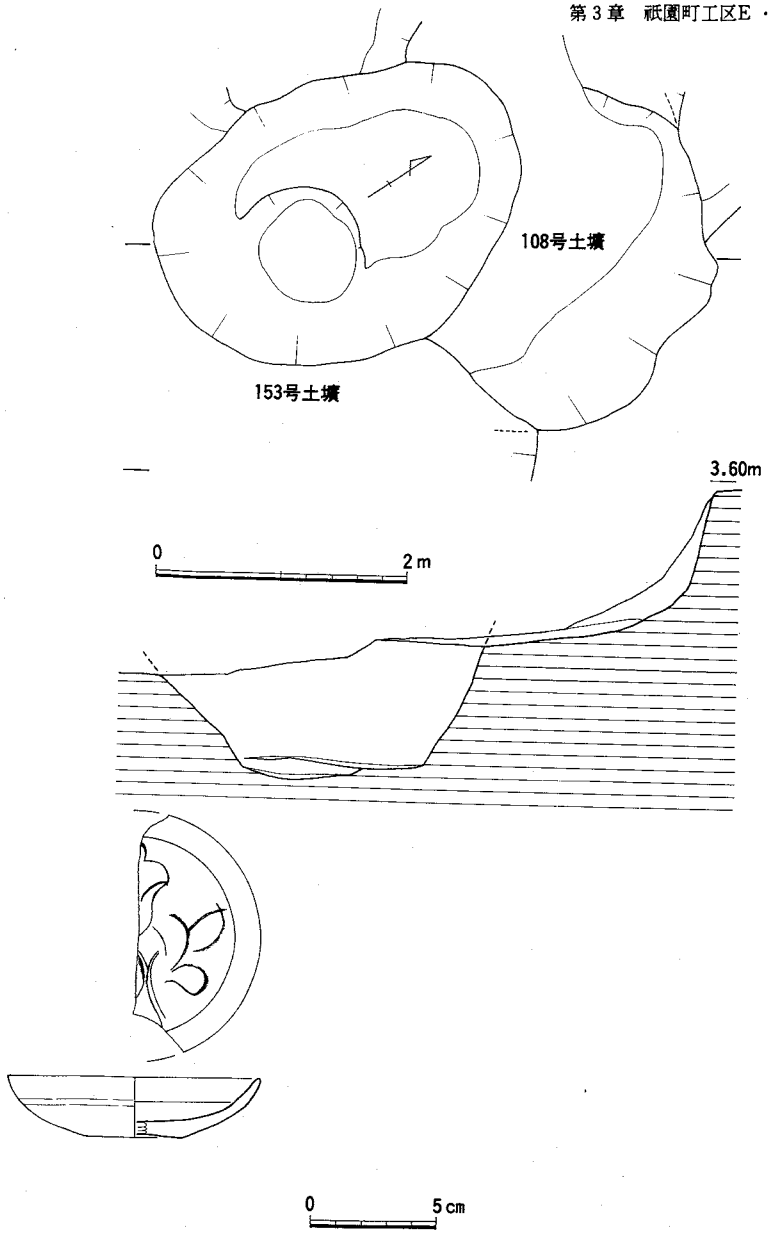


Fig.13　108号土壙,153号土壙と108号土壙出土遺物

戸である。水溜部に木桶組の痕跡が残る。掘方埋土を中心に遺物は多く見られるが各時期混在する。図示した遺物は１が天目碗、２、３が陶器である。１は内面と外体部中位まで黒褐釉がうすくかけられている。見込に明確な段をもち、外底中央をヘソ状に削り残すなど、通例の天目碗とは器形が異なる。同安窯系青磁碗に共通する器形で福建省南部産であろう。２は準Ａ群の四耳大壺、３はＣ群の壺である。

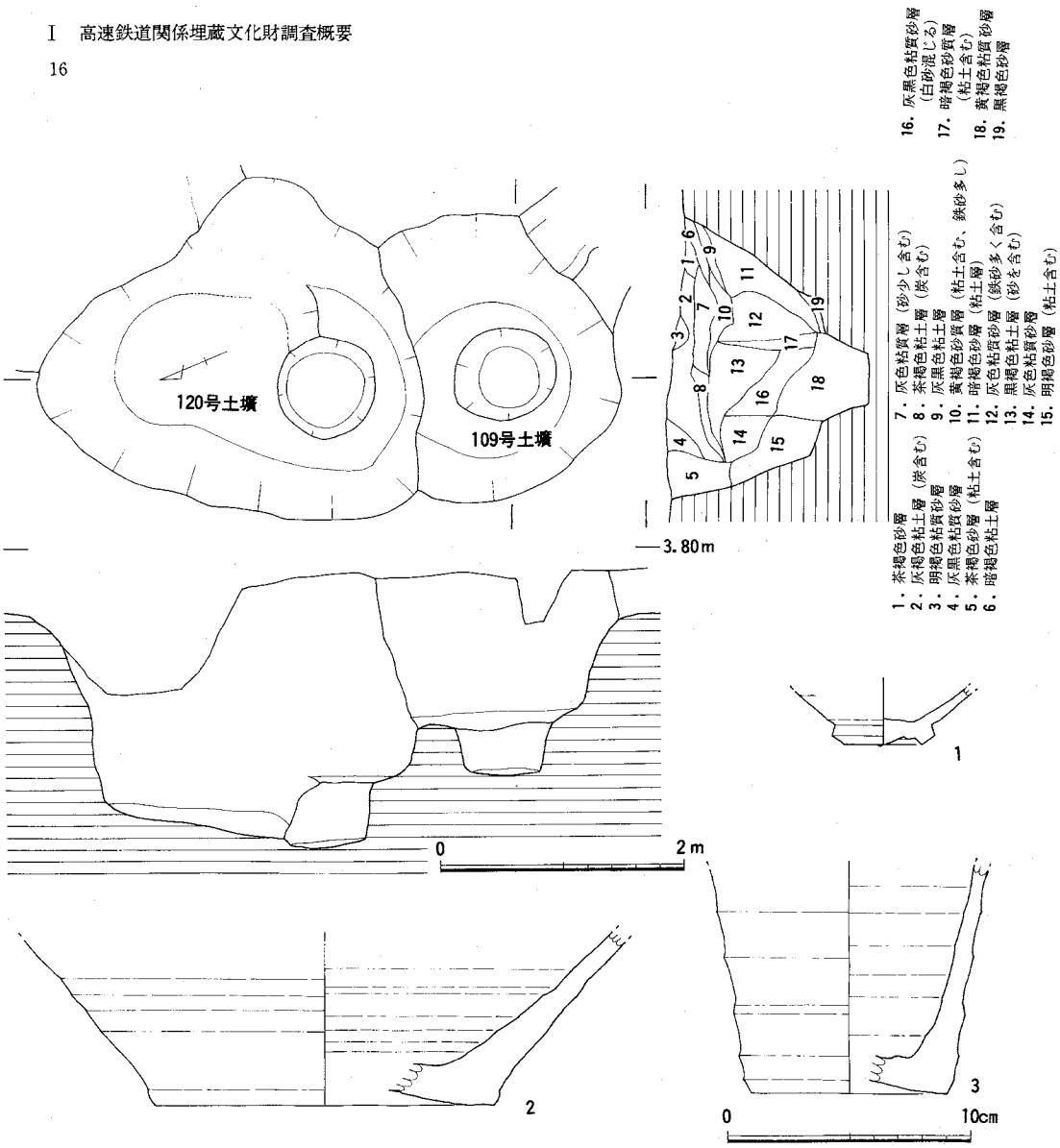


Fig.14　109号，120号土壙と109号土壙出土遺物

110号土壙　(Fig. 15　PL. 27・44)　E－Ⅱ－c区検出遺構で、111号土壙に切られている。一辺1.3mの隅丸方形掘方で、深さ0.7mを計る。図示した遺物は、1が越州窯青磁壺である。胎は緻密で灰色、外底高台内の一部をのぞいて光沢のある灰オリーブ色の釉がかかる。無文。2は口縁を外反させる白磁碗Ⅴ類、3は内面体部を白堆線で6区分する白磁碗Ⅱ類で、ともに高台内露胎部に同一の花押墨書が見られる。4は口縁を6輪花にする青白磁碗で、胎は白いが粗く、高台内をのぞいて淡青色ガラス質釉がかかり貫入が多い。露胎部に墨書が残るが判読で

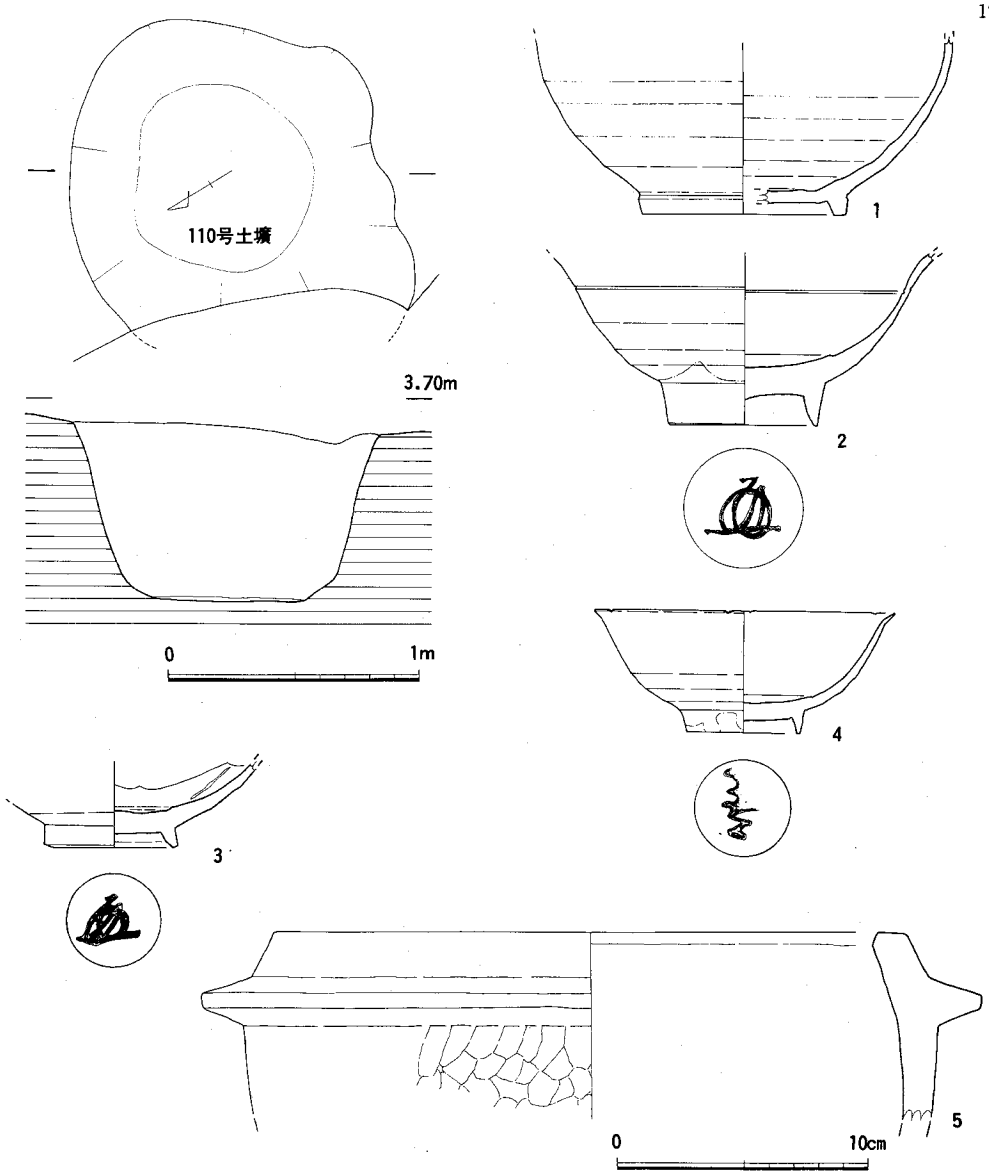


Fig.15　110号土壙と110号土壙出土遺物

きない。５は鍔をもつ滑石製石鍋である。白磁片39点、陶器29点があるが、龍泉、同安窯系の青磁は全く見られず、また土師皿類ではヘラ切底の小破片が見られるにすぎない。12世紀初めの廃棄物処理土壙であろう。

111号土壙　(PL. 27)　Ｅ－Ⅱ－ｃ区検出の径2.8ｍの大きな掘方である。分割区境にあり全体形不明であるが108号、110号土壙を切る。近現代の攪乱土壙であり、近代瓦、陶磁に混っ

て白磁片や青磁片などが少量出土している。

112号土壙　(Fig. 16・17　PL. 27)　E－Ⅰ・Ⅱ－d・e区検出の近代瓦組井戸である。119号土壙を切る。遺物は各時期混在し、量的にも少ない。図示した遺物は陶器B群に属する碁笥底をなす鉢である。

113号土壙　(Fig. 16・17　PL. 8・27) E－Ⅱ・Ⅲ－e区検出遺構で114号・135号土壙に切られる。井戸である。径0.8mの木桶組井戸である。水溜部から犬の下顎骨が出土している。図示した遺物は、1が外面に鎬蓮弁文を、見込に片切彫の花文をもち、2が見込および内面体部にヘラ描および細かな櫛描文をもつ龍泉窯青磁碗である。青白磁水注の把手もみられる。遺物量は多いが、各時期の遺物が混在する。土師皿類は小破片で計測できないのが殆んどであるが、器高の高い小皿が見られ、14世紀代に位置づけられよう。

114号土壙　(Fig. 16・17　PL. 9・27) ほぼF－Ⅱ・Ⅲ－a区にかかる。113号土壙を切る。近世の井戸掘方である。木桶組構造の痕跡が残る。18点の近世国産陶磁に混じって多量の輸入陶磁が出土している。図示した遺物は、1が同安窯系青磁皿で見込にヘラと櫛による文様をもつ。2は見込に片切彫の魚文を一匹配している龍泉窯系青磁皿である。3は龍泉窯青磁小碗で外面口縁直下を凹ませ輪花をなす。5は内面体部にのびやかな片切彫の花文と櫛描文をもつ白磁碗で口径19.5cmのやや大型である。6は鉄錆色の釉を施した天目碗である。4、7、8はいずれも陶器である。4はB群に属す壺で平底をなし越州窯青磁風の釉が内外面にかかる。7は準A群に属す四耳大壺の口縁である。8はB群の鉢で口縁内側と体部外面上位に重ね焼きの痕跡がある。このほか内面に灰色透明釉を、外面には高台脇まで黒釉をかける磁器壺が見られる。

115号土壙　(Fig. 18　PL. 27・45)　F－Ⅰ－a区の検出遺構である。長軸1.9mの長円形をなすと思われ、深さ0.65mの深皿形の掘方をもつ。近世陶磁数点に、多量の中世陶磁が混在する。近世の廃棄物処理用土壙であろう。図示した遺物は、1が口縁を水平に外に出す白磁碗の完形で、内面体部上半と底部との境に2本の沈圏線がめぐる。2は白磁平底皿で黄味の強いベージュ色の不透明釉が外面体部下半までかかる。3は内面底に片切彫の花文をもつ白磁平底皿で、Ⅵ類に属し、外底露胎部に「周太」かと思われる墨書が見られる。4は陶器B群に属する壺と思われる底部破片で胎はやや粗いが、内外全面に越州窯青磁風の灰青色の釉がかけられている。壁土かと思われるスサ入り粘土の焼けたものもある。

116号土壙　E－Ⅱ－d区検出遺構である。1.5mほどの径をもつ不整円形で深さ0.2m程の浅い皿状の茶褐色砂の落ち込みで、遺物は全く出土しておらず、明確な遺構とは言えない。

117号土壙　(Fig. 18　PL. 9・28)　E－Ⅰ・Ⅱ－e区検出遺構である。径3.1mの大きな掘方で底面に径0.9mの木桶組水溜の痕跡が残る。近世陶磁が4点出土しており、近世以降の井戸であるが、中世以前の遺物も混在する。図示した遺物は、1が内面底に片切彫の双魚文

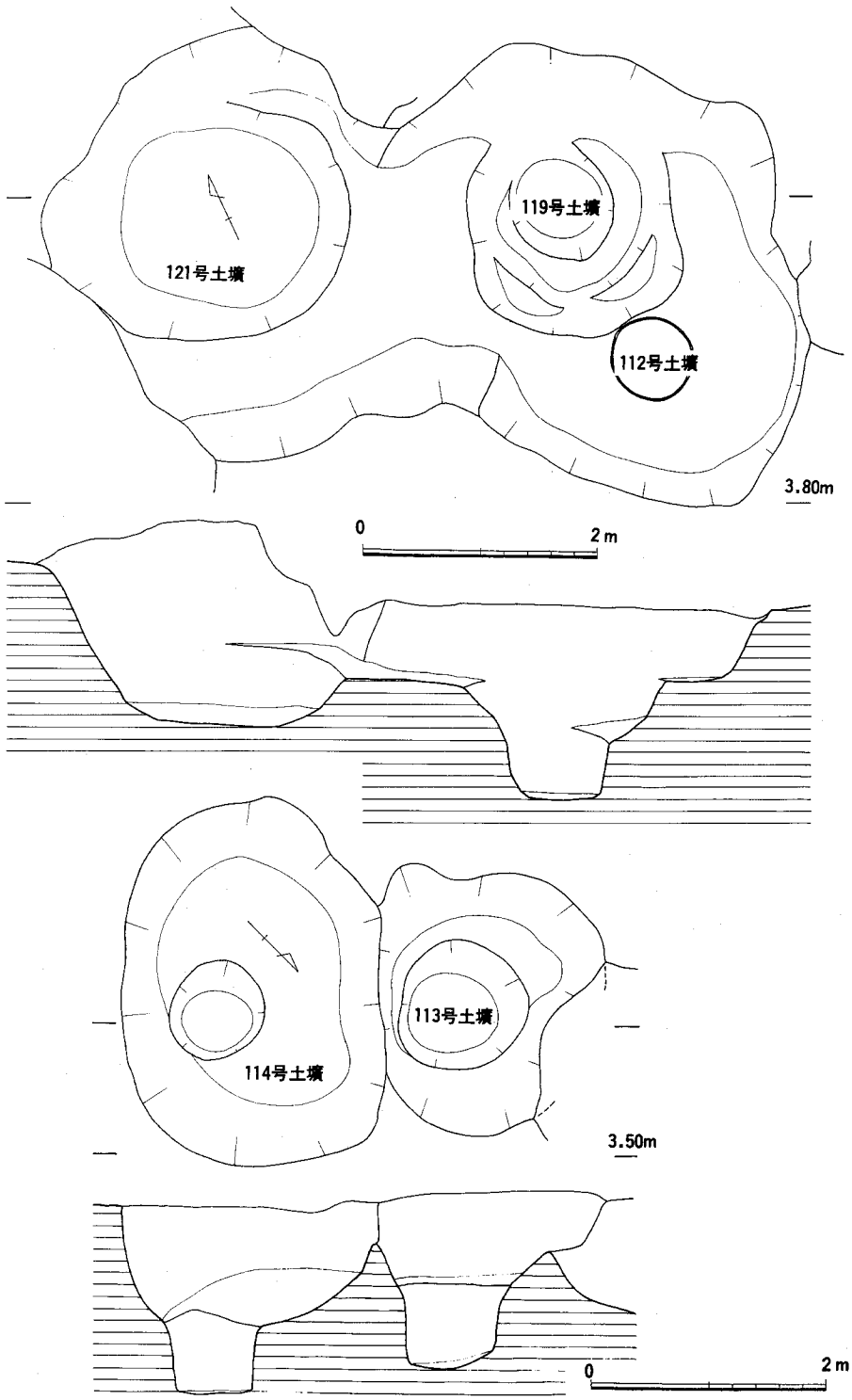


Fig.16　112号,113号,114号,119号,121号土壙

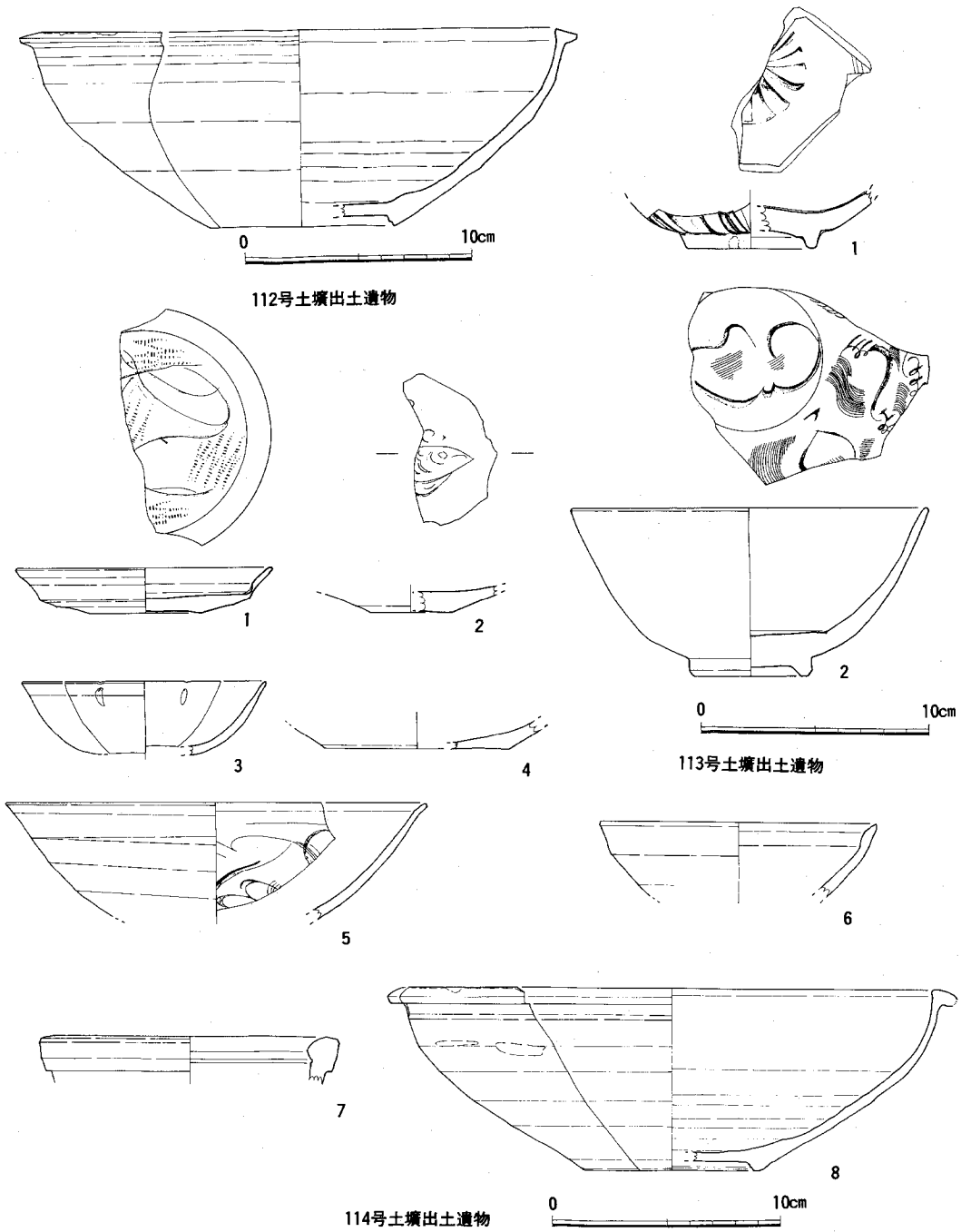


Fig.17　112号,113号,114号土壙出土遺物

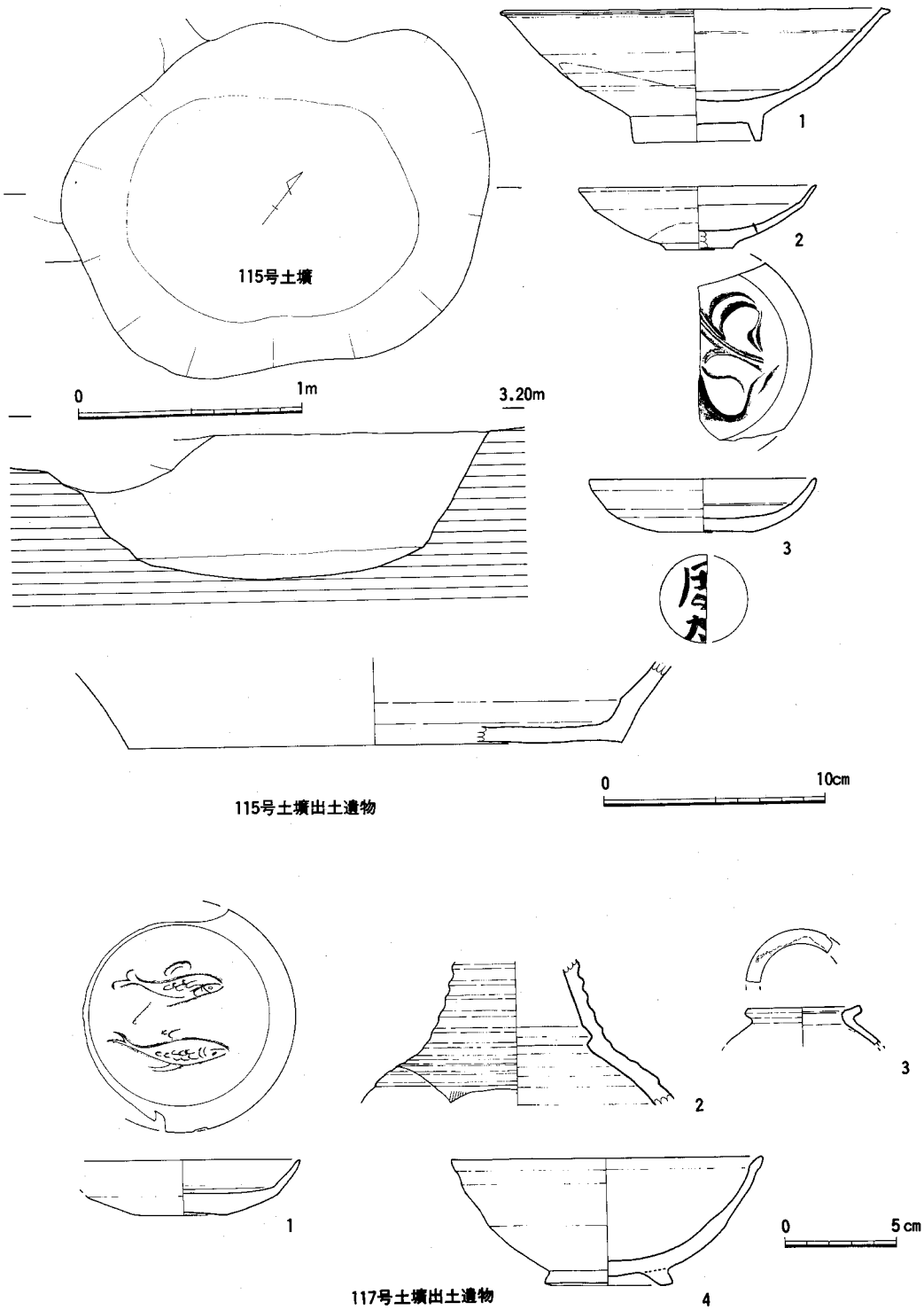


Fig.18　115号土壙と115号,117号土壙出土遺物

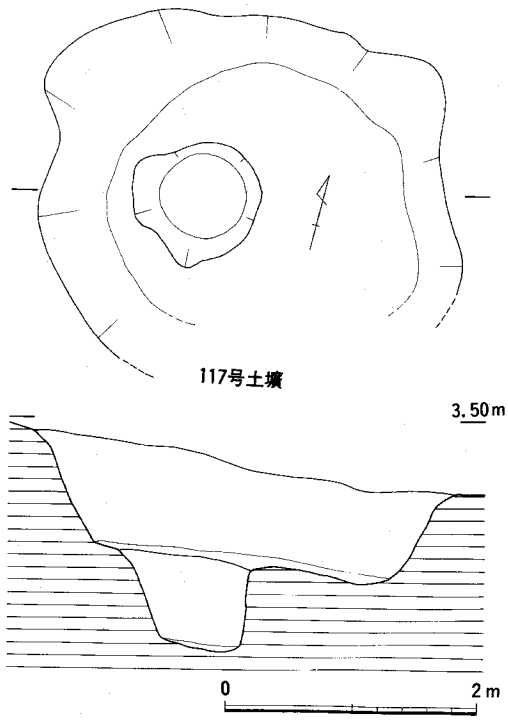


Fig.19　117号土壙

を配しているが、一般に見られる双魚文とは違い、同一方向を平行して向く。2は青白磁壺で、頸部から肩部にかけて幅広の凹線が巡り肩部下半に櫛描文が見える。頸部と肩部との接合部が明瞭で胎は黒粒を含み、やや粗いが堅緻、内面頸部および外面に淡い水色のガラス質透明釉がかかる。3は陶器壺で灰色の胎をもち不透明灰オリーブ釉がかかる。4は土師質の高台付碗で、内外面に研磨が施されているが、アバタ状に器壁全体が荒れている。

118号土壙　(Fig. 20　PL. 28)　E－Ⅱ－e区の上面で検出されている。径1.3mのほぼ円形で浅い。図示した遺物は、1が白磁碗O－Ⅱ類。釉はピンホールが目立つ。2は高台付白磁皿である。3は陶器A群に属す鉢であり、内面のみに黒釉を施す。外面は削りによって調整され薄い胎をなす。4は陶器B群に属すが胎土精良で灰色、外面体部下半まで越磁風のオリーブ色の釉がかかる。土師皿類で計測可能なものは表に示すとおりで、いずれも糸切底である。13世紀代の廃棄物処理土壙であろう。

119号土壙　(Fig. 16・21　PL. 28)　E－Ⅱ－d区検出の井戸である。近世瓦組井戸である112号土壙に切られ、121号土壙を切る。径3.2m程の大きな掘方で中央部に径0.9mの竪穴を穿ち木桶組構造の痕跡をもつ。遺物はやや多く各時期混在する。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗で外面体部にヘラ描の平坦な蓮弁文をもつ。2も同じく龍泉窯青磁碗で鎬蓮弁文をもちスカイブルーの半透明釉がかかる。3は見込に櫛描文をもつ龍泉窯青磁皿、4は同安窯系青磁皿である。土師皿類は計測表に示すように全て糸切底であるが、杯に径のバラつき

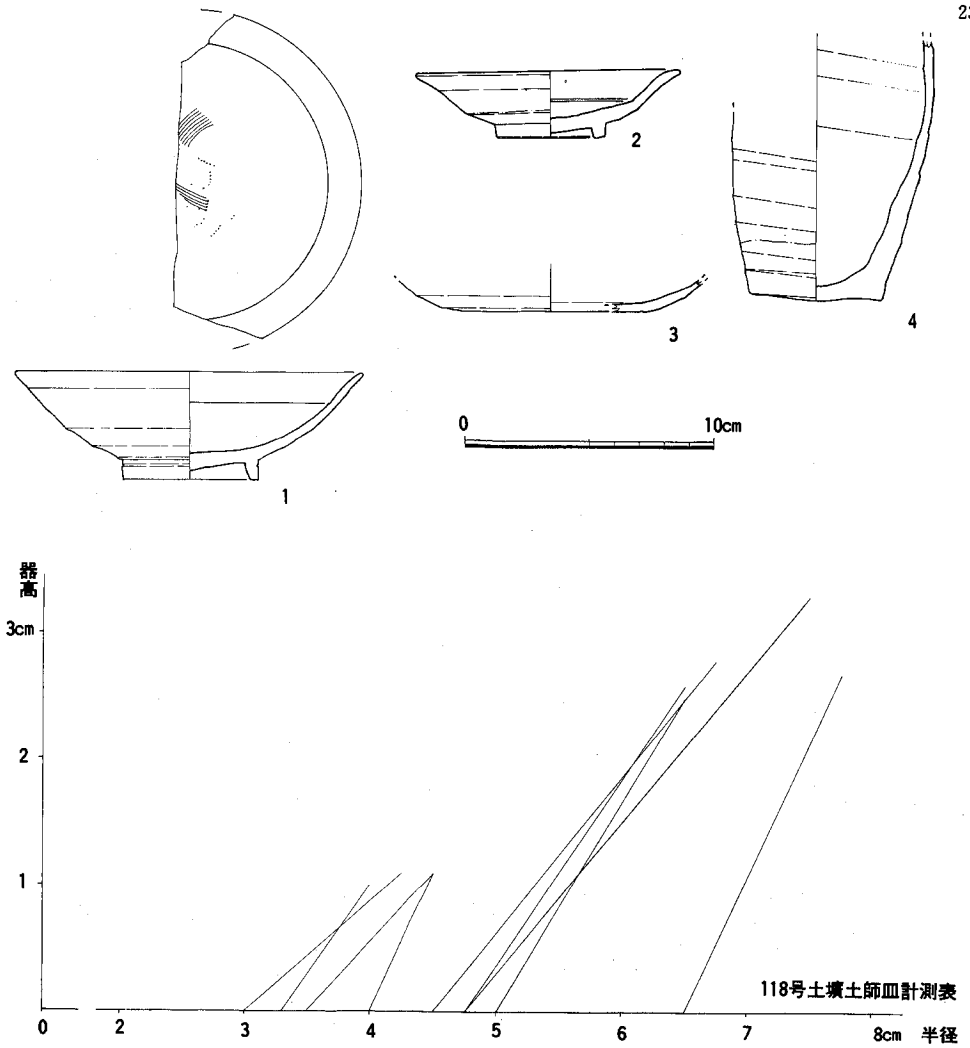


Fig.20　118号土壙出土遺物

がある。13世紀後半から14世紀前半頃の時期を考えておきたい。

120号土壙　(Fig. 14・22　PL. 28)　Ｅ－Ⅰ－ｄ区検出遺構である。近世井戸である109号土壙に切られる。長径３ｍ以上、短径2.8ｍの大きな掘方で、南側に偏して径0.85ｍの木桶組と思われる井戸水溜が見られる。遺物量は多いが各時期混在している。図示した遺物は、１が内面に、２が内外面に櫛描文をもつ同安窯系青磁碗。３、４が陶器Ｃ群に属す胎の粗い無釉の盤口水注で、同一個体であろう。５は陶器Ｂ群に属す長瓶で胎は灰色で緻密、外部下位まで越磁風の釉がかかる。６は同安窯系青磁碗と思われるが、くすんだ半透明オリーブ釉の口縁外直下釉垂れ部分が澱青釉風の美しい発色をなしている。土師皿類は小片で、糸切底のほか、ヘラ切底も見られるが混入であろう。13世紀代と思われる。

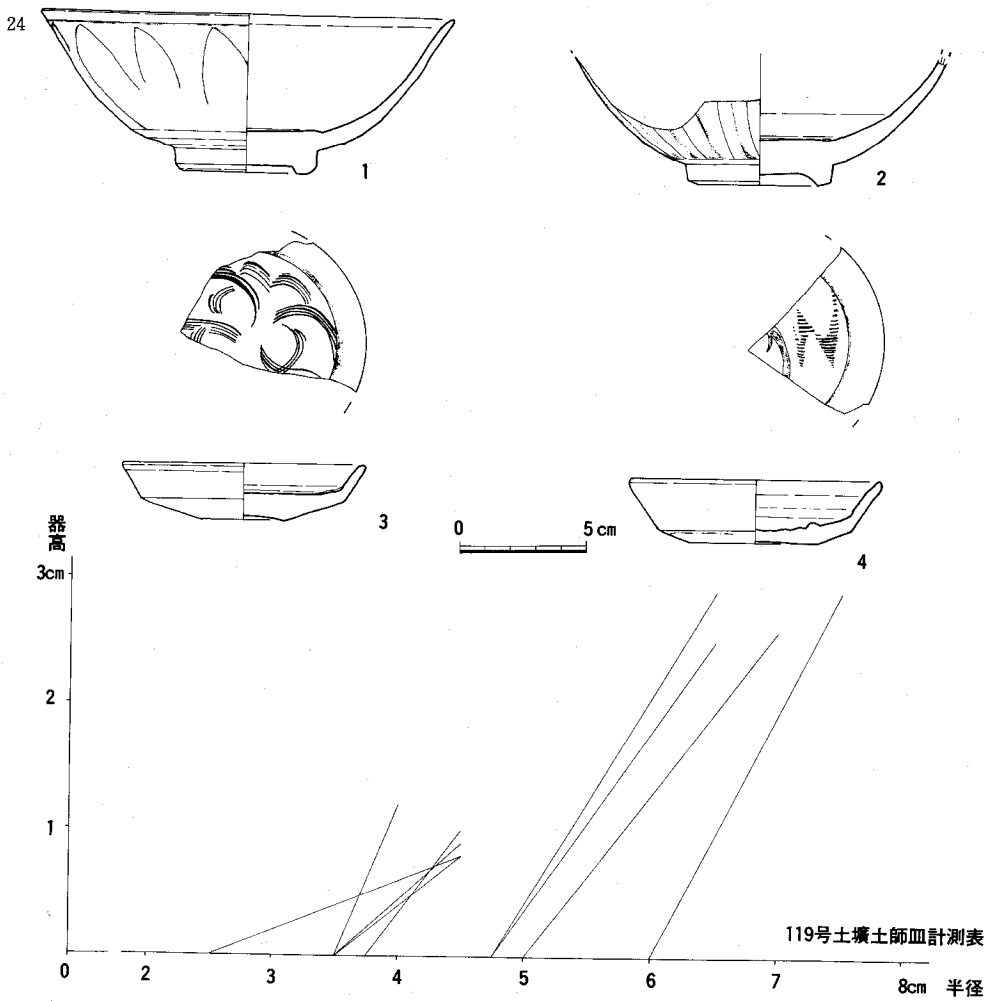


Fig.21　119号土壙出土遺物

121号土壙　(Fig. 16・22　PL. 28)　E－Ⅰ・Ⅱ－d区検出遺構である。中世井戸である119号、120号土壙に切られる。径3.5mもの大きな掘方をもつ。内部構造の痕跡は見られないが井戸掘方であろう。9世紀代の遺構を掘り抜いたものと思われ、当該期の遺物が多い。図示した遺物は、1が見込釉を輪状に削りとる白磁碗で高台は丸味をもつ。2は高台畳付まで施釉する白磁碗。3は青白磁合子蓋で上面に印花文をもつ。5はB群の陶器長瓶で底に目跡が残る。4は内外に黒褐釉を施す陶器壺でC群に属す。外底に他の器物が付着し重ね焼の痕跡を残す。6は土師器皿で外体は縦ハケ目、外底はケズリ調整を行ない赤褐色を呈す。7は土師器甕で口縁部は横ナデ、外体部は縦ハケ目、内面は斜めのヘラケズリ調整を行なう。8は須恵器甕である。13世紀半ば頃に掘り込まれたものであろうか。

122号土壙　(Fig. 23　PL. 29・45) E－Ⅰ－e区検出の近世廃棄物処理土壙である。近世

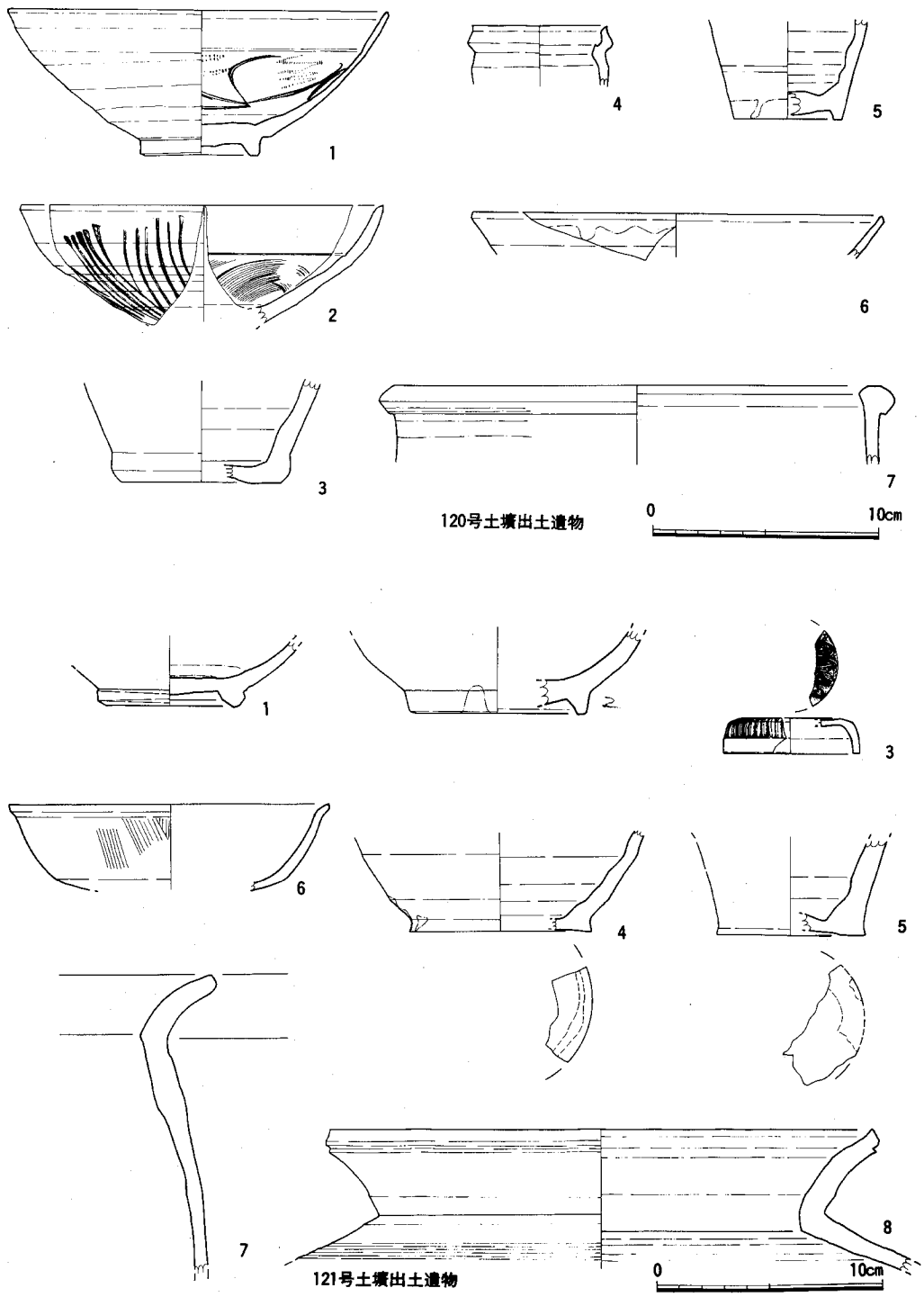


Fig.22　120号,121号土壙出土遺物

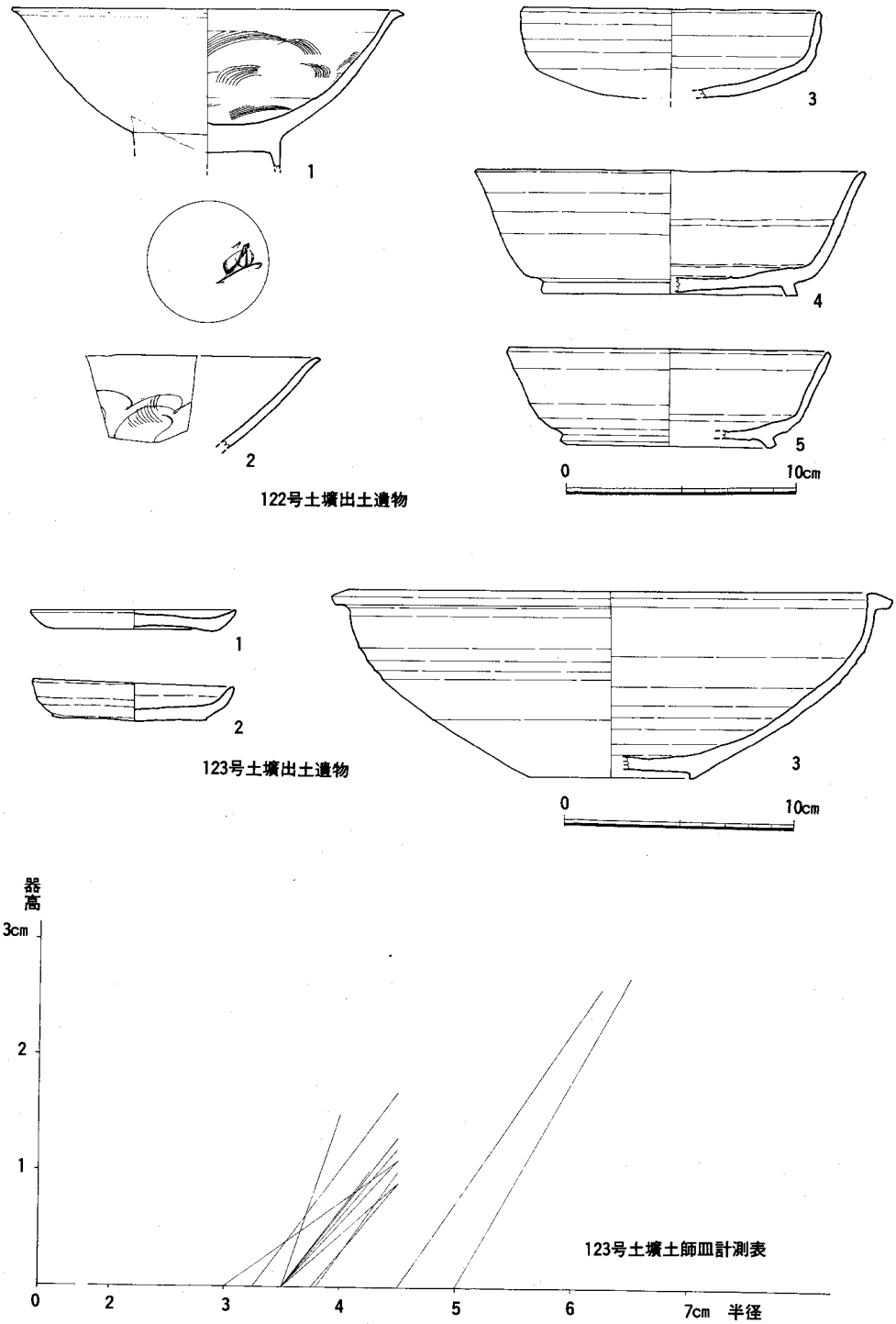


Fig.23　122号,123号土壙出土遺物

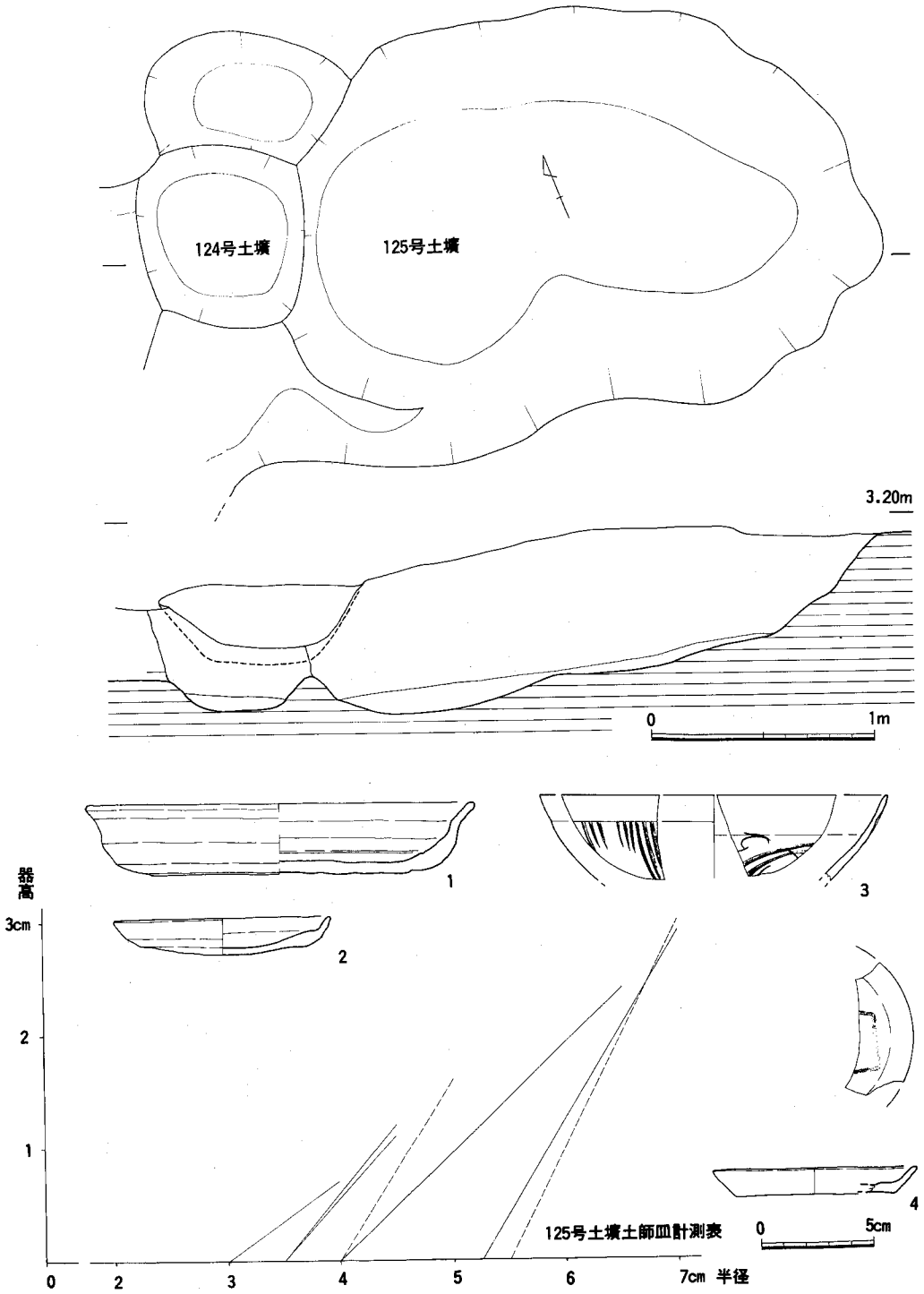


Fig.24　124号,125号土壙と125号土壙出土遺物

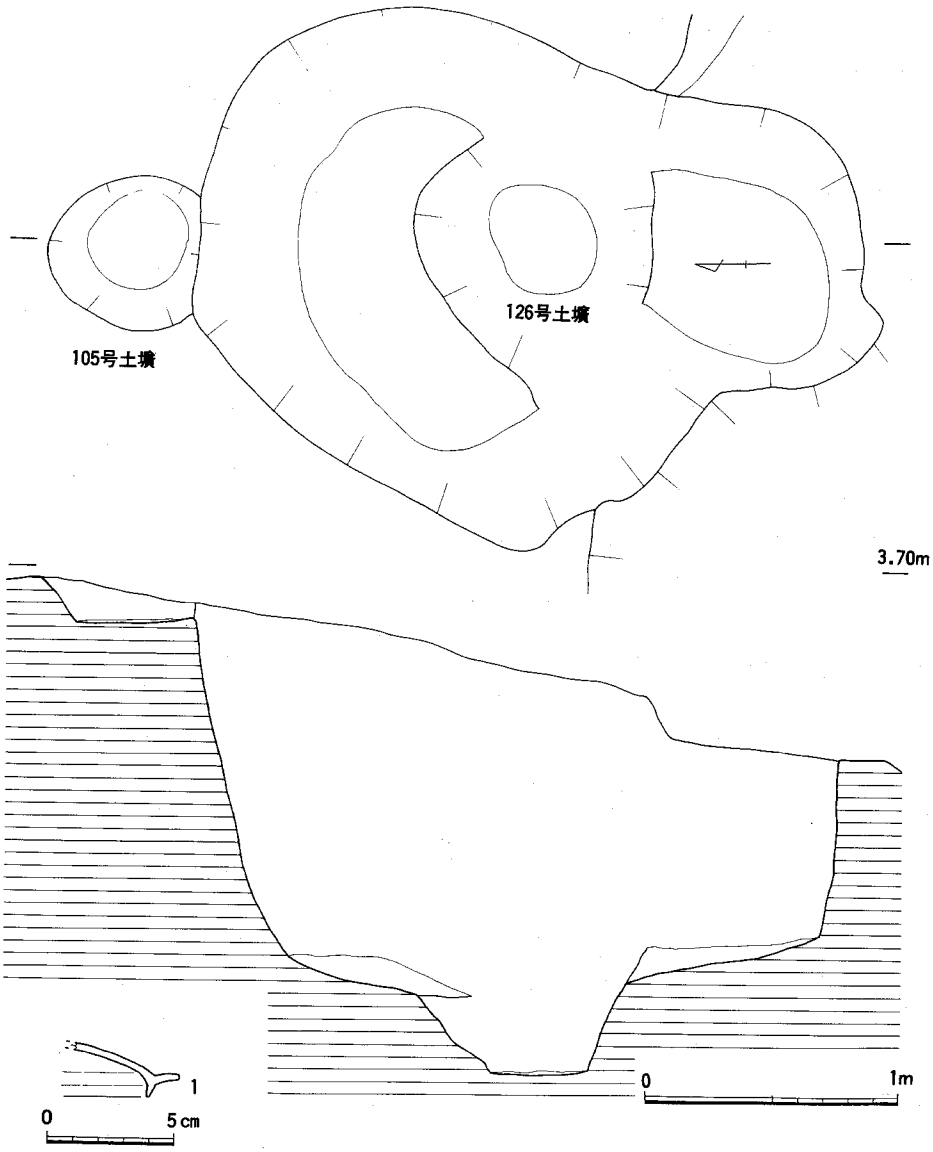


Fig.25　105号,126号土壙と126号土壙出土遺物

陶磁に混じって9世紀代以降の遺物が混在する。図示した遺物は、1が外底露胎部に花押墨書をもつ白磁碗である。2は内面体部に片切彫と櫛描の文様を施す青白磁碗。3は土師皿で体部はほぼ直に立ち横ナデ調整、外底は丸味をもちヘラケズリ調整を行う。赤褐色を呈す。4、5は須恵器高台付杯である。この他図示していないがガラスの坩堝に使用された陶器C群の壺がある。

123号土壙　(Fig. 23　PL. 29)　E－Ⅱ－e区検出遺構である。長軸1.8m、幅1.3mの浅

い土壙である。遺物量は少ないが土師皿類がまとまって出土している。土師皿類は糸切底で計測表に示したとおりである。３は陶器Ｂ群の平鉢で3/4程遺存する。13世紀代の廃棄物処理土壙であろう。

124号土壙　(Fig. 24)　Ｅ－Ⅱ－ｅ区検出の径0.8ｍの円形土壙である。112号土壙に切られ、125号土壙を切る。近世の掘方で近世陶磁に混じり、土師皿片４点が見られるにすぎない。

125号土壙　(Fig. 24　PL. 29・45)　Ｅ－Ⅱ－ｅ区検出の長軸2.5ｍ以上、幅1.9ｍ、深さ0.7ｍ程の深皿形の掘方をもつ。出土遺物はそれ程多くない。土師皿類は図および計測表に示すとおりであるが、糸切底とヘラ切底がみられ、法量にもバラツキがある。図示した遺物は、３が同安窯系青磁碗、４は内底に墨書をもつ糸切土師小皿である。13世紀代に掘り込まれたものであろうか。性格不明。

126号土壙　(Fig. 25　PL. 29)　Ｅ－Ⅱ－ｄ区検出の近世井戸である。多量の近世陶磁に少量の中世遺物が混じる。図示した遺物は陶器Ａ群の蓋である。

127号土壙　Ｅ－Ⅲ－ｄ区検出の1.6ｍ×1.3ｍの長方形の掘方であるが、遺物は全く出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

128号土壙　Ｅ－Ⅲ－ｄ区検出の1.8ｍ×1.2ｍの長方形掘方である。127号土壙に隣接するが、ここでも遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明。

129号土壙　(Fig. 26　PL. 29)　Ｅ－Ⅲ－ｃ区検出の1.2ｍ×1.0ｍの長円形土壙である。計測表に示したようにヘラ切土師小皿の良好な一括資料が得られている。11世紀後半の時期が考えられる。１は同安窯系青磁に類似する文様構成をもつ青磁鉢であるが、器形は11世紀後半に位置づけられている釉下鉄絵の白磁と同じであり共伴に矛盾はないと思われる。２は陶器Ｂ群に属す壺である。他には白磁破片が少量みられるにすぎない。廃棄物処理土壙であろうか。

130号土壙　(Fig. 26)　Ｅ－Ⅲ－ｃ区検出の径0.7ｍ程の浅い円形土壙であるが、遺物は出土しておらず、時期、性格ともに不明である。

131号土壙　(Fig. 27　PL. 29. 30・45)　Ｅ－Ⅲ－ｃ・ｄ区検出遺構であるが、土留壁によって一部切られ、また168号土壙を切る。土師皿片40点程出土しているが、計測可能なものは杯が２点でそれぞれ口径14cm、16cm、器高3.3cm、2.7cm、小皿が２点で口径いずれも９cm、器高1.3cm、1.2cmを計りすべて糸切である。12世紀後半から13世紀前半に位置づけられるが、他の遺物は混在する。図示した遺物は、１が龍泉窯系青磁で無文。外底露胎部に「二」と思われる墨書をもつ。２は越州窯青磁の壺で、肩の張った体部にラッパ状に開く長い頸部がつく。肩と体部に劃花文が施されている。頸部内面まで半透明の濃緑オリーブ釉がかかる。３、４はそれぞれ高台付、平底の白磁皿である。５は菊花文型造りの青白磁合子蓋でスカイブルーの釉をかける。６は国産の緑釉碗で内面に線描文が見られ、胎はネズミ色で粗い。７は天目碗であ

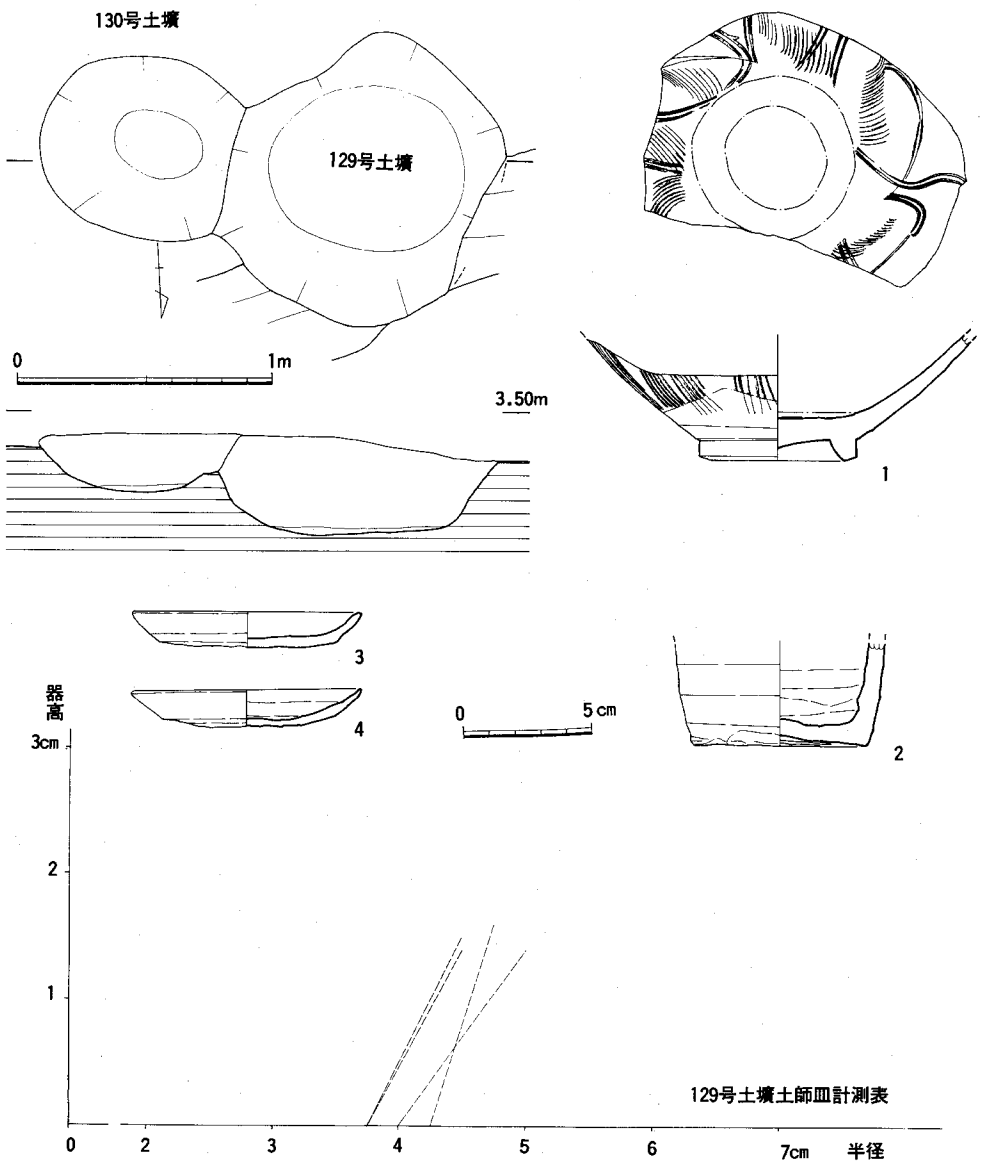


Fig.26　129号,130号土壙と129号土壙出土遺物

る。13世紀前半代の廃棄物処理土壙であろう。

132号土壙　E－Ⅲ－d区検出遺構であるが、遺物は見られず、時期、性格ともに不明。

133号土壙　(Fig. 28)　E－Ⅲ－e区検出遺構である。径1.6mの円形で、深さ1.75mの掘方であり壁はほぼ直になる。他の井戸遺構掘方と同一レベルまで掘り下げられ湧水点に達していることから、井側等の痕跡は確認できないが、井戸であると思われる。遺物は少量である。

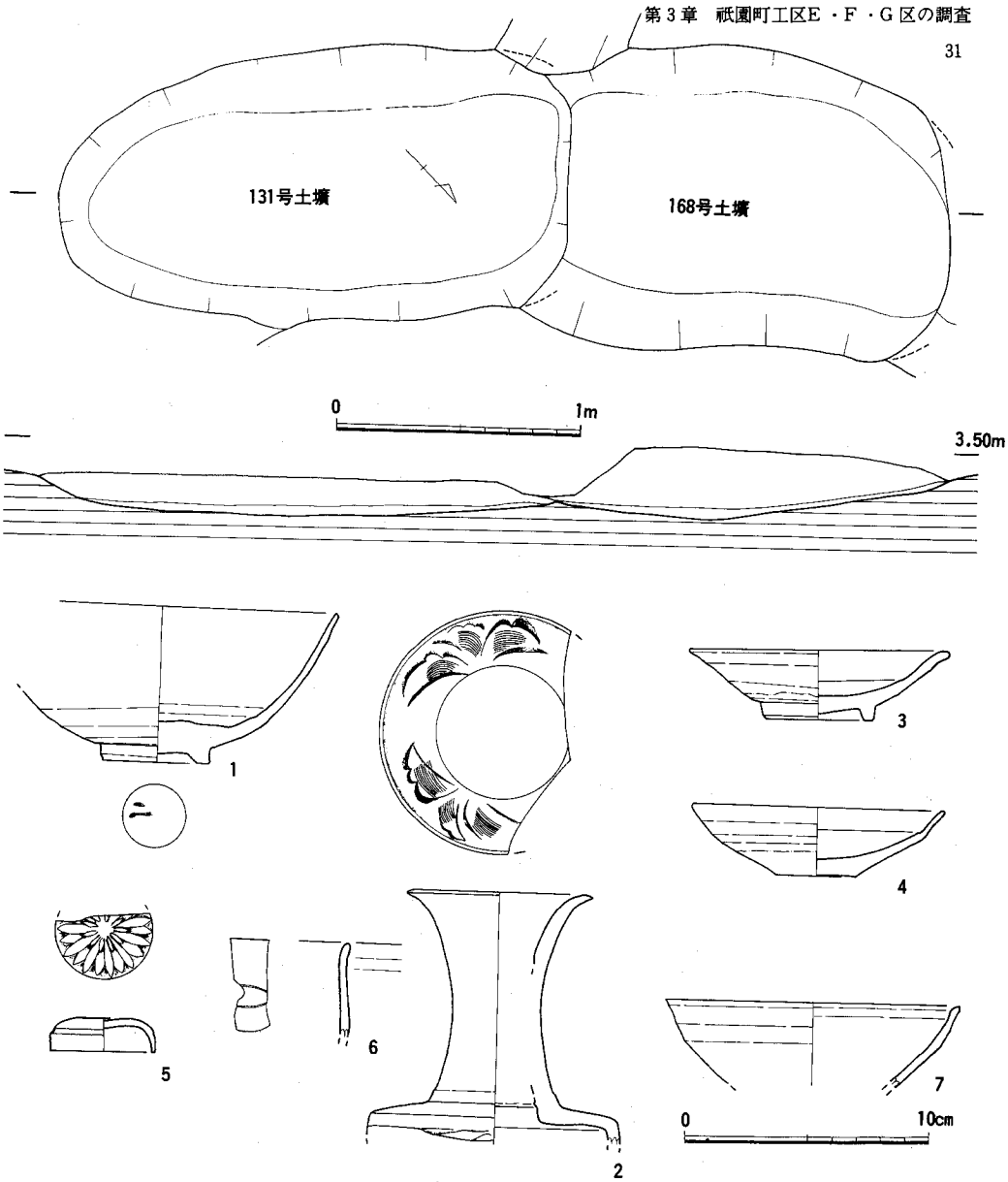


Fig.27　131号,168号土壙と131号土壙出土遺物

14世紀代か。

134号土壙　Ｅ－Ⅲ－ｅ区検出の長軸1.2ｍ、幅0.7ｍ、深さ0.3ｍの浅い掘方である。土師皿小破片１点が出土したのみで時期、性格ともに不明である。

135号土壙　中間杭布掘り時の確認坑である。　以上Ｅ区南半部確認遺構である。

136号土壙　Ｅ－Ⅱ－ｂ区検出の径2.1ｍの円形掘方で、0.8ｍ程の深さをもつ。出土遺物は少なく、時期は明らかにしがたいが、12号溝が埋没してから掘り込まれており、14世紀半ば以降

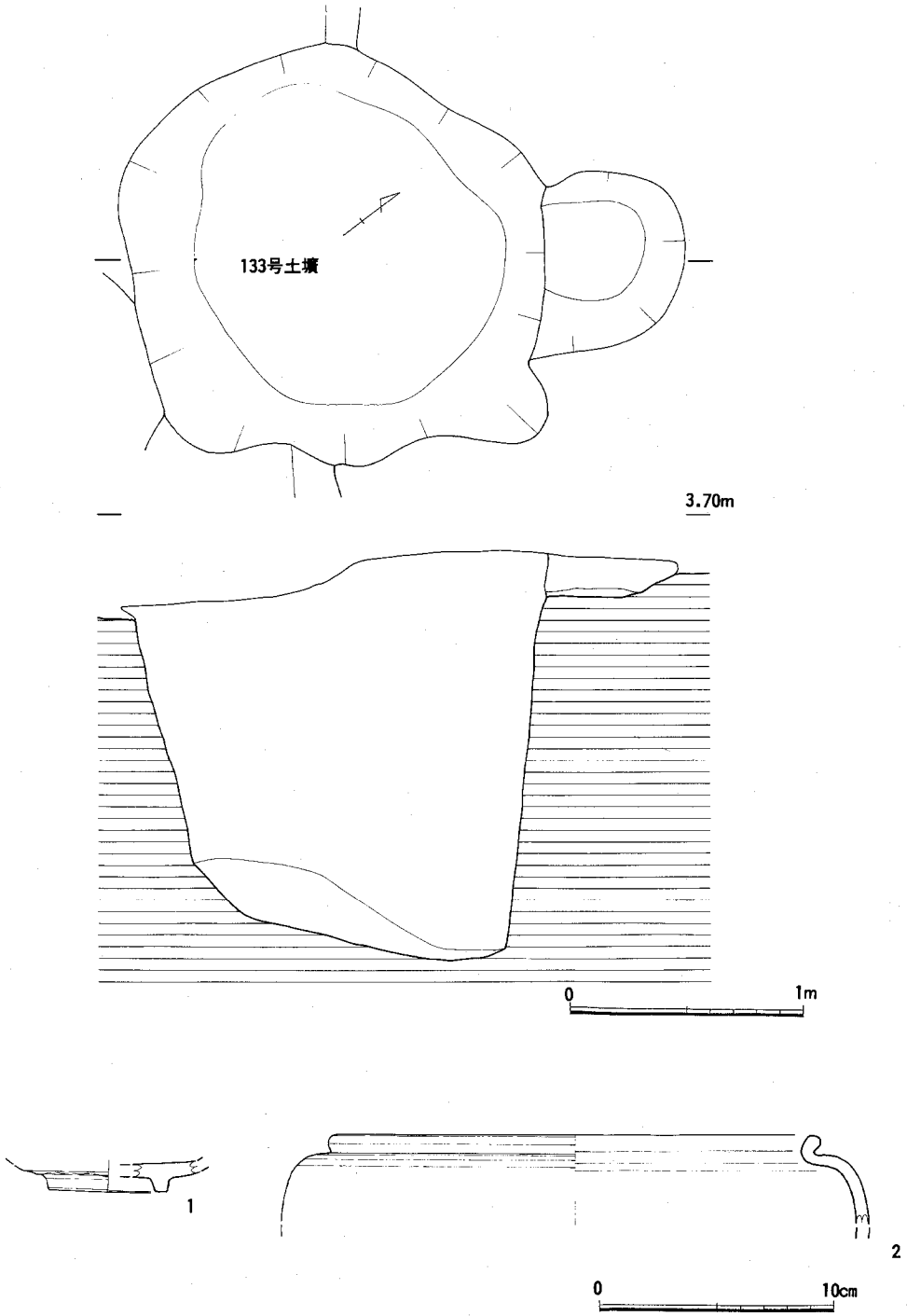


Fig.28　133号土壙と137号土壙出土遺物

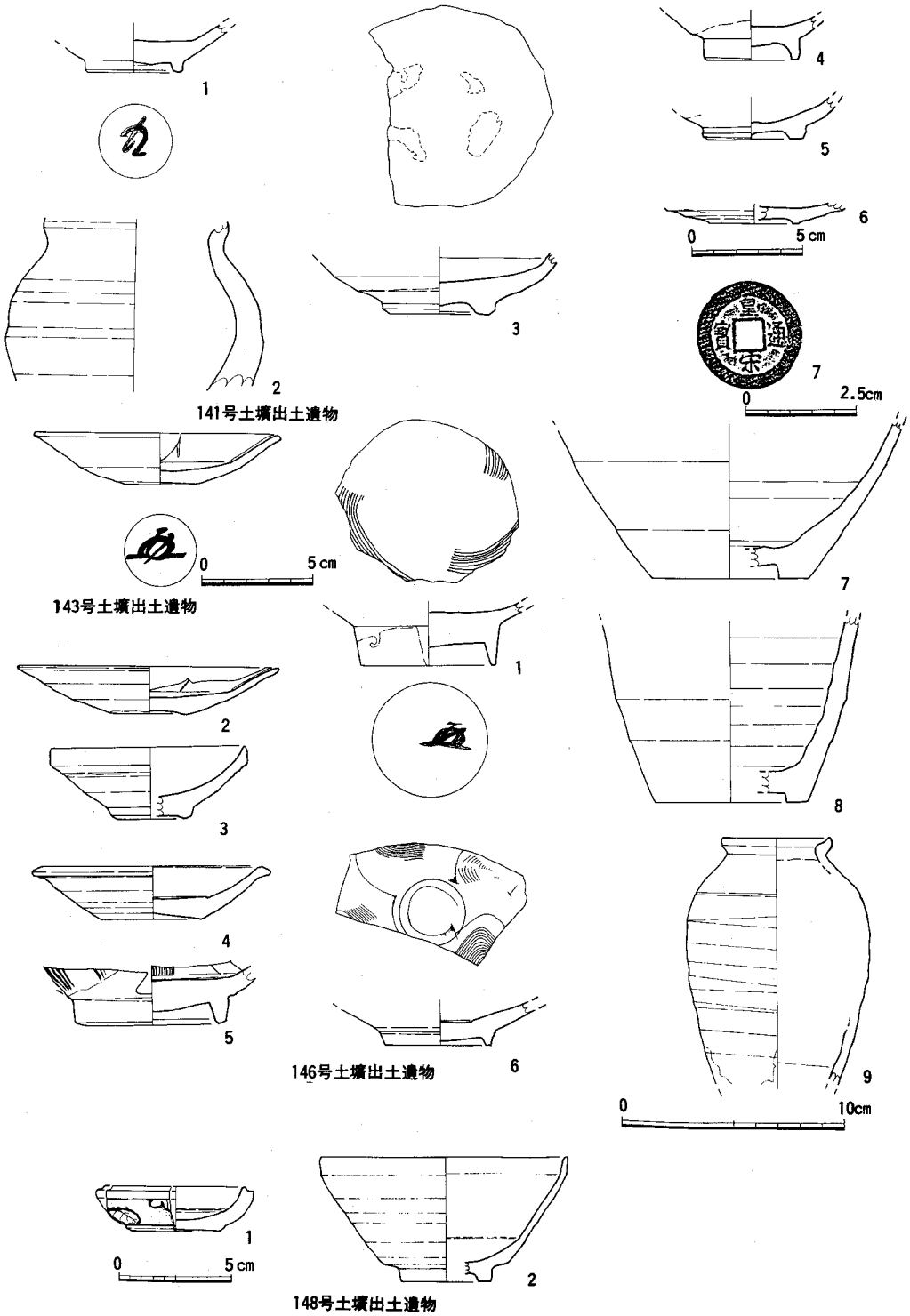


Fig.29　141号,143号,146号,148号土壙出土遺物

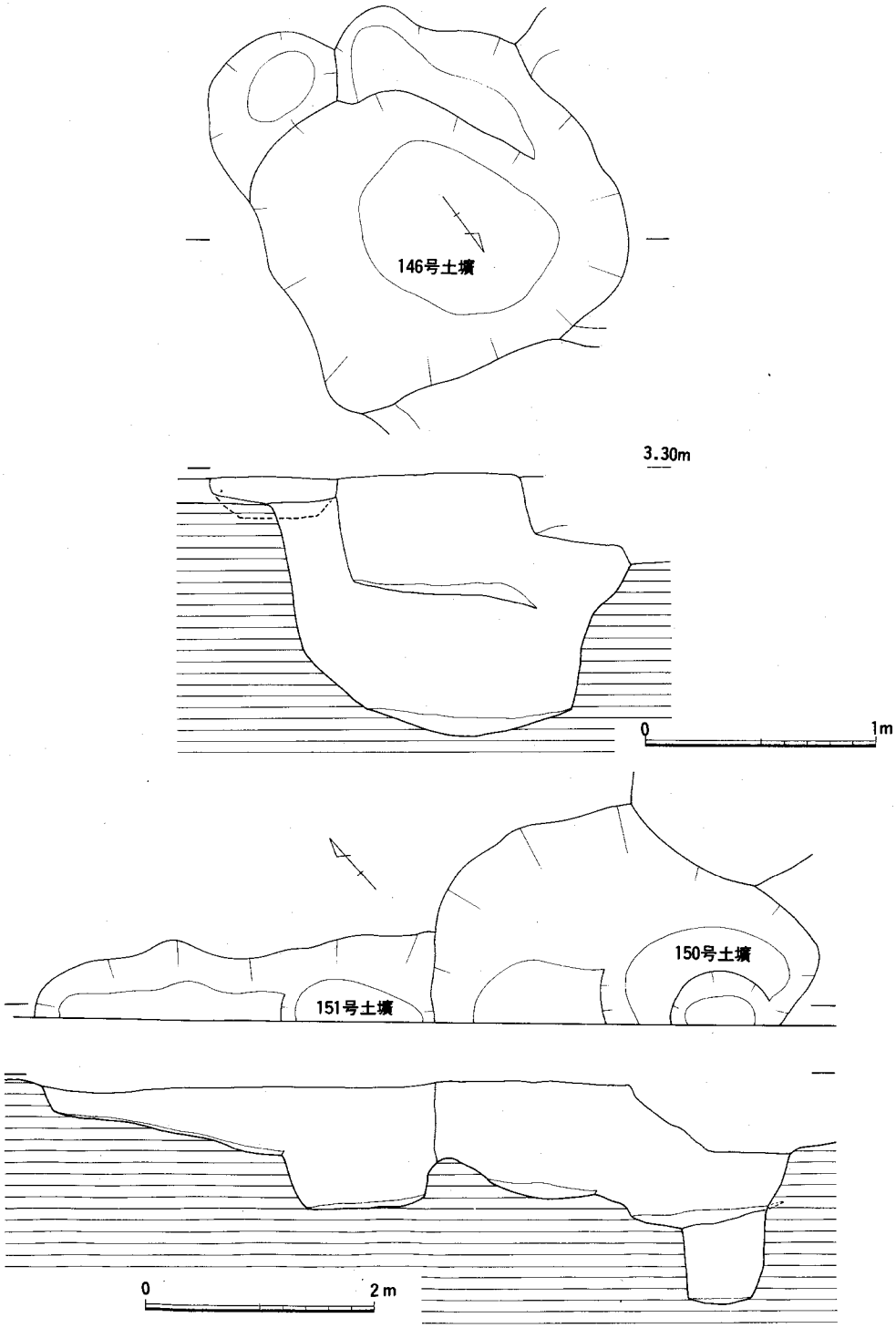


Fig.30　146号,150号,151号土壙

の遺構である。性格不明。

137号土壙　(Fig. 28)　Ｅ－Ⅱ－ｂ区検出遺構である。不定形の浅い掘込で、12号溝の東壁上面にあり、テラス状をなしている。12号溝の一部であるかもしれない。出土遺物は多いが、各時期混在する。図示した遺物は、１が龍泉窯系青磁碗で貫入の多い茶オリーブ釉がかかる。２は陶器Ｃ群に属す鉢で、紫灰色の胎をもち黒褐色の釉をかける。土師皿類も多数出土しているが、微細な小片がほとんどで、計測可能なものは２点だけである。いずれも糸切で口径10cmと９cm、器高はいずれも1.1cmである。

138号土壙　(PL. 30)　Ｅ－Ⅱ－ａ区検出遺構である。近代瓦組井戸で、近代陶磁に混じって中世遺物が出土している。

139号土壙　Ｅ－Ⅱ－ａ区検出の小土壙である。12号溝の上面に掘り込まれた近世攪乱である。遺物は少ない。

140号土壙　Ｅ－Ⅱ－ａ区検出の長方形の小土壙である。12号溝の上面に掘り込まれている。近現代の廃棄物処理用土壙であろう。

141号土壙　(Fig. 29　PL. 30・45) Ｅ－Ⅰ・Ⅱ－ｂ区検出の12号溝の中央部を穿った近世井戸掘方である。掘方最下面の標高は0.68ｍと深い。多量の近世遺物に中世以前の遺物が混入している。図示した遺物は、１が龍泉窯系の青磁小碗で、外底高台内露胎部に「九」または花押かと思われる墨書が残されている。２は備前系の陶器壺、３は唐津系の陶器皿で見込に４箇所の目跡が残る。４は唐津系と思われる陶器碗であるが、体部下半以下を除いて粘りのある天目釉がかけられている。５は中国製白磁皿である。６は唐津系の陶器皿で黒褐釉がかけられている。７は「皇宋通寶」である。

142号土壙　Ｅ－Ⅱ－ａ区検出の浅い土壙で不定形である。遺物は少ない。近世磁器１点に、白磁碗片３点、土師皿片４点が見られるのみである。近世の攪乱土壙である。

143号土壙　(Fig. 29　PL. 30・45) Ｅ－Ⅱ－ａ区検出の小土壙で、12号溝埋没後に掘り込まれている。遺物は少ない。図示した遺物は白磁平底皿で内面体部を白色堆線で５区分しており、外底露胎部に周辺遺構で出土しているものと同例の花押墨書が書かれている。口径12cm、器高2.9cmの糸切土師杯１点もある。14世紀半ばに位置づけられよう。

144号土壙　Ｅ－Ⅱ－ａ区検出の近代攪乱土壙である。近代磁器１点、鉄砲の弾丸３点に、青磁片２点、骨片２点などが見られる。

145号土壙　Ｅ－Ⅰ・Ⅱ－ａ区検出の不整形の掘方である。深さ0.7ｍを計るが出土遺物はほとんど見られず、時期、性格ともに不明。

146号土壙　(Fig. 29・30　PL. 30・45) Ｅ－Ⅰ－ａ区検出遺構で147号土壙に切られる。近世磁器５点があり、近世の廃棄物処理土壙であろう。中世以前の遺物も多数混在する。図示し

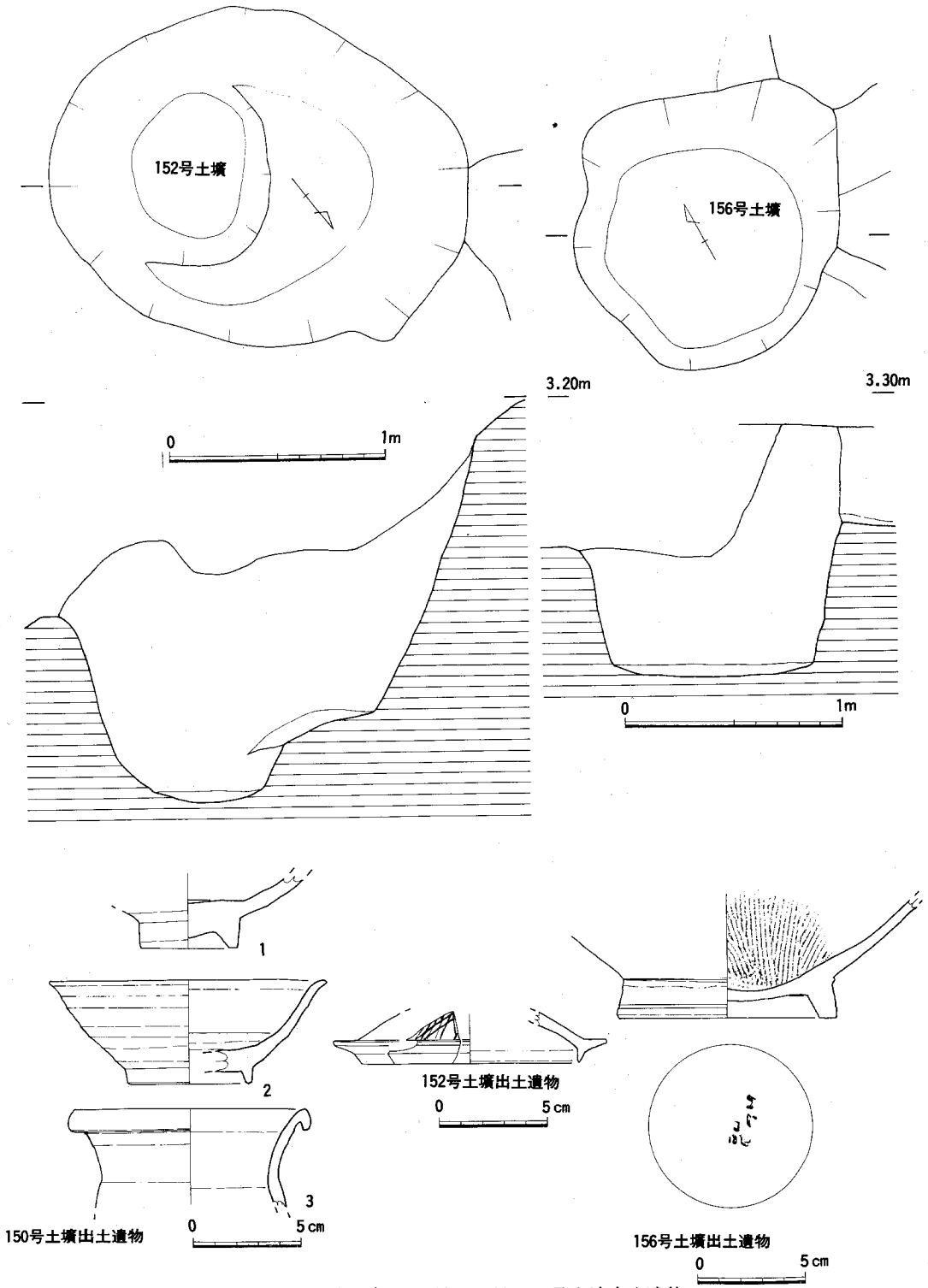


Fig.31　152号,156号土壙と150号,152号,156号土壙出土遺物

たものは、１が見込に櫛描文をもつ白磁碗で、外底露胎部に例の多い花押の墨書をもつ。２は143号土壙例と同じく白色堆線で内面体を区分する白磁平底皿、３は高台付白磁皿である。４は口縁端を外下へ屈折させる白磁平底皿である。５は体部内外に櫛描文をもつ青磁鉢で分厚く、茶味の強いオリーブ色釉をかけ、見込は輪状に削りとる。６は青白磁碗で内面に片切彫と櫛描による文様を施す。外底畳付以内は露胎で、以外にスカイブルーの美しい透明釉をかける。７～９はいずれも陶器Ｂ群に属す壺類である。このほか口径9.5㎝、９㎝、器高1.6㎝のヘラ切底土師皿２点も見られる。

147号土壙　Ｅ－Ⅰ－ｅ区検出の近世攪乱土壙で146号土壙を切る。遺物量は多くない。

148号土壙　(Fig. 29　PL. 30)　Ｅ－Ⅰ－ａ区検出の近代攪乱土壙で、各時期の遺物が混在して出土している。図示した遺物は、１が龍泉窯青磁合子身で体部に葉の浮文をもつ。わずかに黄味をおびた濃緑色半透明釉がかけられている。外底と接合部は露胎。２は磁質の天目碗で、高台畳付を除いて玳玻盞風の黒褐釉がうすくかけられている。近世の国産品であろう。

149号土壙　Ｅ－Ⅰ－ａ区検出の近現代廃棄物処理土壙であり、中世以前の遺物は微量。

150号土壙　(Fig. 30・31　PL. 30)　Ｅ－Ⅰ－ｂ区検出遺構である。土留壁柱に切られ全体形は不明であるが、掘方底面端に木桶組の痕跡を残す穴が穿たれており、井戸掘方である。土師皿類は30点あるが小破片で計測しえない。14世紀代と思われる。遺物は各時期混在する。図示した遺物は、１が同安窯系青磁碗で内面無文、高台を高く小さく削り出している。２は白磁浅碗で見込釉を輪状に削り取る。３は白磁四耳壺または水注の頸部である。

151号土壙　(Fig. 30)　Ｅ－Ⅰ－ａ区検出遺構であるが、土留壁柱に切られ詳細不明。

152号土壙　(Fig. 31)　Ｅ－Ⅰ－ｂ区検出遺構である。径2.0ｍ程の二段掘りをなす掘方で底面は標高1.3ｍを計り湧水点に充分達している。水溜等施設の痕跡は見られないが井戸であろう。出土遺物は少なく、瓦片19点が目立つ。図示した遺物は青磁蓋で上面にのみ淡黄緑色のガラス質の強い釉がかけられている。上面に斜格子の櫛描文がある。他に龍泉窯青磁香炉小片がある。14世紀代であろう。

153号土壙　Ｅ－Ⅱ－ｃ区で検出の154号土壙（井戸）の掘方。欠番。

154号土壙　Ｅ－Ⅰ・Ⅱ－ｃ区検出の井戸である。径3.0ｍ×2.4ｍの長円形の二段掘方である。標高1.13ｍまで掘り下げられている。遺物は少なく、口径13.5㎝、器高2.4㎝の糸切底土師杯が１点出土している。12号溝埋没後に掘り込まれたもので、14世紀半ば以降の井戸である。

155号土壙　103号土壙と同じであり欠番。

156号土壙　(Fig. 31　PL. 30・45) Ｅ－Ⅲ－ａ区検出の近世廃棄物処理土壙である。図示した遺物は国産の近世擂鉢で、外底に墨書が見えるが判読できない。

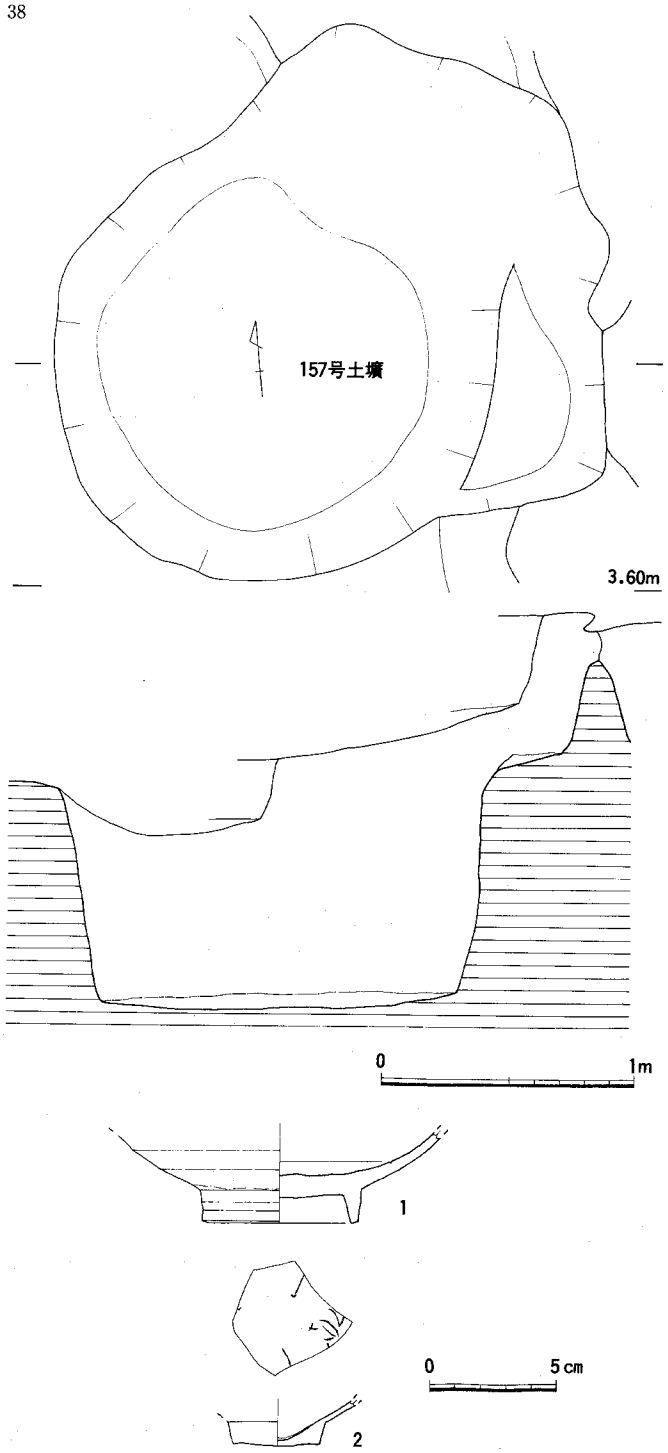


Fig.32　157号土壙と157号土壙出土遺物

157号土壙（Fig. 32　PL. 31）　E－Ⅲ－b区検出遺構である。径1.7m程の円形掘方で、深さ1.6mを計り、底面標高は1.92mである。壁はほぼ直に立つ。出土遺物はまとまりがない。図示した遺物は、1が白磁碗で、見込に異物がゴマ粒のように付着している。外底露胎部に墨書の痕跡を見るが判読できない。2は青白磁碗で内面体部にヘラ描文をもち、外底部をのぞいてライトブルーの美しい釉がかかる。内底に深い茶溜りがある。土師皿は少量かつ小破片で時期は明確にしがたい。14世紀頃の井戸であろうか。

158号土壙（Fig. 33　PL. 31）　E－Ⅲ－c区検出遺構である。径3.9m程のほぼ円形の深皿状の井戸掘方で、深さ1.7m、底面標高は1.76mである。出土遺物は奈良、平安期の土師器、須恵器片がやや多く、中世以降の遺物は微量である。古い遺構を掘り抜いたものであろう。図示した遺物は、1が口縁を外方に平坦に伸ばし、体部に丸味をもつ白磁皿。2は7世紀代の須恵器小壺で、肩に刺突文をもつ。

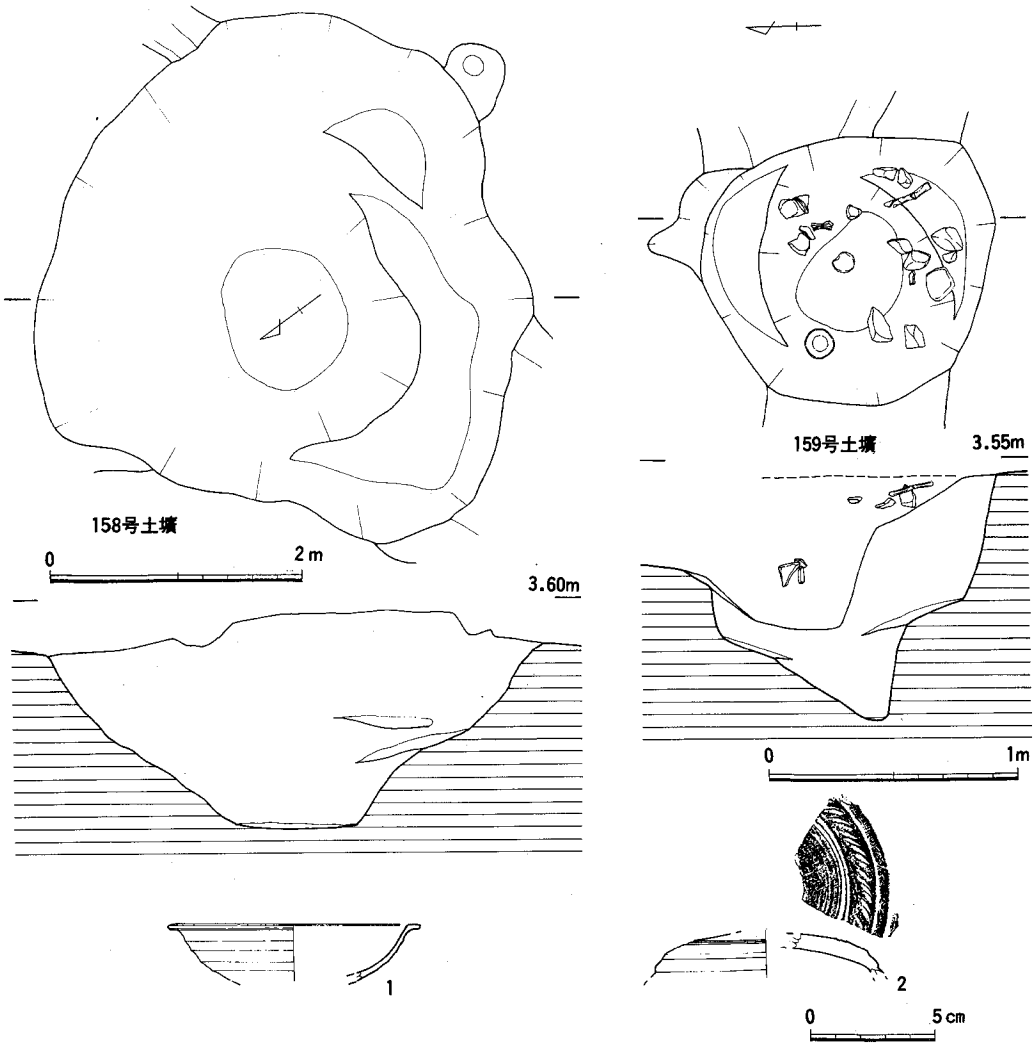


Fig.33　158号,159号土壙と158号土壙出土遺物

土師皿類も小破片のみで明確な時期はわからないが、14世紀半ば頃の掘方か。

159号土壙（Fig. 33）　E－Ⅲ－b区検出の径1.1mの円形土壙である。黒褐色土の覆土中に動物骨片、焼石、土師皿類が散在する。計測可能なものは、ヘラ切底の杯で口径17cm、器高2.8cmの大型のもの1点と、小皿はいずれも糸切底で、最小口径7.0cm、器高1.1cm、最大口径9.0cm、器高1.5cmのものまで7点があり、各時期混在する。以外の遺物には瓦小片6点、白磁、青磁片各1点、陶器6点などがある。おそらく14世紀半ばの廃棄物処理土壙である。

160号土壙（Fig. 34・35　PL. 31）　E－Ⅲ－b区検出遺構で、161号土壙を一部切る。近

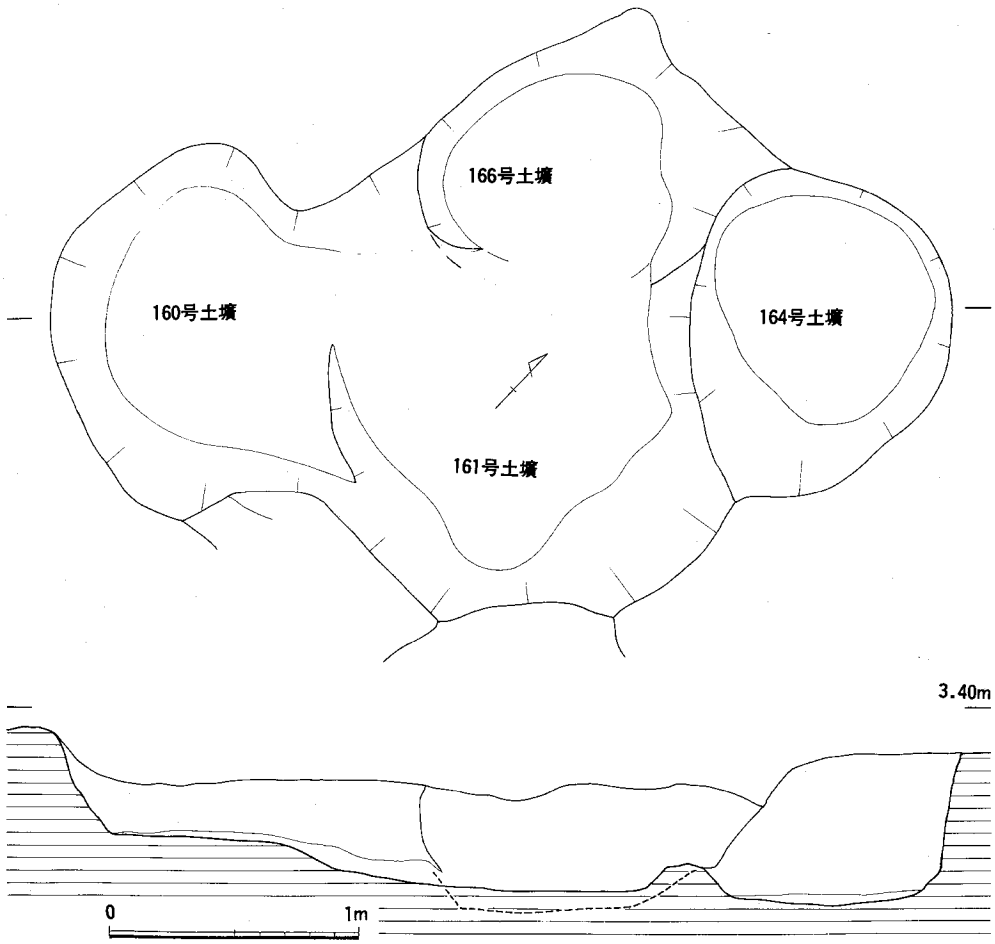


Fig.34　　Fig.34　160号,161号,164号,166号土壙

代攪乱土壙。遺物量は少ない。近代国産陶器擂鉢や磁器に混じり、少量の中世陶磁がある。図示した遺物は、磁灶窯系の陶器蓋で無釉、上面頂部のみヘラ削調整で、他はナデ調整を行う。

161号土壙（Fig. 34・35　PL. 31・45）　E－Ⅲ－b区検出遺構で、160号土壙に切られ、164号、166号土壙を切る。少量の近世陶磁に、多量の中世以前の遺物が混じる。近世廃棄物処理土壙である。図示した遺物は1が龍泉窯系青磁碗で、内面体部を2条の沈線で5区分した間に飛雲文を描く。見込に4箇所の目跡が残り、外底露胎部に墨書が見られるが判読できない。鶯色不透明釉がかかる。2は見込沈圏線内にヘラ描ともえ文、体部にヘラ、櫛による花文をもつ青磁碗である。体部は丸みをもち龍泉窯青磁碗のプロポーションに近いが、胎土、釉、高台の削りは同安窯系青磁碗に近い。3は畳付部のみ露胎で他に茶味のあるモスグリーン色の釉が

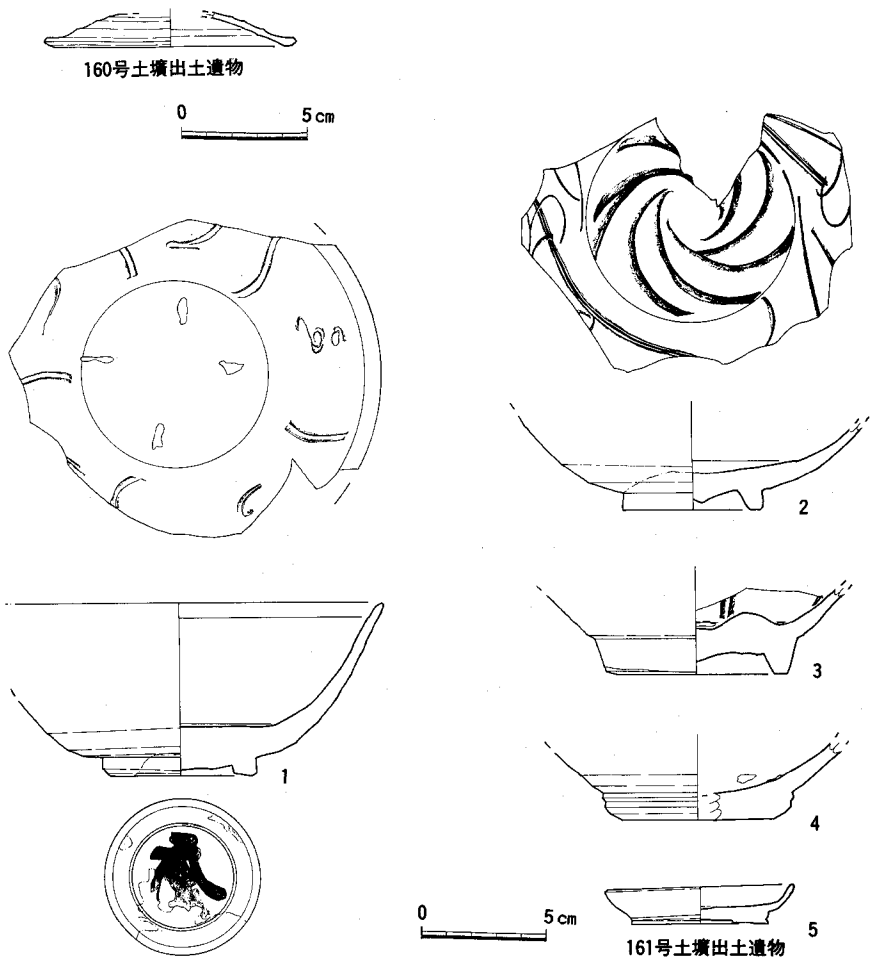


Fig.35　160号,161号土壙出土遺物

かかり、見込に輪状の目跡が残る。底には火ぶくれがあり粗製であるが、越州窯青磁とＢ群陶器との中間的印象がある。４は越州窯系青磁碗で体部下半を削り高台状にする。底部の脇に目跡が斜めに残る。５は糸切底土師小皿で口径7.8㎝、器高1.6㎝を計る。

162号土壙（Fig. 36　PL. 31）　Ｅ－Ⅲ－ｂ区検出遺構である。163号土壙に接するが前後関係不明。土留壁柱に切られ全体は不明であるが、0.3ｍ程の浅い掘方をもつ。土師皿類がまとまって出土しているが計測可能なものは表に示したとおりで、いずれも糸切底。小皿はややまとまりを見せるものの杯はまとまらず、12世紀後半から13世紀代まで混在しているようである。近世遺物も少量であるが混在しており、以前の遺構を再び掘り起こした近世廃棄物処理土

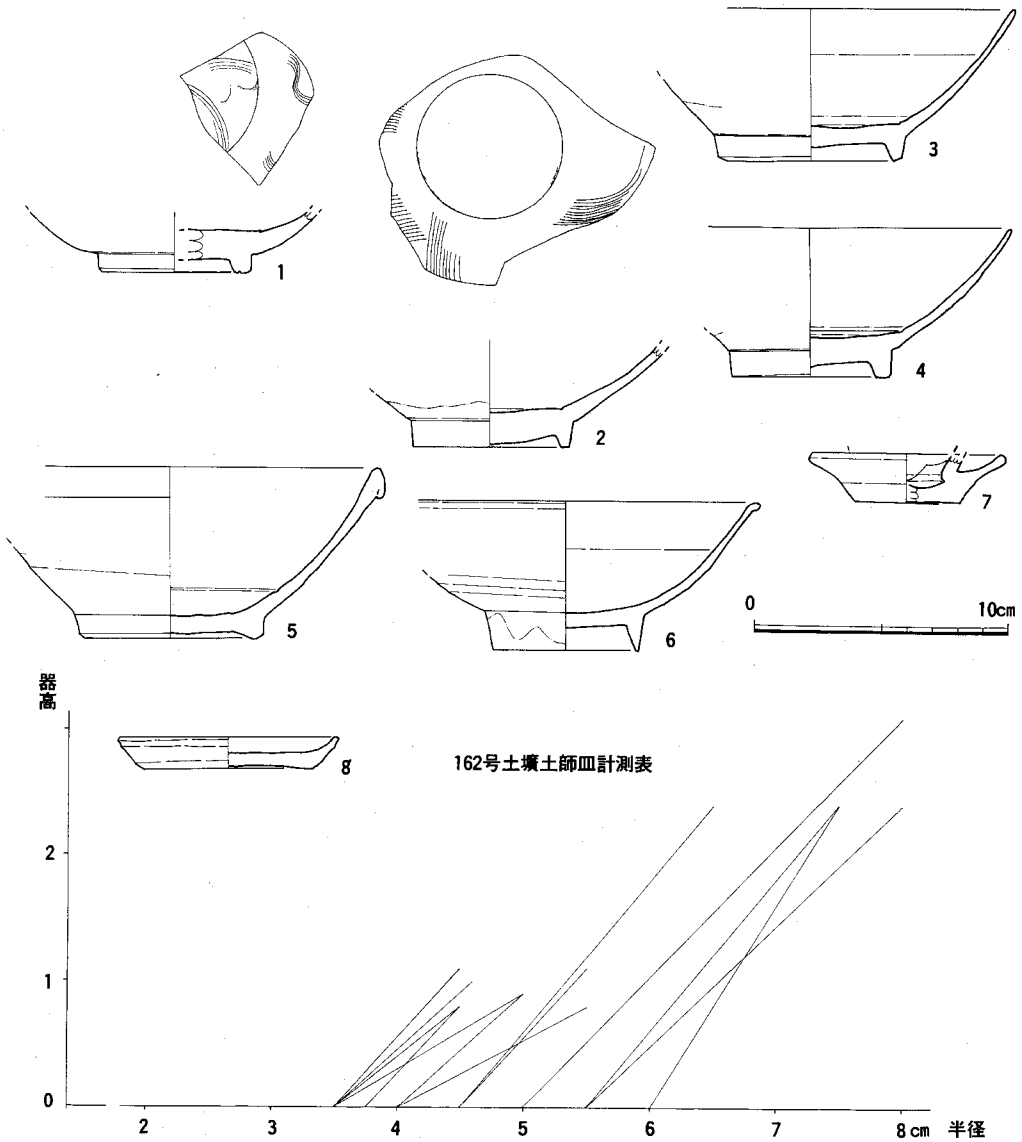


Fig.36　162号土壙出土遺物

壙であろう。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗、2が内面体部に櫛描文をもち、見込に段をもつ白磁碗で、淡黄色の貫入の多いガラス質透明釉が体部下半までかかる。3、4は白磁碗Ⅸ類で見込釉を輪状に削りとる。6は白磁碗Ⅵ類である。7は国産の糸切底の灯明皿で、無釉、レンガ色の胎をもつ。

163号土壙　E－Ⅲ－c区検出の遺構であるが、土留壁柱に切られ全体形は不明。出土遺物

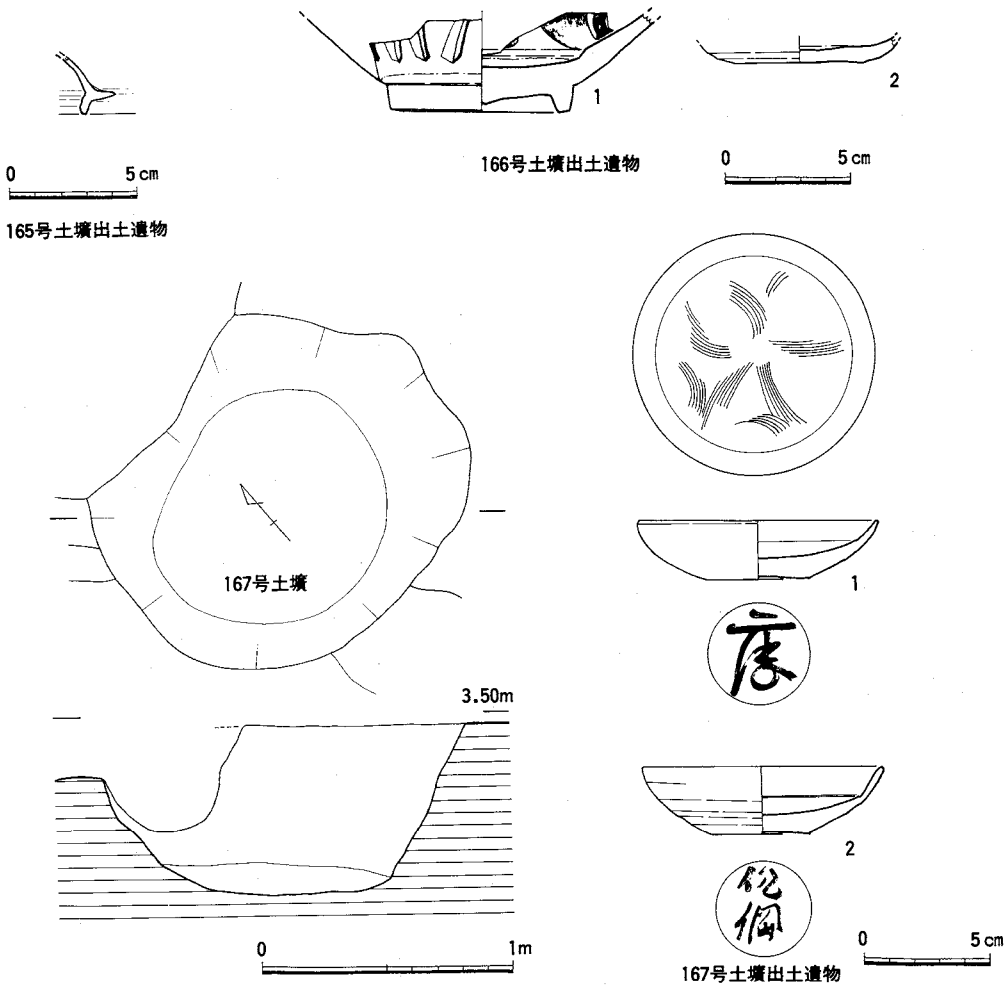


Fig.37　167号土壙と165号,166号,167号土壙出土遺物

は骨片少量を除いて全く見られず時期は不明である。土壙墓であろうか。

164号土壙（Fig. 34）　Ｅ－Ⅲ－ｂ区検出遺構で、径1.1～1.2ｍのほぼ円形で深さ0.6ｍを計る掘方をもつ。遺物は少量で中世末かと思われる瓦破片９点が見られるのみである。性格不明。

165号土壙（Fig. 37　PL. 31）　Ｅ－Ⅲ－ｂ区検出遺構である。径0.9ｍの円形で、深さ0.7ｍの掘方をもつ近世土壙である。近世陶磁に混じり少量の中世遺物が混じる。図示した遺物は青白磁蓋である。上面にのみ明青色の半透明釉がかかる。

166号土壙（Fig. 34・37　PL. 31・46）　Ｅ－Ⅲ－ｂ区検出遺構である。161号土壙に切られる。径0.9ｍ程の円形をなすと思われ、深さ0.53ｍを計る。多量の骨片に混じって、中世遺物が多く見られる。図示した遺物は、１が釉下鉄彩の鉢で、外面体部に放射状の片切彫が見られ、

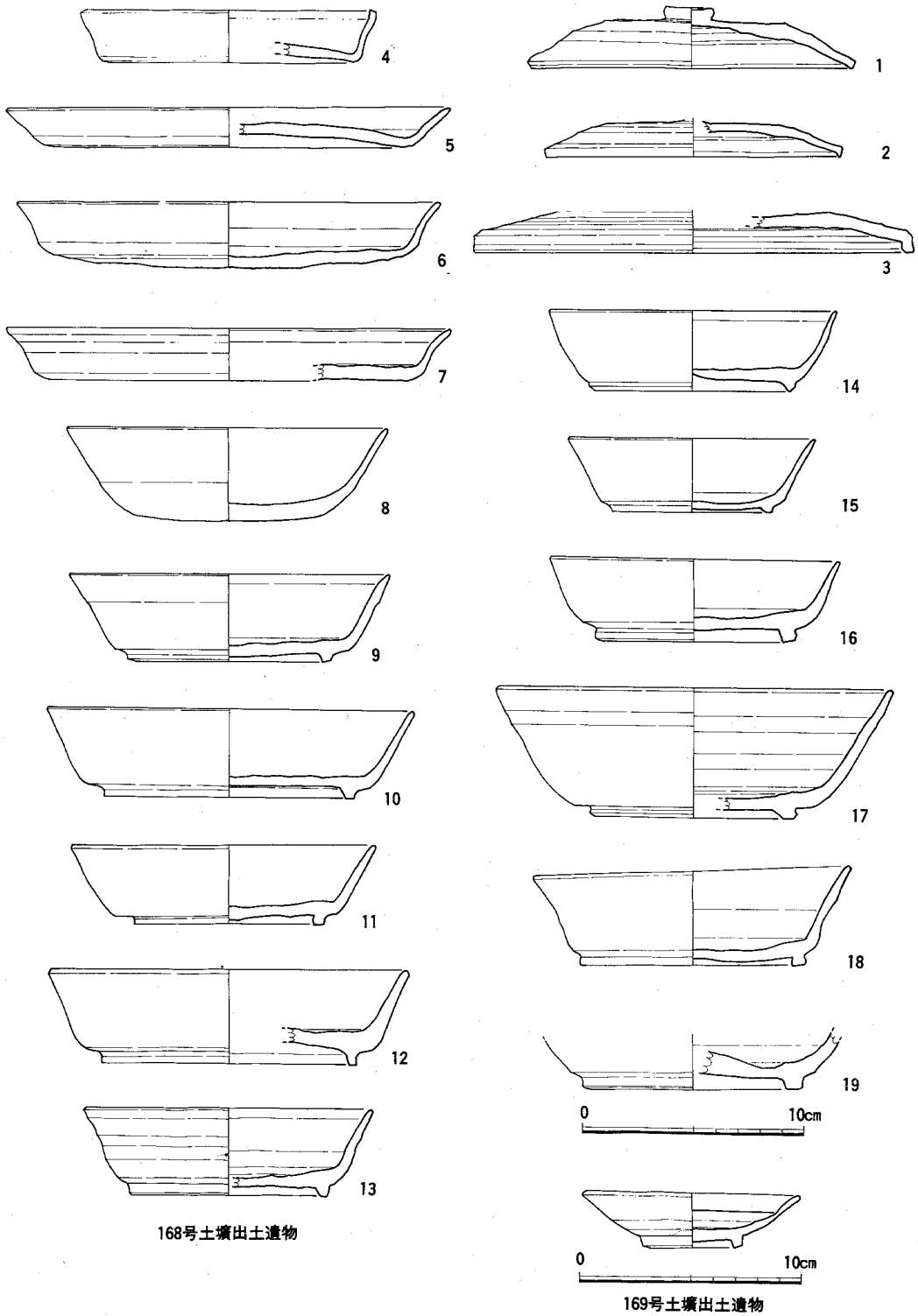


Fig.38　168号,169号土壙出土遺物

見込に段をもち、見込で釉を粗雑に輪状に削りとる。胎はネズミ色～肌色でやや粗いが堅緻で暗いオリーブ色の釉が施され青磁に近い。２は同安窯系皿で見込で釉を円形に削りとっている。この他、玉縁をもつ磁灶窯系の盤などがみられる。土師皿類は24点が出土しているが、計測可能なものは糸切杯１点のみで、口径13cm、器高2.3cmを計る。13世紀後半代の廃棄物処理土壙か。

167号土壙（Fig. 37　PL. 31）　Ｅ－Ⅲ－ｃ区検出遺構である。1.5ｍ×1.2ｍ程の楕円形で0.68ｍの深さをもつ掘方である。遺物は多く、白磁43点、青磁６点、陶器30点等が土師皿類55点や瓦23点等の国産遺物に混じる。土師皿類はいずれも小破片で計測できないが、ほとんど糸切底である。図示した遺物は、１が見込に櫛描文をもつ白磁平皿Ⅵ－１類に属するもので、外底部をのぞいて全面に乳白色の不透明釉がかけられ、ピンホールが多い。外底露胎部に遺存状態のよい墨書が残るが判読できない。２は白磁平皿Ⅵ－２類に属するもので、無文、体外半釉で灰オリーブ半透明釉がかかっている。外底露胎部に「□綱」と読める墨書がある。時期を限定することはむずかしいが、おそらく13世紀代の廃棄物処理土壙であろう。

168号土壙（Fig. 27・38　PL. 31）　Ｅ－Ⅲ－ｃ区検出遺構である。131号土壙と土留壁柱に切られ全体形は不明であるが、深さ0.25ｍ程の浅い皿状の断面形をなす。奈良時代の土師器片198点と須恵器片130点が集中して出土している。図示しえたものは須恵器のみである。１～３は蓋である。いずれも天井部のみに回転ヘラ削調整を行う。１、２の受け部は断面三角形をなし、内側に明確な段がつく。３の受け部は下方に折れ、断面四角形をなす。４～７は皿である。４は体部が外方に開かないもので、体部最下位から底部を回転ヘラ削調整を行っている。５～７は口径が大きく、体部は外方に開き、ヘラ削調整を行わないものである。８～19は杯である。８は丸底をなし、体部最下位から底にかけて回転ヘラ削調整を行っている。９以下はほぼ断面四角形の高台を貼りつけるもので、９、10、12、13、16が体部最下位から底部にかけて回転ヘラ削調整を行っている。ほぼ８世紀前半から半ば頃の遺構である。当該期の遺構の検出例は少ないが、遺物は各遺構から混在という形で出土しており、かなり広い範囲に同時期の遺構群は広がっていたものと思われる。

169号土壙（Fig. 38）　Ｅ－Ⅲ－ｂ区検出の遺構である。1.1ｍ×0.8ｍ、深さ0.7ｍのほぼ長方形の掘方をもつ。出土遺物は図示した高台付白磁皿１点のみである。13世紀代の土壙墓の可能性がある。

11号溝（Fig. 39）　Ｅ－Ⅰ－ｄ区検出の溝状遺構である。101号、109号土壙に両端を切られ全体形は不明であり、幅0.6ｍ、深さ0.5ｍの掘方が1.2ｍ程続くのみで溝とは断定できない。出土遺物も少ない。ほぼ12世紀後半代と思われる。図示した遺物は須恵器蓋で天井部のみを回転ヘラ削調整する。８世紀後半代のものか。計測可能な土師皿２点もあり、それぞれ口径9cm、10cm、器高1.3cm、1.0cmである。

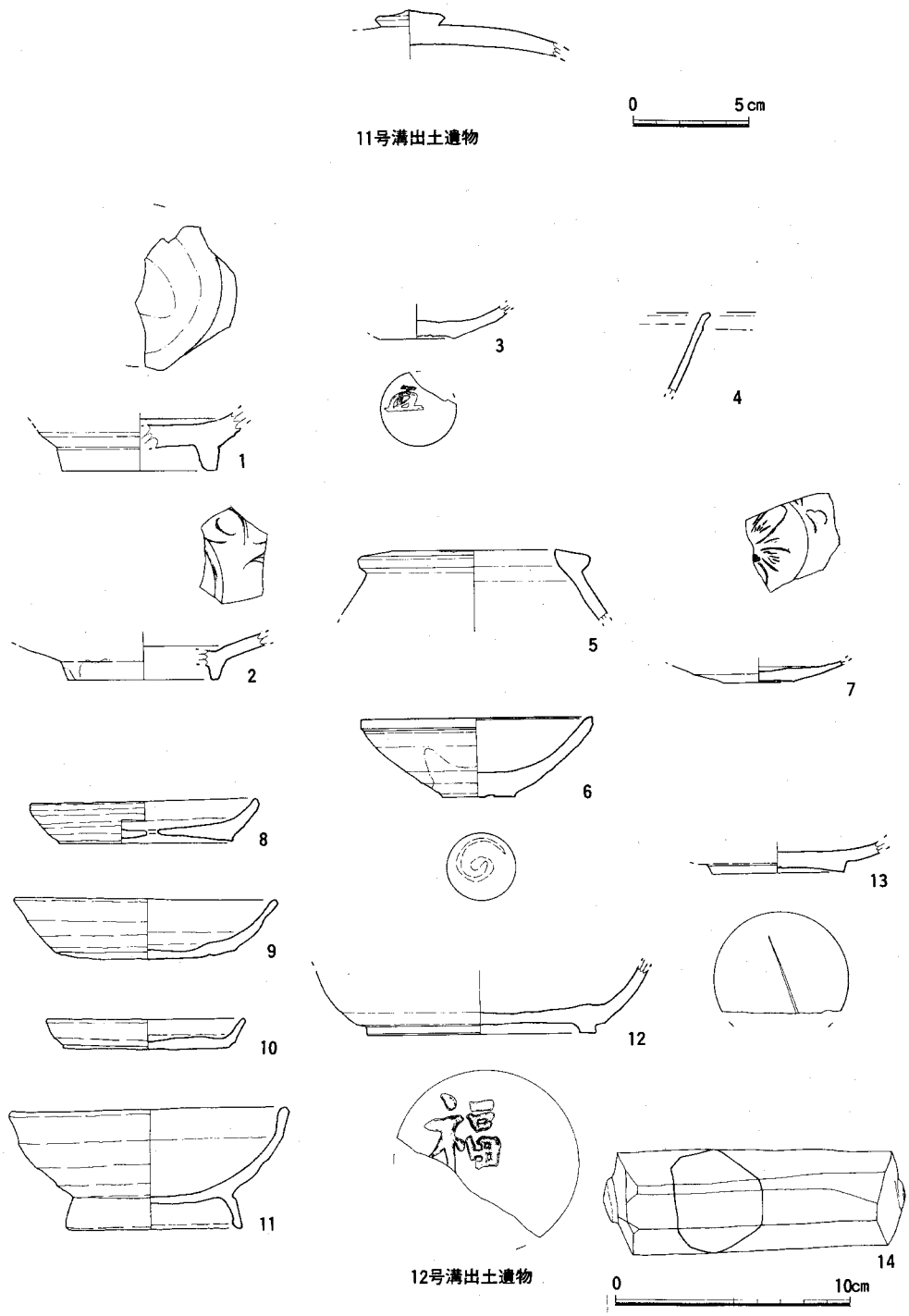


Fig.39　11号,12号溝出土遺物(1)

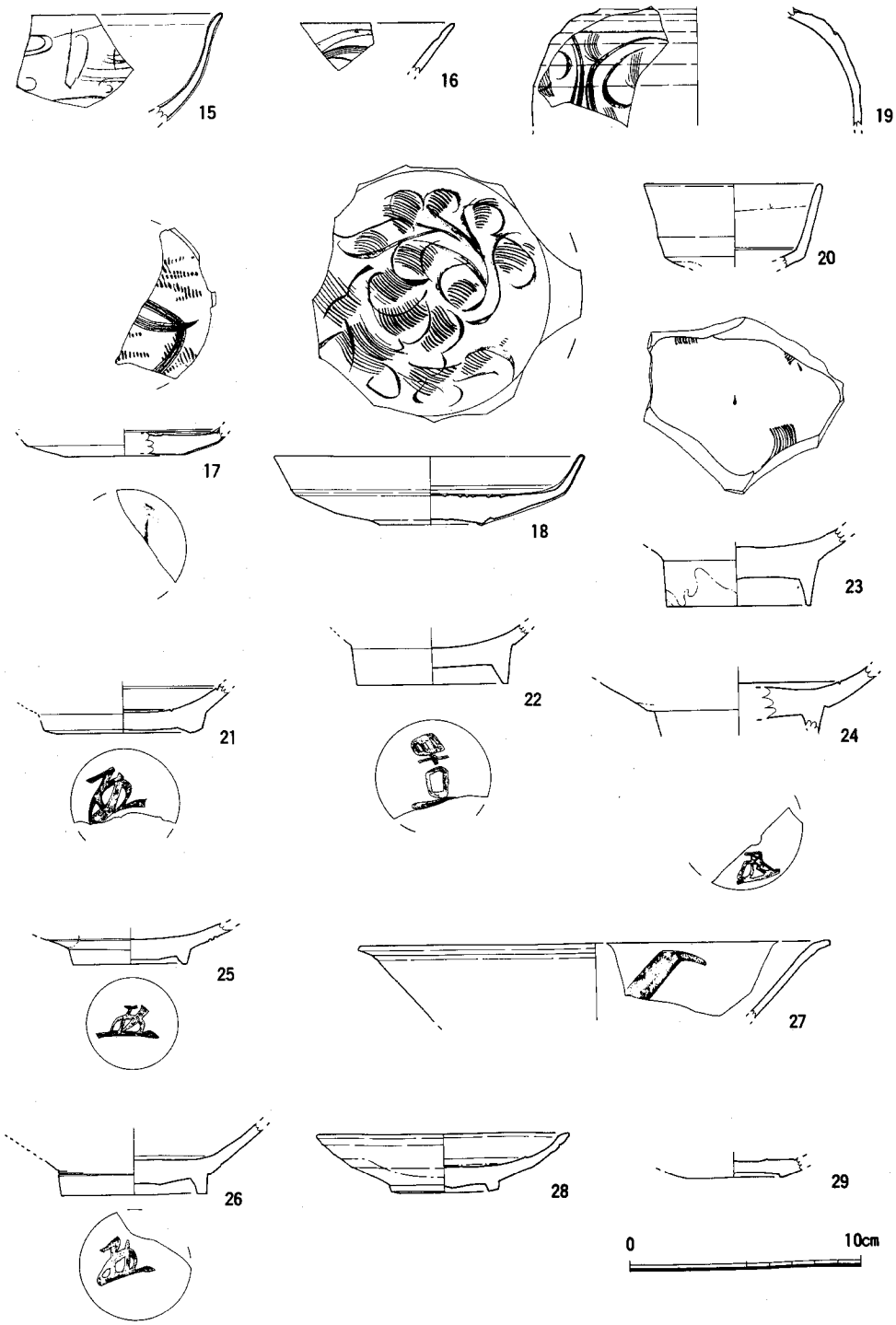


Fig.40　12号溝出土遺物(２)

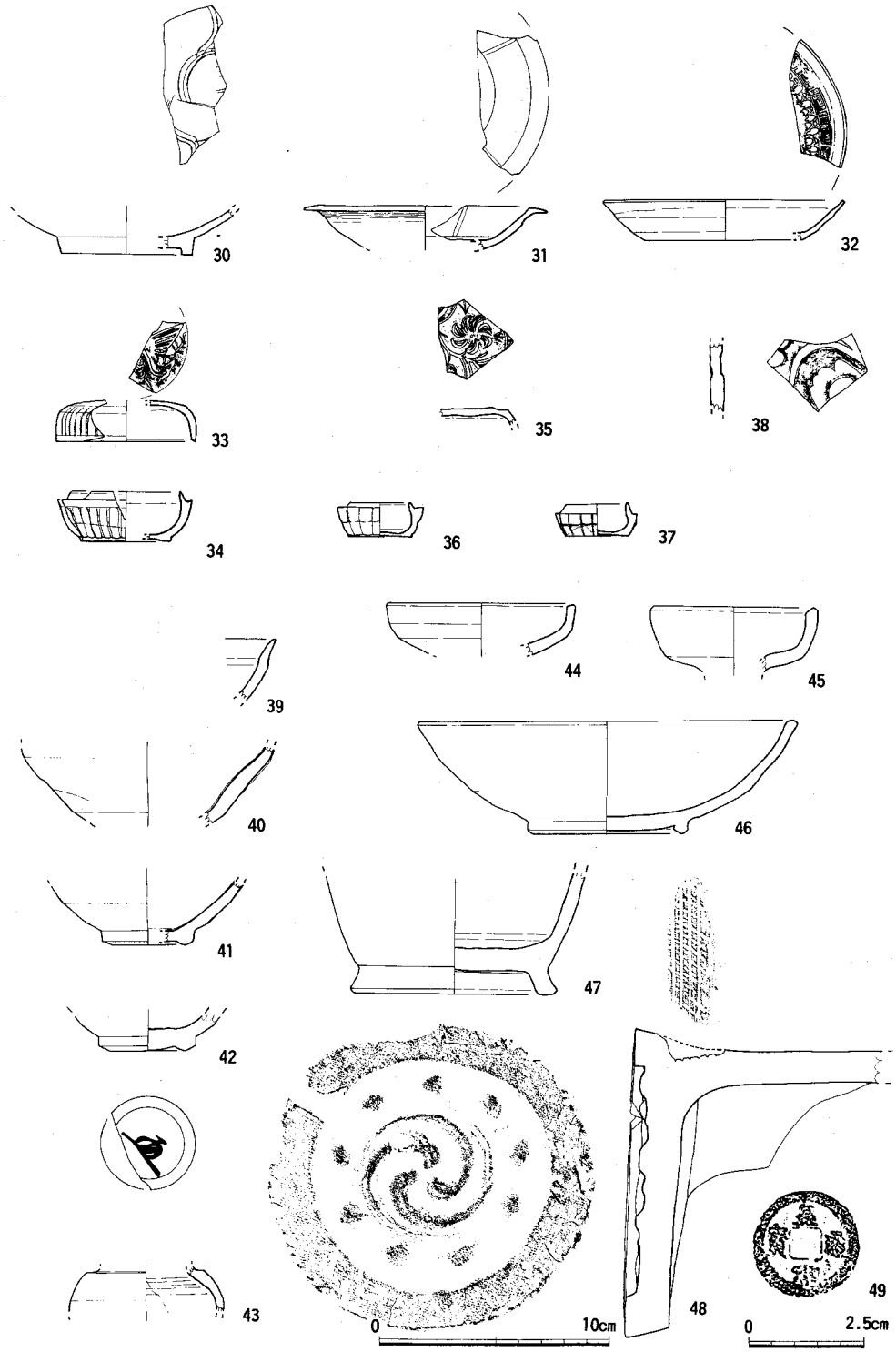


Fig.41　12号溝出土遺物(3)

Fig.42　12号溝出土遺物(４)

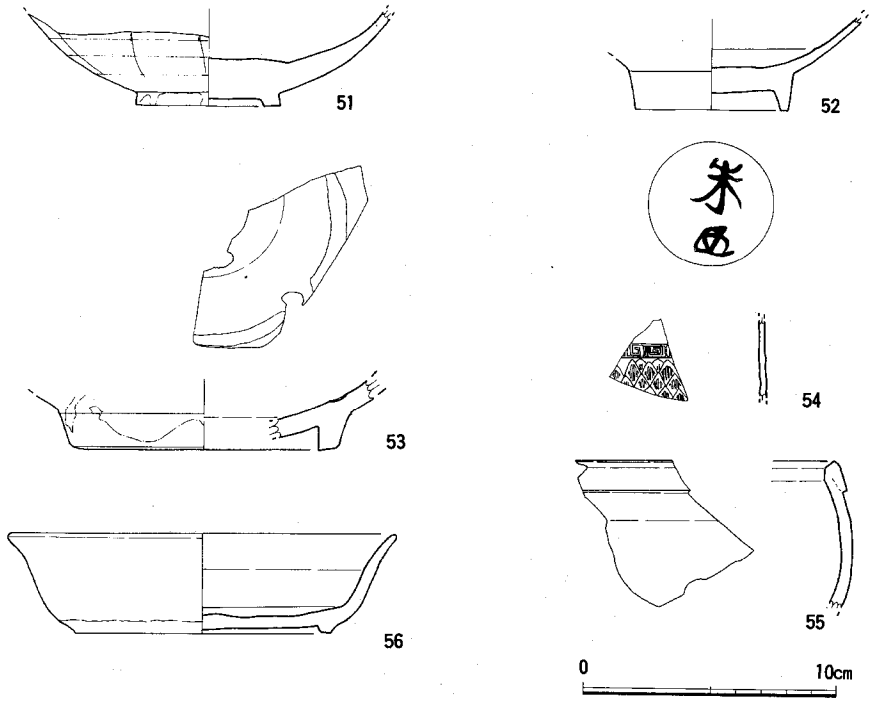


Fig.43　12号溝出土遺物(5)

12号溝（Fig. 39～44　PL. 7・10・32・46）　E区北側調査区を中心に調査区を斜断する形で検出された大規模な溝である。E区の北西に接する店屋町工区D区の調査でもこの溝の一部が検出されており、確認された長さは23mになる。多くの遺構等によって切られており、特に東側の壁面の上面は明確でないが、溝の上端幅は最大6mにもなると思われる。底幅は2m強で、高低差は最大1.7mもある。溝断面形はV字形をなす。この溝の主軸はほぼ真北を向き、誤差はあっても2～3°東に振れる程度である。この方位については、同様の規模をもっていた店屋町工区A・B区で検出された2号（5号）溝の方位N－88°－Eや、小規模であるがG区からH区にかけて検出された31号溝とほぼ直角をなしている。Fig. 44に示した土層断面図は、中間杭列に沿っており、溝の斜断面土層図となっている。この図からも看取できるように、溝は地山黄白色砂層を掘り込んで作られたものである。壁面には土留施設等の痕跡は残されておらず素掘であったかもしれない。底面および壁面の下層部分には、薄い砂層が何枚も推積して

おる。壁面の崩壊と水の流れによるものであろう。これらの下層部の堆積の上には、土器片を多く含む黒褐色で粘性を有する砂質土が厚く堆積しており短期間のうちに埋められたものであろう。遺物は極めて多量であり、便宜上溝上面検出時の出土遺物を上層、黒褐色の粘性のある厚い砂質土中のものを中層、以下のものを下層と区分している。しかしながら、多くの遺構の切込等があり混じり込みも見られると思われる。それらについての除去等の操作は行っていない。以下出土遺物のうち図示したものについて説明する。

Fig. 39－1～14　は上層出土遺物である。1は白磁碗で見込釉を粗雑に削りとるものである。2は白磁碗で内面体部に劃花文をもち、見込との境に段をもっている。3は白磁平皿で体外半釉、内面は釉むらがありやや粗雑である。外底部には周辺に類例の多い花押の墨書が残されている。4は白磁碗である。口縁部を外方に丸く突き出す。全体に淡い透明オリーブ色釉をかけているが、内面上端は重ね焼のため他の器物が付着した痕跡があり、その部分だけ釉が剝げている。5は陶器ｃ群壺で黒褐釉がかかる。6は陶器皿である。口縁端部を施釉後平坦に削っている。7は陶器皿で、見込に菊花かと思われる印花文を施し、外面をのぞいて透明な茶オリーブ色の釉がかけられている。Ａ群の胎土に近い。8は糸切底

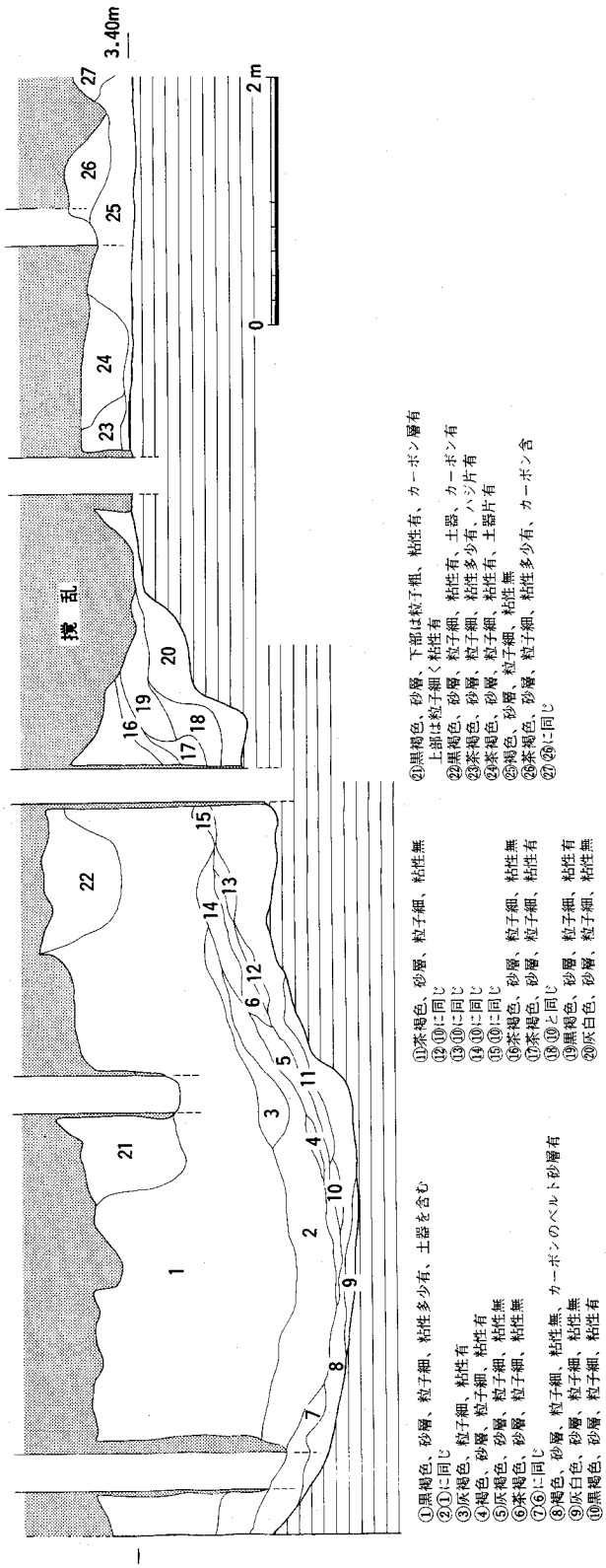


Fig.44　12号溝土層断面図

土師小皿で底部中央に穿孔が見られる。口径10cm器高1.8cmである。9はヘラ切底土師杯で口径11.3cm、器高2.5cmを計る。10は糸切底土師小皿で口径8.5cm、器高1.3cmである。11は高い高台のつく土師器碗である。12は断面四角形の高台を貼りつける須恵器杯で、体部最下部と底を回転ヘラ削調整をなし、外底部に「福」の墨書を残す。13は円盤高台の緑釉陶器で、外底にヘラによる記号があり、三叉トチンの痕跡と思われるゴマ粒大の目跡が残る。洛北古窯群の産であろう。14は目の粗い硬砂岩製で、六角柱状に面取りし、両端に突出部を設けた石器である。時期、用途ともに不明。

Fig. 40～42　15～50は中層出土遺物である。15～19は青磁である。15は龍泉窯青磁小碗で内面体部に一部漢字かと思われる線描文をもち深い砧手風の釉がかかる。16は内面に劃花文をもつもので胎は灰色で緻密、灰オリーブ色透明釉がかかるが、口縁端部は茶色の発色をなす。龍泉窯系である。17は同安窯系青磁平底皿で、内底に櫛描文をもち、外底露胎部に墨書が見られるが判読できない。18は龍泉窯青磁平底皿で内底に片切彫と櫛描による花文を施し、外底と体部の境に小さな沈圏線をめぐらせ高台風にする。透明な黄緑色釉が外底の一部にまで厚くかけられ、大きな貫入が見られる。19は青磁壺の肩から胴部にかけての破片で、境に一条の沈線をめぐらし、胴部にはヘラと櫛による劃花文をもつ。内外面にややくすんだ灰青色透明釉がかかる。龍泉窯に近い胎をもつ。20～29は白磁である。20は香炉で内面体部上半と高台脇まで灰白色半透明釉がかかる。21は碗Ⅳ類に属するもので外底露胎部に25、26と同じ花押墨書をもつ。22は碗Ⅵ類で内底に櫛描文をもち、高台内に「四十口」と読める墨書がある。23、24も同じく碗Ⅵ類である。24の高台内には墨書が見られるが判読できない。26は碗Ⅸ類で見込釉を輪状に削りとるタイプのものであるが、高台内に花押墨書をもつ。25は高台付の皿で、未分類、胎は灰白色で黒粒を含み粗く、内面と外面体部下半にまで乳白色の不透明釉がかけられている。高台内に花押墨書をもつ。27は釉下鉄絵の白磁鉢である。口縁端はやや水平に外方に開き、体部は直線である。酸化炎焼成のためか、胎は肌色で、鉄絵は灰色に釉はベージュ色の発色をなす。28は白磁高台付皿のⅡ類に属し、見込釉を輪状に削りとる。29は白磁平底皿であるが、未分類で外底をわずかに削り込み碁笥底風をなすものである。胎は灰白色で精良、釉は外面体部下端までかけられている。30～37は青白磁である。30は内面体部に櫛描文をもち内底を凹ませ茶溜りを作っている。胎は白色で精良、堅緻、わずかに緑味をおびた青白釉が畳付をも含め全体にかけられている。31は皿でおそらく平底になるものと思われる。口縁部は外に水平に薄く開き、体内面は推定5本の白色堆線で区切られている。胎は白く精良。淡青白釉が全面にかけられている。32はロハゲの印花平底皿である。内面体部中位に雷文、下位に小さな花弁文が陽刻される。釉は薄い青白色である。33は印花合子蓋で、上面に鳳凰が、側面に菊弁が陽刻される。35も印花合子蓋で上面に花文が陽刻され、ややくすんだ青灰色透明釉がかけられている。

34、36、37はいずれも合子の身で、側面が菊弁の型造りである。38は梅瓶と思われ、ヘラによる浮文で外面を飾る。胎は白色精良で、わずかに緑味をおびた青白色透明釉が内外面ともにかけられている。貫入が目立つ。39～42は天目碗である。いずれも口縁部を鼈口にし、小さな高台を削り出す通例の器形である。41はネズミ色の胎をなし焼成も良好であり、釉も禾目風の流れが見え上物である。他は中国製品ではあるが、焼成も良好でなく、胎は肌色をなし、釉にも艶がなく下手物といってよい。42の高台内には今回例の多い花押墨書が見られる。43は緑釉陶器の小壺である。焼成は甘く胎は肌色を呈するが、粒子は細かく精良である。鮮やかな緑釉を外面にかけており、表面はわずかに銀化している。内面にも一部釉が流れ込んでいる。磁灶窯系の産と思われる。44、45は陶器Ｃ群に属する灯台の口縁部で盤口をなす。胎はいずれもレンガ色であり、44は光沢のある黒褐釉が、45には艶のない茶褐釉がかけられている。50は陶器Ａ群に属す磁灶窯系の黄釉鉄彩大盤である。同一個体の破片と思われるものがまとまって出土している。内底中央部に牡丹文を配し、周囲に葉文を環状にめぐらす。内底と体部は２本の圏線で区画し、更に中位と下位も２本の圏線で区画され、体部下位には波状文を、中位に２列に短い線を連ねている。口縁は玉縁状に収まり、体部はやや丸味をもつ。底部は上げ底状をなす。釉は外面体部中位以下と、口縁部内側平坦面を除いて半透明の黄釉がかけられている。口縁部内側と外体部下半に重ね焼の火跡が見える。46は瓦質の碗で、やや外に開いた断面四角形の高台が貼りつけられる。内面は丁寧なヘラ磨きがなされ、外面は横方向にまばらな研磨がなされる。高台内には板状圧痕が残る。47は灰釉陶器と思われる壺である。外方に開く断面四角形の高台を貼りつける。胎は灰白色で軟調である。体部下位の一部に釉の痕跡が残るのみでカセているものと思われる。48は三つ巴文の軒丸瓦である。49は「至和元寶」。
Fig. 43－51～56は下層出土遺物である。51は龍泉窯青磁碗で線描の幅広の蓮弁をもつもの。52は白磁碗で高台内露胎部に「朱（花押）」の墨書が見える。53は陶器Ｂ群に属すると思われる鉢で見込と高台に目跡が残る。54は青白磁平皿である。55は陶器Ｂ群の鉢である。56は高台付の須恵器碗で全面回転ナデ調整を行っている。

以上図示した遺物を簡単に説明したが、土師皿類の一括資料がなく上層遺構の切込、道路下での調査等の悪条件から必ずしも遺物の層位的把握が確実にできてはいないため、溝の造営年代と廃棄年代とを明らかにすることができない。しかしながら、店屋町工区Ａ・Ｂ区、Ｃ・Ｄ区で検出されている、12号溝と同一方向もしくは直交する溝では、良好な土師皿類の一括資料があり、その廃棄年代は明らかにされている。本溝の廃棄年代についても、それらと同じく14世紀前半に求められよう。

ピット群　Ｅ－Ⅰ－ｄ・ｅ区、Ｅ－Ⅲ－ｅ区に柱穴と思われるピット群が検出されており、東西方向または南北方向に並びそうな印象はあるが、周辺の掘方によって寸断され、建物とし

ての組織的な把握はできない。

2）E区遺構外出土の遺物（Fig. 45～50　PL. 32・33・46・47）

遺構外出土の遺物は、おびただしいものがあるが、その中から墨書のある陶磁器を重点的にとり出して紹介する。墨書のないものでも、残りのよいものや、珍しいものは紹介することにした。今回は出土陶磁器の破片数を種類別に報告するスペースがないが、これまで報告してきたA～D区とおおよそ同じ傾向を見ることができた。数字はできれば来年度にまとめて発表したいと考えている。

青磁　1は一般にⅠ類とされている龍泉窯系青磁に先行すると考えられるタイプの碗で0類としたものである。胎は灰色で堅く焼け、灰オリーブ色の透明釉がかかる。氷裂はない。底部は小さく、腰の浅い形で器外には太い片切彫の斜平行線が、4本を単位にぐるりと回っている。器内は片切彫と櫛文で花文を描き、施釉は高台横まで達している。墨書はあるが不鮮明。2～4は龍泉窯系青磁碗Ⅰ類。2は淡い蜂蜜色を呈す。4はオリーブ色である。見込に「福」字のスタンプが押され、畳付には復原で4個になると思われる大豆大の白い耐火土が付着している。5は同Ⅱ類の碗だが内底に重ね焼の目跡4個が見られる。このような目跡のある青磁は、龍泉窯系でも周辺にはずれる地区のものではないかと考えられていたが、浙江龍泉でも安福龍泉窯で目土をはさんで重ね焼をしていることが報告されており、龍泉青磁と考えることができる。6、7は14世紀の龍泉窯系青磁碗。非常に厚手で見込には花文がスタンプされているが、釉が不透明で厚いためはっきり見えない。釉は淡色で畳付から外底は露胎。8、Ⅰ類碗に並行すると考えられる龍泉窯系皿。9は灰色ながら砧風の厚い釉がかけられた青磁で、三足の小形香炉の残部である。胎は灰色、精良堅緻。10、厚手の青磁壺底部。太く掻き取った鎬文に厚く長石釉がかかっている。釉色は浅い青灰色で氷裂なく、畳付から露胎である。11は越州窯系青磁瓶口部。暗灰色の胎にオリーブ色の釉が薄くかかる。氷裂なし。口縁部に丸く目土が付着。12、13は薄い釉が器外半ばまでかかるオリーブ色の青磁で、器形は龍泉窯に似るが、福建の青磁と思われる。釉は透明で氷裂がある。14は龍泉窯系とも同安窯系とも異なり、その他の青磁と分類した青磁碗Ⅱ類に入る。釉は透明で青みを帯び、氷裂がある。器外には荒いヘラ削り跡が残り、体下半は露胎である。15～17は同安窯系青磁皿。15、16はⅡ類、17はⅠ類である。16は非常に淡い釉色である。

白磁　18は広東省潮州窯産と考えられる白磁碗Ⅱ類で、釉は淡い蜂蜜色。氷裂なし。胎はベージュ色を呈している。19、21、22は白磁碗Ⅵ類、20、27、28は同0－Ⅱ類、23、24、26は同Ⅸ類、25は同Ⅴもしくは Ⅵ類に属する。29は淡色の同安窯系青磁に似た釉がかかる筒形香炉で、器内および折腰以下は露胎である。31は灰ベージュ色の胎土に透明オリーブ色の釉がかかる。

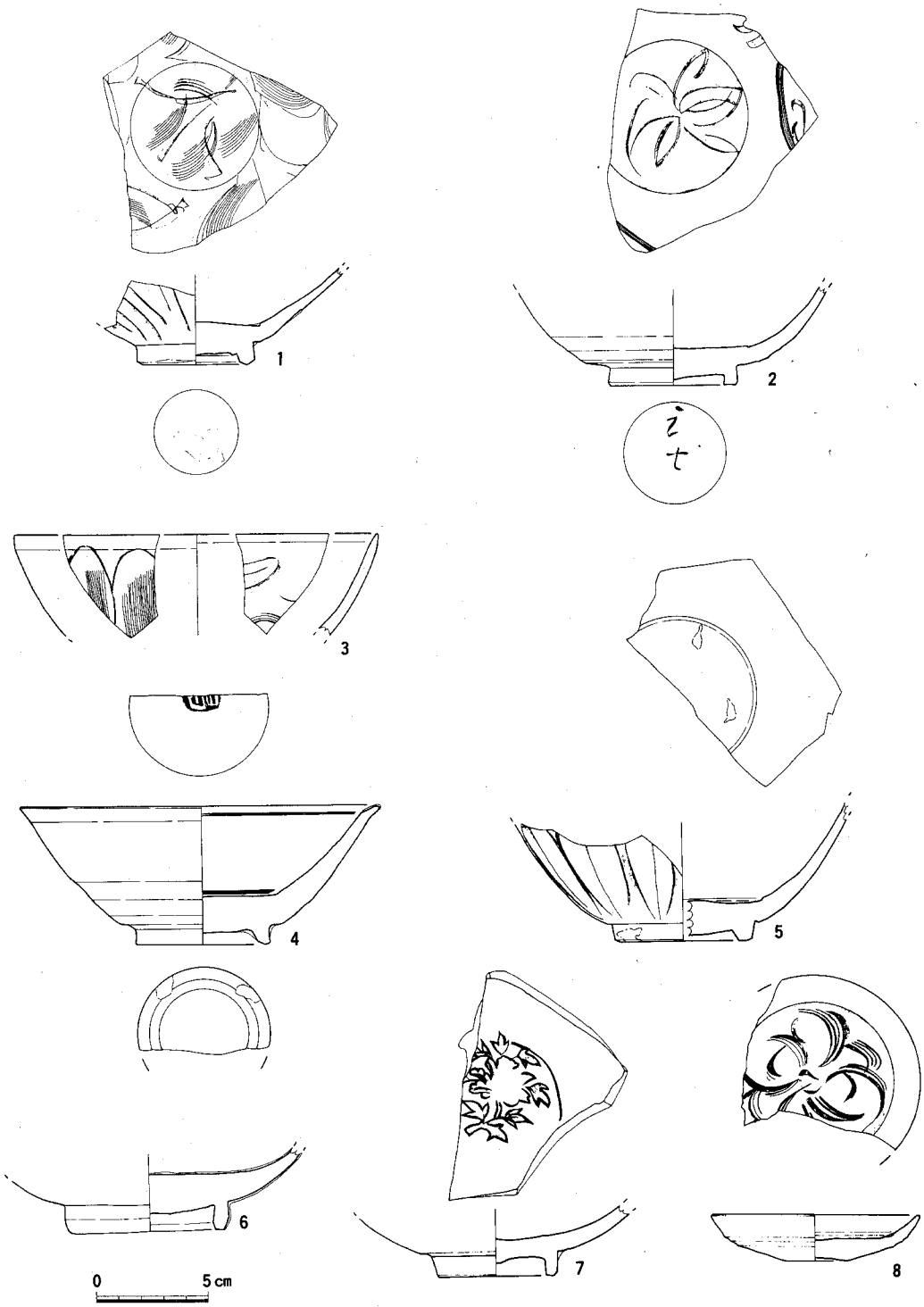


Fig.45 E区遺構外出土遺物(1)

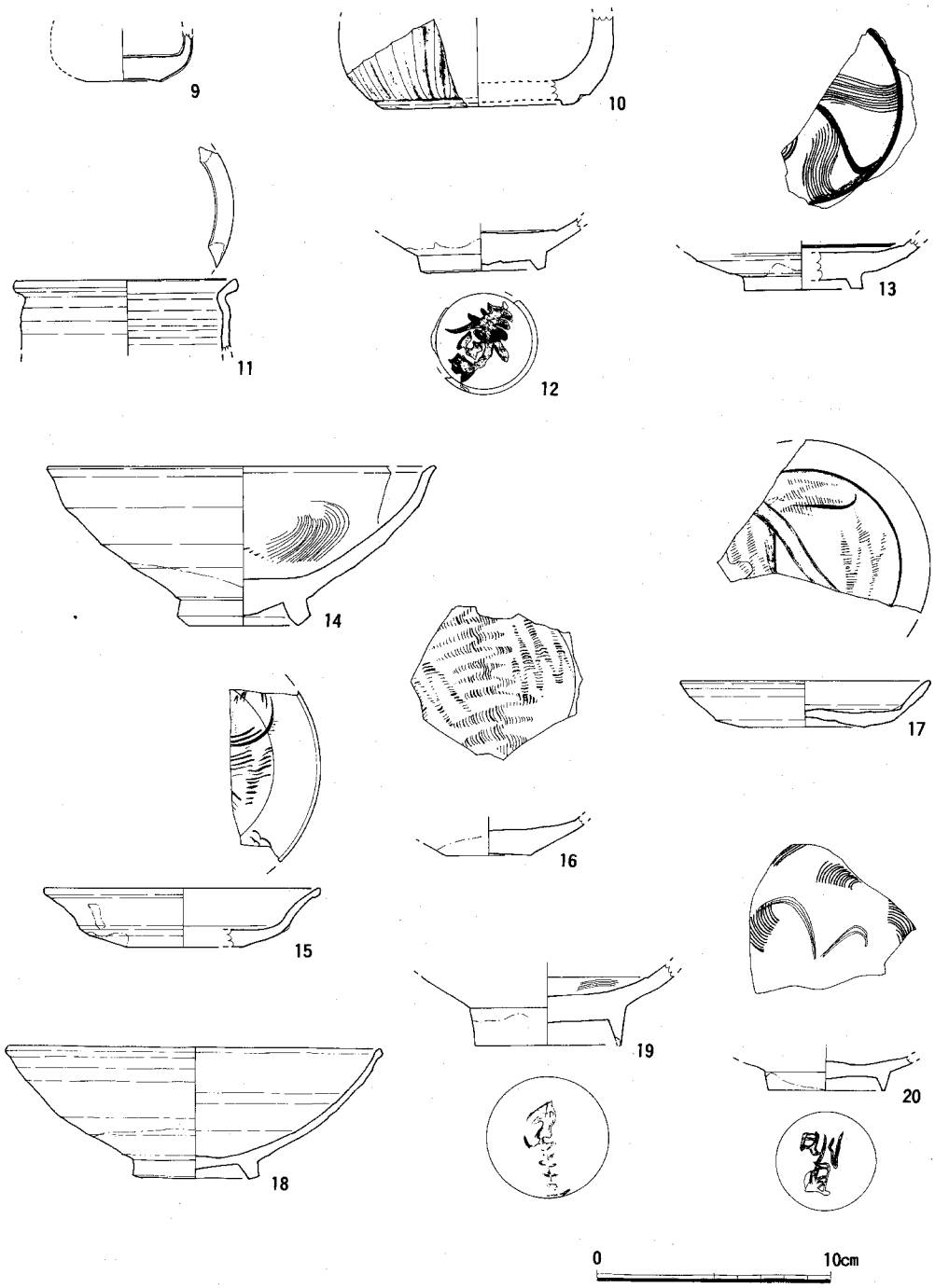


Fig.46　E区 遺構外出土遺物(2)

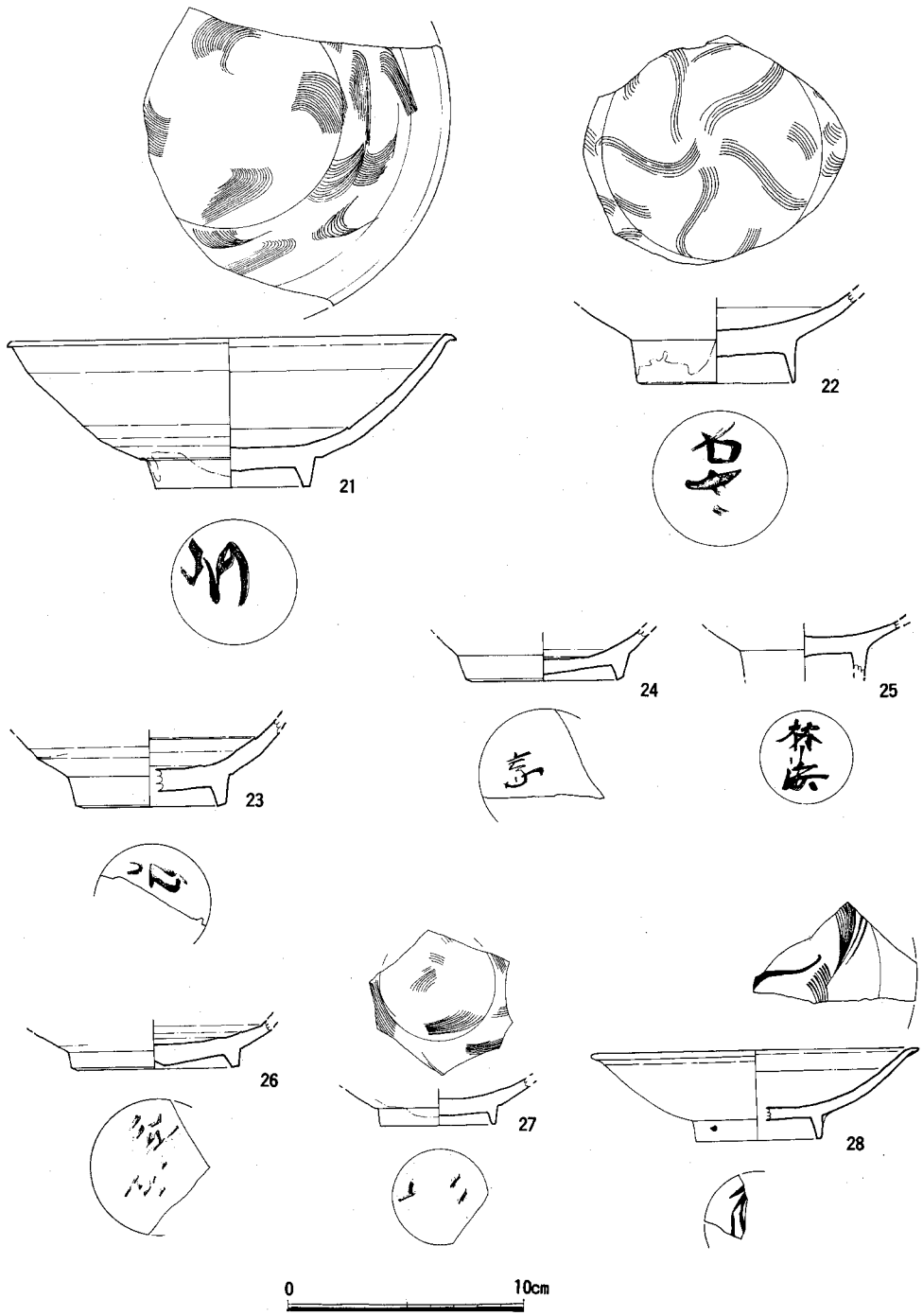


Fig.47　E区 遺構外出土遺物(3)

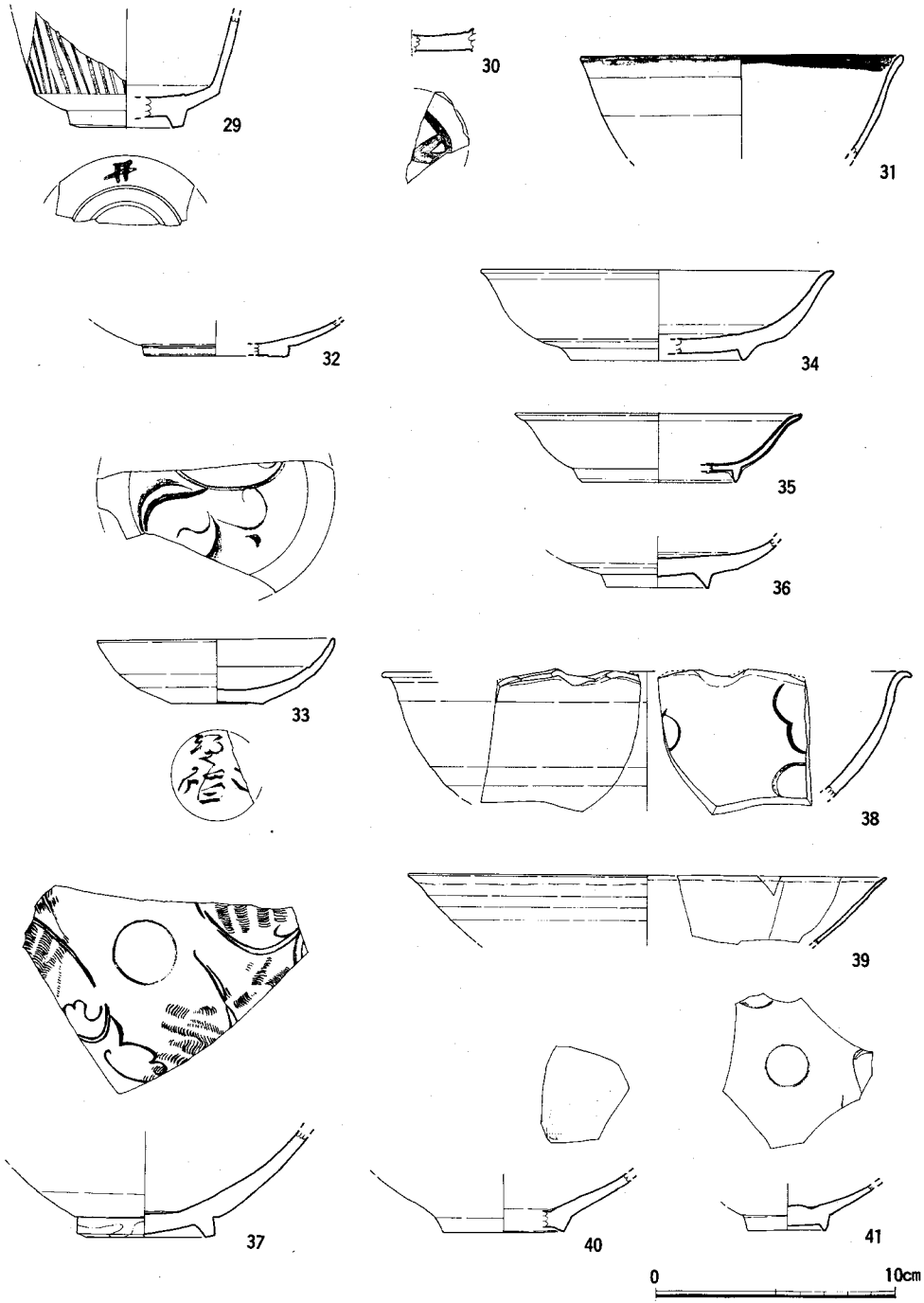


Fig.48　E区 遺構外出土遺物(4)

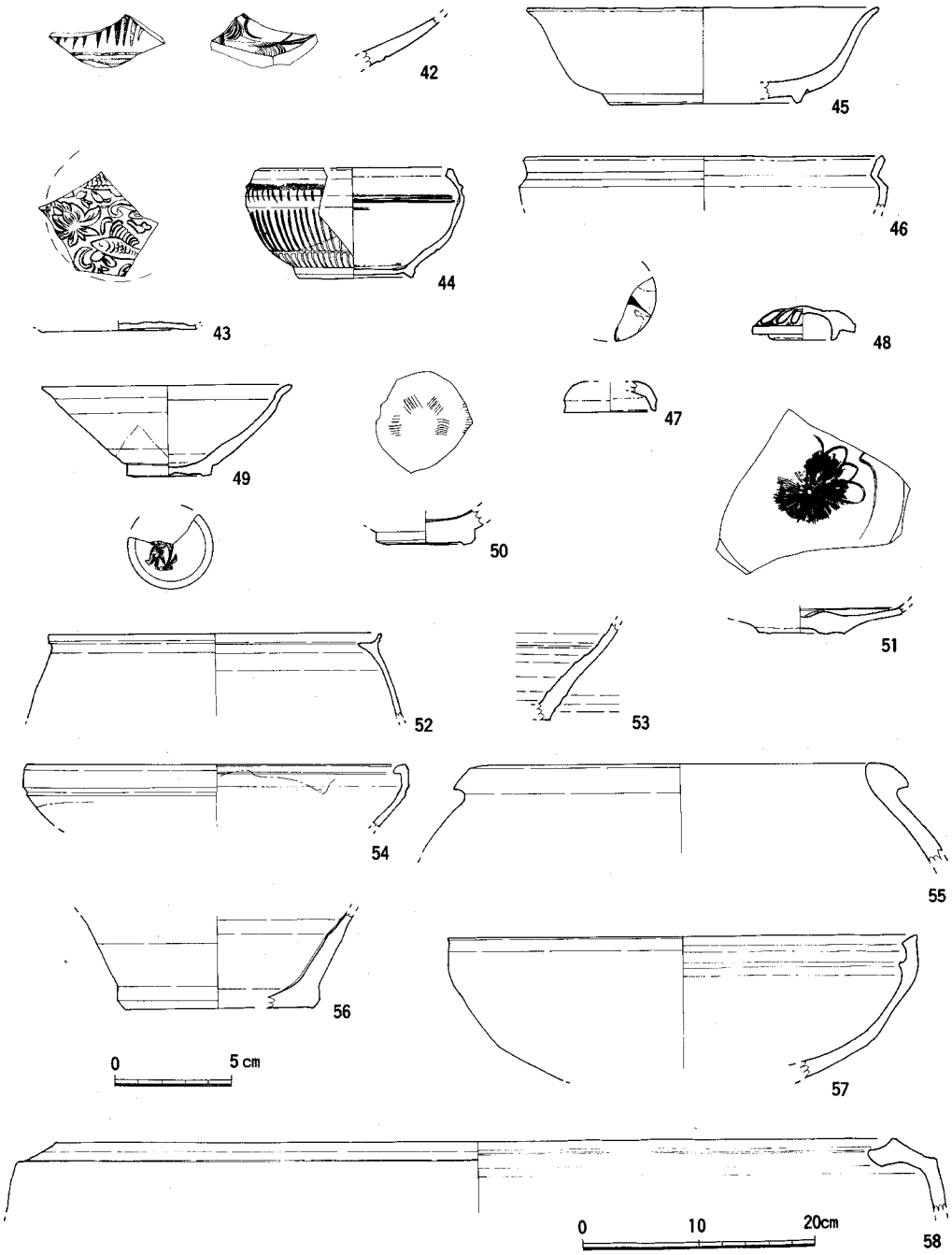


Fig.49　E区 遺構外出土遺物(5)

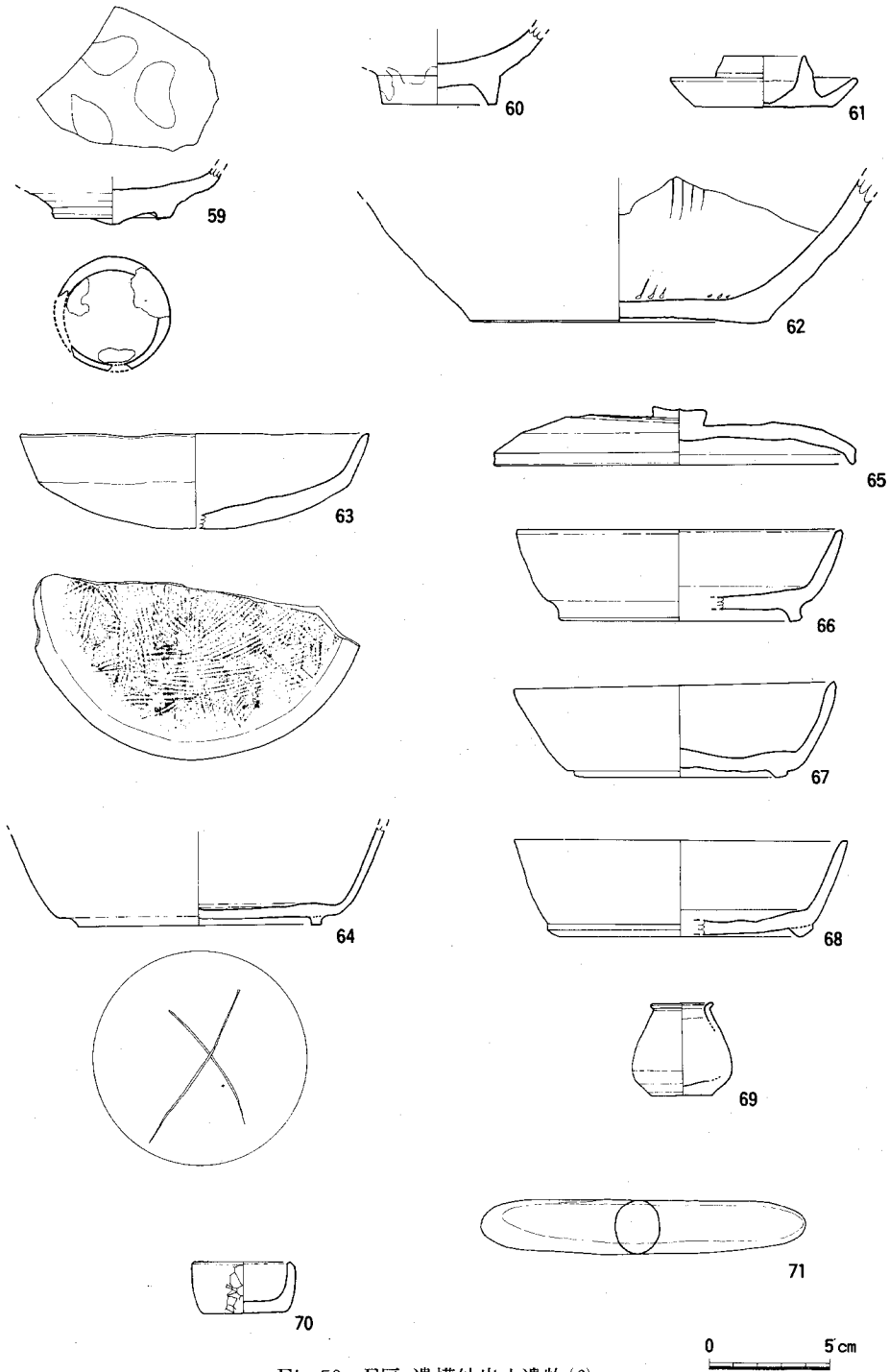


Fig.50　E区 遺構外出土遺物(6)

釉層は薄く、氷裂はない。外反口縁には鉄銹色の釉がかかっている。32は不透明帯青色の白釉がかかる破片で、口ハゲ白磁の底部と思われる。33は白磁皿Ⅵ類である。34、35は16世紀の白磁。34は胎、釉とも灰色、35は白くよく磁化しているが、釉は粘性がある。36は国産の白磁か。底部が非常に特徴的である。34、36は見込に重ね焼のための輪形の釉切がある。

青白磁　37は見込に小さな茶溜のある碗で、器壁が直線的に開き笠型になると思われる。細いヘラ描きの花文の間を櫛による刺突文で埋める、古式の文様が施される。胎は灰白色で、淡い空色の透明釉がかかっている。氷裂はない。38、大ぶりな鉢で、口縁を大きく外弯させ、何箇所かを更に強くおさえて輪花にしている。素早いタッチの曲線で文様が描かれている。土は灰白色でやや粗め、釉は淡青色透明釉である。39は口ハゲ碗で幅太の覆輪がかぶせてあった上手の碗である。胎は白色で、釉は透明、やや黄味がかかった柔い色調で、酸化ぎみの炎で焼成されたもの。器内壁は鋭く整った凸線で区分して、花形に作っている。40、41、も見込に小さな茶溜を作る小形の碗である。40はやや下手で、灰青色の釉がかかっている。42は外面に同安窯系青磁に見られるような櫛描平行線文を施している。空色をおびた透明釉がかかる。43は口ハゲの印花文皿である。胎はややベージュがかった白で、草色をおびた透明釉がかかる。底部も施釉されている。44、青白磁小壺。型造りで肩で継いでいる。胎は灰がかかり、やや粗い。釉は濃いめの青色を含んでいる。45、青みを帯びた透明釉が畳付をまわって高台内側にまで見られる。16世紀以降のものである。46、胎、釉とも青灰色を帯びている。47は梅花形の小形の平合子蓋。48は菊花形の小壺の蓋。ともに粗雑な型造りで釉色も灰色が強い。

黒釉茶碗　49は小形の建盞タイプの茶碗である。土は破面灰色、露胎は灰褐色で、細かい黒点は見えるが粗くはない。釉はやや透明感のある褐色で、天目釉というよりは飴釉というべきであろうか。釉尻に釉が厚くたまることはないが、口縁部では薄くなっている。50は同じく建盞タイプの茶碗の底である。胎は49とよく似るが、釉は黒耀石のように黒く、見込に厚く溜っている。表面に細かい文様の痕跡が残っている。伝世品に建盞タイプの茶碗に金彩で「寿山福海」の文字をあらわしたものが知られているが、それと同種のものと思われる。文様は痕跡だけで金彩であったか銀彩であったかは知ることができない。同様の細かい文様が認められる破片は、これまで他にも数片出土しているが、文字の部分はまだ出土していない。

陶器　51、型造りの印花文ある平皿。胎は極く細かい灰～ベージュの土で、器内にはオリーブ色の青磁系の釉がかかるが、大部分ではよく溶けず不透明である。底部の成形は雑で凹凸しており、布目が残っている。底に茶色に火跡が残っている。磁灶窯系陶器である。52は行平。53は丈の低い小口瓶で、肩に青釉のかかる磁灶窯斗温山窯の産品。ともにＡ群の陶器である。54は非常にきめの細かい土で、チョコレート色を呈す。口縁を除き黒褐色の釉が薄くかかる。国産かも知れない。55、土はよく焼きしまった煉瓦色で、白い砂粒がパラっと混じっている。黄

褐色の不透明な釉が内外に施されるが、口唇部で削り落として重ね焼をしている。56、暗灰色の土に白い砂が多量に混じる粗い土である。器内には青緑色を帯び、オパール化した空色ガラスが厚くかかっている。C群の盤口瓶で、ガラスのるつぼとして用いられたと考えられる。底部は外から熱に当たって色が変化している。57、褐色の土に白い砂粒がたくさん混じっている無釉の鉢である。筋目はたててないが擂鉢として用いられたと見え、内底部が滑らかに擦り減っている。58は口縁の内折した大型容器である。中心暗灰色、外側赤褐色に焼けた土で、中に大量の白砂をかむ。外に斜めの、内に青海波のたたき目がある。釉は茶褐色不透明である。55～58はc群の陶器。

国産遺物　60は黄灰色の粘性の強い不透明釉をかけた碗で、施釉時の指頭把持痕跡が残る。産地、時期不明。61は土師器灯明皿である。内底に筒状の部品を貼りつける。煤が付着している。糸切底で江戸時代のものである。62は瓦質の擂鉢である。内面は磨耗がはげしく櫛目が痕跡程度に残る。外体部は指頭圧痕が残り、一部ハケ目調整痕がある。外底には板状圧痕が残る。14世紀頃のものである。63は体部のみを回転ナデ調整し、円底をヘラナデ、外底を板状工具で手持ち削りを行なう土師器杯である。8世紀前半代のものであろう。64～68は須恵器である。65は蓋で天井部のみ回転ヘラ削りで他は回転ナデ調整を行なう。受け部は下方にのびる。66～68は高台付の杯である。64は外底に「メ」形のヘラ記号をもつもので焼成が甘い。66はやや高い高台をもつ。67は焼成良好で堅緻であるが、器形にゆがみがみられる。68は幅広の逆台形の高付をつけるもので、焼きが甘く軟質である。これらの須恵器はいずれもほぼ8世紀代におさまるものであろう。70は滑石製の小さな器で、丁寧な削りを行ない表面は滑らかである。火熱を受けた痕跡もなく、何の用途に充てられたものであろうか。71は硬質砂岩と思われる棒状の礫で、一端に敲打痕と擦痕が残り、側面にも擦痕が見られる。工具として用いられたものであろうが、時期不明である。69は陶器小壺である。無釉の焼き締めで、備前焼風であるが、胎は精良で細かく、あるいは中国製品かもしれない。

４．Ｆ区の調査

Ｆ区は７月10日より表土掘削を開始し、同13日より発掘作業を行なった。暑気極まる季節であったが、終了は８月11日でほぼ１箇月を要した。Ｆ区の対象面積は360㎡であったが、歩道確保の必要上、ａ区の一部について調査不能であった。包含層は薄く、地山砂層の検出面も標高3.5ｍ前後で周辺よりやや高くなっているが、遺構は上部と下部に分けて検出しており、土壙類には200番台を溝には20番台を付している。以下検出した遺構、遺物について述べる。

１）遺構と遺構出土の遺物

201号土壙（Fig. 51）　Ｆ－Ⅰ－ａ区上部検出遺構である。土留壁柱に切られるが、径2.2ｍ前後のほぼ円形の掘方と思われる。１ｍ近い深さをもつ。古代から中世にかけての遺物が混在する。13世紀前半代の廃棄物処理土壙か。図示した遺物は、１が須恵器蓋、２が同じく大型の高台付杯で、体部最下位から底部は回転ヘラ削調整を行う。８世紀代の遺物である。口縁内折の大甕もある。

202号土壙　Ｆ－Ⅰ－ｂ区上部検出の近世廃棄物処理用土壙で、近世瓦18点に混って中世遺物等が出土しているが量は少ない。

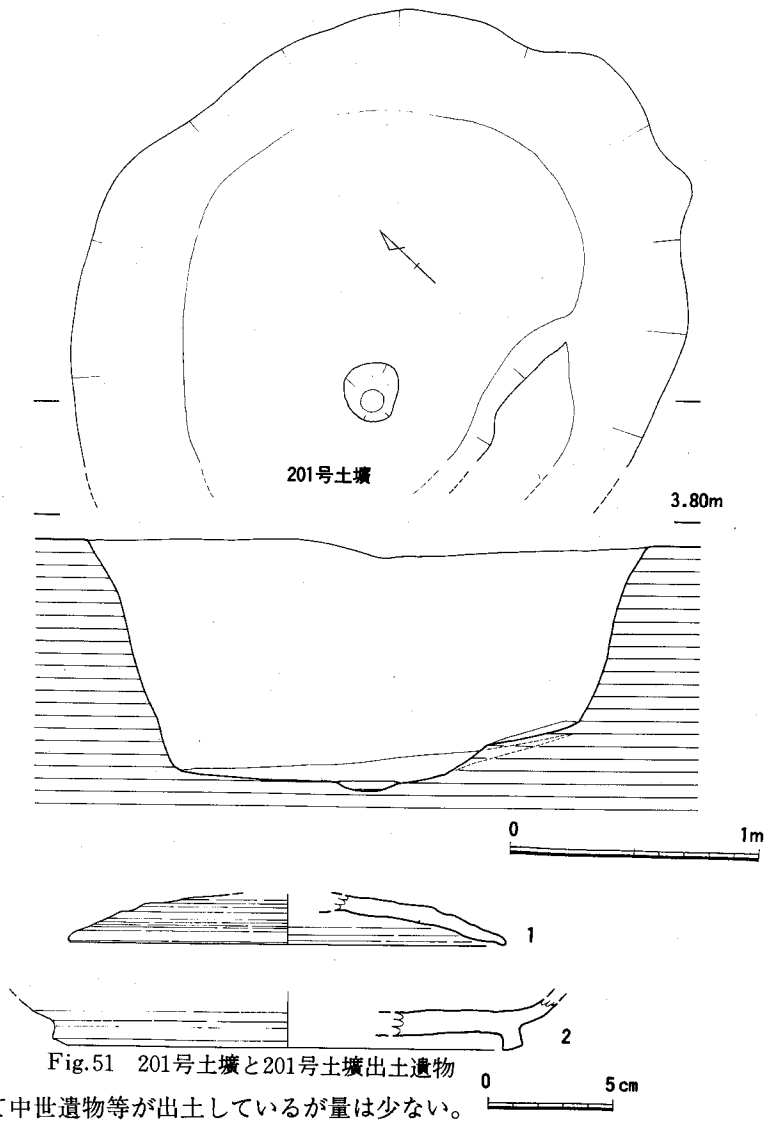


Fig.51　201号土壙と201号土壙出土遺物

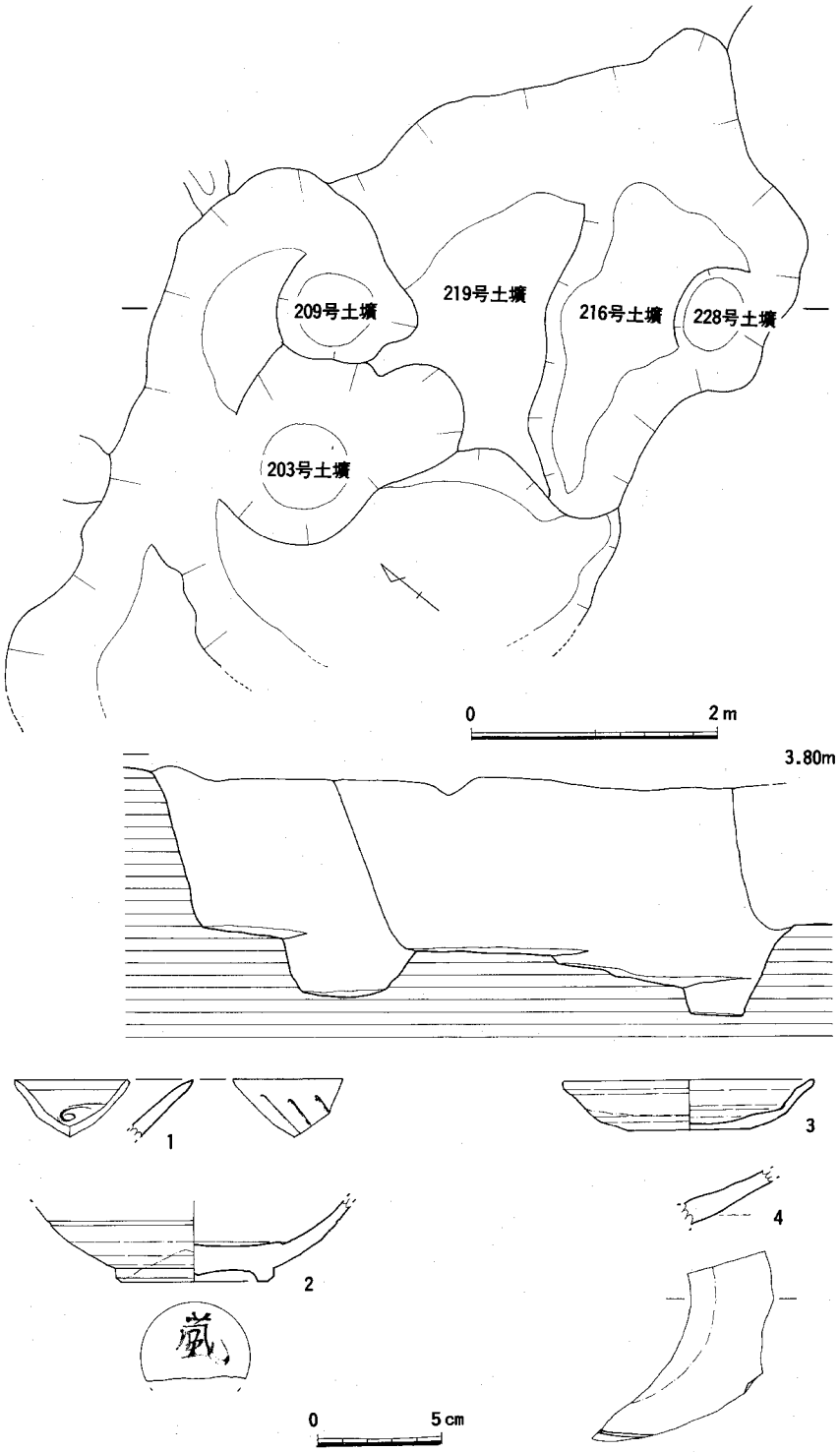


Fig. 52　203号，209号，216号，219号，228号土壙と203号土壙出土遺物（1）

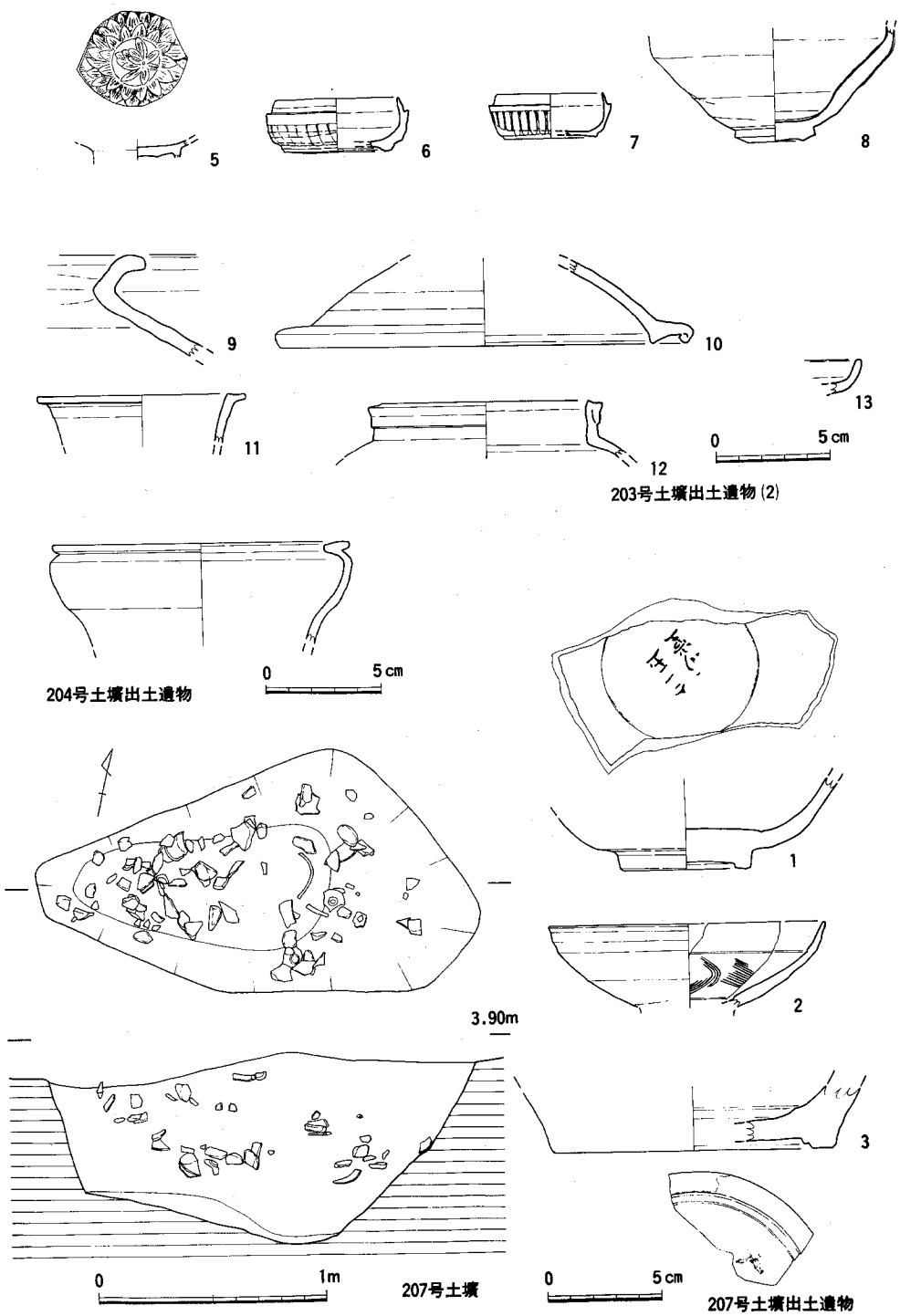


Fig.53　207号土壙と203号(2),204号,207号土壙出土遺物

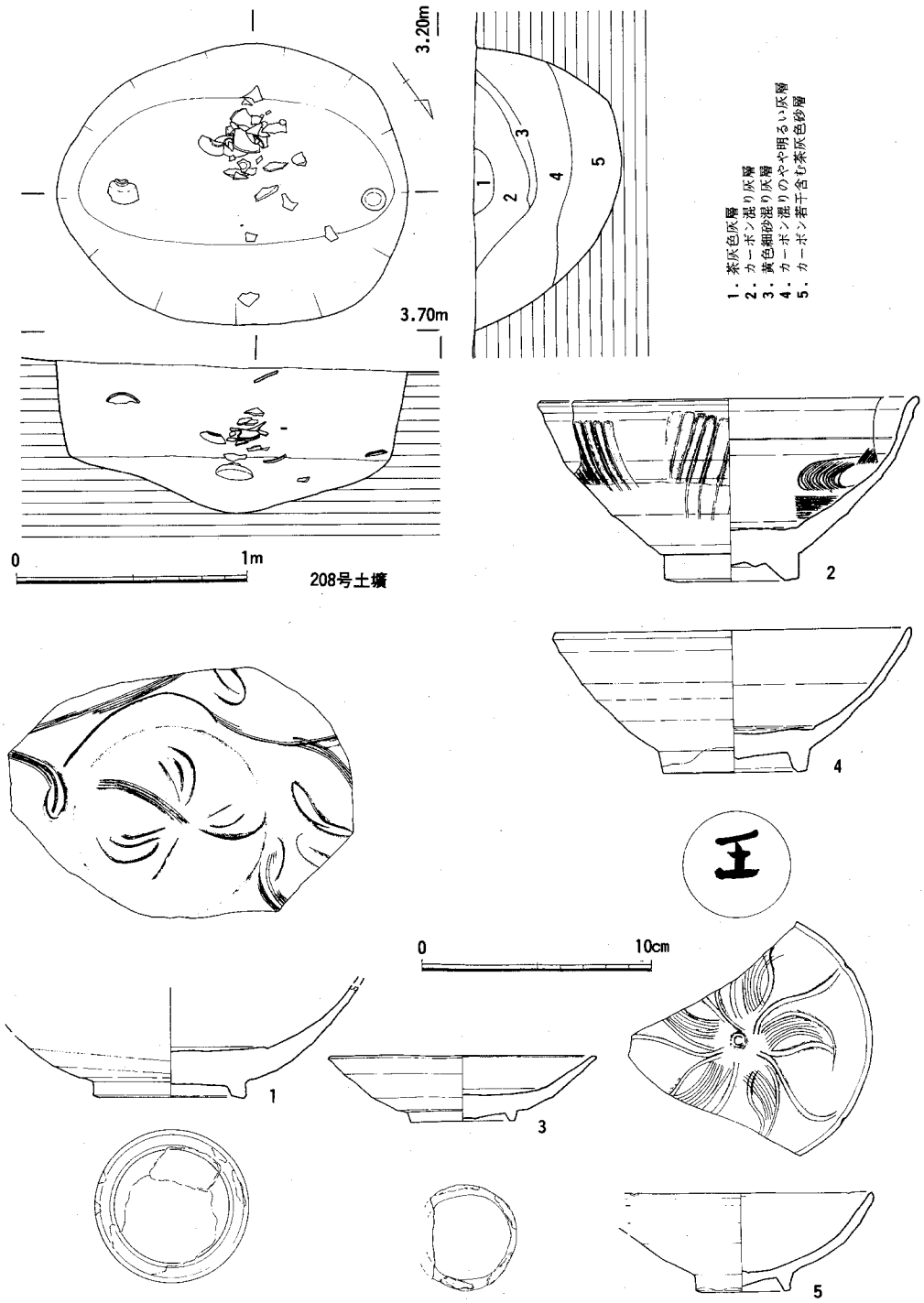


Fig.54　208号土壙と208号土壙出土遺物（1）

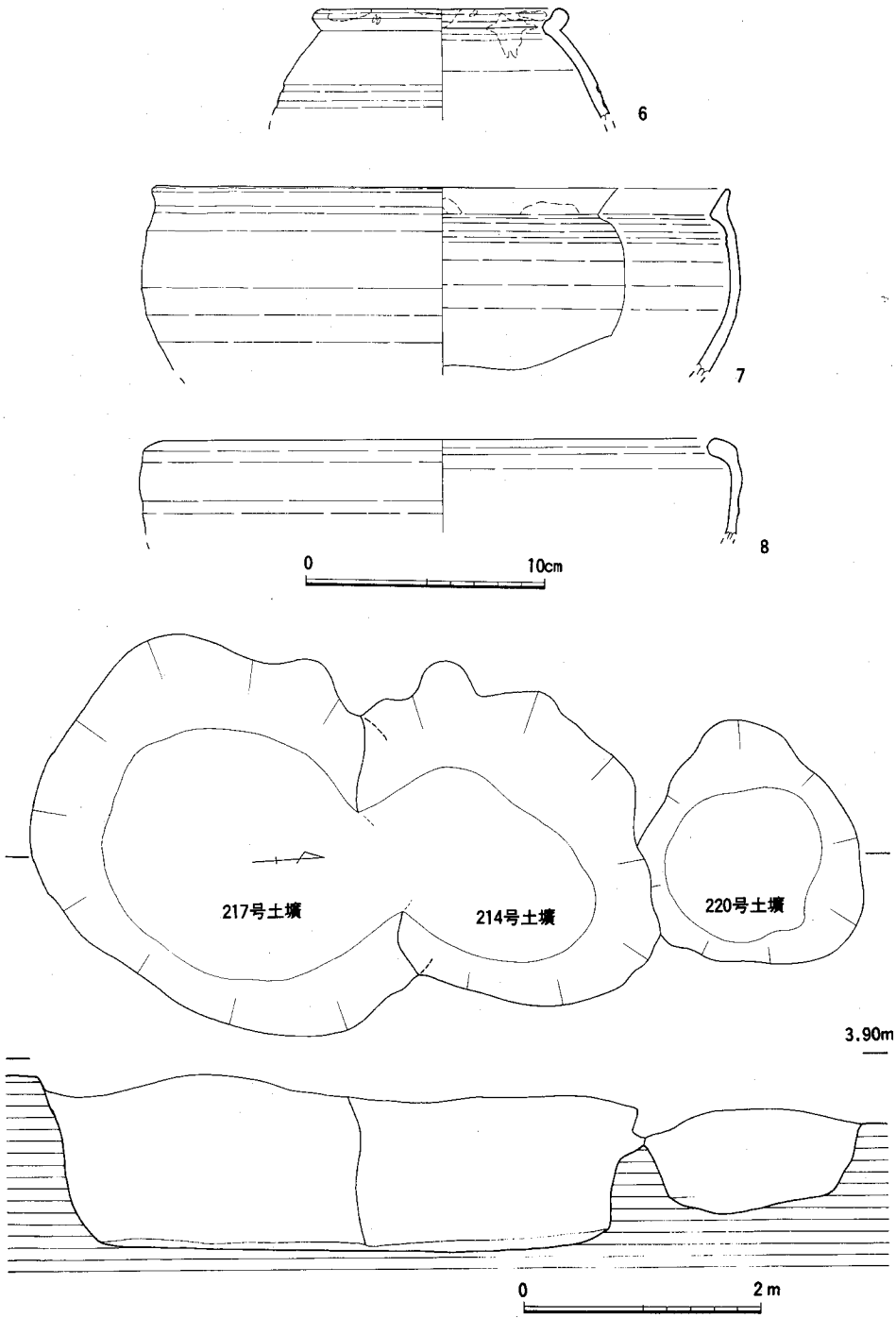


Fig.55　214号,217号,220号土壙と208号土壙出土遺物(2)

203号土壙（Fig. 52・53　PL. 33・47）　F－Ⅰ－c区上部検出の近世井戸掘方である。近世陶磁19点瓦61点に混じって多量の中世遺物が出土している。白磁碗、皿類、223点、龍泉窯系青磁105点、同安窯系青磁90点、中国製陶器439点のほか、土師器甕類50点、須恵器類45点などがある。土師皿類も296点見られる。中世の廃棄物処理土壙を新たに掘り抜いたためであろう。図示した遺物は、1が龍泉窯系碗0類、2が外底に「蔵□」かと読める墨書をもつ龍泉窯系青磁碗、3は同安窯系青磁平皿、4は高麗青磁であろうか、外体部に白色象嵌がわずかに見える。5は青白磁皿であるが釉は青味をもたない。6、7は菊弁印花の平型合子身である。8は上手の天目碗。光沢のある釉が厚くかけられている。9は陶器A群甕、10は全面無釉の磁胎の蓋物で、国産の素地であろうか。11は陶器B群の壺で、越磁風の釉がかかる。12は陶器準A群の小型壺である。13はA群の緑釉陶器で、皿または盤口壺の口縁か。外面は銀化する。

204号土壙（Fig. 53　PL. 33）　F－Ⅰ－c検出の近世井戸である。遺物は少ない。図示した遺物は陶器B群の鉢で口縁平坦面に目跡が残る。

205号土壙　F－Ⅰ－b区上部検出の不定形の土壙である。0.5m程の深さであるが、遺物はほとんど含まれず、時期、性格ともに不明。

206号土壙　F－Ⅰ－b区上部検出遺構である。1.0m×0.8mの長円形で深さ0.3m程。出土遺物はほとんどなく、時期、性格ともに明確でない。

207号土壙（Fig. 53　PL. 33）　F－Ⅲ－c区上部検出遺構である。近世の廃棄物処理土壙で、近世陶磁や瓦に混って多くの中世遺物が出土している。図示した遺物は、1が見込に「金玉満堂」の印を押す龍泉窯青磁碗、2が同安窯系青磁小碗、3が陶器B群の壺で、外底露胎部に「十」と思われる墨書が見られる。このほか磁州窯または遼あたりの産かと思われる釉下鉄彩の緑釉陶器壺破片がある。近世の荒神祀りに使われたかと思われる塑像も見られる。

208号土壙（Fig. 54・55　PL. 33・34・47）　F－Ⅲ－c区上部検出遺構である。1.5m×1.2mの長円形で深さ0.62mである。内部には灰や炭混じりの砂が層をなして堆積している。遺物はこれらの層に含まれている。図示した遺物は、1が龍泉窯の大型青磁碗で、外底に焼台の一部が付着している。2は外面に幅広の櫛描文をもち、内面体部に細かな櫛描曲線文をもつ青磁碗で、青白磁のような鮮かな釉をかける。通例の同安窯系青磁とは趣が異なる。3は高台付青磁皿で無文、高台脇まで茶緑色のガラス質半透明がかかる。あまり例を見ない。4は白磁碗Ⅸ類で、高台内に「王」の名前が墨書されている。5は口縁を輪花にし、内面に美しい花文を刻む青白磁であるが、胎は粗く厚手で、釉もくすんだ発色をしている。6は陶器B群四耳壺、7は同じく鉢。8はc群の鉢で口縁内折、オパール現象を見せる茶褐釉がかけられている。なお床面上に土師糸切底小皿の完形品が見られた。口径9.0cm、器高1.2cmを計る。13世紀前半代の廃棄物処理土壙であろう。

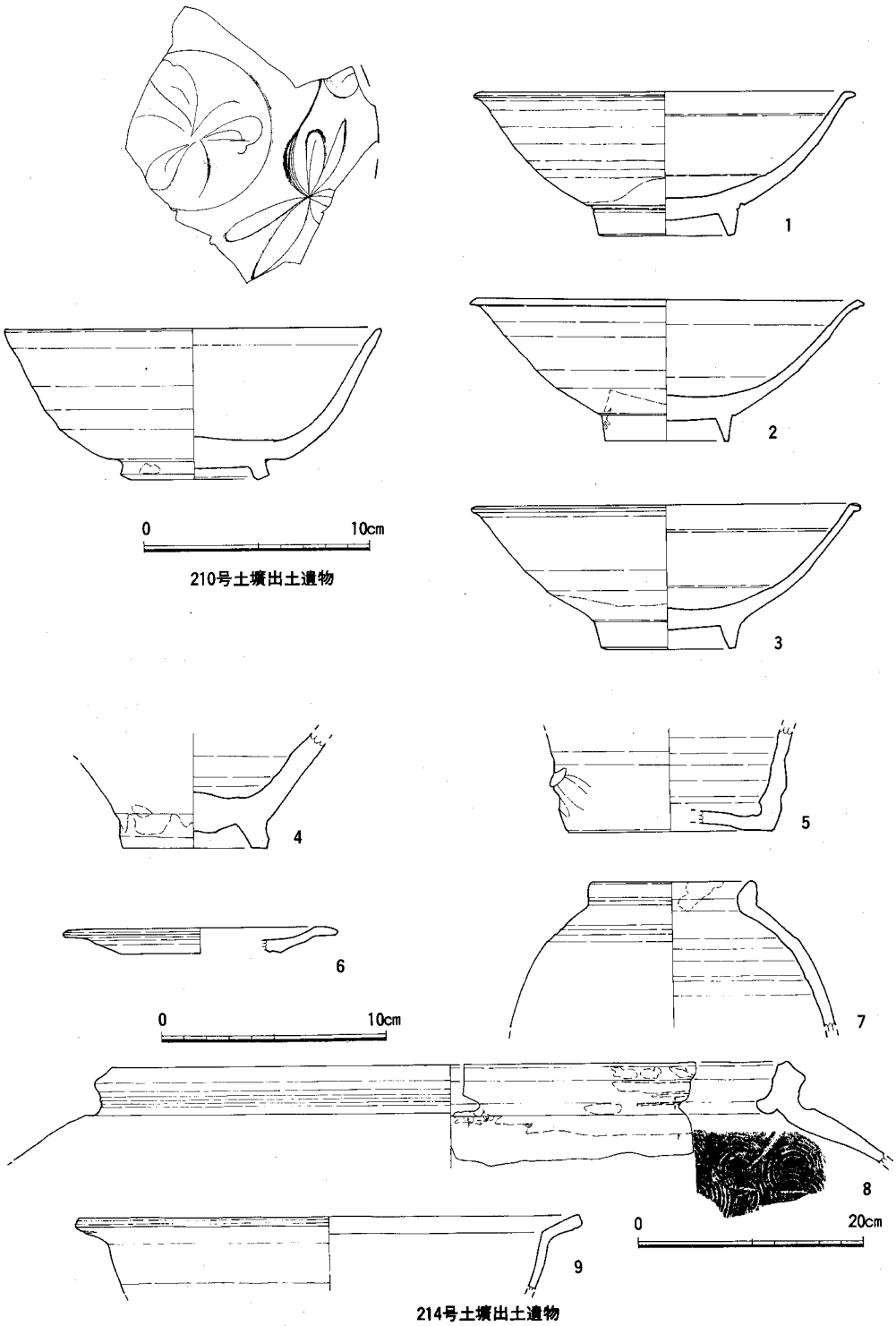


Fig.56　210号,214号土壙出土遺物

209号土壙（Fig. 52）　F－Ⅰ－c区下部検出遺構である。203号土壙（井戸）に切られる。近世井戸掘方である。遺物は少量で、近世焼塩壺のほか、8世紀代の土師器、須恵器がある。

210号土壙（Fig. 56・60）　F－Ⅰ－e区上部検出遺構である。218号土壙を切る。遺物は少量で土師皿も破片2点しかなく時期、性格とも明確にしえない。図示した遺物は龍泉窯青磁碗で、貫入の目立つ青緑色の透明釉がかかっている。

211号土壙　F－Ⅲ－c区上部検出遺構である。土留壁柱に大半が切られている。出土遺物では土師皿類のみやや多いが、計測しうるものは糸切底小皿2点で、口径9cmと10cm、器高1.2cmである。他の遺物は微量である。13世紀代の掘方か。

212号土壙　F－Ⅲ－d区上部検出遺構である。径0.8m程の円形で深さ0.6mの掘方である。土師皿片がやや多いが計測しうるものはヘラ切底小皿1点で口径9cm、器高1.1cmである。この他白磁11点、陶器5点、須恵器9点などがある。12世紀代の廃棄物処理土壙か。

213号土壙　F－Ⅲ－d区上部検出の近代井戸掘方で、白砂で埋め戻しており遺物はない。

214号土壙（Fig. 55・56　PL. 34）　F－Ⅱ－e区上部検出の井戸遺構で、水溜部に方形の板組の痕跡が確認できた。博多での方形井戸例は少ない。217号土壙を切る。遺物は多い。図示した遺物は、1～3いずれも白磁碗Ⅵ類である。4は白磁壺で高台と体部の明確な区分は見られない。5は陶器A群小口瓶である。6は陶器C群の灯明台受け皿部と思われるものである。7は陶器B群の瓶で口縁部内側に目跡が残る。8は陶器C群に属すY字口縁の大型甕で、口径60cmを計る。胎は砂粒を多く含み粗く、内外に緑褐釉がまばらにかかる。内面には同心円の叩き目が残る。接合はしないが同一個体と思われる破片も40点程ある。9は内外をナデ調整する土師質の火鉢で、焼成は堅い。土師皿は少なく計測しうるものは2点で、いずれも糸切底小皿で口径8cm、9cm、器高1.3cm、1.0cmである。13世紀前半の廃棄物処理土壙であろう。

215号土壙（Fig. 57　PL. 34）　F－Ⅰ－d区上部検出遺構で216号土壙を切る。径3.0m、深さ1.6mの大きな円形掘方である。近世廃棄物処理土壙で、近世陶磁片に混り中世遺物が見られる。1は灰色釉のかかる白磁碗で、見込に3箇所の目跡が残り畳付には目砂が付着している。2は陶器C群の水注で二個の縦耳がつく。不透明なあずき色の釉がかかる。

216号土壙（Fig. 52・57　PL. 34）　F－Ⅰ－d区上部検出である。215号土壙に切られ、219号、229号土壙を切る。14世紀代の井戸掘方で底面の片側に水溜と思われる径0.6m程の穴が穿たれている。図示した遺物は、1が青白磁小壺蓋で受け部を除き淡青色透明釉がかかる。2は見込に劃花文をもち、外底をわずかに抉って高台を造る青白磁碗である。3は内底に片切彫蓮華文をもつ龍泉窯青磁平皿である。

217号土壙（Fig. 55・58・59　PL. 34）　F－Ⅱ－e区下部検出遺構。214号土壙（井戸）に切られる。径3.4mの円形掘方で13世紀前半の井戸と思われる。遺物量は多い。図示した遺

物は１が龍泉窯青磁碗Ⅰ－５類である。２は同じくⅡ類碗であるが、他の遺物より極端に新しく、混入したものであろう。３は同安窯系と龍泉窯との折衷タイプの青磁碗である。４は同安窯系青磁碗で青白磁のような淡青色の釉がかかる。５は越磁またはＢ群陶器かと思われる蓋か。６はわずかに飴色がかった透明釉をかける青白磁合子蓋で細かな貫入がある。７は内面を櫛描波状文で埋める青白磁碗である。８は白磁Ⅳ類碗、９は白磁高台付皿Ⅰ－２類である。10は陶器Ａ群の蓋で無釉、11は陶器Ａ群の広口鉢か。胎は白く磁質、透明黄釉がかかる。12は陶器Ａ群の軍持頸部で外面に黒釉がかけられる。13はＡ群盤でベージュの不透明釉がかかる。他に緑釉盤もある。14はＢ群の蓋または灯明台の受け皿である。15は同皿、16も同群で灯明台受皿部であり、18の本体に接続する形となる。17はＢ群の広口壺、19はＣ群擂鉢で、口縁部のみあずき色釉が見られる。

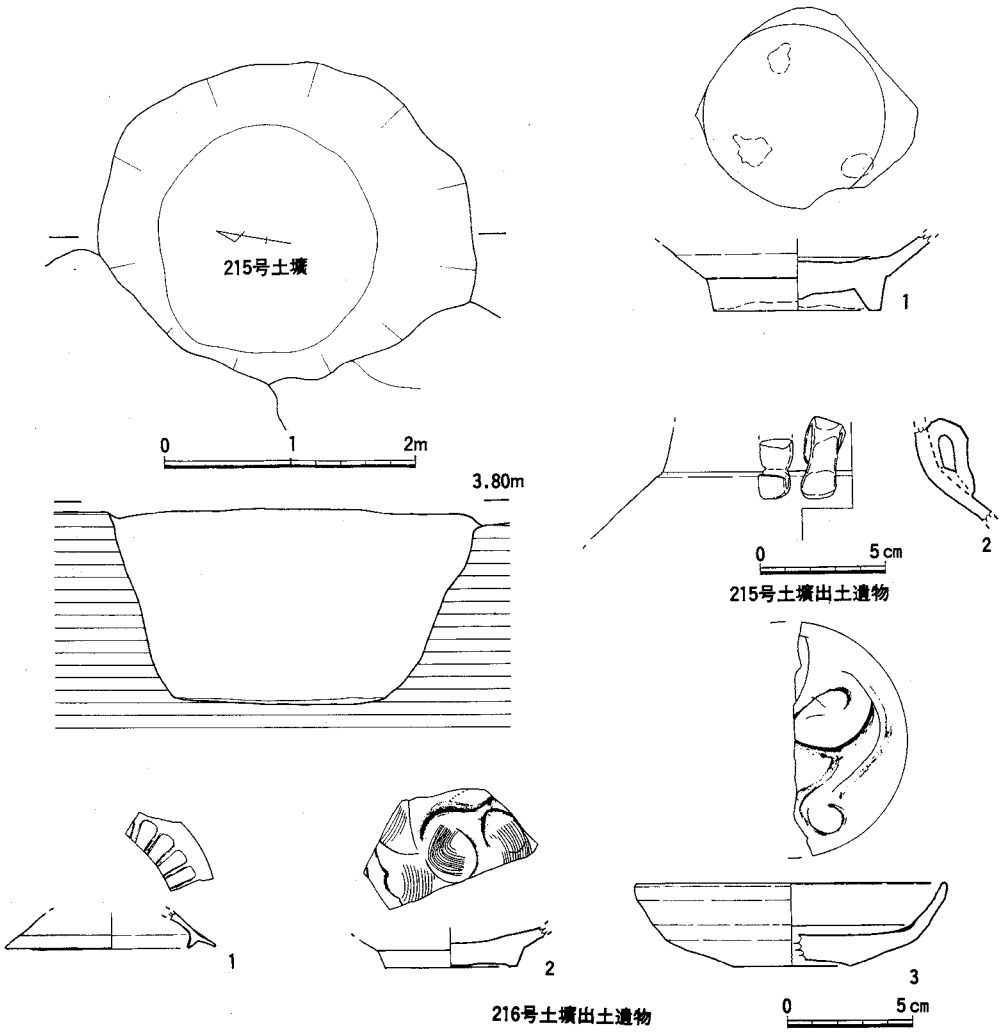


Fig.57　215号土壙と215号,216号土壙出土遺物

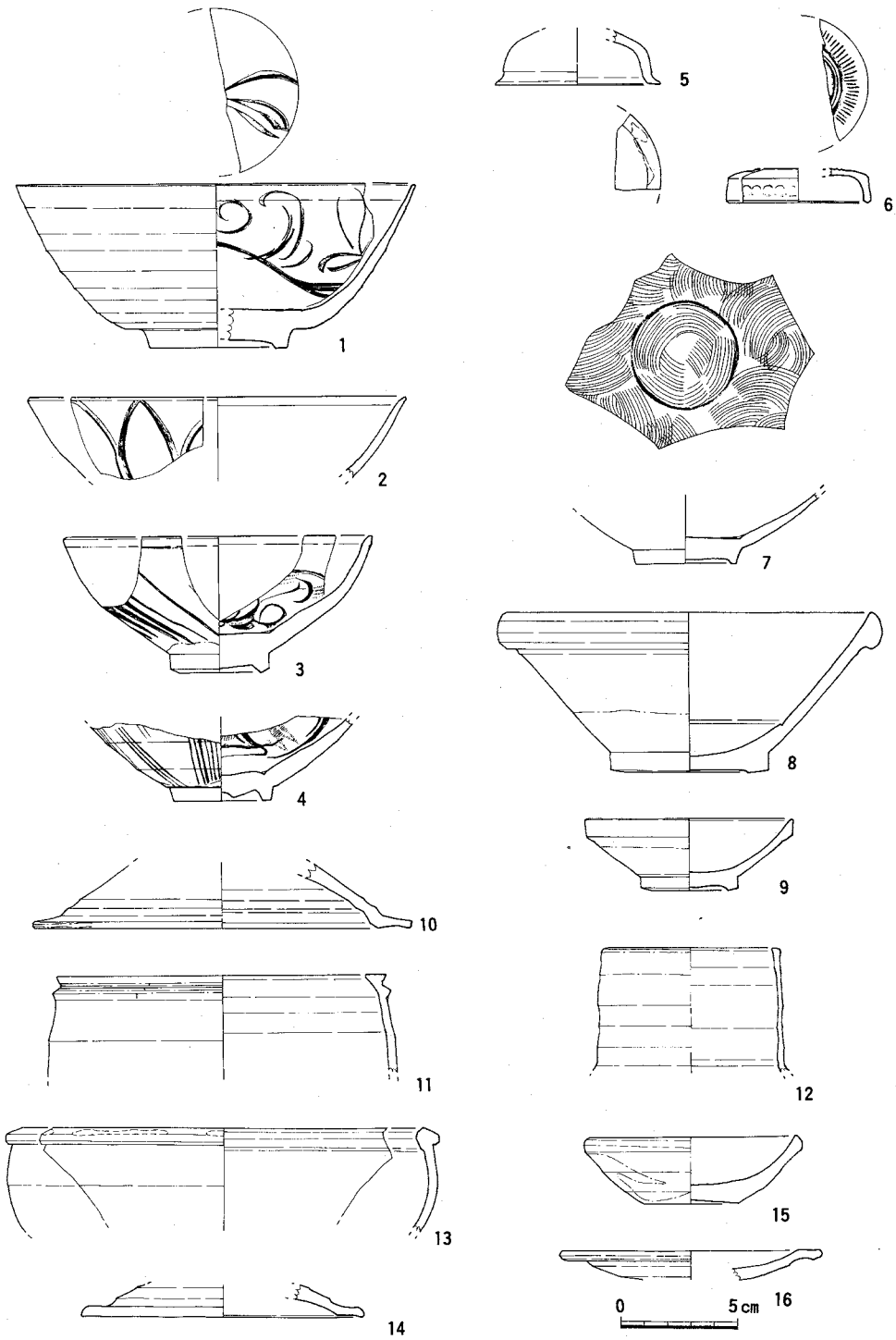


Fig.58　217号土壙出土遺物(1)

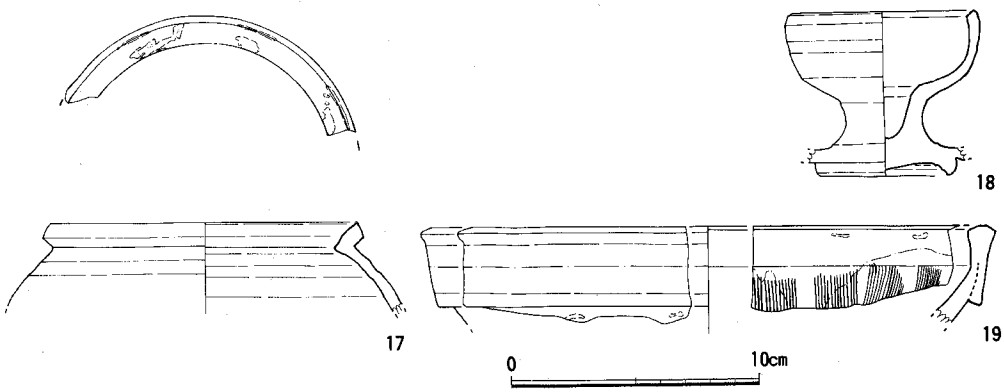


Fig.59　217号土壙出土遺物（２）

218号土壙（Fig. 60　PL. 34・35）　Ｆ－Ⅰ－ｅ区上部検出遺構で、210号土壙に切られる。長軸1.8ｍ、幅1.2ｍ程の菱形の掘方で、深さ0.7ｍを計る。図示した遺物は、１が龍泉窯青磁碗Ⅰ－５類で内面に片切彫劃花文をもつ。２も同じく龍泉窯青磁碗Ⅰ－５類で内体部のみに劃花文をもつ。３は未分類の白磁碗で、内面体部にラマ式蓮弁様の櫛描文をもち、外面体部に６本１組の粗い放射状櫛描文をもつ。釉はくすんだ緑灰色で体外半釉である。見込に三箇所の重ね焼の痕跡が残る。図示していないが、PL. 34の４は、内外面に櫛描文をもち、口縁を外方に捻り出す青磁碗で、濃モスグリーン半透明釉がかかるものである。内面に多量の異物が付着し、極端な下手物で窯系不明。土師皿類で計測可能なものは４点あり、いずれも糸切底小皿で口径9.0cm、器高1.0～1.3cmである。13世紀前半代の廃棄物処理土壙であろう。

219号土壙（Fig. 52・61　PL. 35）　Ｆ－Ⅰ－ｄ区下部検出遺構である。203号、209号、216号土壙によって大半を切られ掘方全体形は不明。出土遺物は多い。１は龍泉窯青磁小壺で内面と外底無釉、外体部に斜格子状の蓮弁文を刻む。２は同平皿で見込に片切彫魚文をもつ。３も同平皿で見込に片切彫蓮華文をもつ。４は同安窯系青磁碗で外面に放射状櫛描文、内面に片切彫と櫛描文をもつ。５は同平皿。６は白磁碗Ⅳ類であるが、見込に釉削りがあり、外底の抉りがやや深い。７は白磁皿で内面体部上半が肥厚する。８は白磁平皿Ⅵ－１類で見込に片切彫花文をもつ。９も同類で見込に片切彫花文と櫛描列点文をもつ。10は白磁平皿Ⅴ類で外底露胎部に墨書をもつが判読できない。11は青白磁平皿。薄胎で見込に櫛描文がある。12は陶器準Ａ群の小形壺。13は７世紀代の須恵器甕である。14は底部に穿孔のある高台付土師器小皿。15は土師糸切底杯で口径13.5cm、器高2.8cm、この他計測可能な土師糸切小皿２点があり、それぞれ口径8.5cm、9.5cm、器高0.8cm、1.5cmである。13世紀代の井戸または廃棄物処理土壙である。

220号土壙（Fig. 62・63. PL. 35）　Ｆ－Ⅱ－ｄ区上部検出遺構である。径1.6ｍ程の円形の掘方中央に刳り貫きの桶状の木製品が据え置かれ、周囲に杭が打ち込まれている。底面標高

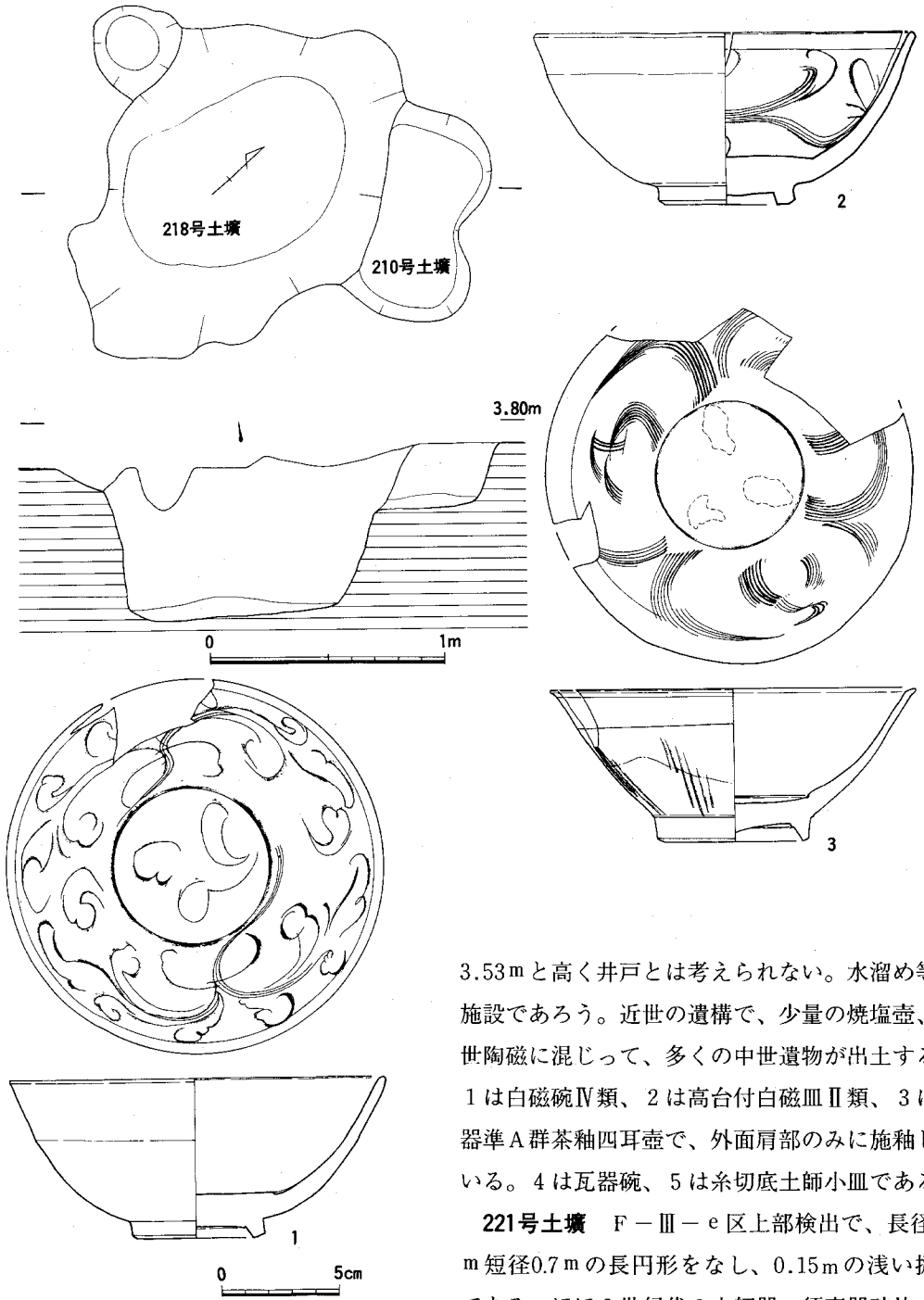


Fig.60　210号,218号土壙と218号土壙出土遺物

3.53mと高く井戸とは考えられない。水溜め等の施設であろう。近世の遺構で、少量の焼塩壺、近世陶磁に混じって、多くの中世遺物が出土する。1は白磁碗Ⅳ類、2は高台付白磁皿Ⅱ類、3は陶器準A群茶釉四耳壺で、外面肩部のみに施釉している。4は瓦器碗、5は糸切底土師小皿である。

221号土壙　F－Ⅲ－e区上部検出で、長径1.0m短径0.7mの長円形をなし、0.15mの浅い掘方である。ほぼ8世紀代の土師器、須恵器破片のみが少量出土している。当該期の遺構であろう。性

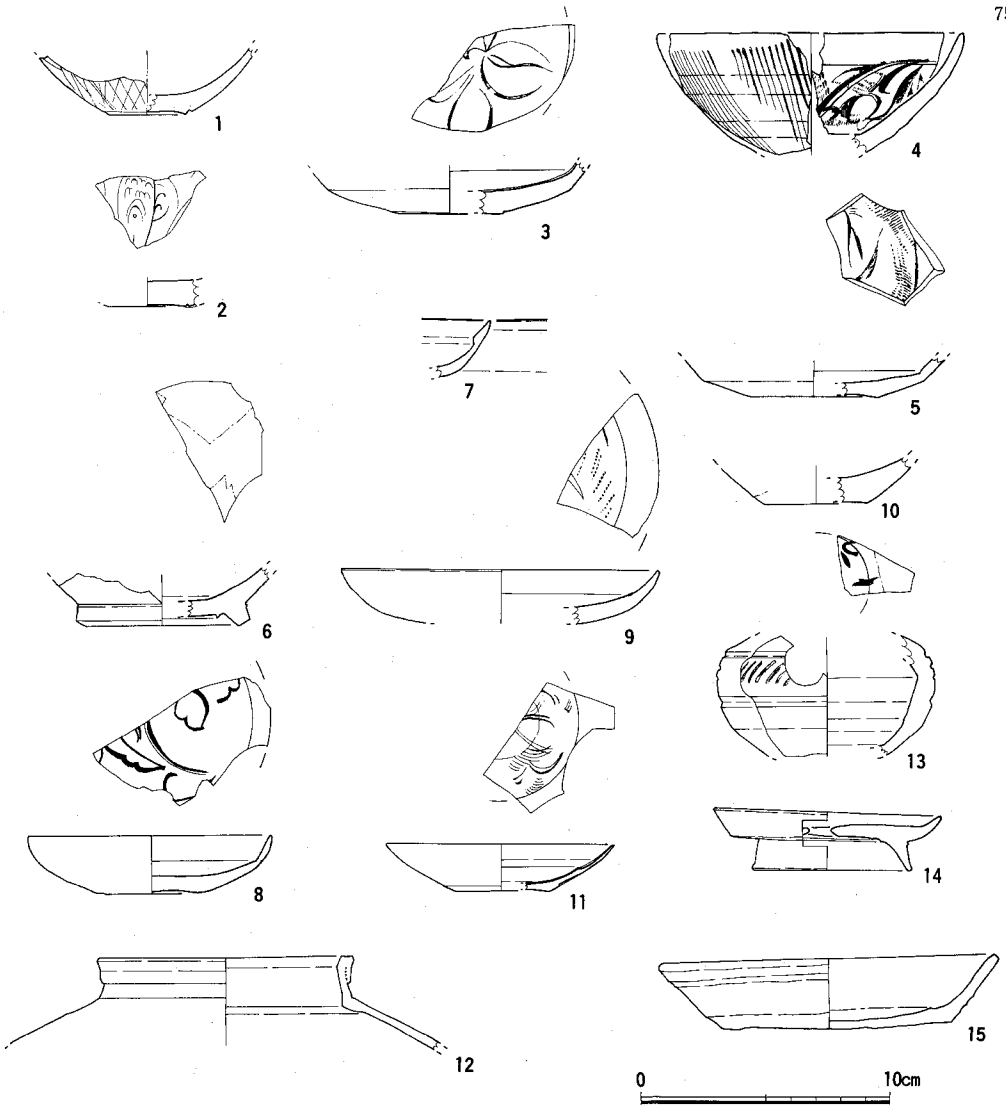


Fig.61　219号土壙出土遺物

格不明。

222号土壙　F－Ⅲ－e区上部検出の小土壙で、糸切底土師杯小片6点のほか、白磁片6点などが出土しているにすぎない。中世の遺構であるが、詳細な時期、性格は不明。

223号土壙　F－Ⅲ－e区上部検出の近代瓦組井戸である。10枚の井戸瓦（塼）を組合せ、径0.7mの井戸側をなす。廃棄後ゴミ処理用に使われており、近代の遺物が多く見られる。中国の白磁水注破片も1点みられた。

224号土壙（Fig. 63　PL. 36）　F－Ⅰ－d・e区下部検出の不明確な掘方である。近世廃棄物処理土壙である215号土壙に切られる。図示した遺物は、1が同安窯系青磁碗で内外面

に櫛描文をもつ。2は白磁碗でⅡ－3類に属す。3は同Ⅳ類。4は青白磁小壺で、全体に青白釉をかけ、後に口縁端の釉を削りとる。型造りで外体部に浮花文がある。5は青白磁高足杯である。淡青白色の透明釉がかかる。近世国産品の可能性もある。この他、薄胎で体部が朝顔形に開く青白磁碗もある。土師皿類は小破片が10数点見られるのみで計測できない。時期、性格ともに明確にしがたい。

225号土壙（Fig. 63）　F－Ⅰ－d区下部検出遺構である。229号土壙を切る。土留壁柱に切られ全体形は不明である。1.0mの深さをもつ。遺物は少量で、土師皿類はわずか2片のみ。図示した遺物は、1が白磁Ⅸ類碗、2が青白磁合子蓋である。このほか外面に片切彫劃花文をもち、緑がかった灰色不透明釉をかける越州窯系青磁の壺もある。12～13世紀の時期と思われるが性格とともに詳細は不明。

226号土壙　F－Ⅰ－d区下部検出の遺構である。土留壁柱に切られ全体形は不明。深さ0.4m

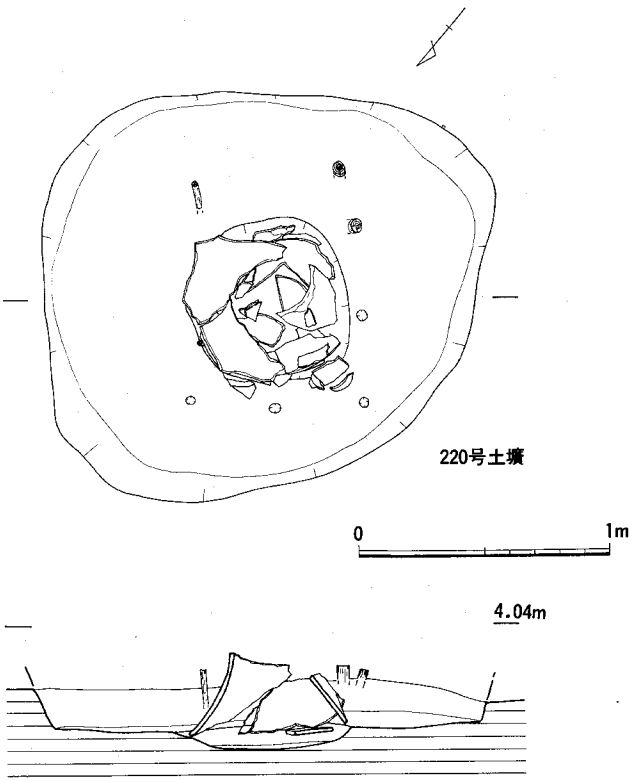


Fig.62　220号土壙

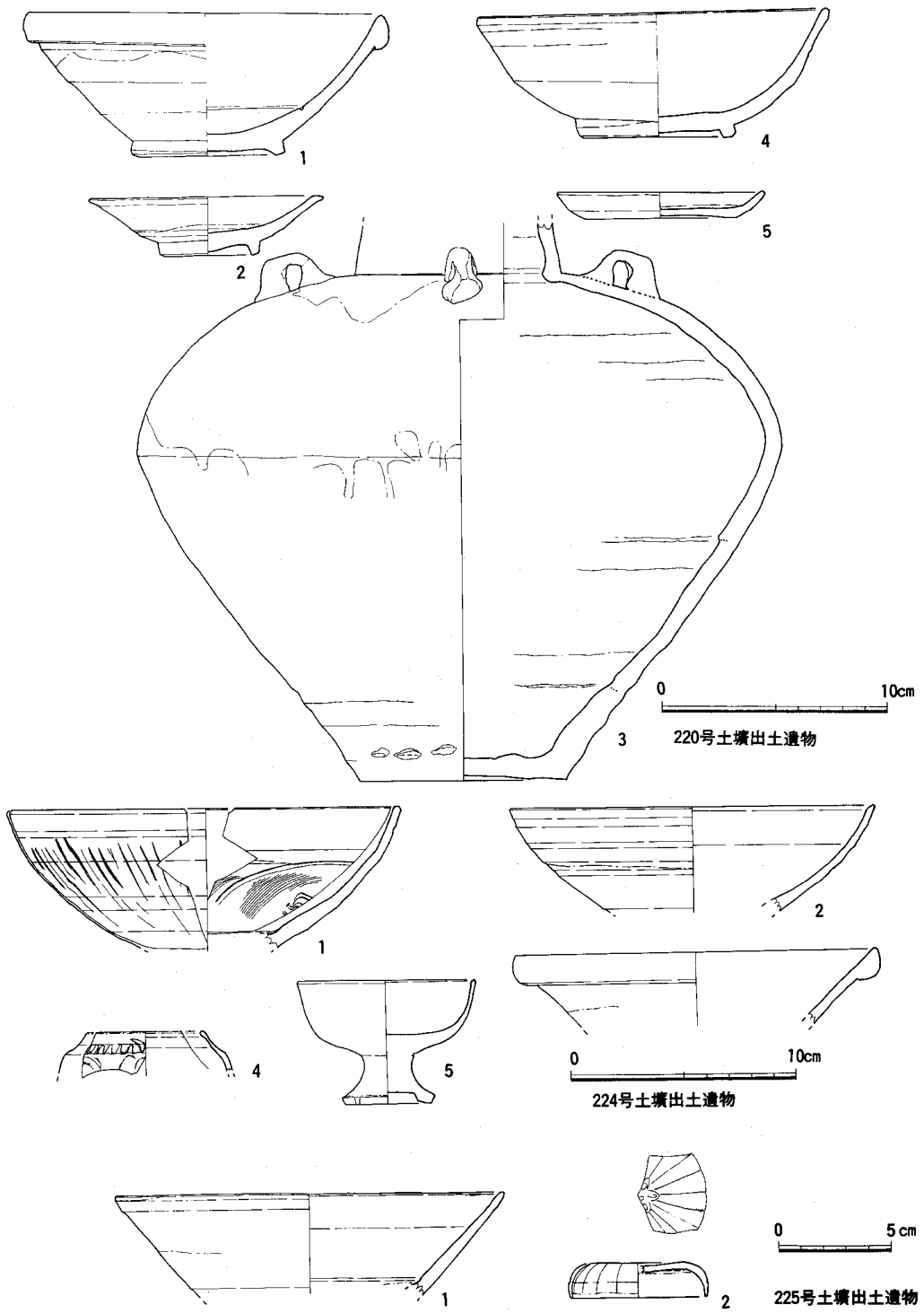


Fig.63　220号,224号,225号土壙出土遺物

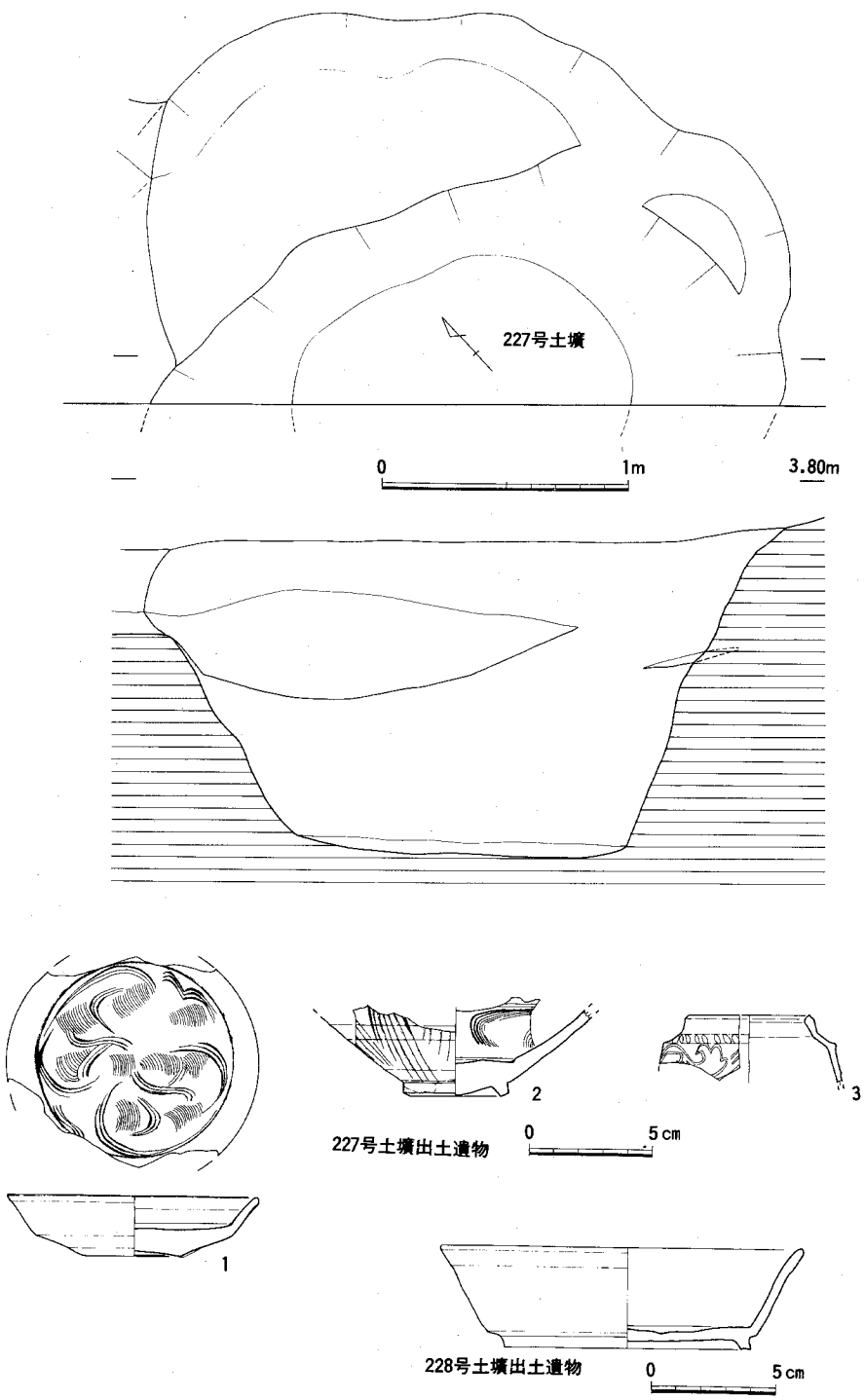


Fig.64　227号土壙と227号,228号土壙出土遺物

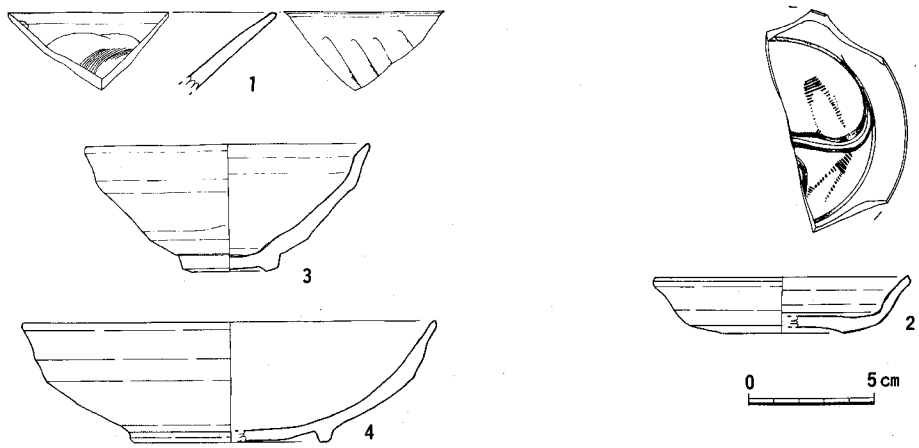


Fig.65　229号土壙出土遺物

を計る。遺物は殆んど出土しておらず、時期、性格ともに不明。

227号土壙（Fig. 64　PL. 36）　Ｆ－Ⅰ－ｅ区下部検出遺構である。土留壁柱によって切られ全体形は不明。1.5ｍの深さをもつ大きな掘方である。遺物は少ない。１は龍泉窯青磁皿Ⅰ－１類、２は内外面に櫛描文をもつ同安窯系青磁碗であり高台脇まで施釉されている。３は青白磁小壺で外面に浮花文があり、口唇部の釉を削りとっている。土師皿類は杯１片１点のみである。この他、奈良時代の焼塩壺、陶器Ａ群の蓋物や緑釉壺等も見られる。およそ12～13世紀代と考えられる。井戸であろうか。

228号土壙（Fig. 64　PL. 36）　Ｆ－Ⅰ－ｄ区下部検出の井戸遺構である。216号、225号土壙に切られ掘方は明確でないが、径0.7ｍ程の木桶組の痕跡がある。図示した遺物は須恵器高台付杯である。この他無鍔の黄釉鉄絵盤と土師皿、白磁の小片が各１点見られるのみである。ほぼ13世紀代と思われる。

229号土壙（Fig. 65）　Ｆ－Ⅰ－ｄ区下部検出遺構で井戸である。216号、225号土壙等に切られており全体形は不明。径0.65ｍの木桶組の井側痕跡がある。図示した遺物は、１が外面に放射状の片切彫をもち、内面を片切彫と櫛描文で飾る龍泉窯青磁碗０類である。２は同安窯系青磁皿、３は天目碗、４は瓦器碗である。土師皿類は16点程出土しているが、いずれも小片で計測しえない。このほか陶器類が16点出土している。13世紀頃と考えられる。

230号土壙　Ｆ－Ⅰ－ｅ区下部検出遺構で、径1.2ｍのほぼ円形で20cm程の深さをもつ。出土遺物は少なく、土師皿片11点、白磁片３点、青磁片１点、陶器片５点程度である。時期、性格不明。

231号土壙（Fig. 66・67　PL. 36・47）　Ｆ－Ⅲ－ｂ区下部検出の長軸4.7ｍ、幅2.8ｍの大

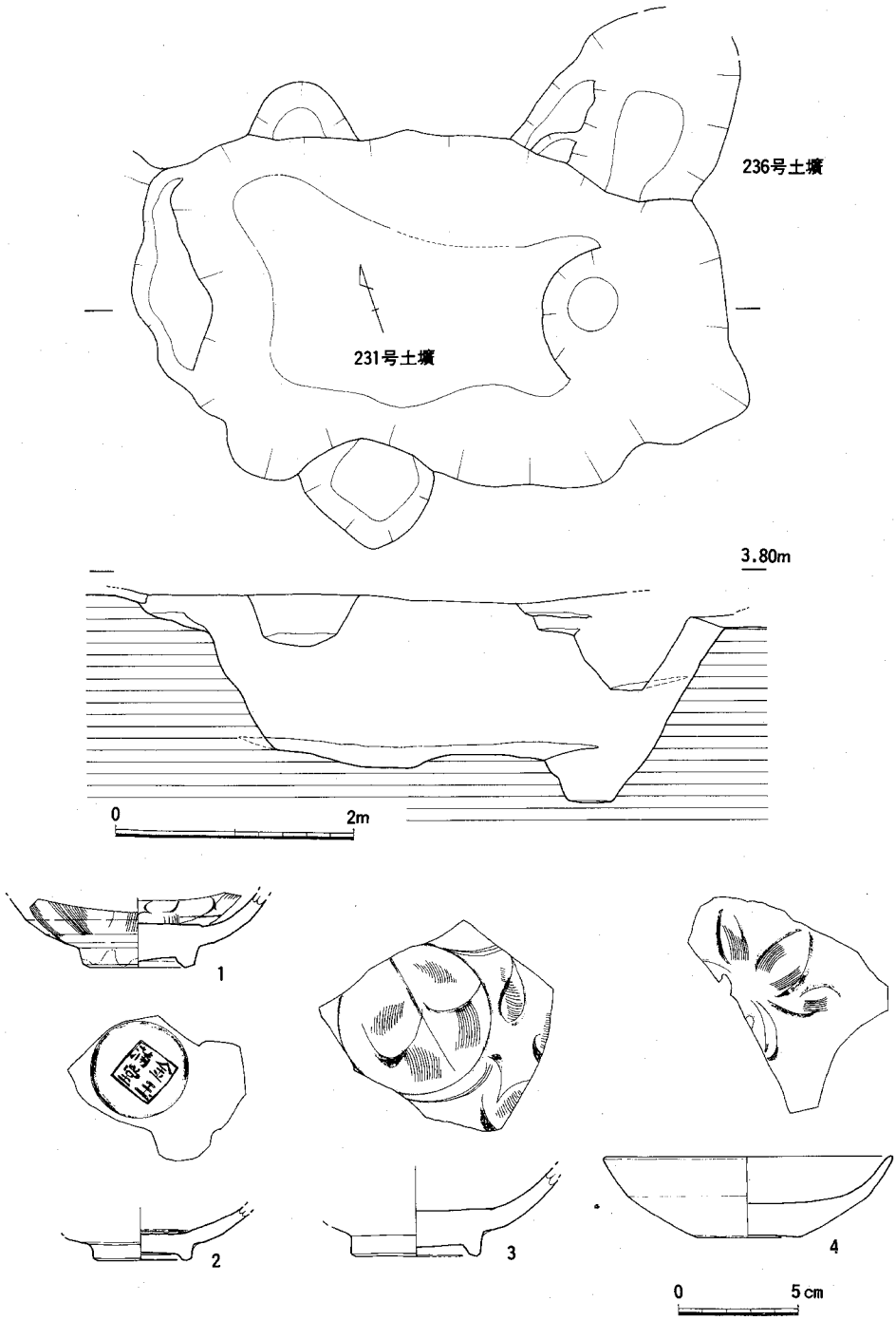


Fig.66　231号,236号土壙と231号土壙出土遺物(1)

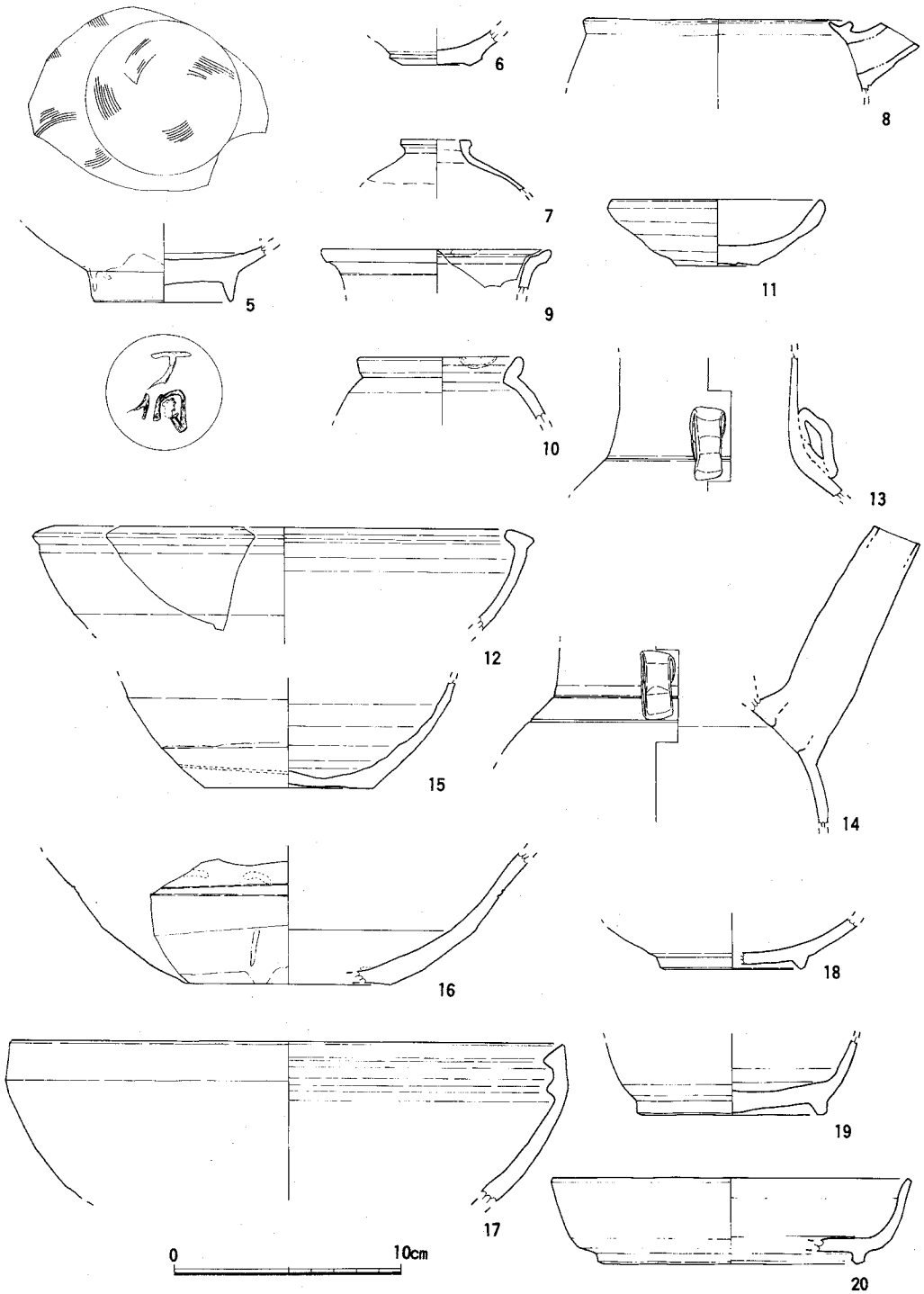


Fig.67　231号土壙出土遺物（２）

きな掘方で、一端に水溜めの小土壙を穿っている近世井戸掘方である。236号土壙を切る。多量の遺物が混在する。1～4は龍泉窯青磁で、1は内外面に櫛描文をもつ碗、2は見込に「金玉満堂」のスタンプをもつ碗、3は内面に片切彫と櫛描文をもつ碗、4は見込に片切彫と櫛描の蓮華文をもつ平皿である。5は内面に櫛描文をもつ白磁碗で、外底に「丁綱」の墨書がある。6は天目碗である。7～17は中国産陶器である。7、8はA群に属し、それぞれ小口瓶、行平である。9～12はB群に属し、9は水注の口縁部で上面に目跡がある。10は長瓶である。11は皿である。12は平鉢である。13～17はC群に属す。13～15は赤褐色の胎をもち小豆色釉を内外にかける水注である。同形のものが少くとも三個体はある。16は鉢で内底と外体部に目跡が残る。17は粗胎の捏鉢である。18は瓦器碗で内外を丁寧にヘラ研磨する。19、20は高台付須恵器杯である。土師皿類も35点出土しているが、計測可能なものは3点しかない。いずれも糸切底で、口径14cm、器高2.8cmの杯、口径9cm、8cm、器高0.9cm、1.1cmの小皿である。近世陶磁も14点含まれている。

232号土壙（Fig. 68　PL. 36）　F－Ⅱ－a区下部検出の近世攪乱土壙で、少量の近世陶磁と多量の中世遺物が出土している。特に陶器が多い。1は内面に櫛描文をもつ白磁碗、2は磁灶窯系陶器でA群に属す緑釉盤である。内面にヘラ描文があり、外底をのぞいて光沢のある半透明緑釉がかかる。

233号土壙（Fig. 68）　F－Ⅲ－c区下部検出遺構で、235号土壙を切る。12世紀半ばの廃棄物処理土壙である。土師皿類で計測しうるものは、それぞれ口径14.5cm、15cm、15cm、器高4.6cm、2.6cm、2.6cmのヘラ切底杯3点と口径16cm、器高2.8cm、2.6cmの糸切底杯2点、同じく口径10cm、9cm、9cm、器高1.3cm、1.1cm、1.1cmの糸切底小皿3点である。その他白磁片10点、陶器片3点などがあり、奈良期土師器、須恵器も混じる。1は白磁皿、2は糸切底土師器杯、3は瓦器碗、4は土師器碗である。

234号土壙（Fig. 68）　F－Ⅲ－d区検出遺構である。中間杭によって一部攪乱を受けている。12世紀半ばの土壙で掘方上面に幼児頭大の礫数個が置かれている。図示した遺物は白磁合子蓋で、外面のみ灰オリーブ透明釉がかけられている。土師皿は糸切底小皿1点のみが計測でき、口径9cm、器高1.3cmである。白磁、陶器は各13点、10点あるが青磁は見られない。

235号土壙　F－Ⅲ－c区下部検出の深さ0.15mの浅い皿状遺構で、233号土壙に切られる。8世紀代の遺構で、土師器甕、焼塩壺、須恵器等が少量出土している。

236号土壙（Fig. 66・69　PL. 36）　F－Ⅲ－b区下部検出遺構である。231号土壙と土留壁柱に切られ全体形不明。遺物は少ない。図示した遺物は、1が白磁碗Ⅳ類。2は釉下鉄彩の鉢で、白磁碗Ⅵ－4類の器形であるが、釉は濃いオリーブ色、胎は暗灰色で青磁に近い。見込釉を輪状に削り取る。3は陶器A群蓋で無釉、天井部に焼成後穿孔されている。4はA群小口

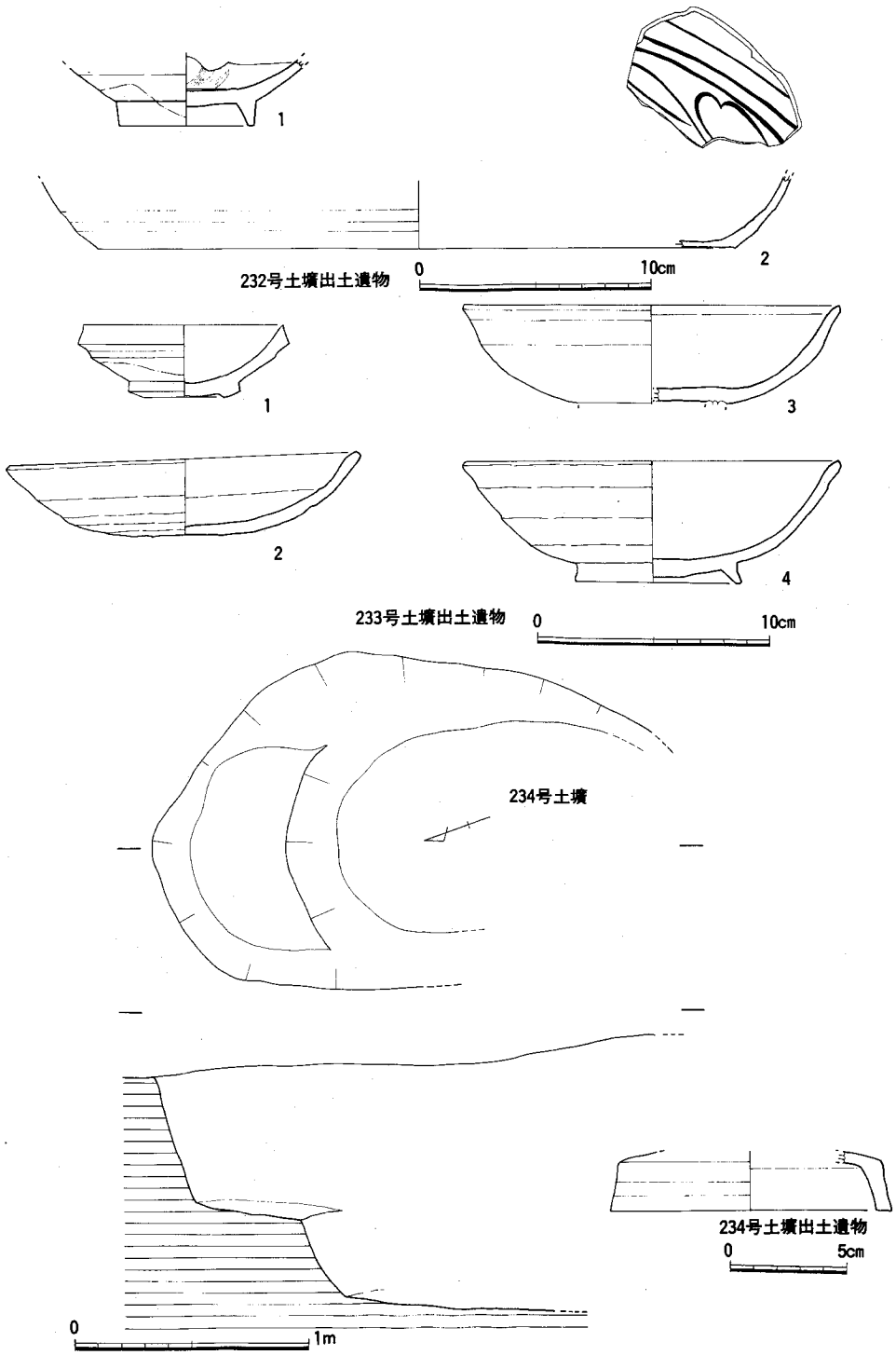


Fig.68　234号土壙と232号,233号,234号土壙出土遺物

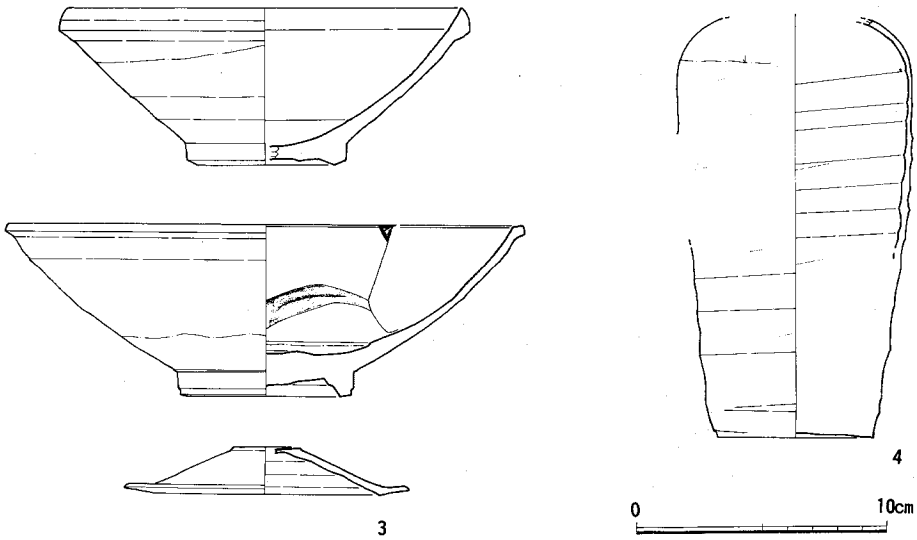


Fig.69　236号土壙出土遺物

瓶で肩に小豆色の釉がかかる。他に3個体がある。土師皿は微細な破片のみである。12世紀前半代の遺構か。性格不明。

237号土壙（Fig. 70　PL. 13・14・37・47）　F－Ⅱ－b区下部検出の馬の埋葬施設である。不定形の土壙に頭位を西に向け、脚を折り曲げ横臥させる。首は後に曲げ肩の下に置く。上面には牡蠣殻層があった。体長1.1mの幼齢である。肩と腰の上面に銅銭が1枚づつ置かれていたが、銹がひどく銭種不明。以外の出土遺物は多量であるが、破片であり、副葬品とは考えにくい。埋土中に混入したものであろう。図示した遺物は、1が白磁碗Ⅵ－1類で高台内に「王七□」の墨書がある。2は白磁小碗で見込に茶溜りをもつ。3は白磁碗Ⅵ類であろう。4は内面に櫛描文をもつ青白磁風の皿であるが釉の発色はわずかに黄味を帯びた白である。5は白磁高台付皿Ⅱ類である。6は青白磁合子蓋で外面にのみ施釉されるが、一部鉄漿が付着している。7、8は磁灶窯系陶器の行平で、7は注口、8は把手部分である。別個体である。7の内体部端に茶褐釉が見える。土師皿はいずれも糸切底で、口径15.0cm、器高2.6cmの杯が2点、口径8.5cm、9.0cm、器高1.1cm、1.0cmの小皿2点がある。青磁は含まれていない。12世紀半ば～後半代の遺構であろう。

238号土壙　F－Ⅱ－b区下部検出遺構である。径1.4mのほぼ円形で深さ0.48mの掘方である。遺物は全く見られず、時期、性格ともに不明。

239号土壙（Fig. 71・72　PL. 37・47・48）　F－Ⅱ－c区下部検出遺構である。長径1.6m、短径1.4mの長円形で深さ1.3mの土壙である。多量の遺物がある。図示した遺物は、1が龍泉窯青磁碗0類、2は白磁碗Ⅱ類で外底に墨書が見られるが判読不能。3は同碗0－Ⅱ類。4、

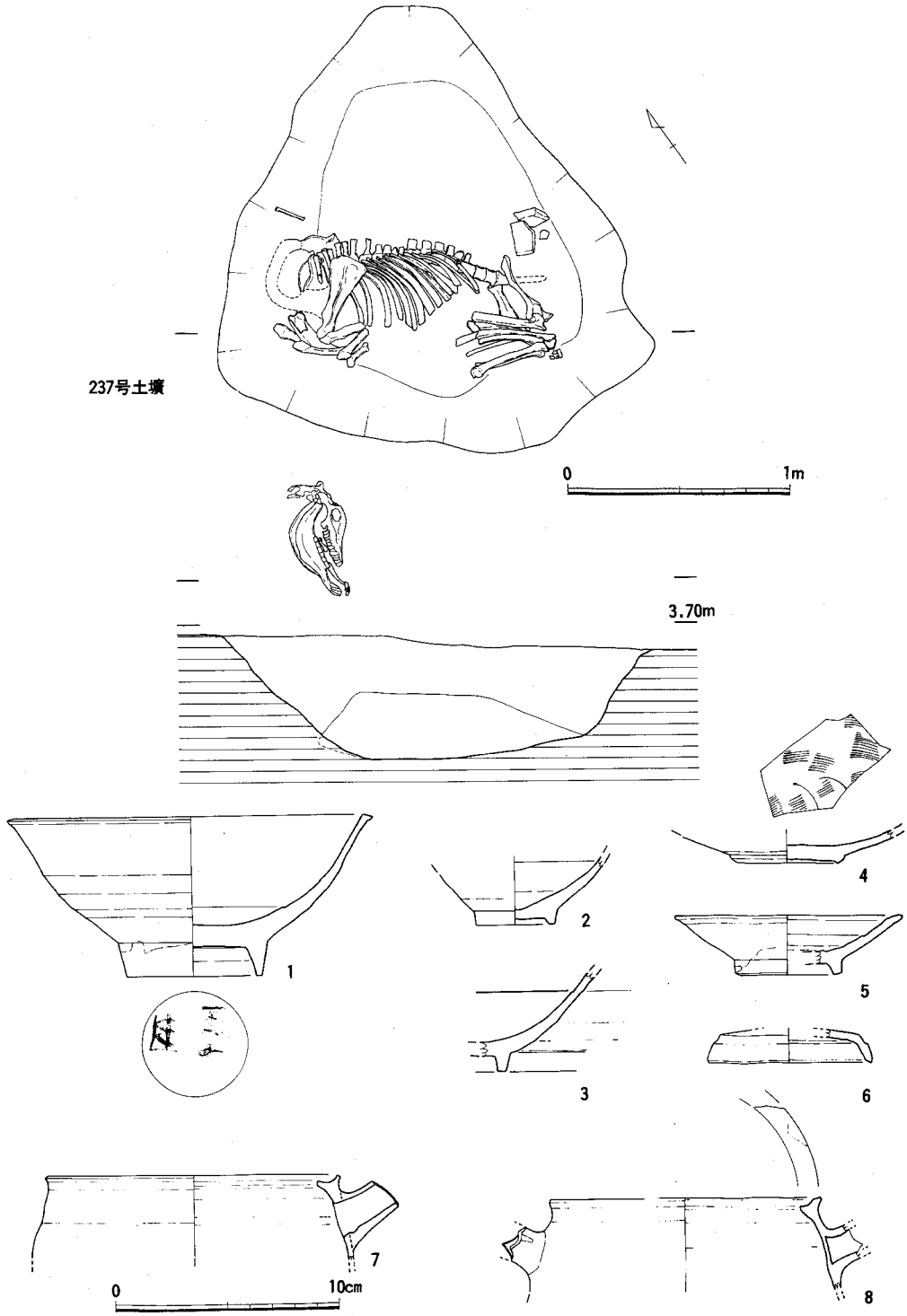


Fig.70　237号土壙と237号土壙出土遺物

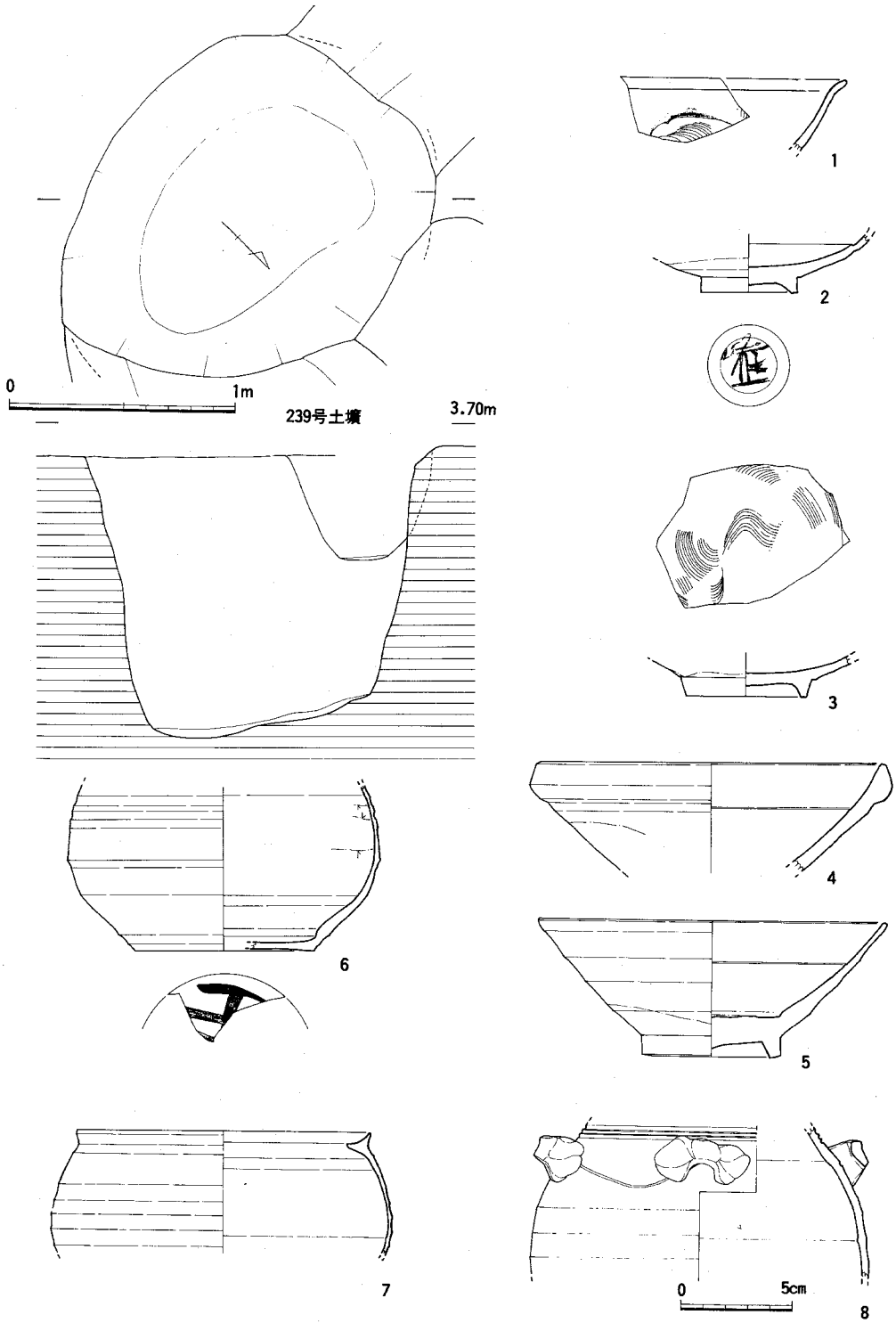


Fig.71　239号土壙と239号土壙出土遺物(1)

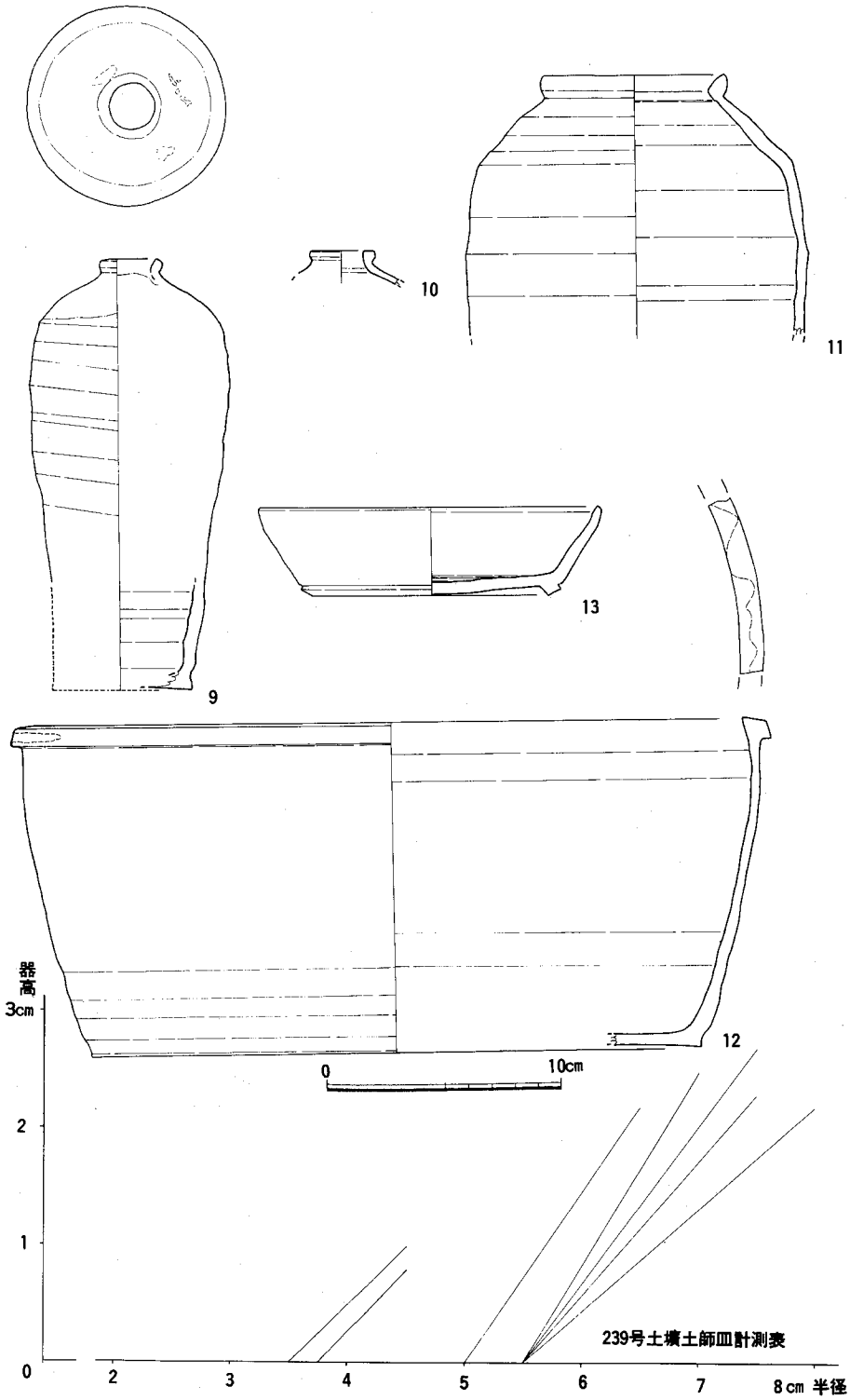


Fig.72　239号土壙出土遺物(２)

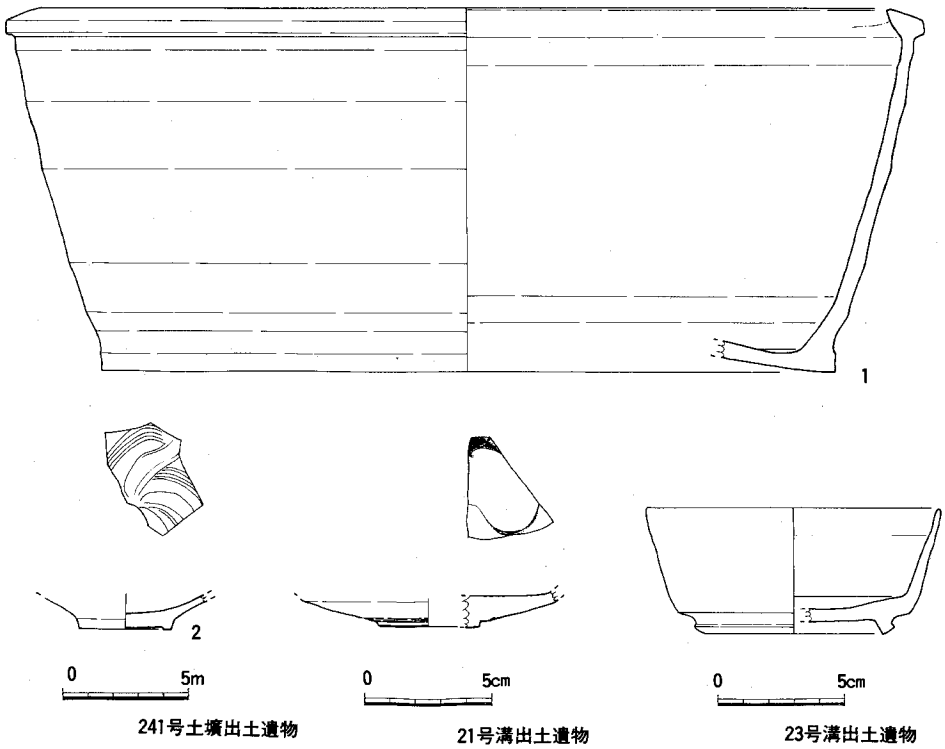


Fig. 73　241号土壙出土遺物と21号，23号溝出土遺物

5は同Ⅳ類、Ⅸ類である。6、7は陶器A群行平である。6の底部に「王」かと思われる墨書がある。8は同B群四耳壺、9、10はA群小口瓶で、肩の施釉部分に目跡が残る。11はB群の長瓶。12はA群の深い盤で口縁は外方に四角に突出する。内面のみ黄オリーブ色の半透明釉がかかる。13は須恵器杯である。土師皿類は計測表に示すとおりである。13世紀半ばの廃棄物処理土壙であろう。

240号土壙　F－Ⅱ－a区下部検出遺構である。232号土壙に切られ、全体形は不明であるが、深さ1.1mを計る。遺物は少なく、口径12.0cm、器高3.6cmの土師器糸切底杯と、同9.0cm、0.8cmの糸切底小皿があり、他に白磁、陶器、須恵器等が微量みられるにすぎない。13世紀代の廃棄物処理土壙。

241号土壙（Fig. 73）　F－Ⅱ－e区下部検出遺構で、214号土壙に切られ全体形不明。小土壙である。遺物は少ない。図示した遺物は、1が磁灯窯系の陶器A群の深い盤で、T字形の口縁をなす。内面に暗茶オリーブ色の釉がかかる。2は見込に線描き花文をもつ青白磁皿である。土師皿は出土していないが、切り合いから12～13世紀前半頃が考えられる。性格不明。

21号溝（Fig. 73）　F－Ⅲ－e区上部検出の幅0.2～0.5m程の小溝である。深さも0.2m前

後で浅い。雨落溝であろうか。主軸は真北に対してほぼ直角に向く。図示した青白磁皿のほか、出土遺物は多いが、いずれも小片で土師皿類も計測できない。13世紀代であろう。

22号溝　F－Ⅲ－e区上部検出の小溝で、21号溝と同大。21号溝の南に約0.7mの間隔をおいて平行する。両溝にはさまれた部分が路地であったと思われる。遺物は殆んど見られない。

23号溝（Fig. 73）　F－Ⅰ－b・c区上部検出の小溝で、前2者と同程度の規模である。22号溝の延長線上に伸びており、あるいは同一の溝かもしれない。遺物は少なく、図示した遺物は8世紀代の須恵器であるが、溝の時期は前2者と同じである。

ピット群　多くの柱穴と思われるピットが見られ、一部は溝に平行又は直交方向に並びそうであるが、組織的には把握しにくい。

2）F区遺構外出土の遺物（Fig. 74～81　PL. 37・38・48）

青磁　1～8は龍泉窯系青磁器。1、2は0類の碗の碗底である。灰色でやや粗い土に緑がかった釉がかかる。氷裂はない。高台、見込とも小さく、腰は直線的に斜行する。器外は太めの櫛による猫掻文を、器内には片切彫の草花文を描く。地は細かい櫛による刺突文でうめている。3はⅠ類の小碗。外底の半分ほどに釉が入りこんでいる。畳付に3個に復原できる耐火土の目跡がある。4～6はⅠ類に対応する皿である。4は釉がオリーブ色、透明で氷裂がある。5は青緑釉で少々なまこがかっている。6は青緑色透明で厚みのある釉である。7はⅡ類碗。釉は青灰色で厚く、釉中に細かい気泡が多く、透明性が少なくなっている。8はⅢ類の小杯。オリーブの暗い色合で不透明な、砧風の釉が厚くかかる。畳付のみ露胎。9は灰オリーブ色の厚めの釉がかかる青磁の蓋。釉層は厚めで氷裂がある。天井は露胎でうす茶色。11は龍泉窯系でも同安窯系でもない、その他の青磁のⅡ類に入る碗。口縁部は還元して胎は灰色、釉はオリーブ色に焼けているが、下部は酸化ぎみで胎釉とも薄茶色である。器外の平行線は櫛描である。12は同じくⅡ類の碗。胎釉とも非常に淡色で、クリーム色を呈する。釉には細かい氷裂がある。器内の文様は櫛でスピードをつけて描いた蓮花文、器外は粗めの片切彫で平行線文を施す。13～16は同安窯系青磁。13、14はオリーブ色透明釉。15、16は灰色である。いずれも透明性はあるが氷裂の少ない釉である。17～19は越州窯系の青磁。胎土は細かい。19は蛇の目高台の碗。底部全体に釉がかかり、高台縁際に6箇所、目跡が残る。釉色は薄い蜂蜜色で細かい氷裂がある。この遺跡で発見される中国陶器としては、最も古い時代のものである。

白磁　20～22は白磁小碗。20は白泥で器内壁を5もしくは6区に分割するが、この堆線の中央を細く掻き落としている。釉は不透明で厚く、ピンホールが多い。23、25、26は白磁碗0－Ⅱ類、27～30・33は同Ⅵ類、29は無文、30には文字のようなものが線書してあるが、釉にピンホールが多くはっきりしない。27・28は器内に櫛による曲線文を施すものである。33はⅥ－3類で

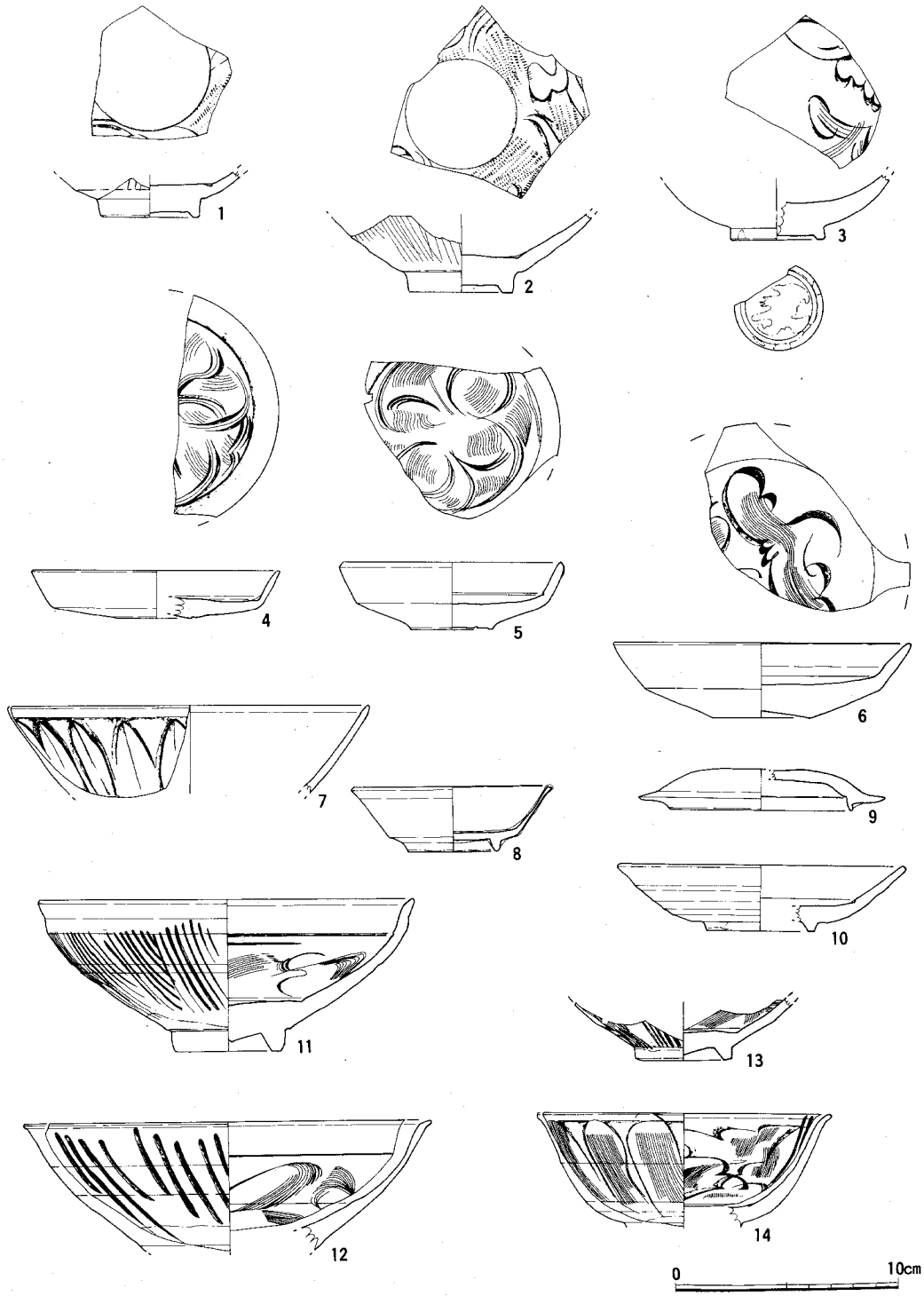


Fig.74　F区 遺構外出土遺物(1)

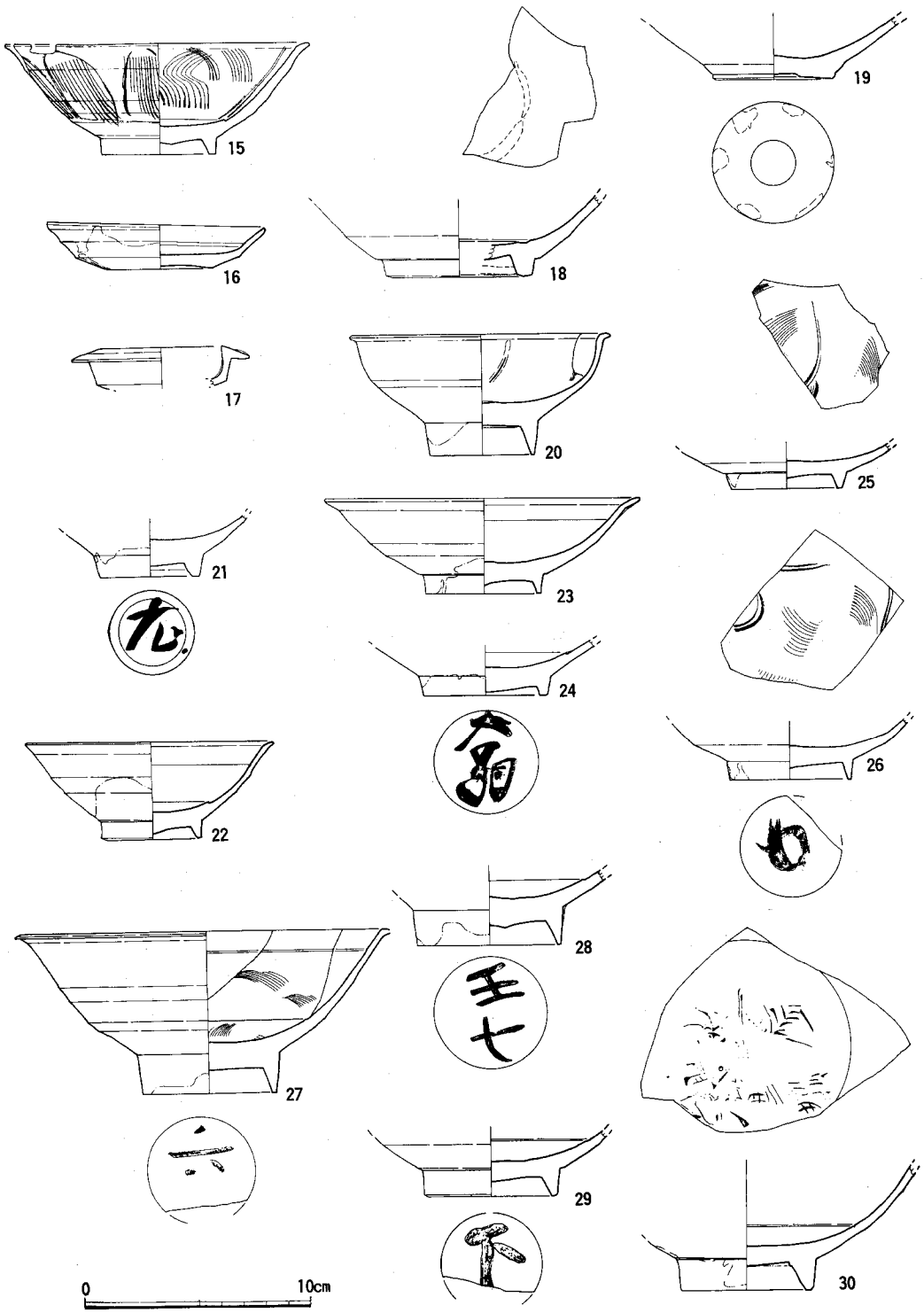


Fig.75　F区 遺構外出土遺物(2)

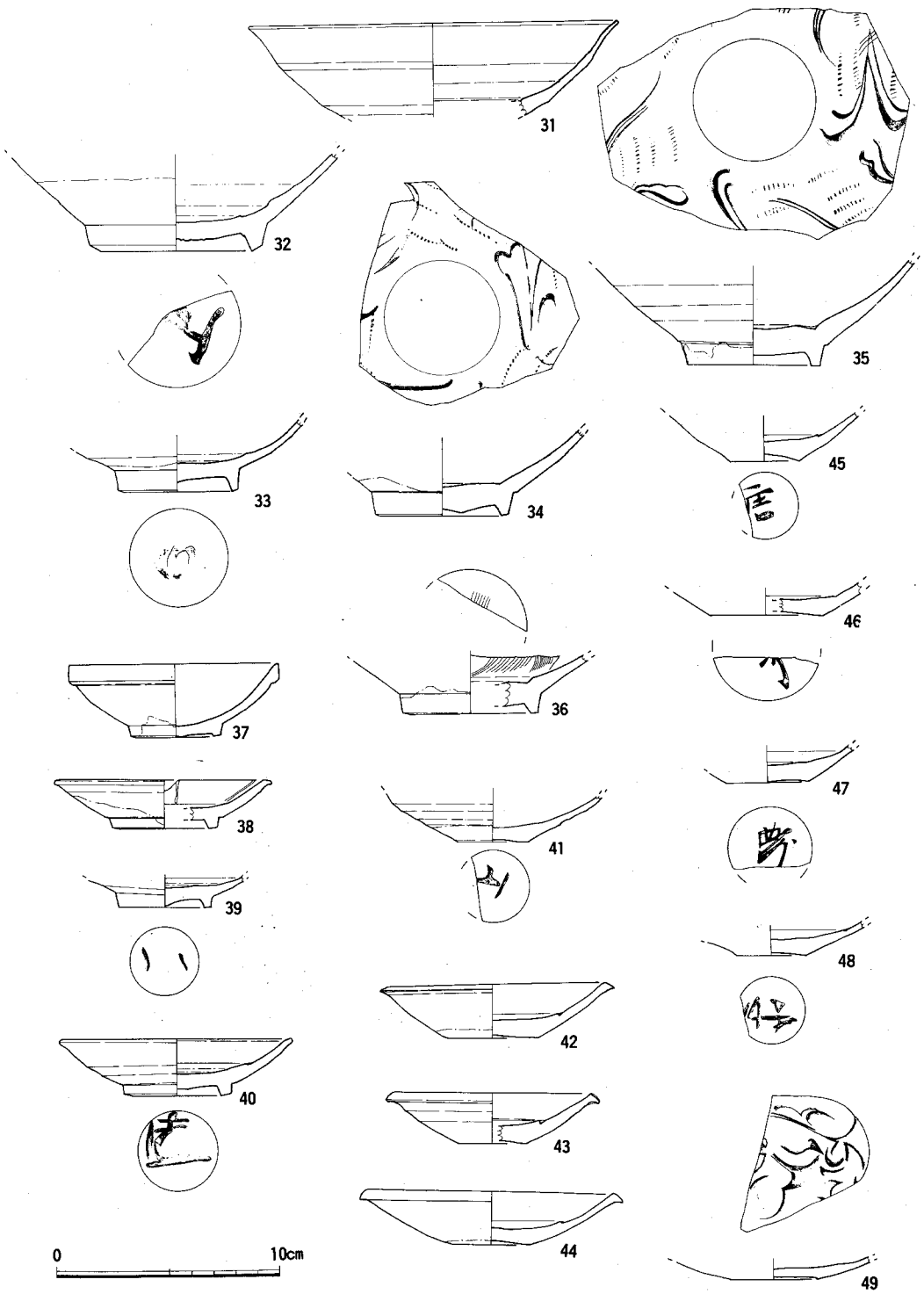


Fig.76　F区 遺構外出土遺物(3)

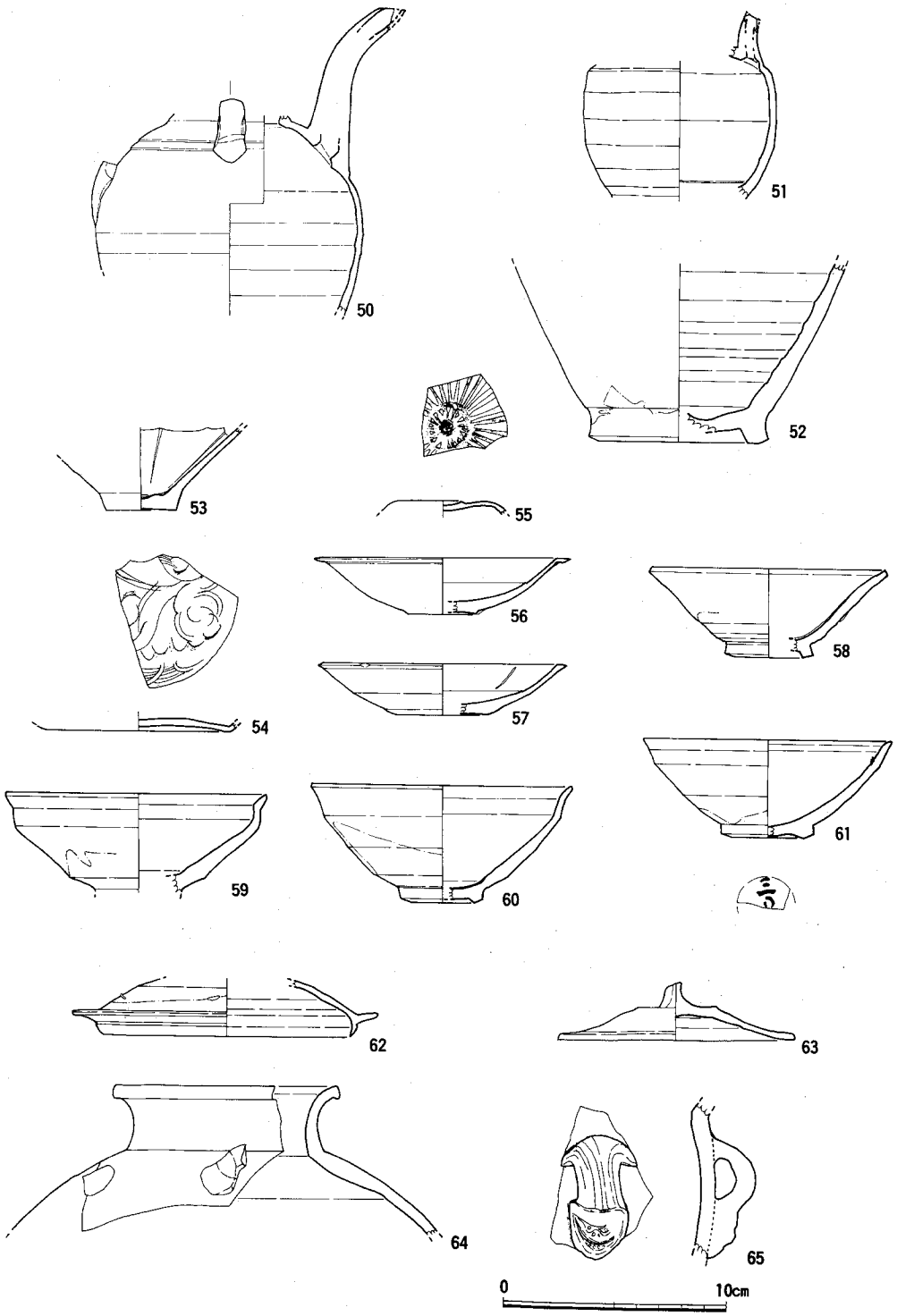


Fig.77　F区 遺構外出土遺物(4)

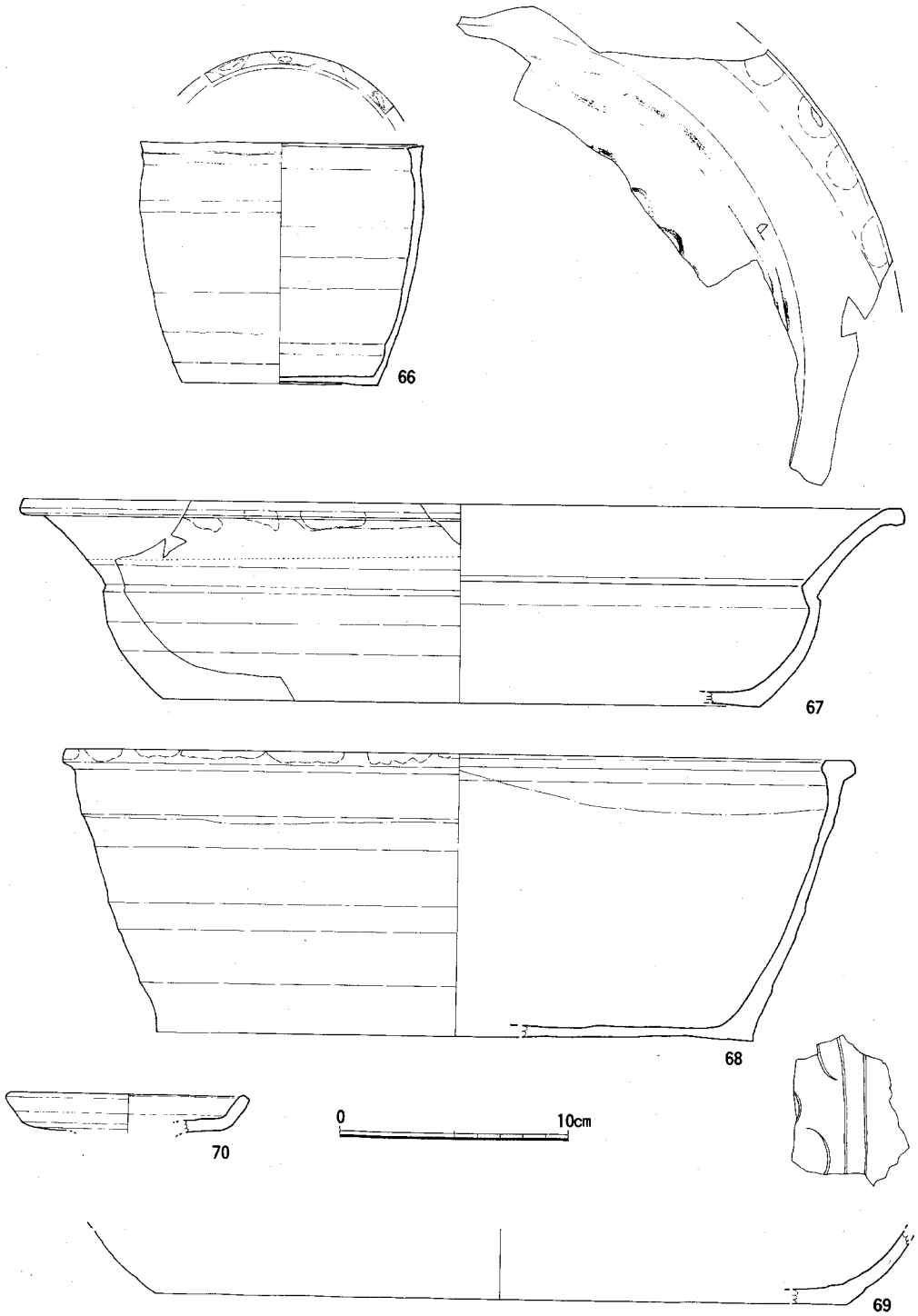


Fig.78　F区 遺構外出土遺物(5)

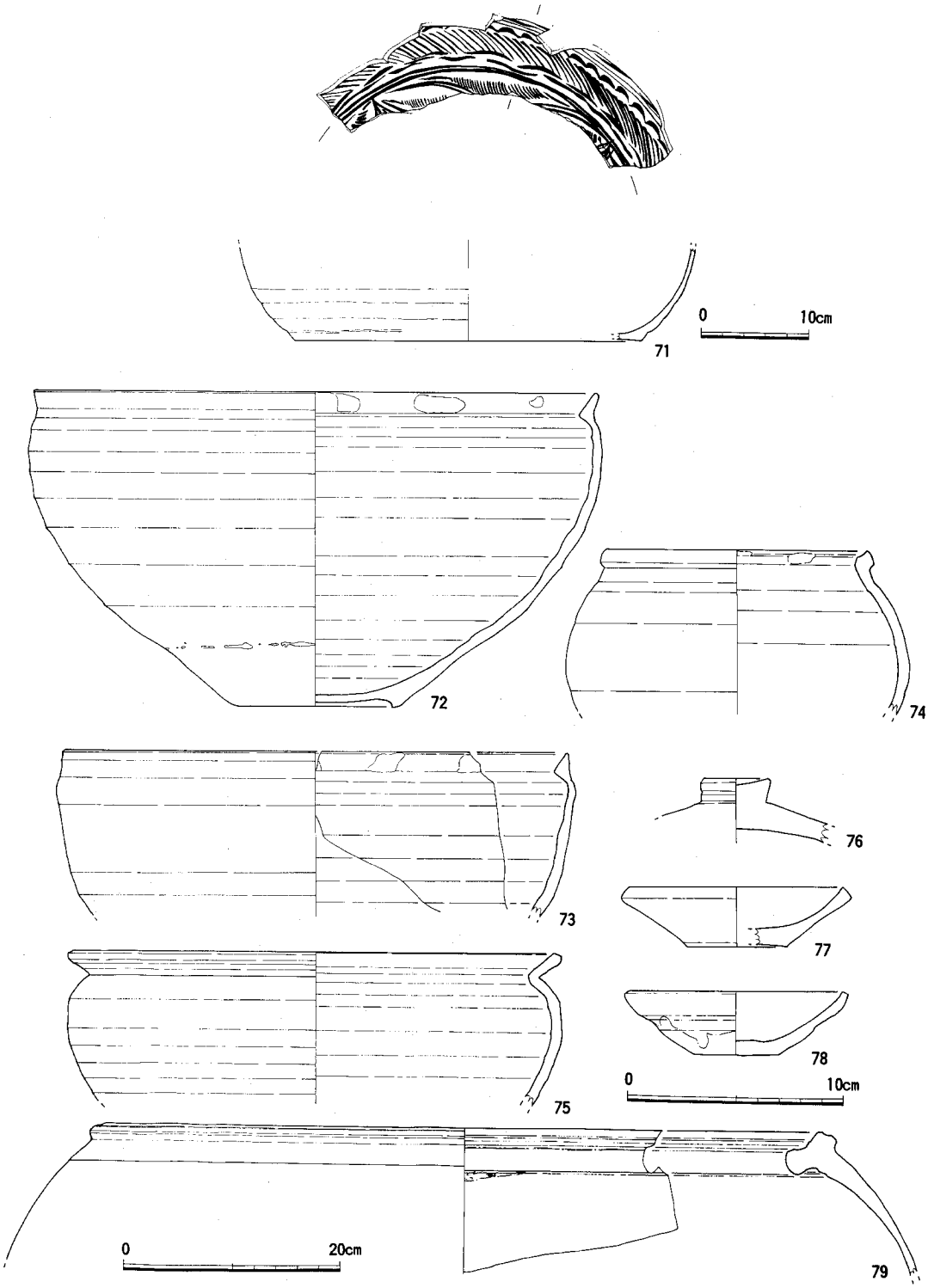


Fig.79　F区 遺構外出土遺物(6)

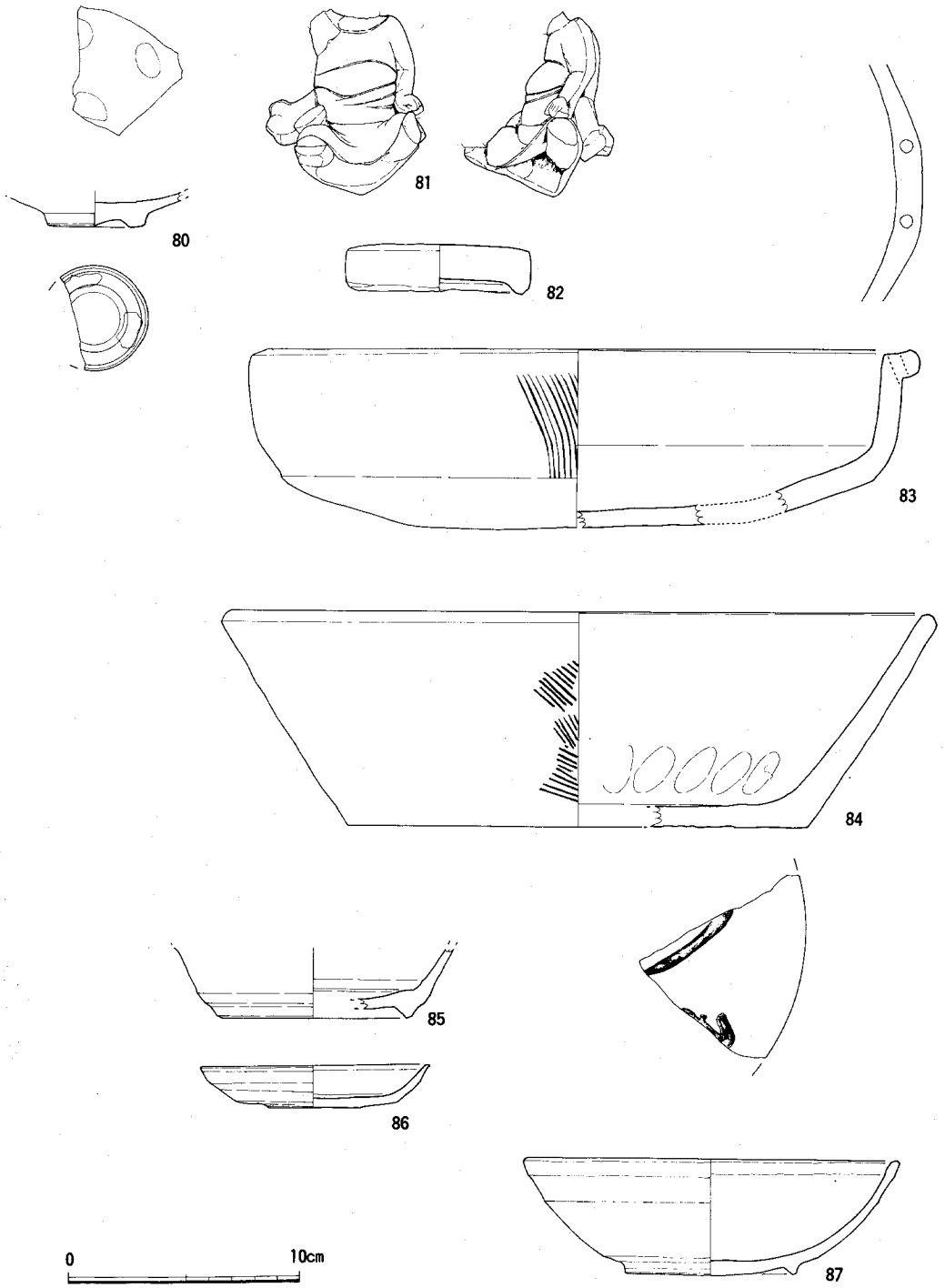


Fig.80　F区 遺構外出土遺物(7)

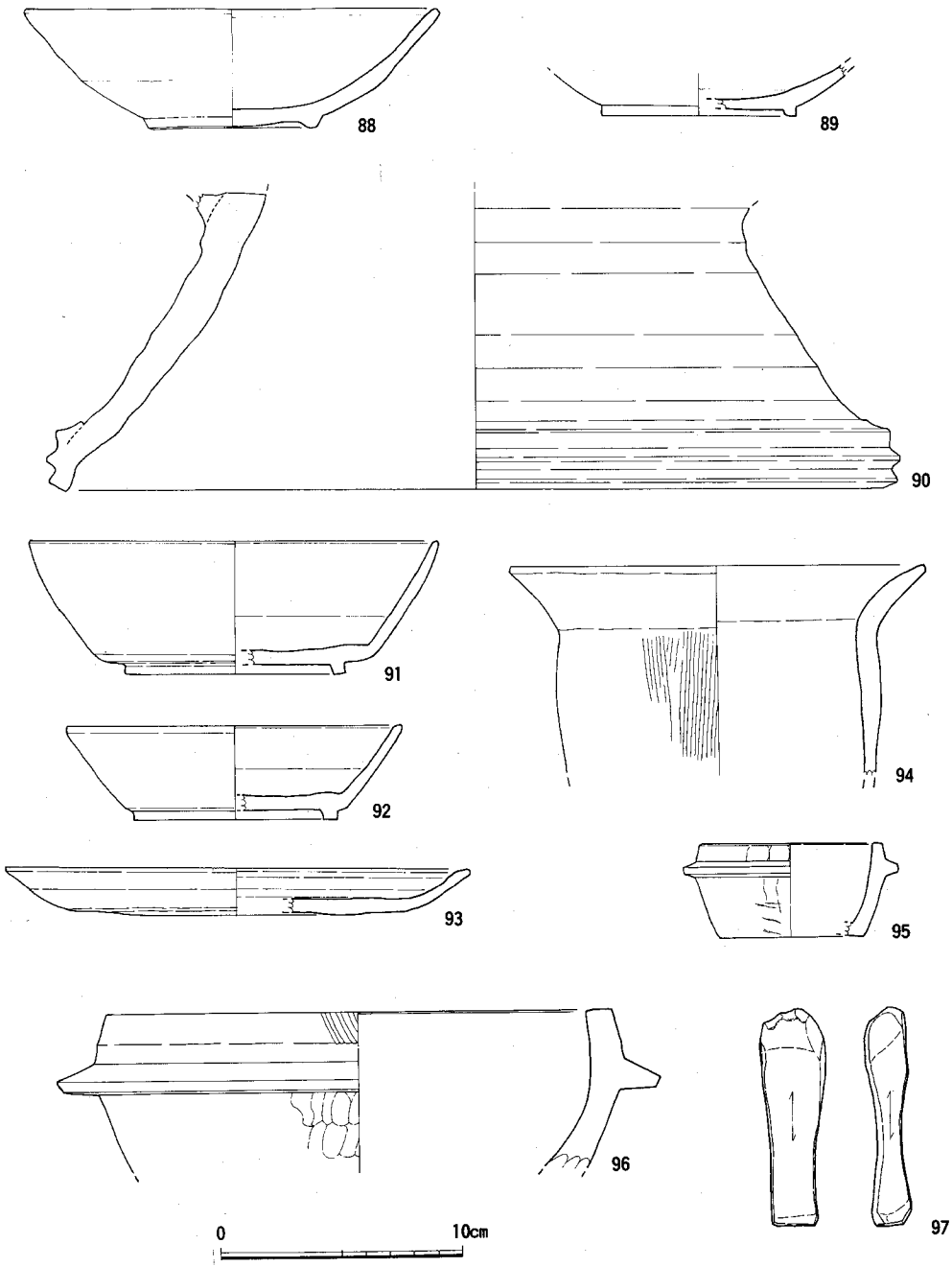


Fig.81　F区 遺構外出土遺物(8)

ある。32はⅨ類、31は口縁外反で通常のⅨ類とは異なるが、見込に輪型の釉切が見られる。34～36は胎が薄茶～灰白色、やや粗く、釉は淡オリーブから灰を帯びる透明釉で氷裂がある。酸化ぎみに焼かれていることの多い碗で、記号化されていないが、11世紀後半～12世紀前半のものと考えられている。37～49は白磁皿。37は高台付皿Ⅰ－2類、38～40は同じくⅡ類、41は平底皿Ⅲ類、42～46はⅣ類である。47、49は平底皿Ⅵ類である。50は広東省潮州窯を主な産地と考えられている白磁碗Ⅱ類と、胎釉ともによく似た水注。胎は灰白色でやや粗く、釉は黄白色である。先曲りの長い注口と、対称の位置に把手がつき　頭を巻きこんだ耳が両側につけられている。器内無釉。51は小形水注。注口の先は欠失している。胎は灰白色で堅く焼け、釉は青灰色透明で氷裂はない。52、白磁壺底部。四耳壺か。

青白磁　53は小ぶりの碗。小さな茶溜から6方向に白い堆線が入っている。外底はほとんどくりがなく平らである。54は劃花文の平底口ハゲ皿。55は菊花型合子蓋、56、57は皿で、口縁部に白堆線を入れて分割している。いづれも白い胎に淡青色を帯びた透明釉がかかっている。

黒釉磁　58は広東省の西村窯もしくは潮州窯の茶碗と思われる。胎は灰白色でよく磁化している。オリーブ色を含んだ褐色の飴釉をかけるが、口唇で釉を削り、その部分に透明釉をかけている。釉尻で一部玉になって釉が溜まっている。ほとんど同じような茶碗が、福建省光沢茅店窯や徳化窯でも生産されていたもようで、同定にはなお問題がありそうである。59～61は建盞タイプの茶碗。59の胎は破面暗灰色で細かい白砂が混じる。やや粗い。60、61は土がより細かく、灰色。露胎はいずれも薄茶である。釉は61は漆黒だが59、61は色が薄くやや透明で飴釉に近い。

陶器　62～71はA群に属する。62、66は灰ベージュの細かい胎土で黄がかった褐色の釉がかかる。胎、釉は、博多でも発見例の増えている福建省泉州郊外、磁灶窯の製品と考えられる小口瓶とよく似ており、ことに62は、蓋の上面の釉上に付着している目土の置き方まで、小口瓶と同じである。63もこれらに似ているが、土の中に砂や小石が混っており、陶汰されていない無釉の陶器である。通常行平と組み合わさる蓋と考えている。67、68、71も磁灶窯製品と考えられている黄釉盤。67、71には鉄絵が描かれている。69は緑釉盤で、砂混じりの灰ベージュ色の土で、光沢あるペンキのような緑釉がかかる。釉下に太い線彫の文様がある。64、65もこれらの盤によく似た土の壺で、泉州近辺の製品と考えられよう。65のような獣面のついた耳は、東南アジアに出土例の多い壺に多く見られ、通常広東地方の壺といわれている。暗オリーブの軟かい感じの釉がかかっている。70は緑釉陶器で、平底の皿か、あるいは盤口瓶の口かと思われる。ベージュ色の粉っぽい土に若草色の釉がかかるが、表面は銀化しており鉛釉と思われる。72～78はB群の陶器。73、74は灰色の胎に青磁系の釉がかかるが、72、75、76は胎は茶色、釉も灰茶から茶褐色を呈している。77、78は茶色、暗灰色と、やや濃い色の土である。土や釉の色調

の変化は、焼成の雰囲気の変化によるもので、必ずしも粘土の違いを示すものではなかろう。79はＣ群の陶器で、Ｙ字口縁の大形容器。赤茶色の土に白い砂が大量に混じっている。外面は斜線の、内面は青海波のたたきが残る。釉は泥をかぶったようなオリーブ色を呈しているが、釉層の薄いところでは褐色を呈している。

李朝白磁　80、胎土はベージュ色でよく磁化している。同色の半透明、氷裂のない釉が、外底を含め全体にかけられている。一部になまこが浮んでいる。見込と畳付に３個づつ、大きめの砂目跡がある。15世紀から16世紀前半の白磁であろう。

国産遺物　81は中空の粘土製塑像である。握りしめた左の拳を膝の上に置き、右手は上に突きあげているものと思われる。頭部は欠落しているが、不動明王であろう。時期不明。82は焼塩壺蓋である。外面は丁寧なナデ調整、内面上部には細かな布目圧痕が残る。18世紀代のものである。83は土師質の平鍋である。外面は体部、底部ともハケ目調整で、内面ナデ調整。部分的に鍔状突起があり釣手着装用に２箇所の穿孔がある。江戸期の所産であろう。84は土師質捏鉢である。外面体部と底はハケ目調整。内面体部下半には指頭圧痕が残る。江戸期の所産であろう。底に墨書が残るが不明。85は高台付須恵器杯であるが、酸化炎焼成で赤褐色を呈す。高台は、断面三角形に近い。86は糸切底を残す瓦質の小皿であるが焼成は須恵器に近い。内外面に粗いヘラ研磨がある。87、88は瓦器碗である。87は断面三角の高台を貼りつけ、高台内には板状圧痕が残る。内面と外面上半は黒くいぶされている。88は断面逆台形の高台を貼りつけ、高台畳付に板状圧痕が残る。外体部上半と内面上位が黒色にいぶされている。内外面を粗くヘラ研磨する。89は緑釉陶器碗である。肌色の柔らかい胎でうすい不透明釉がかかる。90は古窯系の須恵質甕の頸部である。胎部との継目が明瞭である。口縁に３本の突帯をめぐらす。91、92は高台付須恵器杯である。断面四角形の高台を貼りつける。全面回転ナデ調整である。８世紀代のものである。93は須恵器皿で回転ナデ調整を行う。94は土師器甕である。口縁部は外に開き、外面横ナデ、内面横ハケ目調整を行い、体部は外面が縦方向のハケ目調整、内面は斜めに粗いヘラ削りを行っている。８世紀代である。95は小形の滑石製石鍋で鍔がつくものである。細かな削りで表面は滑らかになっている。96は通常のサイズの滑石製石鍋で鍔がついている。ノミ状加工具の削り痕が明瞭に残される。外面には煤が付着している。97は砥石である。粘板岩製で４面を砥面としている。

5．G区の調査

地下鉄祇園町工区における埋蔵文化財調査の最初の調査区である。調査面積は20ｍ×18ｍの360㎡で、調査は昭和54年５月13日より６月31日まで行った。調査区は便宜上、二列の中間杭列によって三分割し、大博通り側よりⅠ・Ⅱ・Ⅲ区と呼び、更に４ｍごとに細分し、西北側より、ａ～ｅの符号をつけた。遺構番号は溝について30番、土壙等については300番台とした。以下Ｇ区で検出された遺構および遺構出土の遺物について述べて行く。

1）　遺構と遺構出土の遺物

301号土壙　(Fig. 82　PL. 38)　Ｇ－Ⅲ－ｅ区上部検出遺構である。近世井戸とその掘方で、多量の近世陶磁類に混じり、中世の遺物が見られる。図示した遺物は、１が龍泉窯系青磁の大型碗で内面体部に片切彫りの花文が施され、白濁したオリーブ色の釉がかかる。２は逆凹形の断面形をなす焼塩壺の蓋であり、内面に細かな布目圧痕が残されている。17世紀代のものと思われる。

302号土壙　(Fig. 82)　Ｇ－Ⅱ－ｄ区上部検出遺構である。近代の瓦組井戸の掘方で、305号土壙を切っている。遺物は各時期混在するが、量は少ない。図示した遺物は分厚い胎の青磁で器形は不明。貫入のある透明なオリーブ色の釉がかかる。

303号土壙　(Fig. 82)　Ｇ－Ⅱ－ｂ区上部検出遺構である。近代の地下室状の遺構で廃棄物が多量に投棄されている。378号土壙を切っており、それに由来すると思われる中世遺物も一部混在する。図示した遺物は「崇寧通寶」の大型銭である。

304号土壙　(Fig. 82)　Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。近現代の石組み地下室によって切られている。地下室築造の際の掘方かもしれない。遺物は近現代の陶磁がほとんどで、一部中世陶磁が混在する。図示した遺物は、１が近代高取系の陶器鉢で、２は李朝の皿と思われる底部破片である。見込と高台畳付に４箇所の砂目跡がついている。外面底の削り出しは粗雑で、高台幅に差が見られる。全体に白っぽい灰色不透明釉がむらにかけられている。

305号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｅ区上部検出遺構である。306号土壙（井戸本体）の掘方である。少量の近世陶磁、中世陶磁が混在して出土している。301号土壙に切られている。

306号土壙　(Fig. 82　PL. 38)　Ｇ－Ⅲ－ｅ区上部検出遺構で、305号土壙（近世井戸掘方）の本体部である。径0.9ｍを計る。内部構造は木桶組と考えられるが、明確な痕跡はない。中近世遺物が混在する。図示した遺物は、１が青磁碗で、龍泉風の分厚い高台の作りであるが、外面体部の櫛描文と、体部下半までの施釉など同安窯系青磁に共通する点も多い。２、３は磁灶窯系の胎をもつ陶器で、四耳壺および蓋である。２は内面体部上半と外面に茶褐釉がかかる。

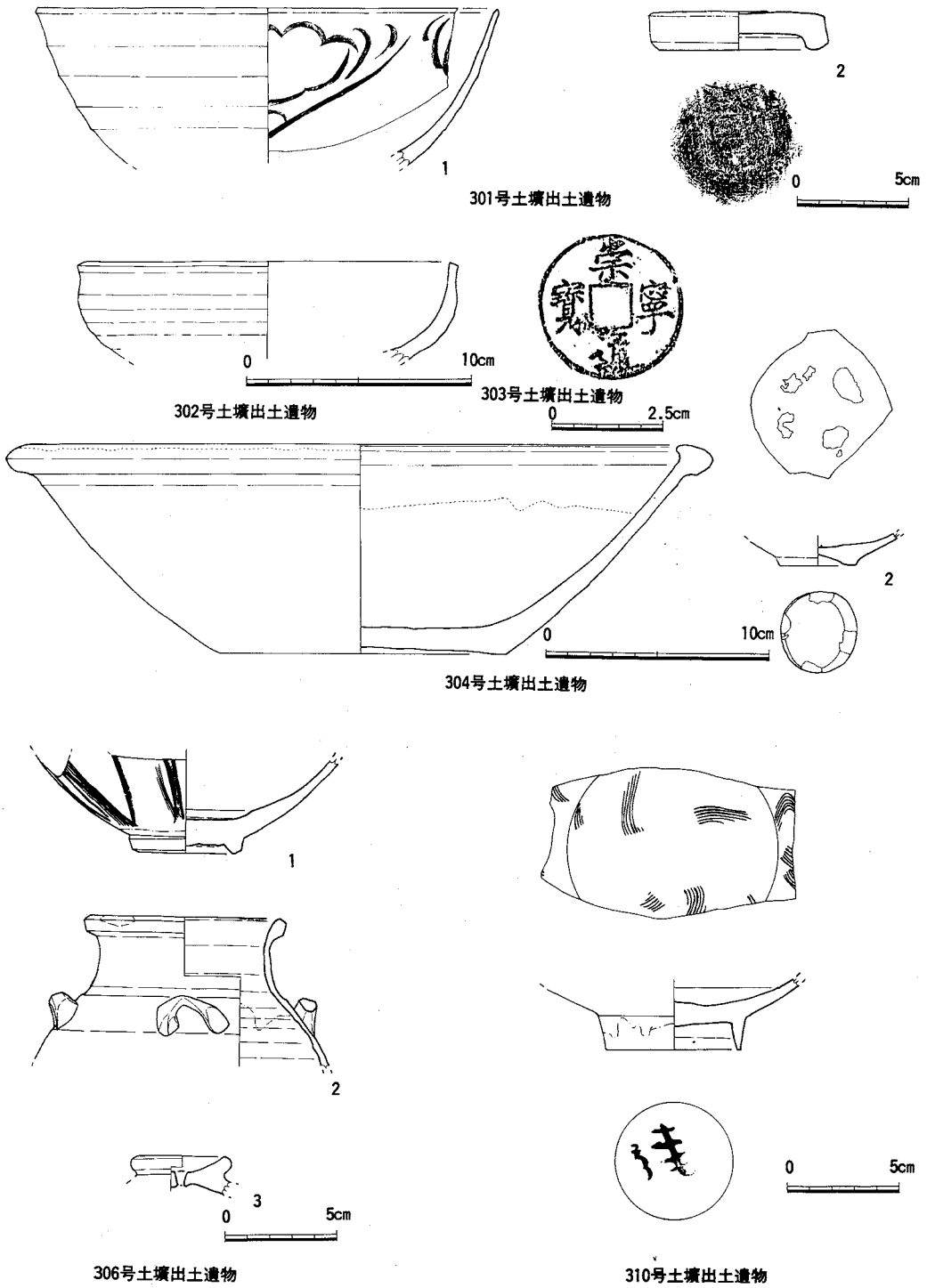


Fig.82　301号,302号,303号,304号,306号,310号土壙出土遺物

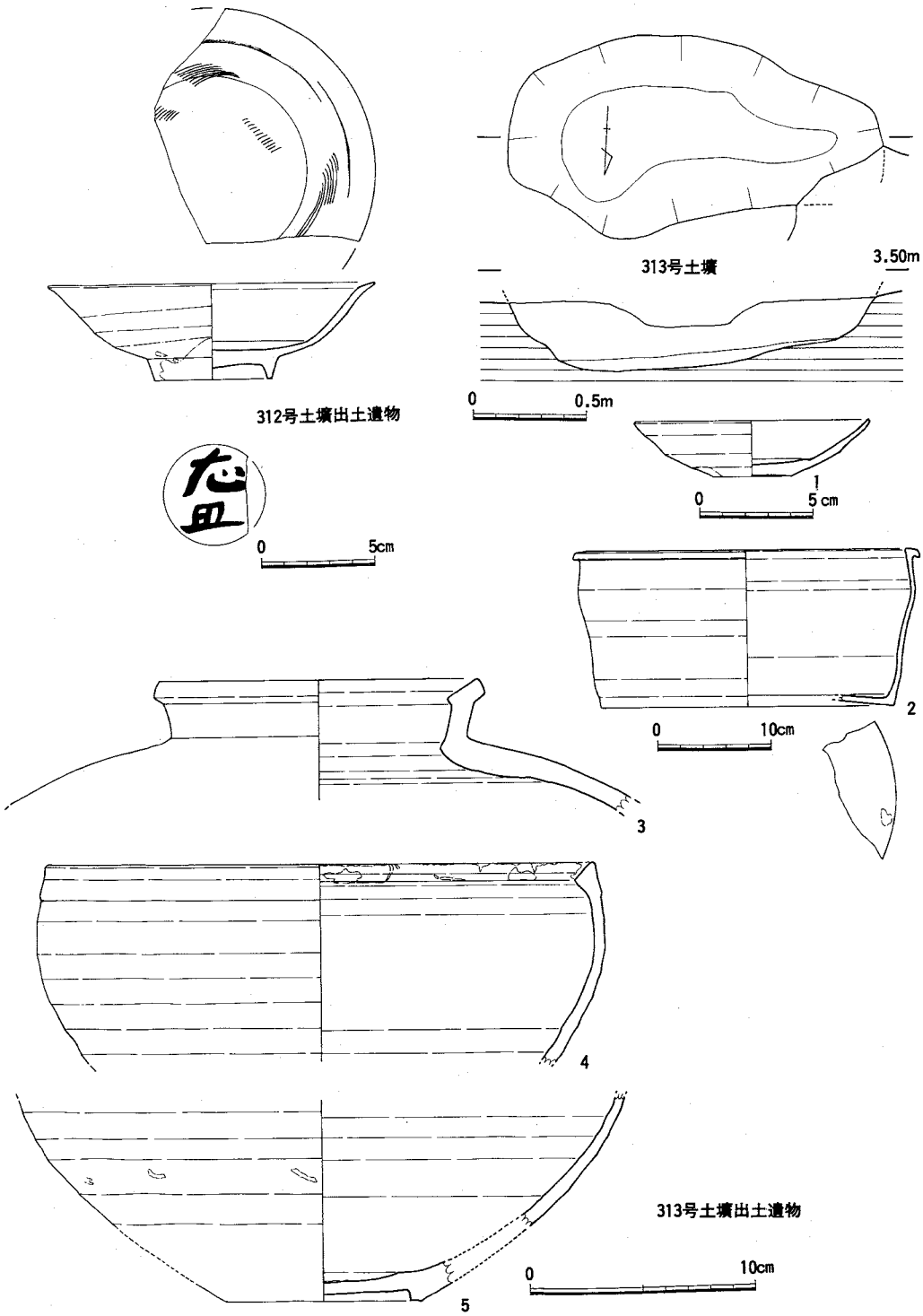


Fig.83　313号土壙と312号,313号土壙出土遺物

３は乳濁した黄緑釉がかかり、中央部に焼成前の穿孔が見られる。穿孔部および内面は無釉である。

307号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｂ区上部検出の現代攪乱土壙である。

308号土壙　Ｇ－Ⅲ－ａ区上部検出遺構である。現代の井戸廃絶後、ゴミ穴にほられたもので、生活廃棄物が多量に投棄されていた。

309号土壙　Ｇ－Ⅱ－ｃ・ｄ区上部検出遺構である。近世瓦組井戸の本体部にあたる。井戸廃絶後ゴミ処理に使用されている。

310号土壙　(Fig. 82　PL. 48) Ｇ－Ⅱ－ｃ区上部検出遺構である。309号瓦組井戸の掘方であるが、最下面に方形板組井戸の痕跡が見られたが、明確ではなかった。小破片で図示しえないが中世陶磁破片が多く混在するのも古い井戸掘方を全面的に再度掘り起こしたためと思われる。図示した遺物は白磁碗で、外底高台内露胎部に墨書が見られるが、判読できない。

311号土壙　(PL. 17) Ｇ－Ⅱ－ｅ区上部検出遺構である。362号土壙の上面に営まれている。長軸1.7ｍ幅0.95ｍの長楕円形をなす浅い皿状の窪みをなし、明確な掘方ではないが、上面に掌から拳大の礫が散漫に集められており、瓦、青磁、土師皿等の小破片が少量介在する。中世後半の遺構と思われるが、性格は不明である。

312号土壙　(Fig. 83　PL. 48) Ｆ－Ⅰ－ａ・ｂ区上部検出遺構である。近世の廃棄物処理用土壙である。近世陶磁に混じって石製碾臼破片３点や、中世陶磁破片少量がある。図示した資料は、見込みに櫛描文をもつ高台付白磁皿で、高台内露胎部に墨書が見られるが判読できない。

313号土壙　(Fig. 83　PL. 17・39) Ｇ－Ⅰ－ｃ区上部検出遺構である。長さ1.65ｍ、幅0.9ｍ、現在深さ0.35ｍの長方形に近い掘方をもち主軸はほぼ東西を向く。壁と床面に酸化鉄層が見られ、黄色砂混り黒褐色土の覆土上に炭混りの灰が多量に見られ、その中に遺物は集中する。13世紀代の火葬墓の可能性がある。図示した遺物は、１が白磁平底皿、２が磁灶窯系の深い盤、３が磁灶窯に近い胎をもつ四耳大壺。４、５はそれぞれ碁笥底をなすＢ群の陶器鉢である。

314号土壙　Ｇ－Ⅰ－ｃ区上部検出遺構である。313号土壙に切られる。径0.5ｍ程の不整円形をなす深さ0.25ｍの浅い土壙である。出土遺物は瓦質土器、土師皿の小破片が各１点のみである。

315号土壙　(Fig. 84　PL. 39・48) Ｇ－Ⅰ－ａ区上部検出遺構である。近現代のポンプ式井戸の掘方である。下層にあった12世紀半ば頃の遺構を掘り起こしたものと思われ、ヘラ切及び糸切の土師皿類がまとまって出土している。図示した遺物は、１が高台内露胎部に「林□」の墨書をもつ白磁碗、２が内面に粗い布目圧痕をもつ18世紀後半代の焼塩壺である。３、４は

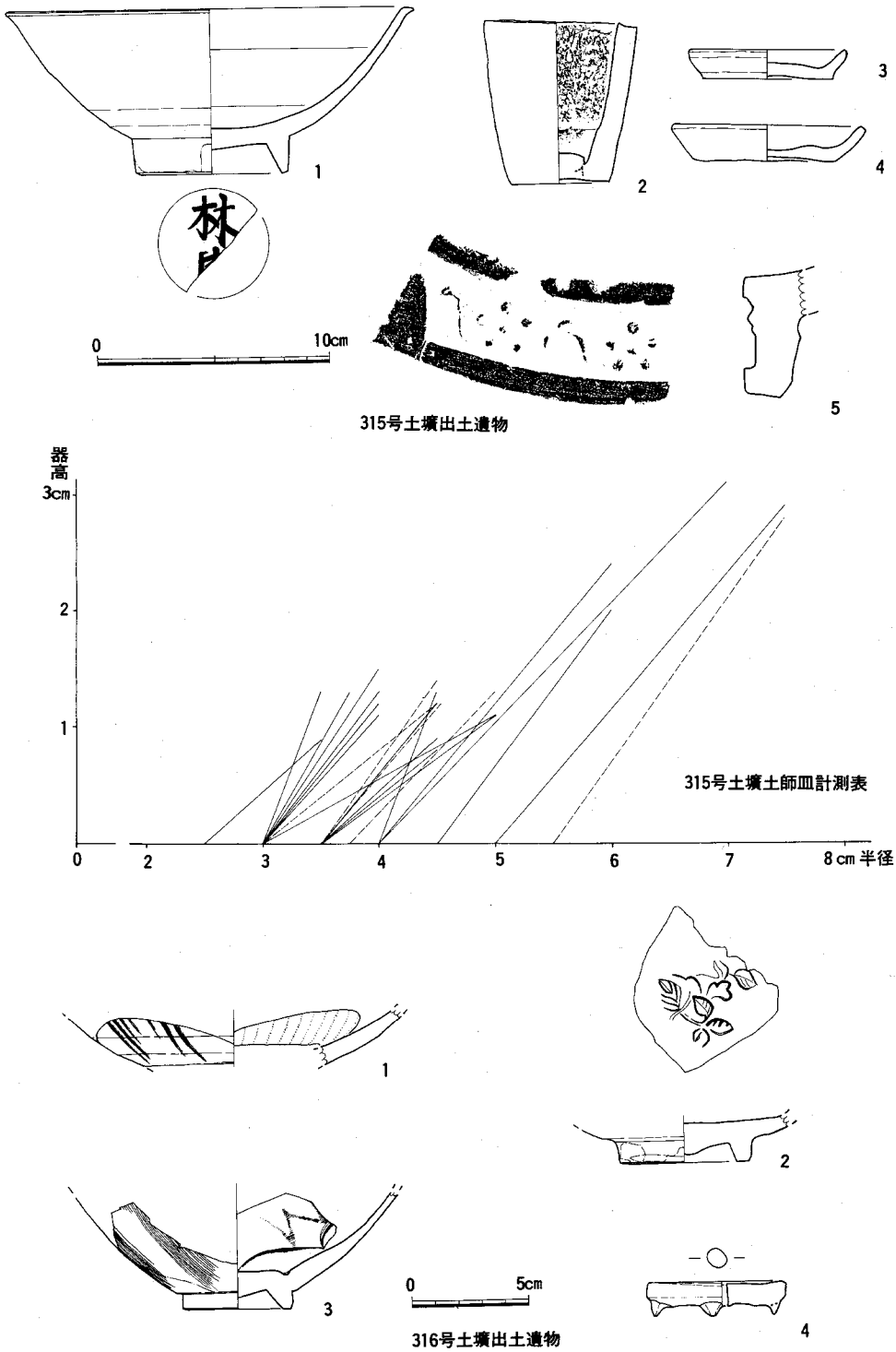


Fig.84　315号,316号土壙出土遺物

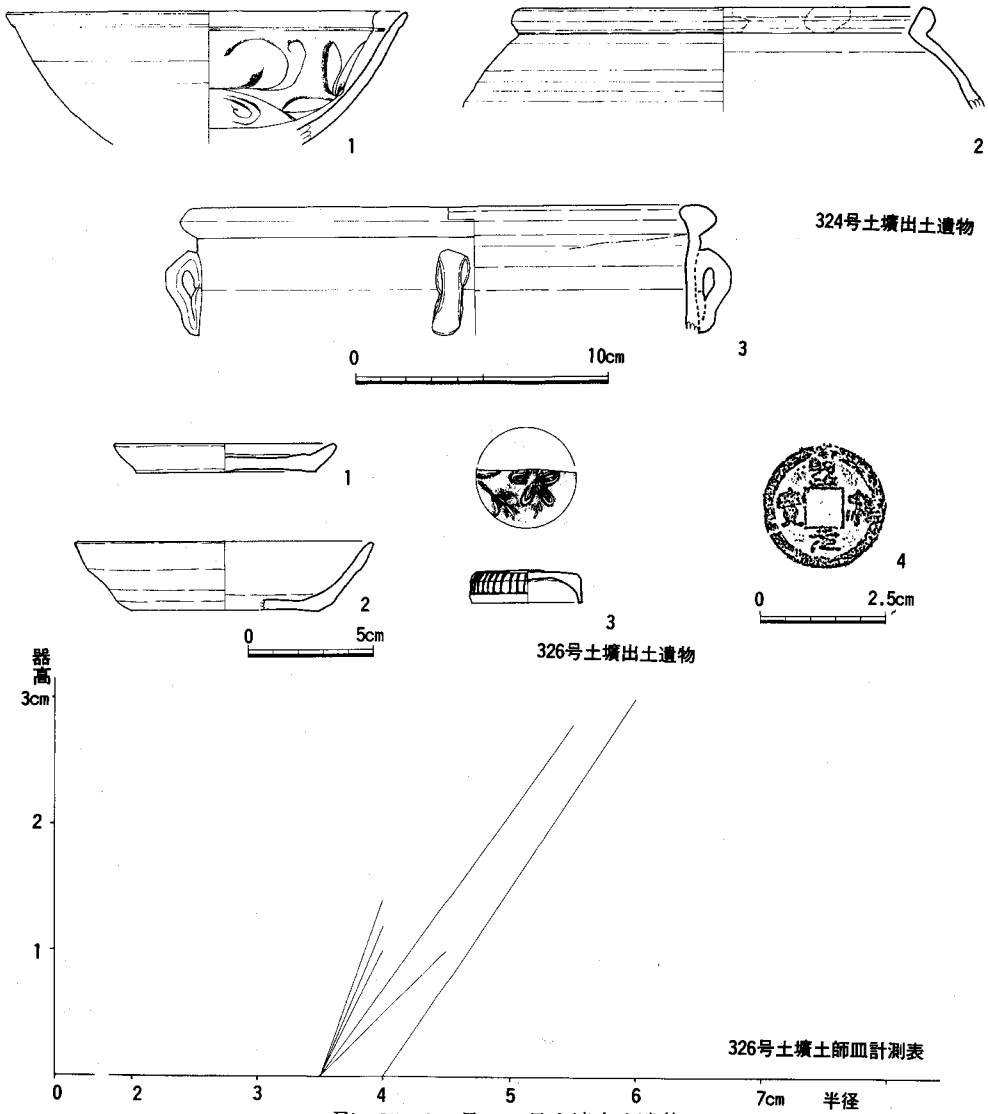


Fig.85　324号,326号土壙出土遺物

それぞれ糸切底の土師皿、杯で、５は近世軒平瓦である。

316号土壙　(Fig. 84　PL. 18・39) Ｇ－Ⅲ－ｃ・ｄ区上部検出遺構である。多量の近世陶磁に混じって中世陶磁がある。図示した遺物は、１が内外面に櫛描文をもつ古いタイプの龍泉窯系青磁碗で、２が見込に印花文をもつ龍泉窯系青磁碗。３が外面に細かな櫛描文、内面に雷光文をもつ同安窯系青磁碗である。４は４つの支柱を貼りつけたドーナツ型の焼台で磁質である。胎土は良質の福建白磁に近く、中国製品か。

317号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｄ区上部検出遺構である。1.1ｍ×0.9ｍの長円形で、0.2ｍの浅い掘方

をもつが、中に礫１個が置かれるのみで遺物はなく、時期、性格ともに不明である。

318号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｄ区上部検出遺構である。0.95ｍ×0.6ｍの長方形をなし、深さ0.5ｍの掘方に灰が充填されているが遺物は全く見られず時期不明。

319号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。径0.5ｍ程の不整円形をなし、深さ0.4ｍの掘方で、下層に灰が見られた。遺物は少量で、土師杯小破片５点、青白磁合子身、白磁碗破片各１点が出土したにすぎない。13世紀代と思われるが性格は不明である。

320号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。0.8ｍ×0.6ｍの長円形をなし、深さ0.1ｍの浅い掘方である。灰、炭等はなく、黒褐土中より土師皿、白磁碗小破片が少量出土しているにすぎない。13世紀代と思われるが性格不明。

321号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。一部を319号土壙に切られる。現存長0.9ｍ、幅0.55ｍの不整長円形をなし、深さ0.4ｍを計る皿状の掘方をもつ。床面に灰層が見られ、上を茶褐色細砂が覆う。遺物は微量であるが切り合いから13世紀頃かと思われる。性格不明。

322号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。遺物は全く見られず、壁面に酸化鉄層が見られることから木根の可能性が強い。

323号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。304号土壙に接する不定形の落ち込みで、少量の遺物が出土したにすぎない。近世の遺物も少量ながら見られることから、304号土壙の一部と考えられる。

324号土壙　(Fig. 85) Ｇ－Ⅲ－ｃ区上部検出遺構である。2.7ｍ×2.4ｍの長方形をなし1.05ｍの深い掘方である。上面で別に332号土壙が検出されており、それよりも古いものである。図示した遺物は１が龍泉窯青磁碗、２がＢ群陶器の四耳壺と思われる口縁部である。３は赤褐色の胎で茶褐色の釉を施した四耳付きのＣ群鉢である。13世紀代の井戸であろうか。

325号土壙　Ｇ－Ⅲ－ａ区上部検出遺構である。326号土壙（近世井戸掘方）の本体部である。井戸側の明らかな痕跡はないが、おそらく桶組みと思われる。遺物は見られない。

326号土壙　(Fig. 85) Ｇ－Ⅲ－ａ区上部検出遺構である。325号土壙（井戸本体）の掘方である。側壁柱に切られ全体は不明であるが、直径3.2ｍのほぼ円形をなすと思われる。近世陶磁に多くの中世遺物が混在する。図示した遺物は１、２が糸切底土師小皿および杯で、口径はそれぞれ９㎝、12㎝である。３は青白磁合子蓋。型造りで側面に菊弁、上面に草花文を陽刻している。４は「至和元寶」である。

327号土壙　(Fig. 86　PL. 39・48・49) Ｇ－Ⅲ－ｂ区上部検出遺構である。１辺2.2ｍ程の隅丸方形で深さ1.3ｍの掘方である。12～14世紀代の遺物が混在しており廃棄物処理用土壙であろう。土師皿類は微細な破片のみである。図示した遺物は、１が白磁小碗で高台内露胎部に略字で「恵□」の墨書が認められる。これと同様の墨書が312号土壙などに数列認められる。

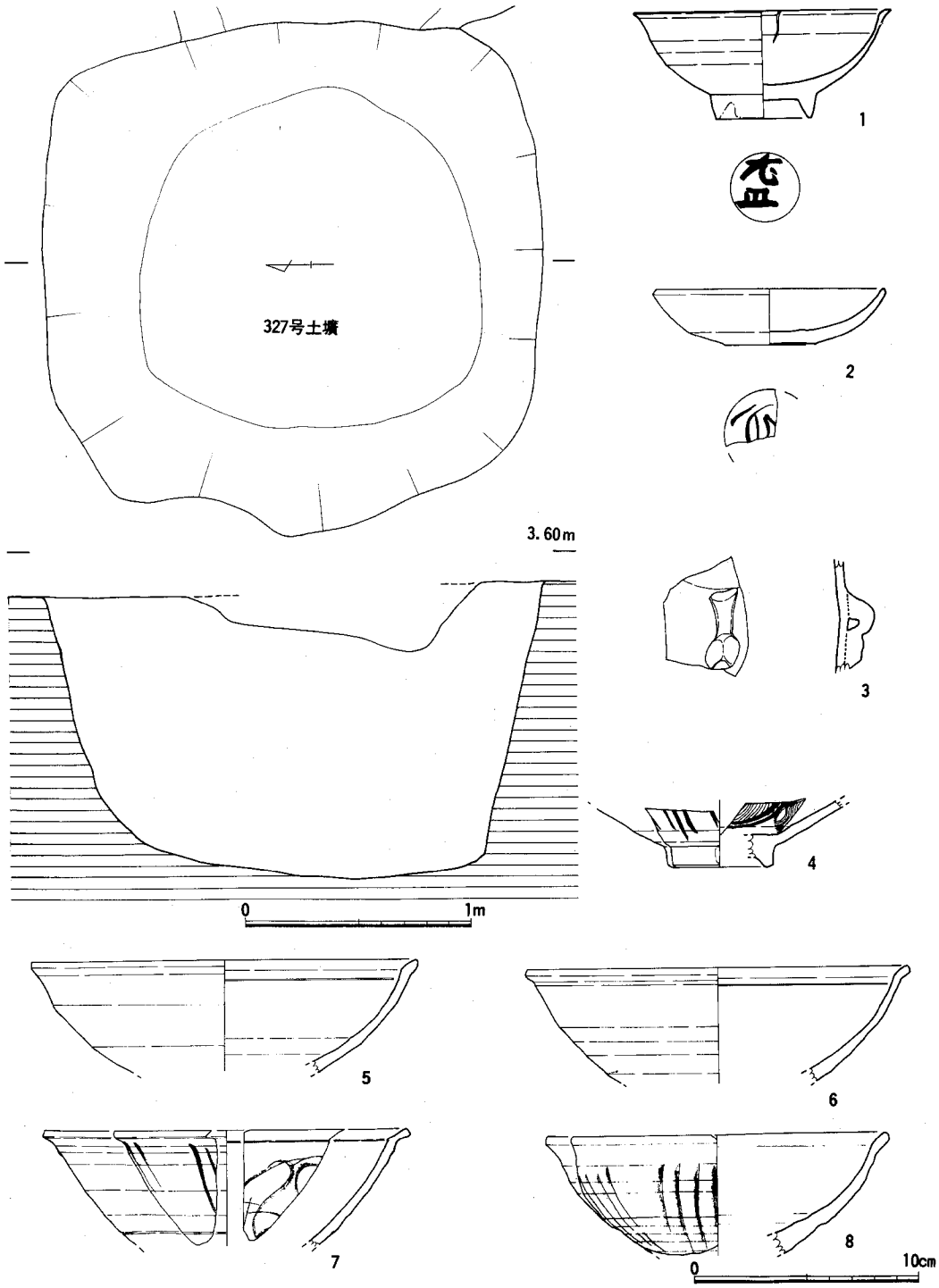


Fig.86　327号土壙と327号土壙出土遺物

2は白磁平底皿で底部露胎部に墨書が認められるが判読できない。3は磁灶窯系の緑釉耳付壺の肩部破片で、外面にやや白濁した緑釉が施されている。低火度焼成のため胎は赤褐色を呈す。4～8はいずれも同安窯系青磁碗である。4は高台畳付脇まで施釉され龍泉窯碗に近い。5、6は外面無文で、内面口縁直下に沈圏線がめぐり、口縁は外に開くものである。7は片切彫りで外面体部に放射状の沈線を、内面体部に花文を施し、口縁部は外に屈折する。9は外面のみに片切彫の放射状刻線を施し、口縁は外方に開く。

328号土壙　G－Ⅲ－b区上部検出遺構である。現代石組地下室とその掘方によってきられており全体形は不明であるが、径2.6mのほぼ円形をなすものと思われ、深さ1.5mを計る。遺物はやや多いが、小破片で図示しえない。13世紀代の廃棄物処理用土壙であろうか。

329号土壙　G－Ⅲ－c区上部検出遺構である。現代地下室掘方。223、228号土壙に切られる。浅い黒褐色土の落込みで掘方は明確でない。遺物は微量で時期、性格ともに不明である。

330号土壙　G－Ⅲ－c区上部検出遺構である。中間杭の攪乱によってほとんど掘方の形態は不明で、遺物も見られない。

331号土壙　欠番

332号土壙　(Fig. 87　PL. 18・49) G－Ⅲ－c区上部検出遺構である。324号土壙（井戸）廃棄後にその上面に掘り込まれる。1.35m×1.0mの不整長円形をなし、深さ0.4mで二段掘りの浅い皿状の断面形をなす。内面には灰が充填されていた。図示した遺物は、1が見込みに輪状に露胎部を作る白磁碗Ⅸ類で、高台内に「四郎」と読める墨書が残されている。2～4は白磁平底皿で、2は見込に片切彫の蓮華文を施すⅥ類で、碁笥底状にわずかにえぐった外底露胎部に墨書を残すが判読できない。3、4はⅢ類である。5は白磁水注または四耳壺である。6は天目碗で、漆黒の釉が外面体部下半までかけられている。7～9は土師皿および杯でいずれも糸切底である。13世紀後半の遺構で火葬墓の可能性もある。

333号土壙　G－Ⅲ－c区上部検出遺構である。近世土壙である316号土壙に大半を切られ全体形は不明であるが、0.3m程の深さをもつ浅い掘方で、灰が充填されている。図示していないが、口径9cm、器高1.2～1.5cmのヘラ切底の小皿3点と口径15cm、器高2.9cmの糸切底杯1点が完形で出土している。12世紀中頃の火葬墓であろうか。

334号土壙　(Fig. 88　PL. 19) G－Ⅱ－e区上部検出遺構である。一部H区境に接し全体形は明確でないが、長軸2m強、幅0.9m程の長円形をなし、深さ0.7m程の掘方をもち主軸はほぼ東西を向く。内部は灰が充填され、焼礫と陶磁破片が散在する。土師皿類はいずれも小破片であるが糸切底でほぼ13世紀代におさまるものであろう。図示した遺物は内面に櫛描文をもつ白磁で、高台内露胎部に墨書をもつが、判読できない。火葬墓であろうか。

335号土壙　(Fig. 88　PL. 19) G－Ⅱ－d・e区上部検出遺構である。長軸2.8m、幅1.1

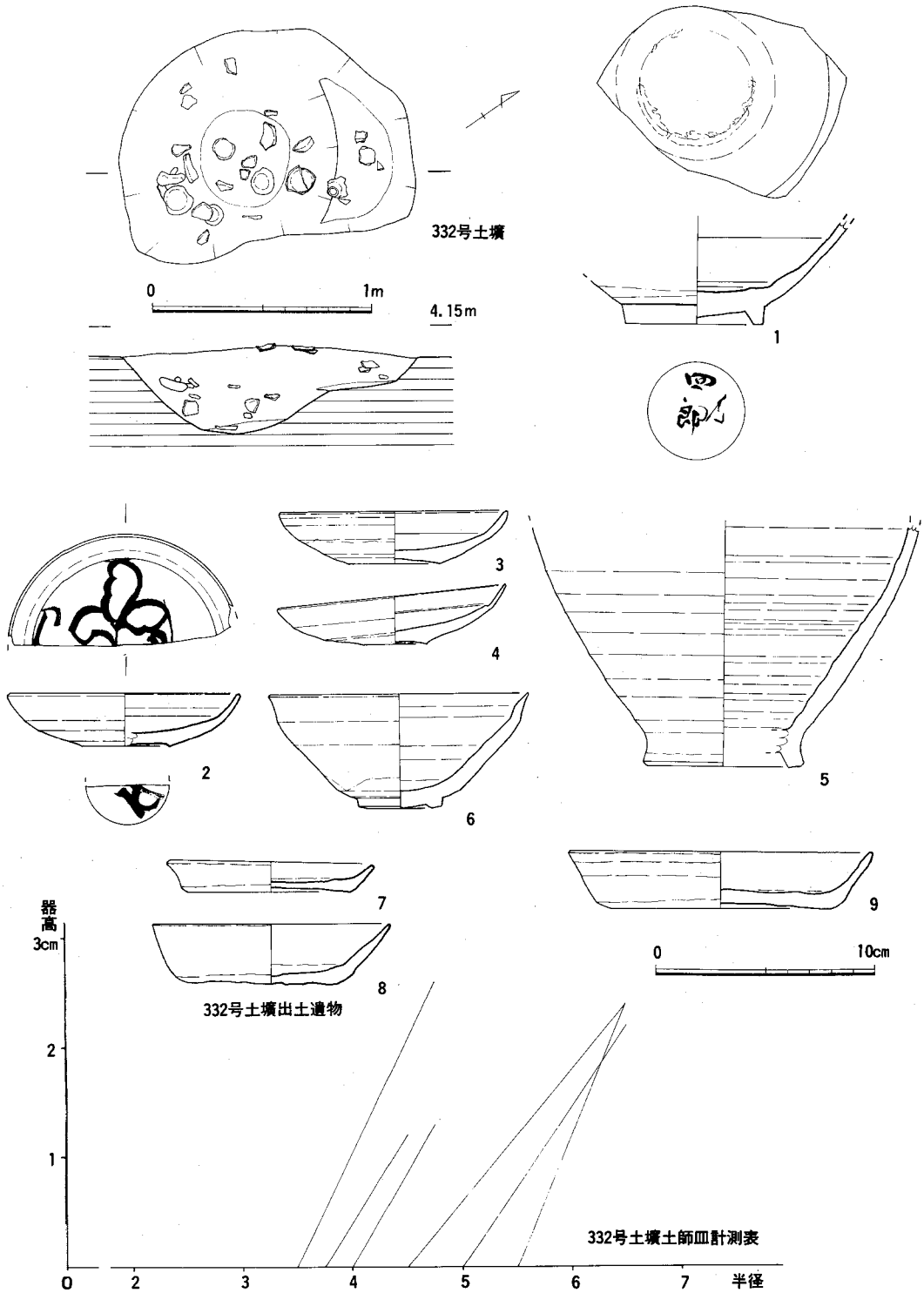


Fig.87　332号土壙と332号土壙出土遺物

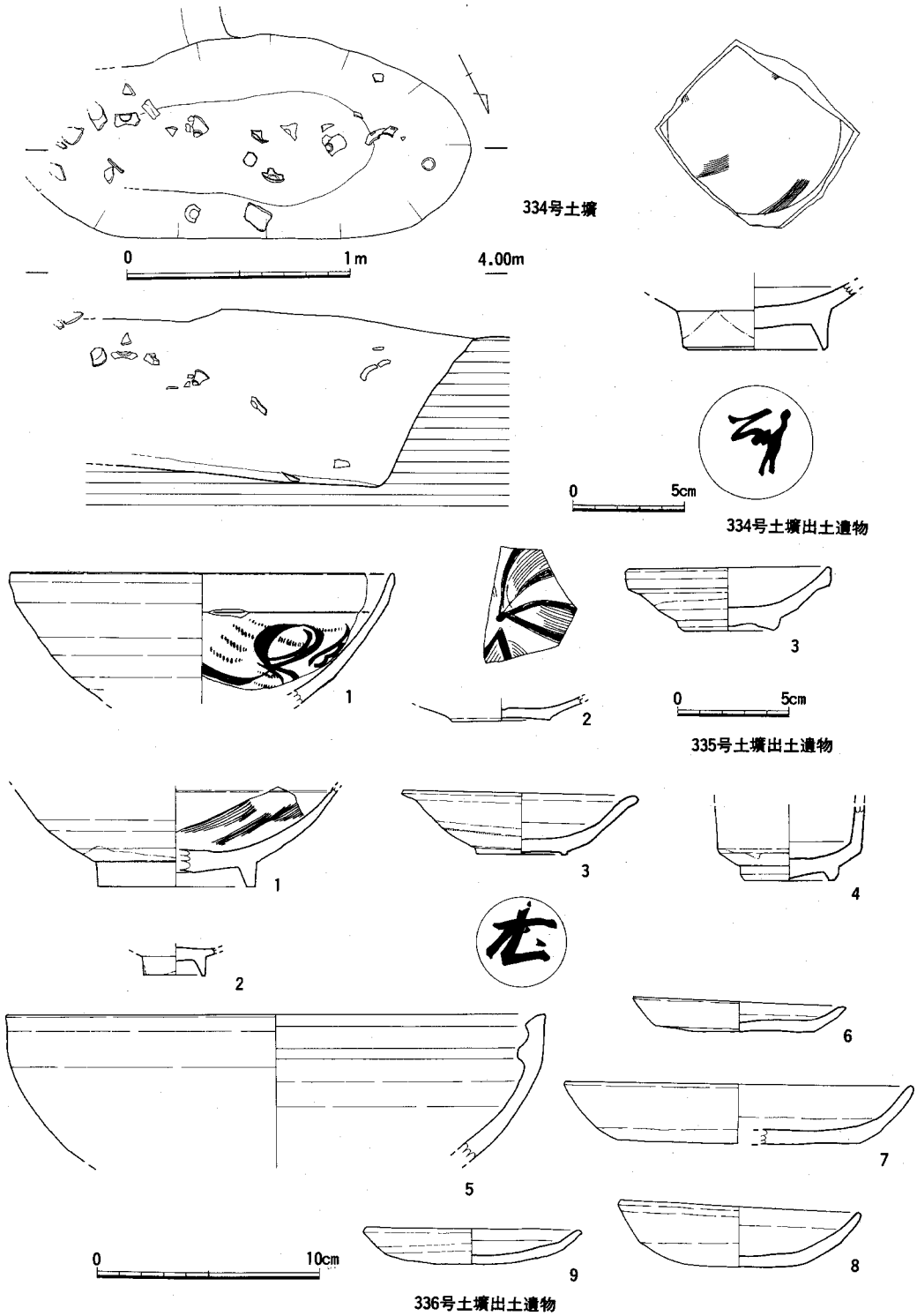


Fig.88　334号土壙と334号,335号,336号土壙出土遺物

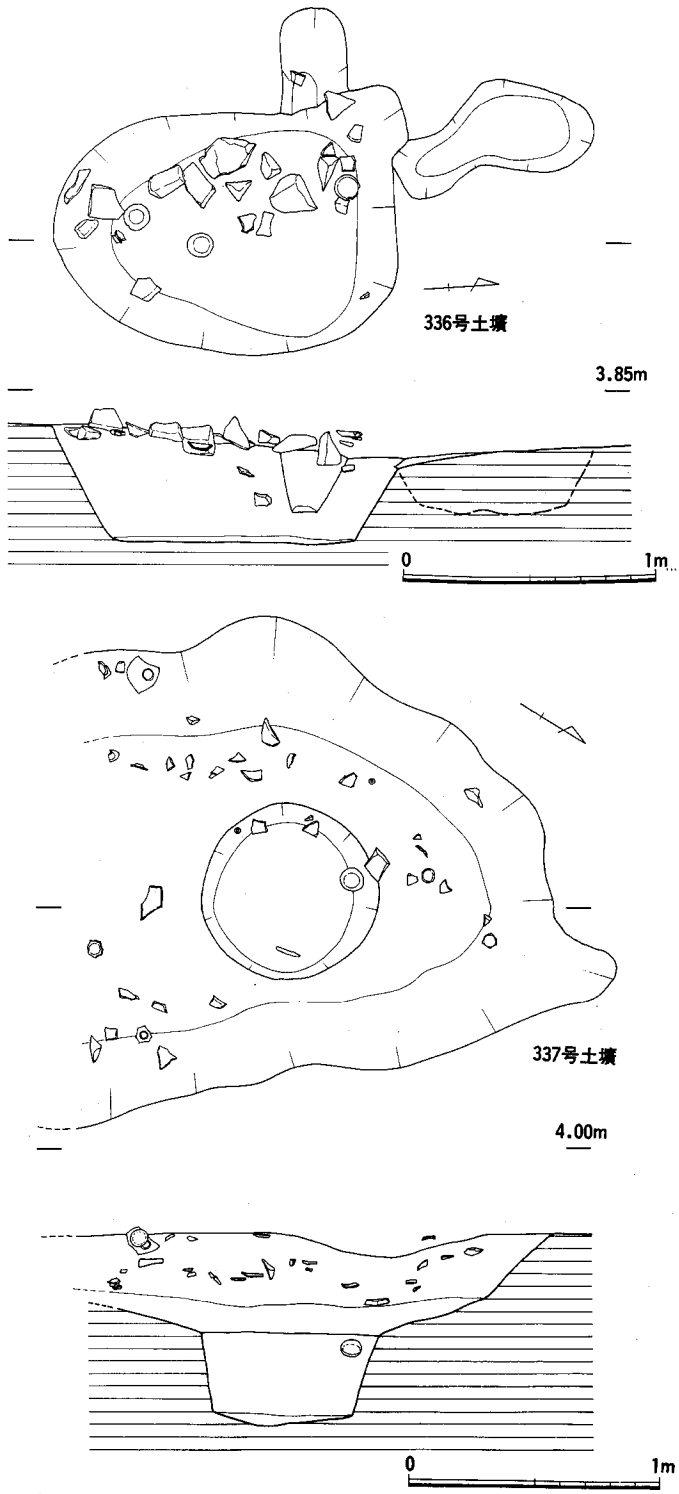
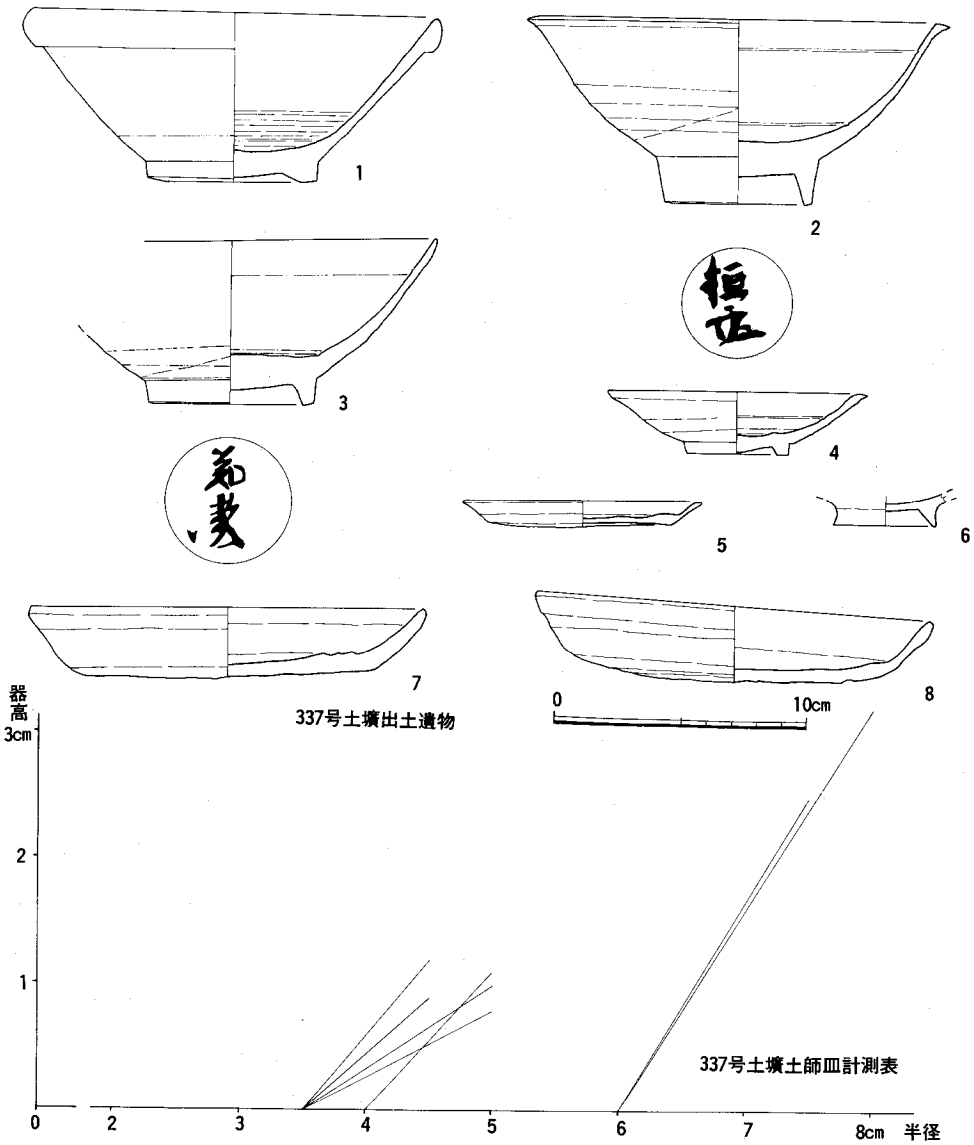


Fig.89　336号,337号土壙



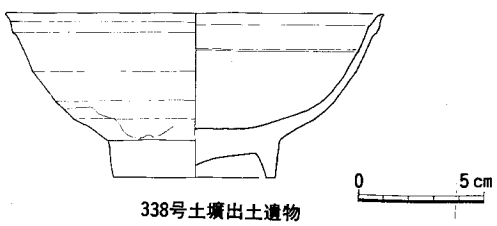


Fig.90　337号,338号土壙出土遺物

mの不整長方形をなし、深さ0.6mの掘方で、主軸はほぼ南北を向く。床面に浅い窪みがみられる。図示した遺物は、1が内面に同安窯系青磁風の櫛描文をもつ白磁碗で、2が内面に櫛描文をもつ平底皿、3が口縁を肥厚させる高台付白磁皿である。ほぼ13世紀代の遺構と思われるが、性格は明確に

しがたい。

336号土壙　(Fig. 88・89　PL. 39・49) Ｇ－Ⅱ－ｄ区上部検出遺構である。長軸1.3ｍの不整形で深さ0.45ｍの掘方をもつ。覆土は黒褐色土で上面にほぼ水平に幼児頭大から拳大の礫や遺物が散在している。馬と思われる臼歯も１点出土している。図示した遺物は、１が白磁碗で底部の造作など例の少ないもので未分類である。内面に櫛描文をもち、ごく淡い飴色のガラス質釉が高台脇までかけられる。２は内面体部に櫛描文をもち、口縁を外に水平に引き出すⅥ類白磁碗である。３はわずかに高台を削り出した白磁皿Ⅱ類で、高台内に「恵」の略字であろうと思われる墨書が見られる。４は白磁香炉で内面無釉、外面は腰部まで半透明の灰オリーブ色釉がかかっている。５は白磁小碗の高台である。６は胎の粗い陶器Ｃ群に属する捏鉢である。７は糸切底土師小皿、８は糸切底土師杯で、それぞれ口径９㎝、13㎝で、器高1.2㎝、2.6㎝を計る。９は丸底の研磨土器杯で内面のみをヘラ研磨している。10はヘラ切り丸底の須恵器皿である。ほぼ13世紀代の遺構と思われるが、性格は不明である。

337号土壙　(Fig. 89・90　PL. 20・39・49) Ｇ－Ⅱ－ｅ区上部検出遺構である。一部中間杭の攪乱によって切られており、全体形は不明であるが、径２ｍ前後の不整円形の深皿状の掘方に径0.7ｍの正円形の穴を穿っている。井戸側等の痕跡は確認できないが、井戸であろう。遺物は散漫に分布する。図示した遺物は１～３が白磁碗で、それぞれⅣ、Ⅵ、Ⅸ類である。２の高台内には「桓□」の、３には判読できない墨書が残されている。４は高台付白磁皿である。５～８は土師皿類で、６の高台付皿をのぞいていずれも糸切底である。計測表に示すように小皿は径９～10㎝、器高0.8～1.2㎝に集中する。12世紀後半代に位置づけられる。

338号土壙　(Fig. 90　PL. 40) Ｇ－Ⅰ－ｅ区上部検出遺構である。側壁柱などによって大半を切られ掘方は明確でない。黒褐色の落込みで、近世陶磁３点、骨片、土師皿、丸底碗片等、少量の遺物が検出されている。図示した遺物は白磁碗で、内面体部上半に沈圏線をもち、口縁がわずかに肥厚する。近世の廃棄物処理用土壙であろうか。

339号土壙　(Fig. 91　PL. 40) Ｇ－Ⅰ－ｅ区下部検出遺構である。338号土壙に切られ、一部Ｈ区にかかる。長軸1.6ｍ、幅1.4ｍの不整長方形で深さ0.7ｍの掘方をもつ。出土遺物は少量であるが比較的まとまりがあり、４点の白磁碗小片と、瓦器碗類小片７点　須恵器片４点のほか、図示した遺物がある。１は青磁小碗で見込に茶溜をもち、内面体部に小さなヘラ描文を施す。内面と外面体部下半まで茶味のあるオリーブ釉がかけられ、小さな低い高台を削り出す。潮州筆架山窯など広東省産の青磁であろう。土師皿類は実測図および計測表に示すとおり、ヘラ切底の小皿がまとまっており、ほぼ12世紀前半代に位置づけられよう。遺構の性格は明確でないが、１の青磁碗の所属年代を考える上で重要な遺構である。

340号土壙　Ｇ－Ⅰ－ｅ区上部検出遺構である。1.1ｍ×1.2ｍ程の不整形の遺構であるが掘方

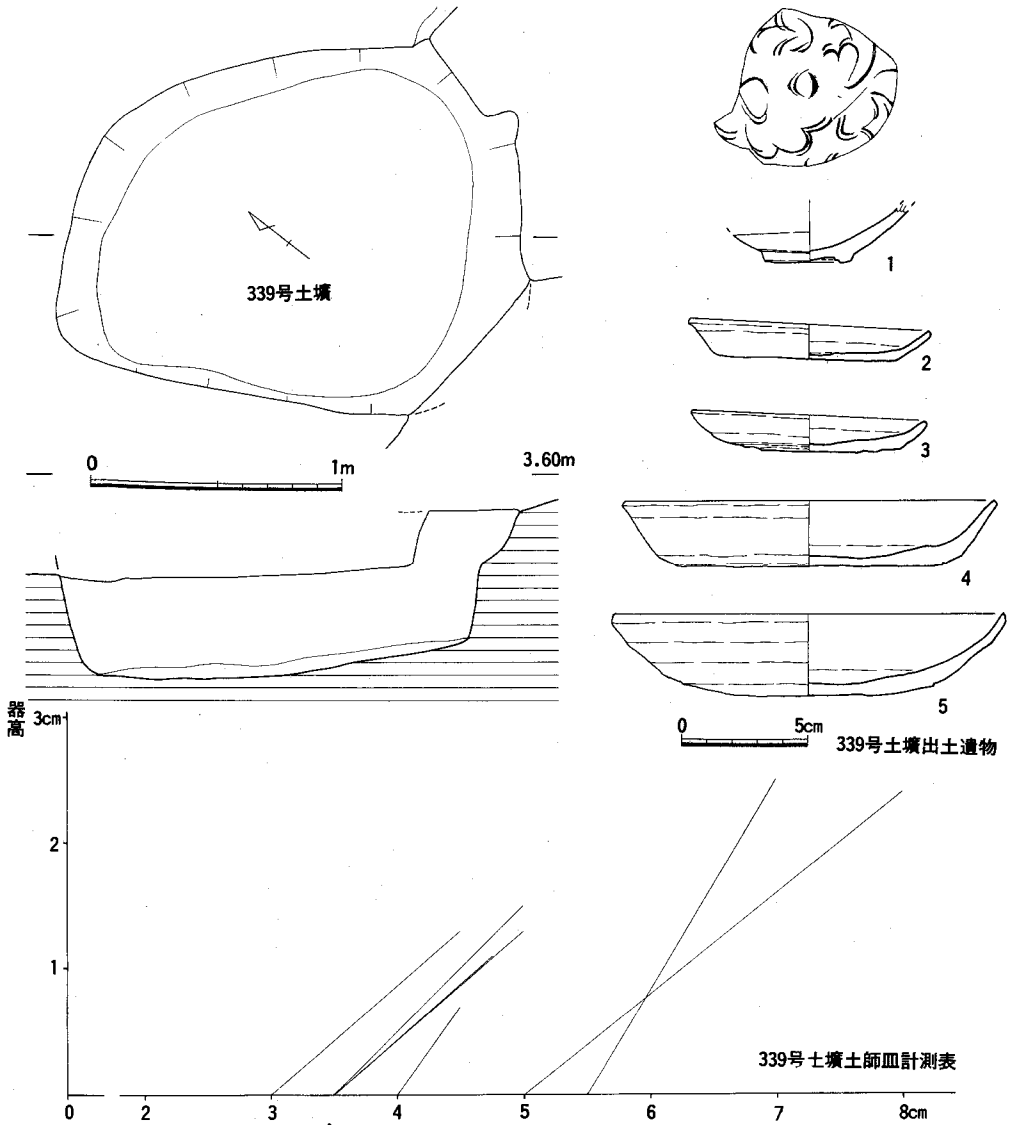


Fig.91　339号土壙と339号土壙出土遺物

は明確でない。遺物も少量でいずれも小破片であり、時期、性格ともに不明。31号溝上に営まれており14世紀半ば以降であろう。

341号土壙　(Fig. 92　PL. 21・40) G－Ⅰ－e区上部検出遺構である。長軸1.5m、幅0.8m、深さ0.5mの深皿状の断面形をなし、334号土壙と同じく主軸はほぼ東西方向をとる。遺物は少なく、時期を断定できるものはないが、ほぼ13世紀代におさまるものと思われる。図示した遺物は濃いマリンブルーのガラス玉で、熱破砕を受け一部銀化している。銅銭1枚も見られるが錆がひどく銭種は不明。土壙墓もしくは火葬墓であろう。

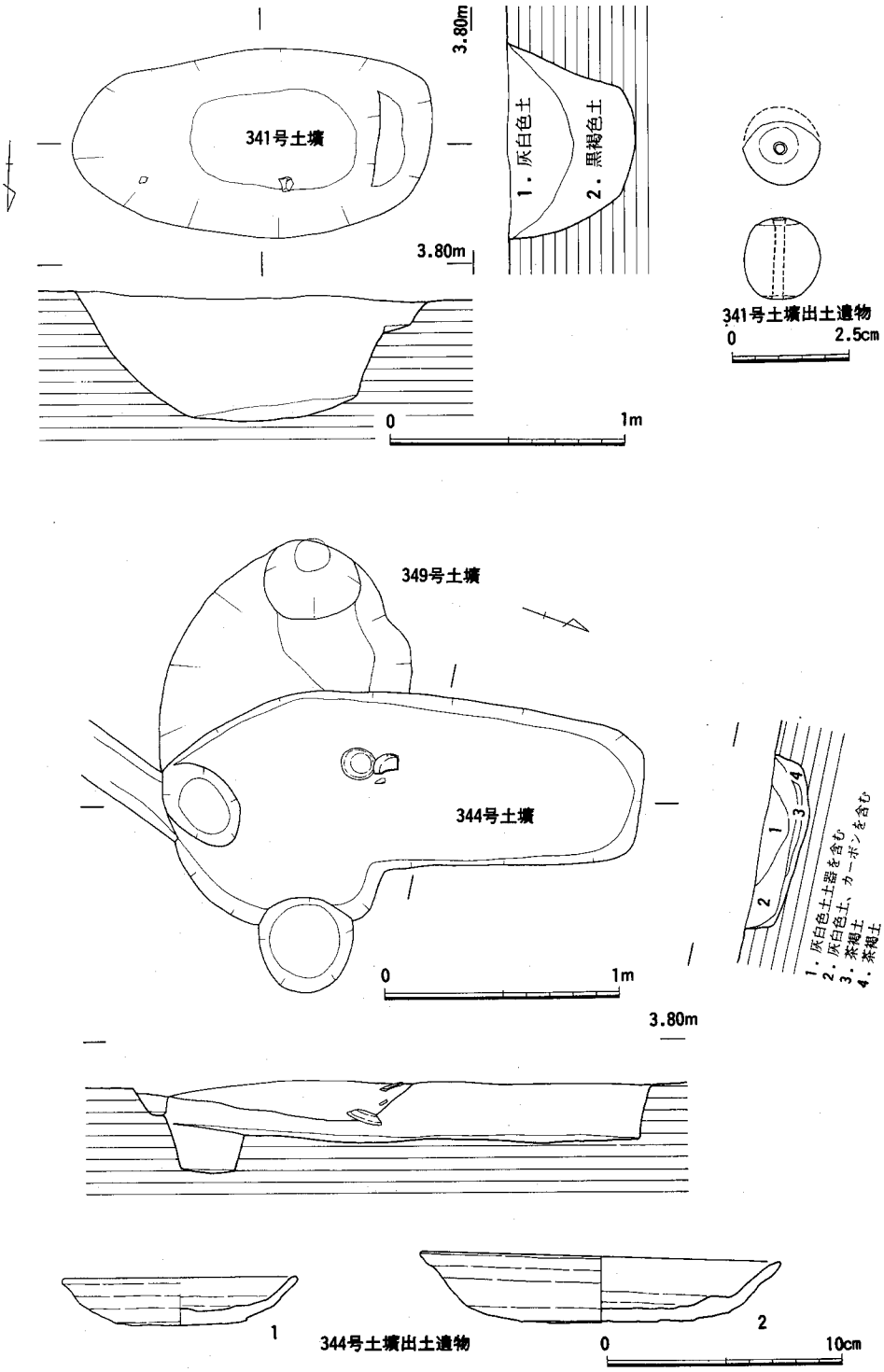


Fig.92　341号,344号,349号土壙と341号,344号土壙出土遺物

342号土壙　G－Ⅰ－d区上部検出遺構である。0.45m×0.4m程の小さな掘方で0.2m程の深さをもつ。遺物は微量で時期性格ともに明確にできない。

343号土壙　G－Ⅰ－d区上部検出遺構である。342号土壙と同様の規模・内容で時期・性格ともに明確にできない。

344号土壙　(Fig. 92) G－Ⅰ－c・d区上部検出遺構である。長軸2.05m、幅0.75mの不整長方形で、深さ0.25mを計り、主軸はほぼ南北を向く。遺物は少なく、口径10cm、器高1.8cmの瓦質皿（1）、口径15cm、器高2.7cmの糸切底土師杯（2）のほか、口径9.0cm、器高0.9cmの糸切底土師小皿が見られるのみである。これらの遺物は床面よりやや浮いた状態で出土している。12世紀後半代の土壙墓もしくは火葬墓であろう。

345号土壙　(Fig. 93　PL. 40) G－Ⅰ－d区上部検出遺構である。一辺1m強の不定形で深さ10cmの浅い落ち込み状の土壙である。遺物は少量で、図示したロハゲの白磁平皿のほかに、計測不能の土師皿小破片2点が見られるのみである。14世紀前半代と思われるが性格は不明。

346号土壙　G－Ⅰ－c区上部検出遺構である。側壁柱および現代攪乱に切られ全体形は不明。径0.7m程の円形をなすか。深さ0.3mで浅い。遺物は全く見られず、時期、性格ともに不明。

347号土壙　G－Ⅰ－d区上部検出遺構である。側壁柱および現代攪乱に切られた全体形は不明。深さ0.8mを計る。遺物は認められず時期、性格ともに不明。

348号土壙　G－Ⅰ－d区上部検出遺構である。側壁柱に切られ全体形は不明であるが、深さ0.9mを計る。遺物は少なく、土師杯破片11点、白磁Ⅸ類碗破片3点などが見られるのみである。13～14世紀代の遺構と思われるが性格は不明。347号土壙とほぼ同形で、同様の機能をもっていたものであろう。

349号土壙　(Fig. 92) G－Ⅰ－d区上部検出遺構である。344号土壙に切られる。浅い皿状の掘方をもつ。須恵器片5点と土師皿片4点が見られる。12世紀代の遺構であるが性格不明。

350号土壙　G－Ⅰ－e区下部検出遺構である。明確な掘方ではないが床面に数個の拳大の礫を置く。出土遺物は少なく、土師皿片2点、白磁碗片5点、龍泉窯青磁碗片1点のほか、須恵器片数点が見られるのみである。時期、性格ともに明確にしえない。

351号土壙　G－Ⅰ－e区下部検出遺構で、350号土壙に接する。明確な掘方ではなく、浅皿状の落込みで、床面上に拳大の礫数個が散在している。遺物はやや多く、須恵器甕・杯などの破片が30点あり研磨土器破片6点や白磁碗皿8点なども混在する。時期、性格ともに明確でない。

352号土壙　(Fig. 93) G－Ⅰ－b区上部検出遺構である。井戸側等の内部構造は明らかでないが、近世井戸の掘方であろうと思われる。径1.1mのほぼ正円形の平面をなす。

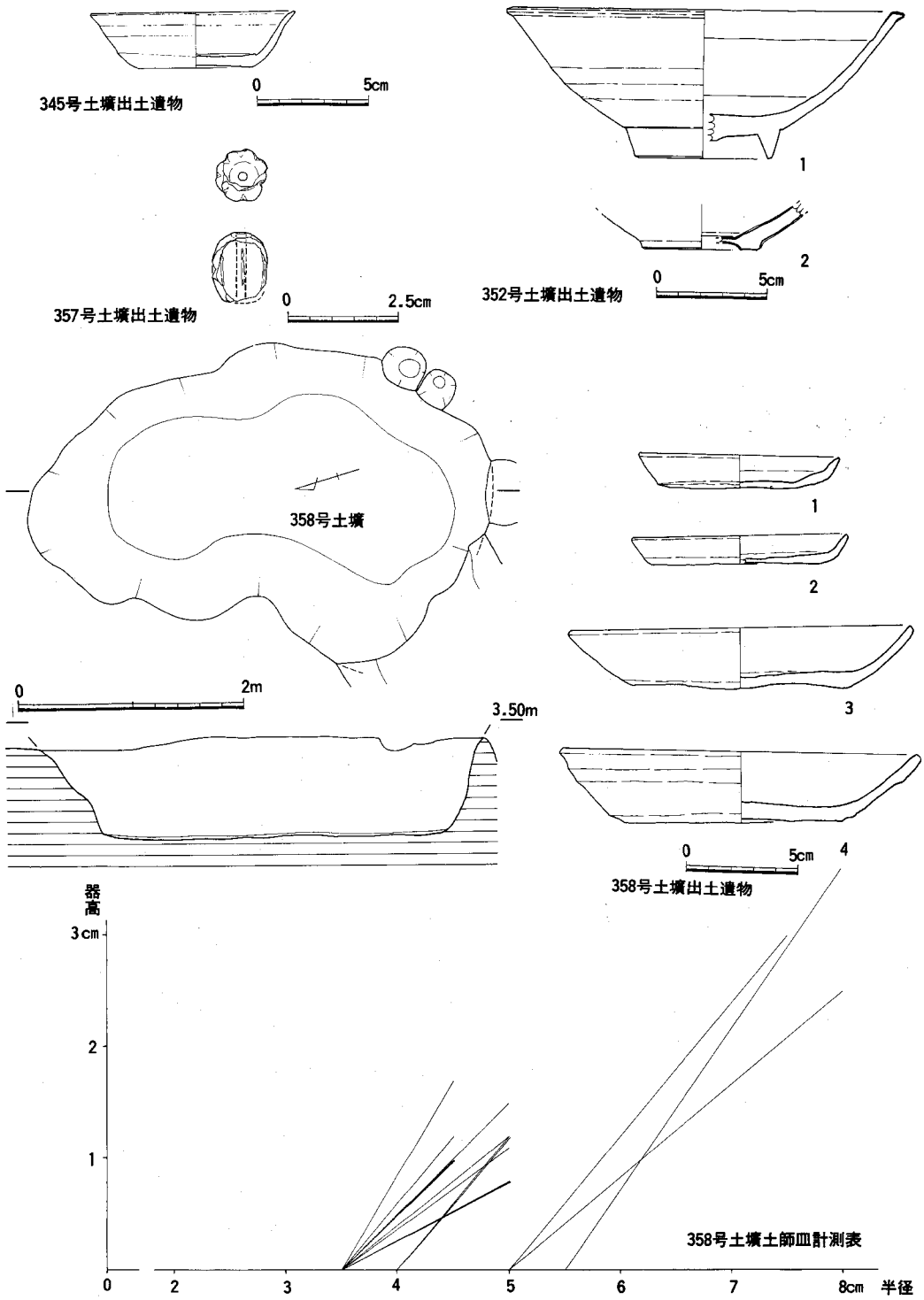


Fig.93　358号土壙と345号,352号,357号,358号　土壙出土遺物（１）

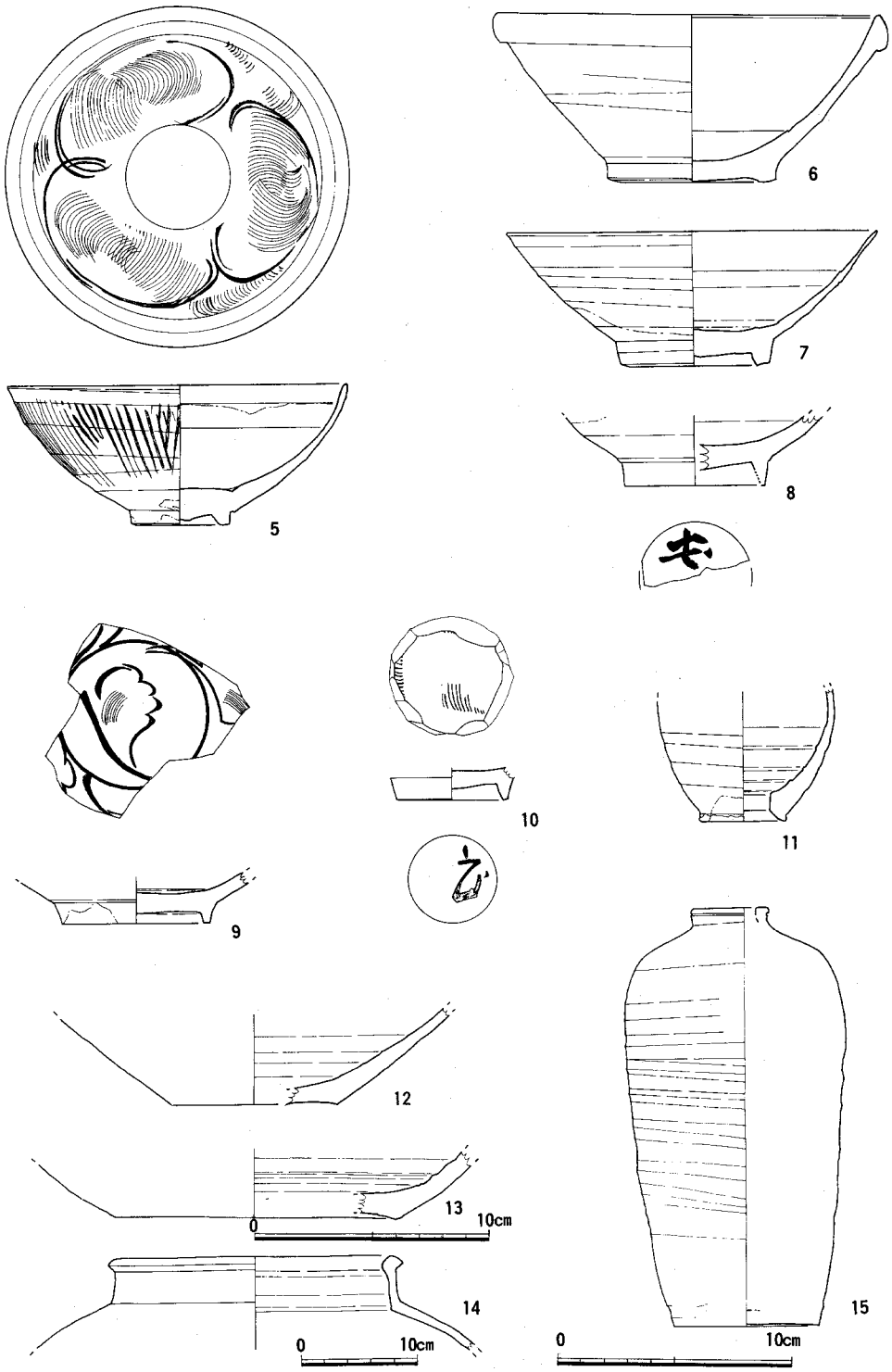
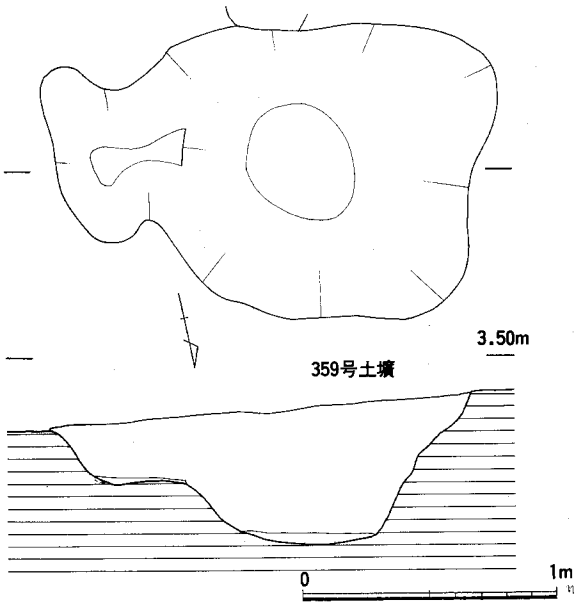


Fig.94　358号土壙出土遺物(2)



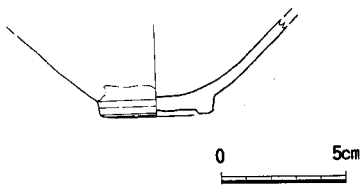


Fig.95　359号土壙と359号土壙出土遺物

近世陶磁の中に少量中世遺物が混在する。図示した遺物は、１が白磁Ⅵ類碗で、２が蛇ノ目高台をなす初期高麗青磁碗である。胎は灰色で緻密、全面に青味をおびた暗緑色の半透明釉がかけられるが、高台畳付は釉を拭きとっている。精製品である。

353号土壙　Ｇ－Ⅰ－ｂ区上部検出遺構である。径１ｍ程のほぼ円形をなし、深さ0.2ｍと浅い。出土遺物は少なく、土師小皿破片１点のほか須恵器小破片３点が出土したのみである。時期、性格ともに不明である。

354号土壙　Ｇ－Ⅰ－ｂ区上部検出遺構である。長軸1.2ｍ、幅0.8ｍの長円形をなし、深さ0.3ｍを計る。遺物はいずれも小片で図示しえないが土師皿類４点、白磁碗７点、陶器５点などがみられるが青磁は含まれない。時期・性格ともに明確でない。

355号土壙　Ｇ－Ⅰ－ａ区上部検出遺構である。径0.9ｍのほぼ正円で深さ0.3ｍを計る。中位に礫１個がみられるが、遺物は皆無であり時期、性格ともに明確でない。

356号土壙　欠番である。

357号土壙　(Fig. 93　PL. 22・40) Ｇ－Ⅰ－ｅ区下部検出遺構である。径0.65ｍの掘方の底に更に径0.2ｍの小穴を掘る。遺物は微量である。図示した遺物は濃緑色のガラス玉で側面に８本の刻みを入れている。時期、性格ともに不明。

358号土壙　(Fig. 93・94　PL. 22・40・41) Ｇ－Ⅱ－ｂ区下部検出遺構である。長軸４ｍ、最大幅３ｍの大きな不整形の掘方で、深さ0.9ｍを計る。覆土は黒褐色砂質土で多量の遺物が出土している。図示した遺物は１～４が土師器皿、杯で、計測表に示すとおりいずれも糸切底で、口径は杯で15～16cm、小皿で９～10cmに集中する。５は同安窯系青磁碗で内外面に櫛描文

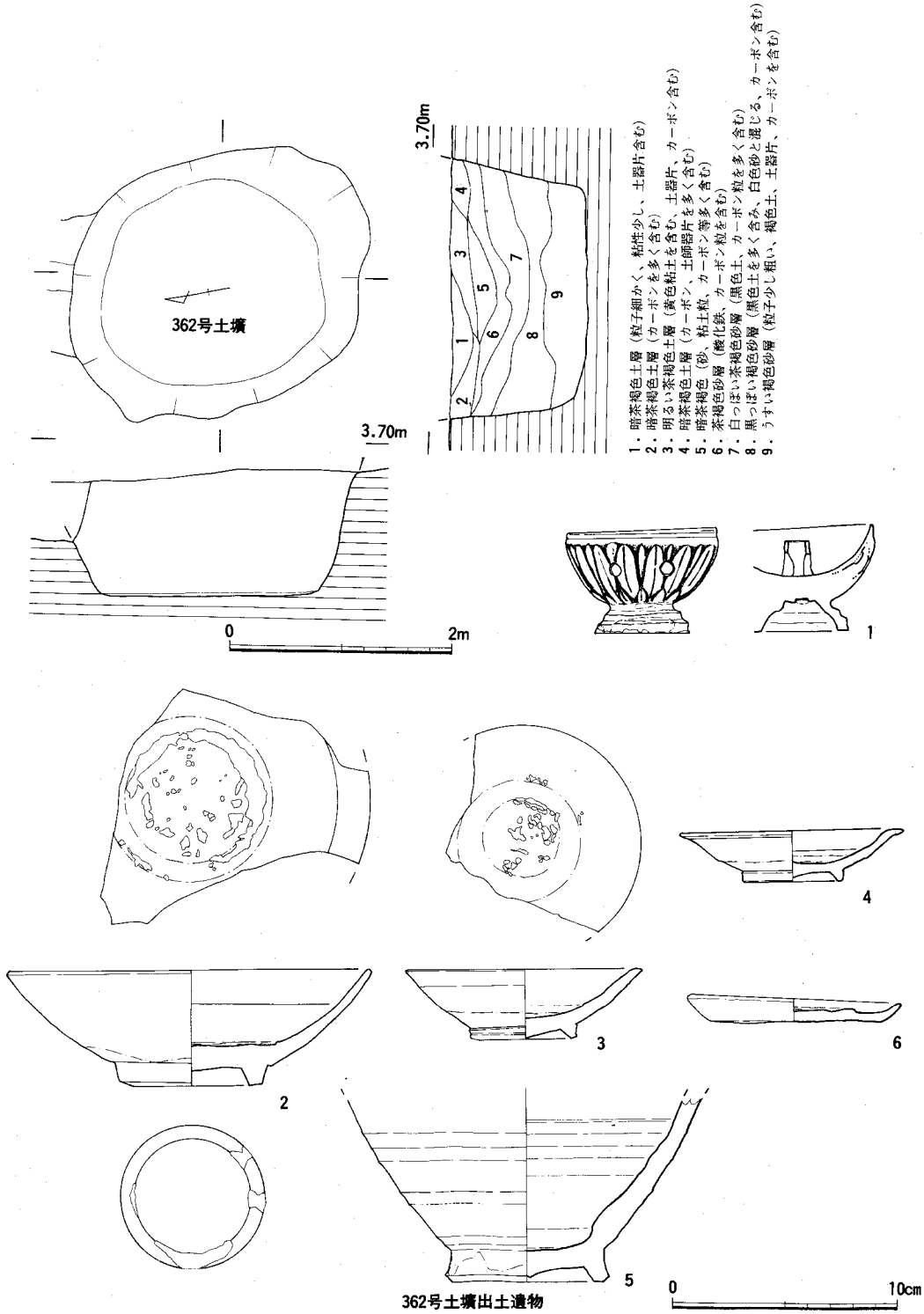


Fig.96　362号土壙と362号土壙出土遺物

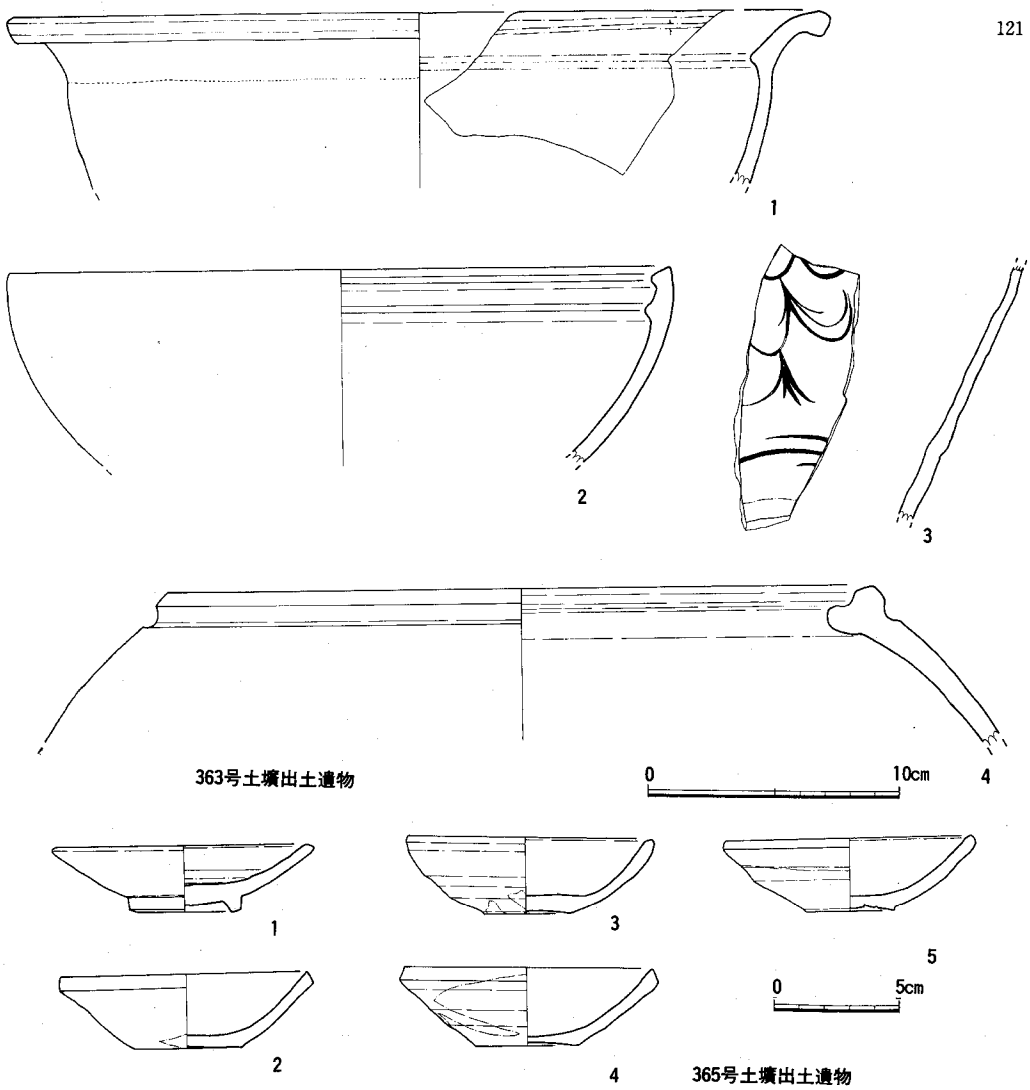


Fig.97　363号,365号土壙出土遺物

をもつが、分厚い底部と高台外面までの施釉法は龍泉に近い。６～10は白磁碗である。６がⅣ類、７がⅨ類、８、10がⅥに分類されるが、９は櫛およびヘラ描による文様を施し、高台脇までに施釉するもので未分類である。８、10の外底高台内に墨書が見られるが判読できない。10は縁辺を意図的に打欠いている。11～15は陶器である。11は底部に穿孔したＢ群壺であるが、むしろ穿孔部を口縁と見なすべきかもしれない。12はＢ群の鉢、13も同群の鉢であるが胎土と釉は越州窯風である。14は口径25.5cmの大型の短頸壺で、胎は茶褐色で大小の砂粒を多量に含んでおり、白味の強いうぐいす色不透明釉がかけられている。15はＡ群磁灶窯系の小口瓶で、頸部から肩部にかけて黒褐釉がかけられている。その他、動物骨、瓦類もみられ、12世紀後半

の廃棄物処理用土壙である。

359号土壙　(Fig. 95) G－Ⅱ－c区下部検出遺構である。長軸1.7m、幅1.15mの不整形土壙で深さ0.6mを計る。図示した遺物は天目碗で、通例とは底造りが違い、胎土も緻密で磁質である。釉は茶褐味が強く禾目がある。遺物は少なく、時期、性格ともに明確でない。

360号土壙　G－Ⅱ－c区下部検出遺構である。長軸0.7m、幅0.5mの小土壙である。出土遺物は微量で時期不明。柱穴の可能性がある。

361号土壙　G－Ⅱ－e区上部検出遺構である。335号土壙によって切られる。浅い茶褐色砂の落ち込みで明確な掘方ではない。出土遺物は須恵器、土師質土器破片のみが少量で、9世紀代の遺構であろうか。

362号土壙　(Fig. 96　PL. 2・23・41) G－Ⅱ－e区下部検出遺構である。径2.8～2.2mの長円形掘方で深さ1.1mを計る。遺物は多量で埋土全体に散在する。図示した遺物を説明する。1は青白磁の灯明台である。埋土の上層から出土し完形である。やや粗雑な作りの二段になる脚台をもち、碗部は二重に作る。この外側では鎬連弁を型造りにしており、通気孔を2箇穿つ。内面底は薄胎で1㎜程の厚さしかなく、中央部に灯芯を置く透しをもった筒状施設が見られる。胎は白いがやや粗く、高台内および二層部内部を除きうすい青白釉がかかる。珍貴な資料である。2はⅨ類白磁碗で見込釉を輪状に削り、その露胎部と高台畳付に重ね焼の痕跡を残している。3、4も同様に見込釉を輪状に削る高台付白磁皿である。5は白磁水注または四耳壺で高台は小さい。その他白磁碗79点、同皿23点　同安系窯青磁碗5点、同皿1点、龍泉窯青磁碗7点、天目碗2点中国産陶器37点、国産陶器2点、瓦107点、須恵器47点などの破片が出土している。土師皿類も169点出土しているがいずれも小片で、計測可能なものは糸切小皿の3点のみで口径8～9㎝、器高0.9～1.3㎝である。13世紀代の廃棄物処理用土壙である。

363号土壙　(Fig. 97　PL. 41) G－Ⅱ－c区下部検出遺構である。310号土壙（近世井戸掘方）によって切られる。多量の中世遺物に混じって近代遺物も見られるが中間杭攪乱によるものであろう。図示した遺物は、1が鍔状の口縁をもつ磁灶窯系黄釉盤、3も同様の胎をもつ壺破片で、外面にヘラ描文が施され濃オリーブ色の釉がかかる。2は粗い胎の捏鉢、4はY字口縁の大型甕で内面に同心円の叩目が残る。12世紀代の廃棄物処理土壙である。

364号土壙　G－Ⅱ－a区上部検出遺構である。F区との区境にかかり全体形は明らかでない。近世の攪乱土壙であり中～近世遺物が混在する。東播系と思われる赤っぽく焼けた捏鉢破片も見られる。

365号土壙　(Fig. 97　PL. 41) G－Ⅱ・Ⅲ－b区上部検出遺構である。長軸3.45m、短軸2.8mの楕円形掘方の井戸で、床面の片側に偏って径0.9mの木桶組構造と思われる水溜掘方が見られる。掘方埋土は白色砂、黒色粘質砂、暗褐色砂の互層である。遺物は少量で、近世磁器

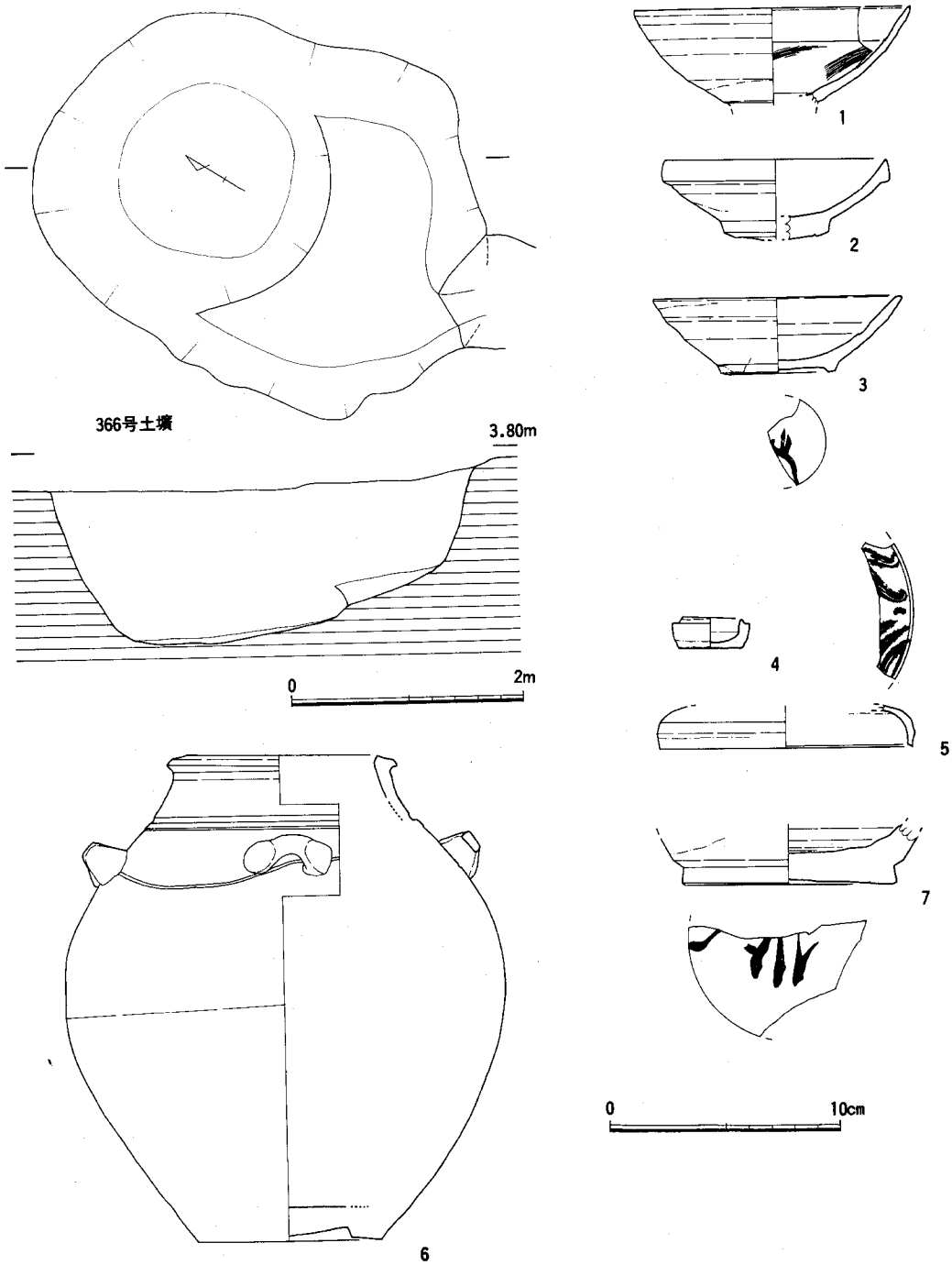


Fig.98　366号土壙と366号土壙出土遺物

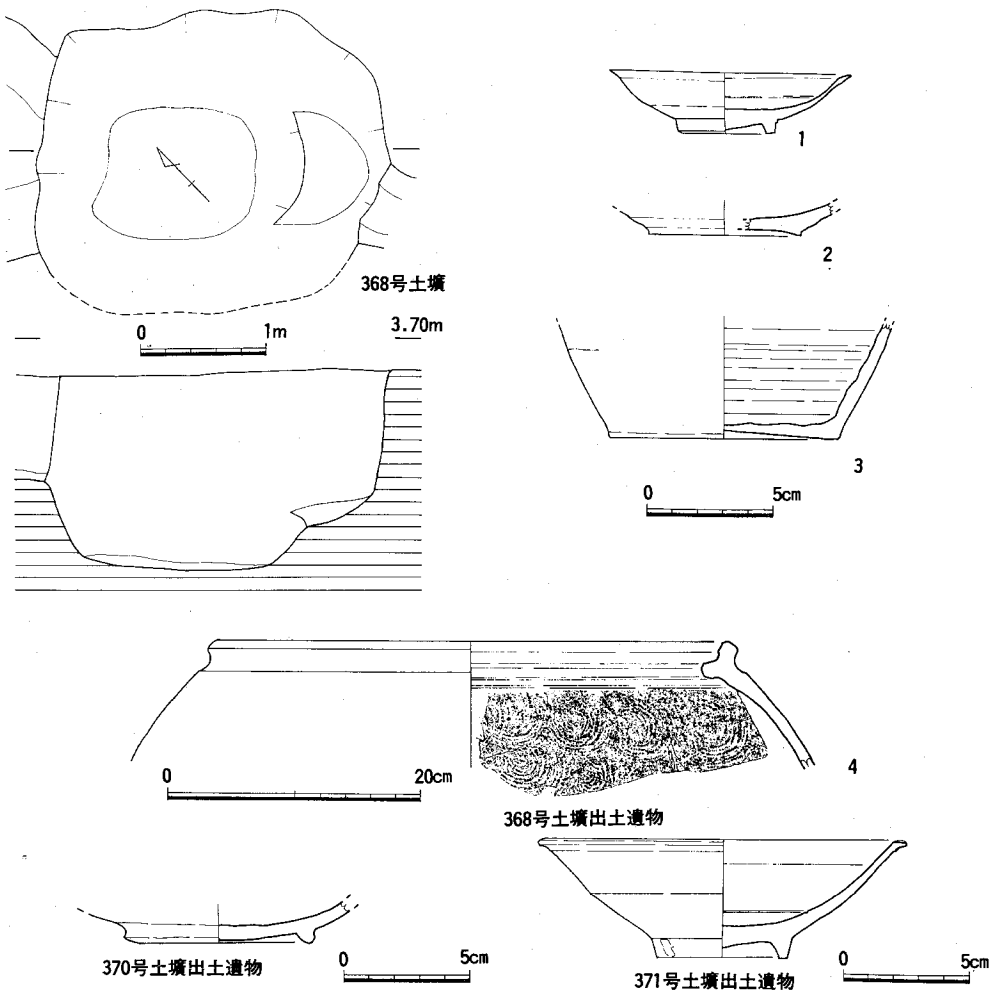


Fig.99　368号土壙と368号,370号,371号土壙出土遺物

がありこの時期に営まれたものであるが、図示したように陶器Ｂ群の平皿４点（２～５）がまとまって出土しているのは注目される。中世遺構を掘り抜いたのであろうか。

366号土壙　(Fig. 98　PL. 41・42) Ｇ－Ⅱ・Ⅲ－ｄ区上部検出遺構である。長軸４ｍ、幅3.2ｍの長円形で深さ1.5ｍの大きな掘方である。中央部は中間杭によって攪乱を受けている。覆土の上層部分には木炭、焼礫、焼土を含む。出土遺物は多いが、図示しうるものは少ない。１が同安窯系青磁小碗で、内面体部に櫛描文をもつ。２は高台付白磁皿、３は高台をわずかに削り出した白磁皿で外底に墨書が見られるが判読できない。４は青白磁の小型合子身で、５は

青白磁の大型合子蓋である。６は陶器Ｂ群四耳壺で内外面全体にくすんだオリーブ色の釉がかけられているが、外面は異物が多数付着しており、高台畳付に輪状に目跡が残る。７は赤褐色の胎をもつ陶器Ｃ群壺で、外底部に墨書が見られるが判読できない。土師皿類は小破片で計測できないが、いずれも糸切底である。13世紀代の廃棄物処理用土壙であろう。

367号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｄ区下部検出遺構である。366号、368号土壙に切られ全体形は不明である。出土遺物は少量で、時期、性格ともに明確にしえないが、切り合いから13世紀頃と考えられている。

368号土壙　(Fig. 99) Ｇ－Ⅲ－ｅ区下部検出遺構である。310号、324号、土壙によって切られている。長軸2.7ｍ、幅2.2ｍ程の長方形をなすと思われる掘方で深さ1.6ｍを計る。遺物は多いが、８世紀代から13世紀代までのものが混在する。図示した遺物は、１が白磁高台付皿、２がＡ群またはＢ群に属する陶器皿で灰ベージュの胎をもち黒褐釉が内外面にかかる。

369号土壙　Ｇ－Ⅰ－ｅ区下部検出遺構である。31号溝を切る。中間杭によって攪乱を受け、遺構の全体形は明確でない。遺物は微量で鉄片１点が見られる程度である。切り合いから14世紀半ば以後と考えられるが、性格は不明である。

370号土壙　(Fig. 99) Ｇ－Ⅲ－ａ区下部検出遺構である。長軸1.2ｍ、幅0.6ｍの長円形で、浅い掘方をもち上面に人頭大の平石を置く。９世紀頃から13世紀頃までの遺物が混在している。図示したものは黄褐色に焼けた研磨土器である。廃棄物処理土壙か。

371号土壙　(Fig. 99) Ｇ－Ⅲ－ａ区下部検出遺構である。308号土壙によって切られる。掘方は長軸1.6ｍ、幅１ｍの長円形をなす。図示した遺物は白磁碗である。土師皿類17点が出土しているが小片で計測できない。13世紀頃までの遺物が混在し、廃棄物処理用土壙であろう。

372号土壙　Ｇ－Ⅲ－ｂ区下部検出遺構である。307号土壙に切られる。径0.8ｍ、深さ0.5ｍの掘方である。出土遺物はほとんどなく、時期、性格ともに不明。

373号土壙　(Fig. 100　PL. 24・42) Ｇ－Ⅲ－ｂ区下部検出遺構である。形1.0～1.1ｍのほぼ正円で、深さ0.8ｍの掘方である。床面よりやや上に、４の陶器Ｂ群の四耳壺破片が重なるように置かれている。この四耳壺はほぼ完形に復元され、内面と外面体部下位まで施釉され、口縁部平坦面および内面に目跡が残されている。黒褐色砂質土の覆土中に他の遺物も散在する。１は白磁碗で、高台脇に施釉時の指頭痕が残っている。２は白磁高台付皿で、内面および外面体部下半まで白い化粧土を施し、その上に施釉している。見込釉は輪状に削りとる。３は磁灶窯系陶器の小口瓶で薄胎である。内外面に巻上げ痕が顕著で、外面体部に墨書が見られるが判読できない。陶器盤などの破片も少量見られる。土師皿類も８点みられるが小破片で図示できない。いずれも糸切であろう。12世紀後半代の火葬墓の可能性がある。

374号土壙　(Fig. 101　PL. 24・42・49) Ｇ－Ⅱ－ａ区下部検出遺構である。365号土壙

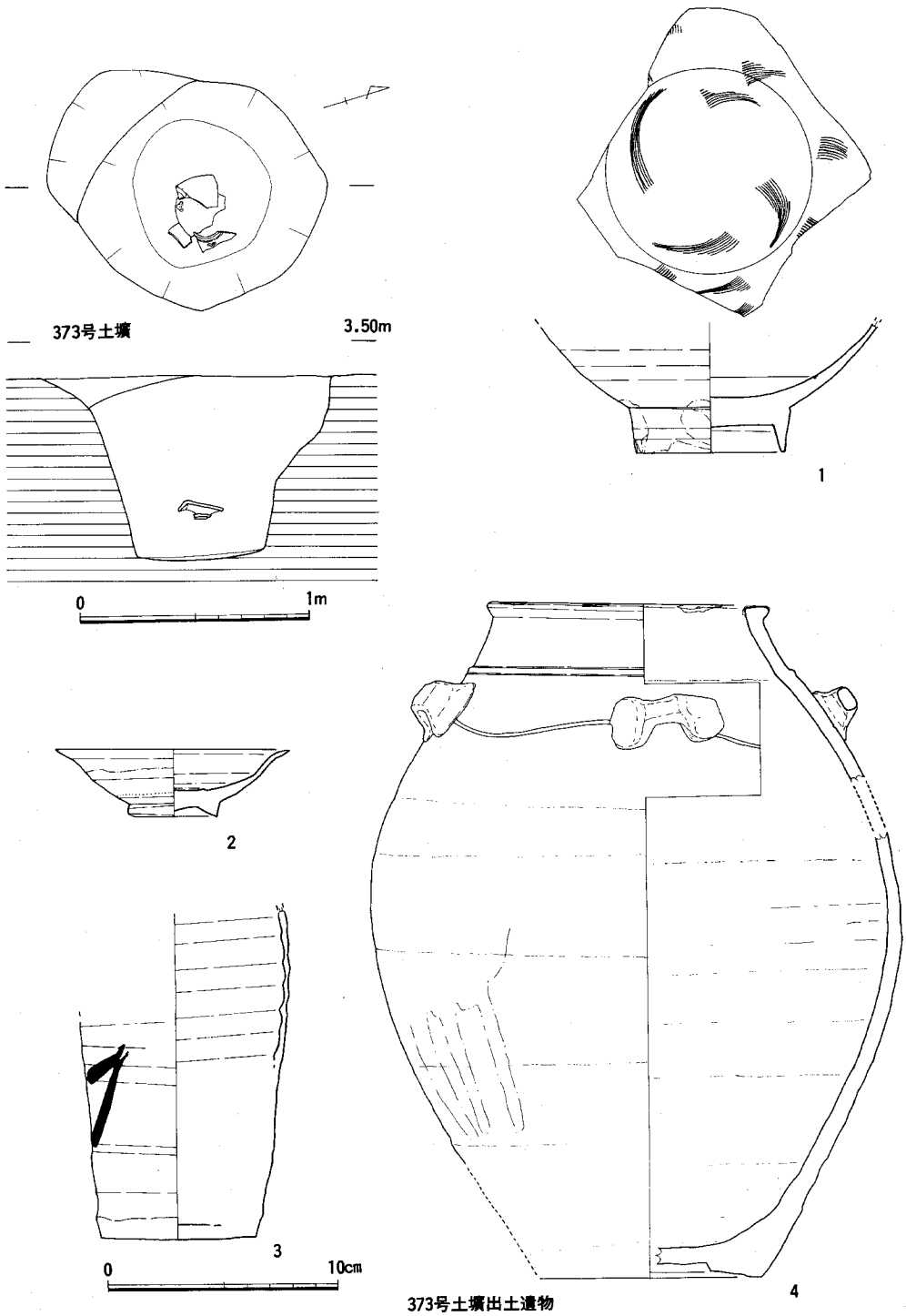


Fig.100　373号土壙と373号土壙出土遺物

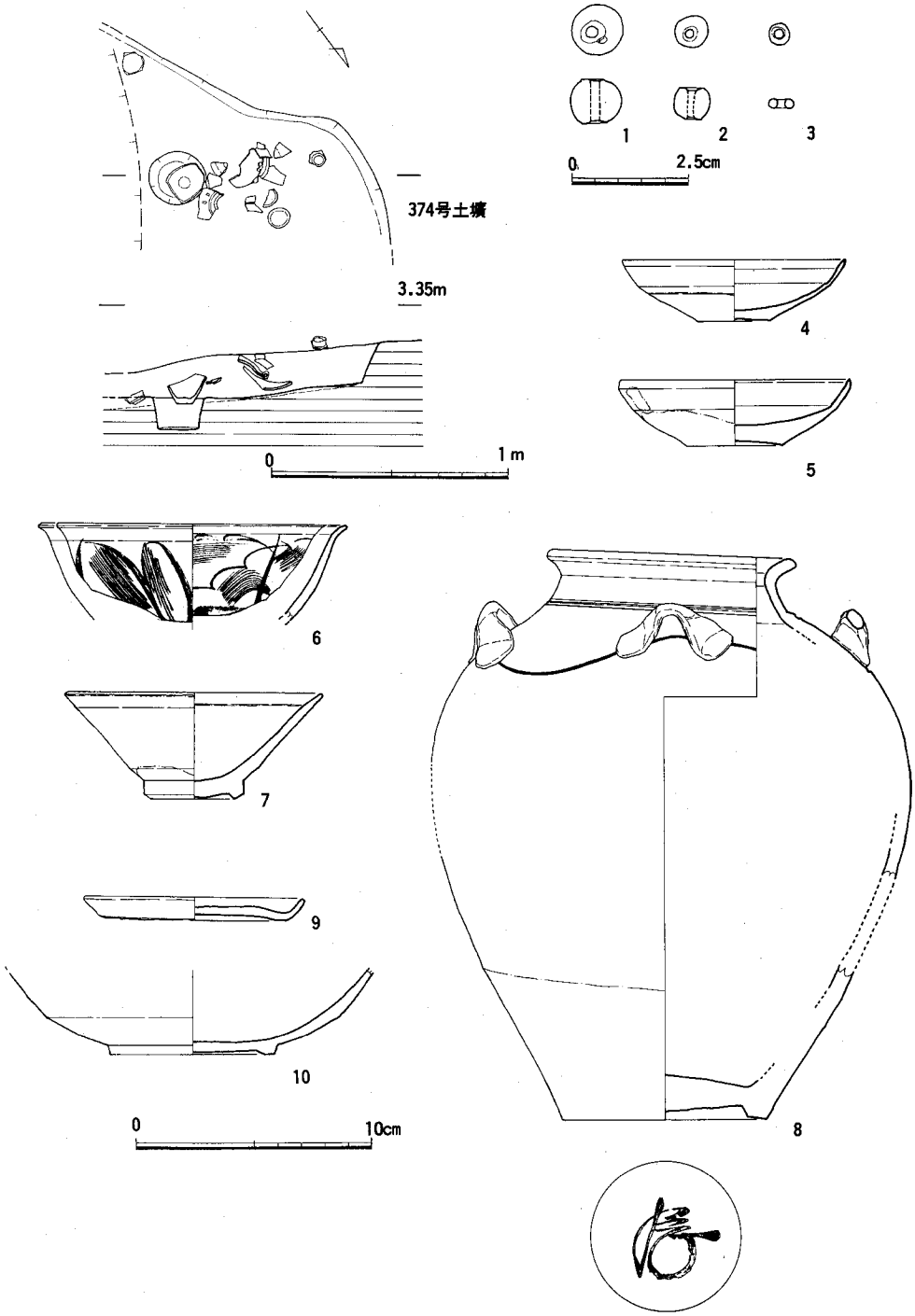


Fig.101　374号土壙と374号土壙出土遺物

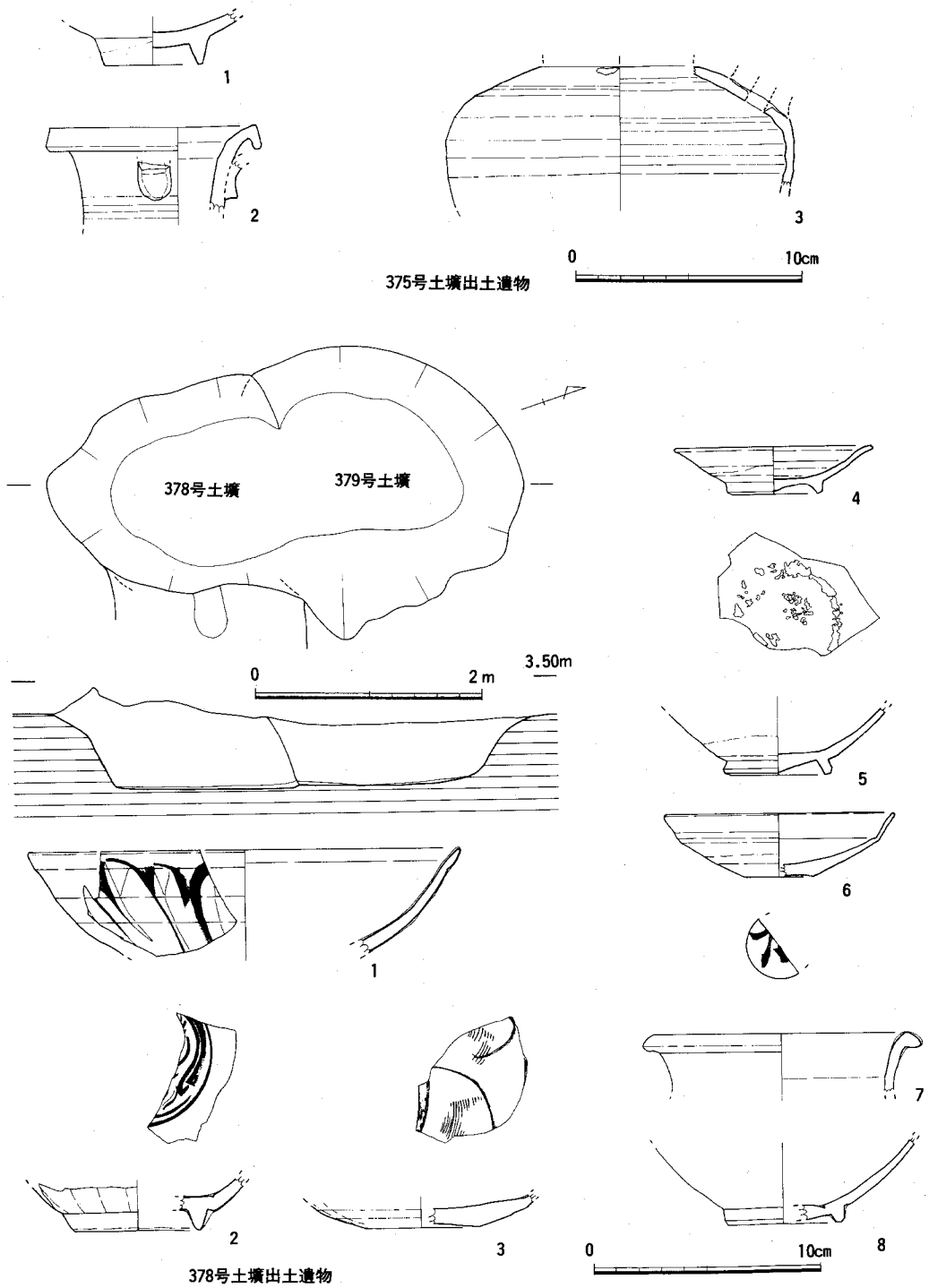


Fig. 102　378号，379号土壙と375号，378号土壙出土遺物

に切られ全体形は不明。浅い掘方の床面に小穴を穿ち、８の陶器四耳壺の底部が挿し込むように置かれている。黒褐色砂質土の覆土中に、四耳壺の胴部以上の破片と多くの遺物が散在している。１～３はガラス玉である。１は赤味の強い茶褐色であるが表面は銀化している。串刺し団子状のガラス棒を折りとり、破面を研磨したものである。２はマリンブルー、３はスカイブルーの発色である。４、５は白磁平皿である。６は龍泉窯系青磁碗で、外面に片切彫と櫛描の蓮弁文をもち、内面にもヘラと櫛による施文を行う、古いタイプである。７は口縁部内面にうすい飴色の釉が輪状にかかり、内面および外面体部下半までに黒釉を施す天目碗である。広東省西村窯などに故地が求められている。８はＢ群の陶器四耳壺で、内外面にオリーブがかった不透明釉がうすくかかる。外底に草書の墨書が見られるが判読できない。９は糸切底土師小皿で、口径9.5㎝、器高1.0㎝を計る。10は瓦器碗で外面黒色、内外面を研磨している。８の四耳壺を蔵骨器とした火葬墓を、上部掘方で壊したものであろう。12世紀半ば時期が考えられる。

375号土壙　(Fig. 102　PL. 42) Ｇ－Ⅱ－ｂ区下部検出遺構である。地山白色砂層中に茶褐色砂が浅い皿状に落ち込んだもので、明確な掘方ではない。図示した遺物は１が白磁碗、２、３が同一個体と思われる白磁水注である。他に口径８㎝、器高0.9㎝の糸切土師小皿１点があり、遺物量は少ない。13世紀頃か。性格は明確でない。

376号土壙　Ｇ－Ⅱ－ｂ区下部検出遺構である。303号土壙に切られる。長軸2.0ｍ、幅1.6ｍの不定形掘方で深さ0.8ｍを計る。出土遺物は少なく、いずれも小破片で白磁碗７点、同安窯系碗１点、同皿１点、龍泉窯系碗８点、土師杯片２点が見られるにすぎない。13世紀後半代の廃棄物処理土壙か。

377号土壙　Ｇ－Ⅱ－ｄ区下部検出遺構である。長軸1.3ｍ、幅0.9ｍの長円形で、深さ0.5ｍを計る。遺物は少量で、須恵器杯、土師質土器等の小片が出土しているにすぎない。９世紀代の遺構である。

378号土壙　(Fig. 102　PL. 42) Ｇ－Ⅱ－ａ区下部検出遺構である。379号土壙を切り、303号土壙に切られる。掘方の全体形は不明であるが、深さ0.9ｍを計る。出土遺物はやや多く、各時期混在する。図示した遺物は、１が外面体部に　鎬蓮弁文をもつ龍泉窯青磁碗である。２は同じく碗で腰の屈曲が強く、体部外面に鎬蓮弁を、見込にヘラ描き劃花文をもち、高台畳付を除いてガラス質の濃緑色透明釉が厚くかけられている。３は龍泉窯青磁皿で茶味の強いオリーブ釉がかかる。４は高台付白磁皿、５も高台付の白磁深皿と思われあまり例を見ない器形である。見込に輪状の目跡が残る。６は白磁平皿で外底に墨書が見られる。「尤」の半欠か。７は白磁壺、８は青白磁碗で無文、乳濁した淡青色半透明釉が内外面にかかる。口ハゲになる

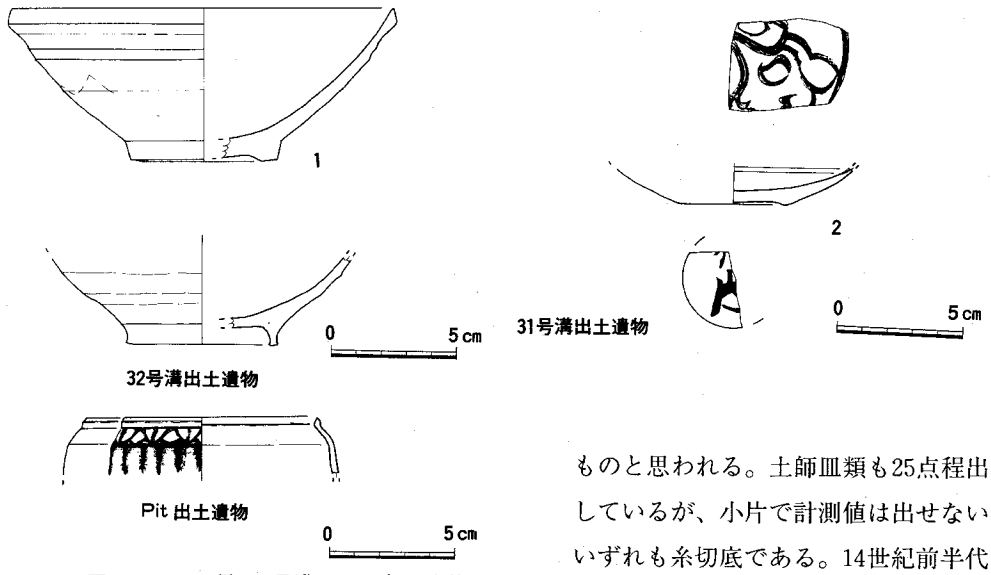


Fig.103　31号,32号溝, Pit 出土遺物

ものと思われる。土師皿類も25点程出土しているが、小片で計測値は出せない。いずれも糸切底である。14世紀前半代の廃棄物処理用土壙である。

379号土壙　(Fig. 102) G－Ⅱ－a区下部検出遺構である。378号土壙に切られる。378号土壙とほぼ同形同大の掘方であるが、白磁碗、皿、陶器四耳壺、須恵器、土師杯の破片が各1点出土しているにすぎない。13世紀頃かと思われるが性格不明。

31号溝　(Fig. 103 PL. 25) G－Ⅰ－d・e区下部検出遺構である。北側片面にのみテラスをもつ二段掘りの溝で、掘方上面最大幅2.5m、下面幅0.9～0.7mを計る。次年度報告予定のH区途中まで二、三の土壙に切られながら約13mが検出されているが、H区側ではテラスは認められない。検出距離は長くないが、主軸はほぼ東西をとるものと思われる。E区で検出された大規模な12号溝とほぼ直角をなす。素掘りで土留め等の施設や水の流れた痕跡もなく、出土遺物も少ないことから、極めて短期のうちに埋没しており地割等の区画を示す溝ではないかと思われる。図示した遺物は、1が口縁を肥厚させる白磁碗で、2が内面にヘラ描の花文をもつ白磁平皿で、外底部に墨書がみえるが、判読できない。

この他白磁碗Ⅲ類1点、Ⅶ類1点、龍泉窯青磁小碗1点、陶器6点、須恵器16点などの小片がある。土師皿類には計測可能なものに大型の杯があり、糸切りで口径16cm、器高2.7cmを計る。340号、341号、369号土壙等に切られており、12世紀後半から13世紀前半頃が考えられる。

32号溝　(Fig. 103) G－Ⅱ－c区下部検出遺構である。363号、310号土壙に切られ3.8m程が検出されている。幅0.3m、深さ0.25m程のV字形の断面をなす浅い小規模な溝で、やや湾曲するものの主軸は真北に近いが、わずかに2°程東偏する。西側に掘立柱建物群と思われるピット群があり、これらの雨落溝の役割を果たしたものであろう。出土遺物は図示した高台付の研磨土器の碗のほか、土師皿類の小破片6点が出土しているのみである。12世紀後半から

13世紀の時期で把えられる。

33号溝　Ｇ－Ⅱ－ｅ区下部検出遺構である。幅0.95ｍ、深さ0.5ｍで断面Ｖ字形をなす。両端を362号、366号土壙に切られ、わずか1.5ｍの長さしか検出されておらず、確実に溝とは断定できない。主軸方向はほぼ南北をとる。出土遺物は土師皿小破片が６点みられるのみである。切り合いから12世紀後半から13世紀にかけての時期が考えられる。

ピット群　(Fig. 103) Ｇ－Ⅰ区とⅡ－ｃ区を中心に、上下両面で多数の柱穴と思われるピットが検出されている。これらのピットは大型の土壙等の見られない部分にのみ検出されているもので、本来は広く分布するものであり、検出されていない区域は後世の遺構掘込等により消失していると考えられる。31号溝にほぼ平行または直交する方向で柱筋が並ぶように見えるが、個々のピットについては時期の認定が困難で、かつ長期にわたることが考えられ、ピット間の同時性を把握できない。そのため敢えて掘立柱建物の推定復元は行っていない。遺物は微量で小破片かつ混在が多い。Fig. 103に示した遺物は、Ｇ－Ⅱ－ｃ区下部検遺構の383号ピットから出土した青白磁小壺で外面に菊弁を刻み、口縁の口ハゲ以外は半透明のスカイブルーの釉がかかる。

２）Ｇ区遺構外出土の遺物 (Fig. 104～109　PL. 1・42・43・49・50)

青磁　１～３は龍泉窯系碗Ⅰ類、４は同双層碗の底である。５～８はⅠ類碗に対応する皿である。５は古式な文様を有しており、釉にはなまこが少し出ている。９は青緑色の、砧に近い釉がかかる。10は龍泉窯系青磁香炉。口は円いが身は隅丸方形で、四面のパネル状印花文が見られる。釉は緑を帯びたガラス質で厚くかかり、氷裂がある。明代中期の青磁か。12～16は同安窯系青磁。15は黄色っぽい氷裂釉のかかる大鉢で、フィリッピンなどではよく出土例がある。17～21は龍泉窯・同安窯系に属さない青磁のⅡ類である。22は越州窯系青磁、23は高麗鉄絵青磁の瓶の肩、胎土は灰色で砂をかみ粗い。淡いオリーブを帯びた透明釉がかかる。24の印花皿は高麗青磁と思われる。外底を全面に施釉し、白い目を３個置いている。釉は青緑色不透明で、氷裂がある。

白磁　25はⅣ－３、見込に重ね焼きのため釉をはいだ跡がある。27はⅦ－１類、土は黄白色、釉も同色で不透明、氷裂がある。酸化気味で焼成不足である。他にⅥ類、Ⅸ類の碗、高台付皿Ⅰ－２、同Ⅱ類と平底皿Ⅵ類などで、墨書のある遺物を中心に紹介した。しかし28の「鄭□」、30の「□恵(カ)」と39の花押の他、判読は困難である。また44～46は胎土灰色やや粗、釉は青みを帯びた透明釉で、青灰色に見える杯である。施釉は下半露胎で、釉の上に砂をおいて重ね焼をしている。中国物のように思われるが、なお例の増すのを待ちたい。

青白磁　49～51は青白磁としては珍しくない皿、および合子である。53～55は同一個体と思わ

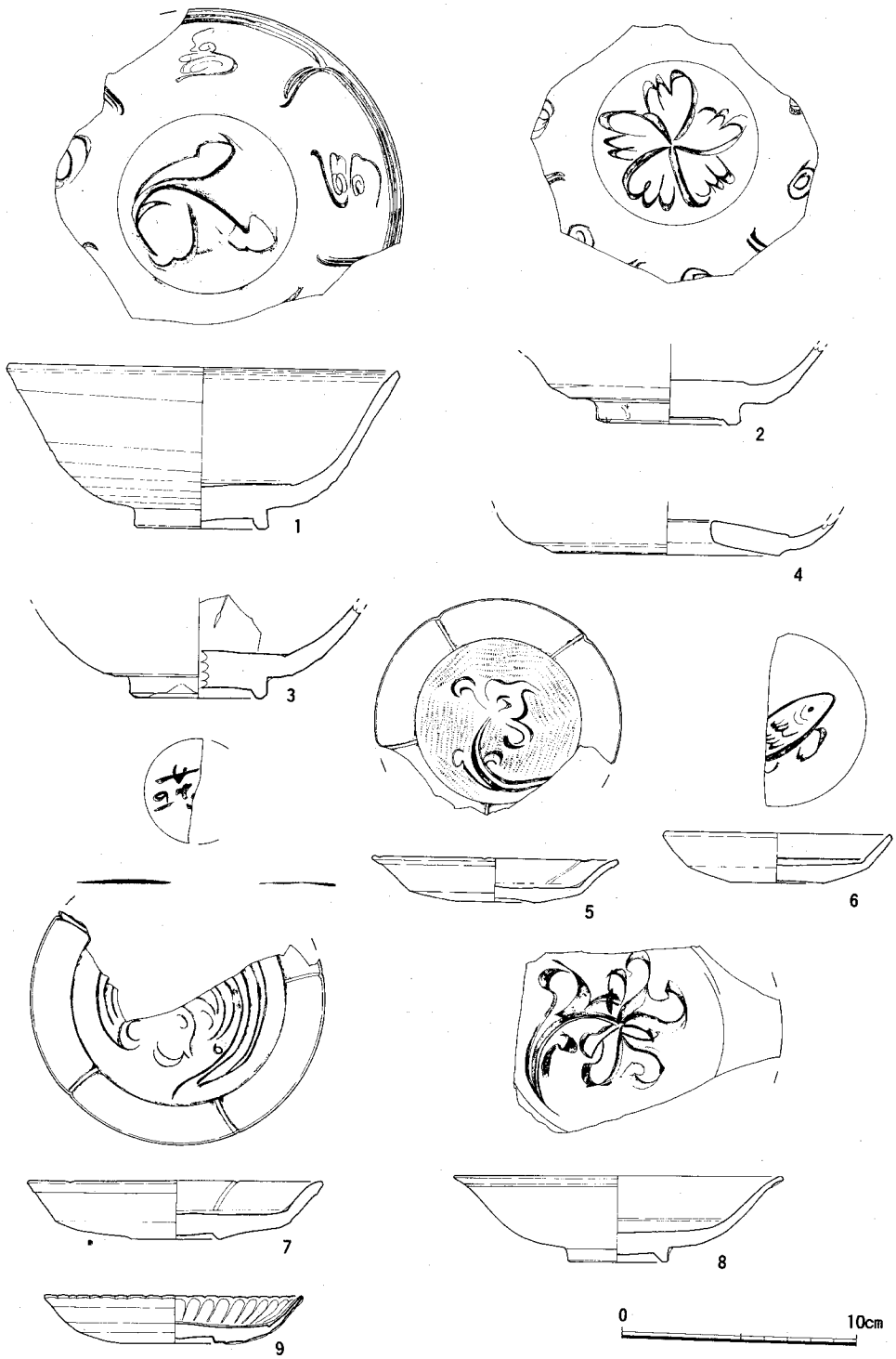


Fig.104　G区 遺構外出土遺物(1)

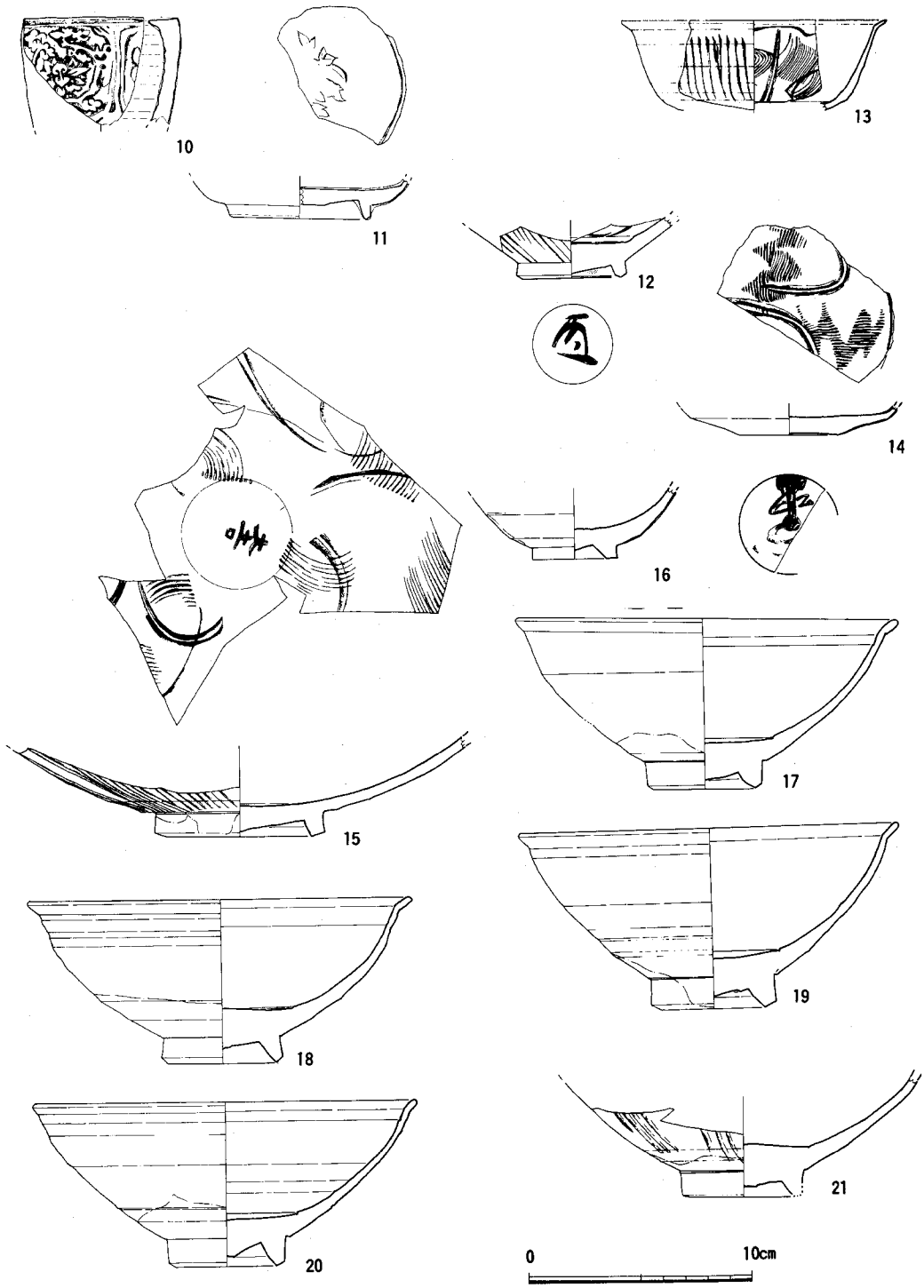


Fig.105 G区 遺構外出土遺物 (2)

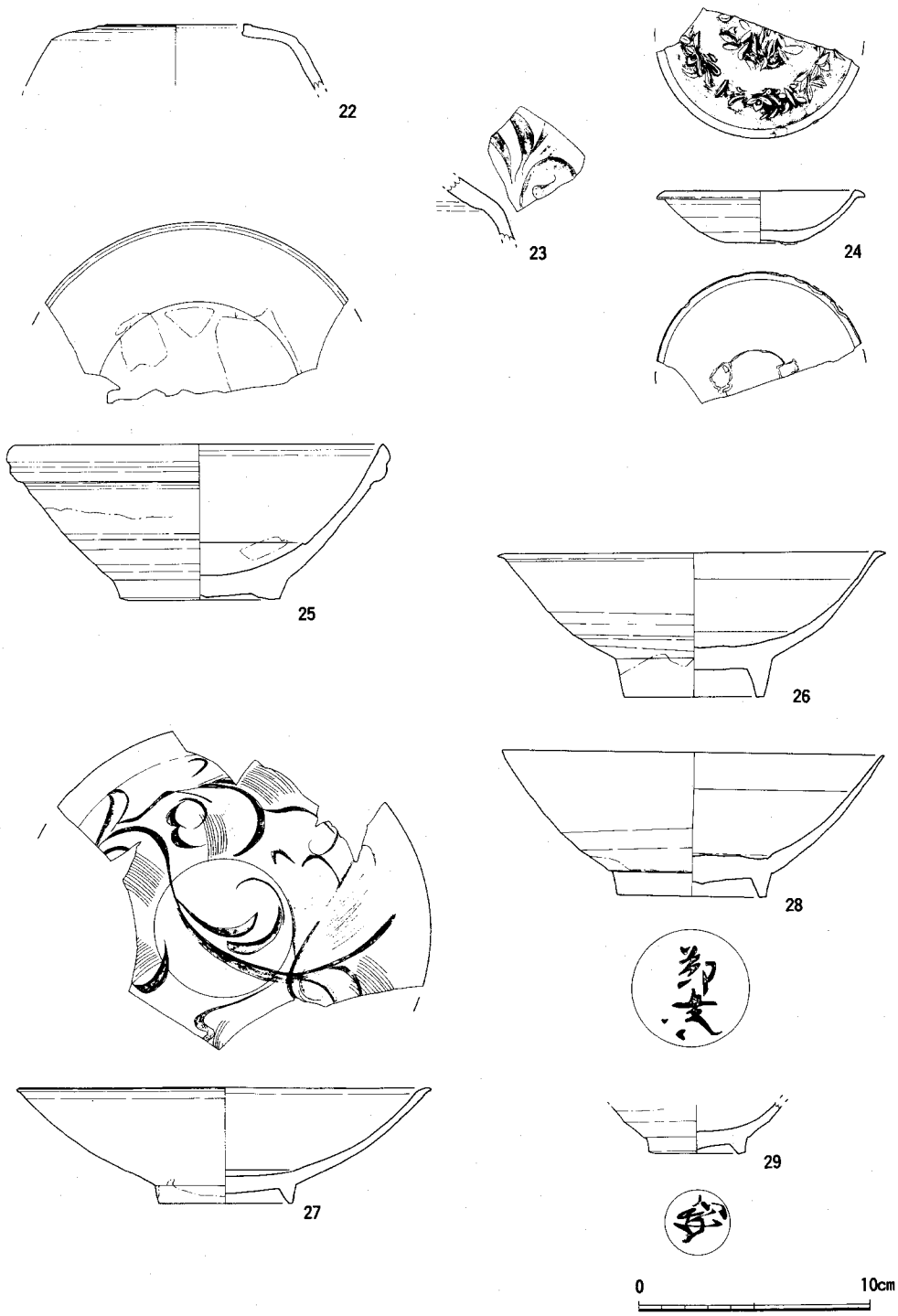


Fig.106　G区 遺構外出土遺物(3)

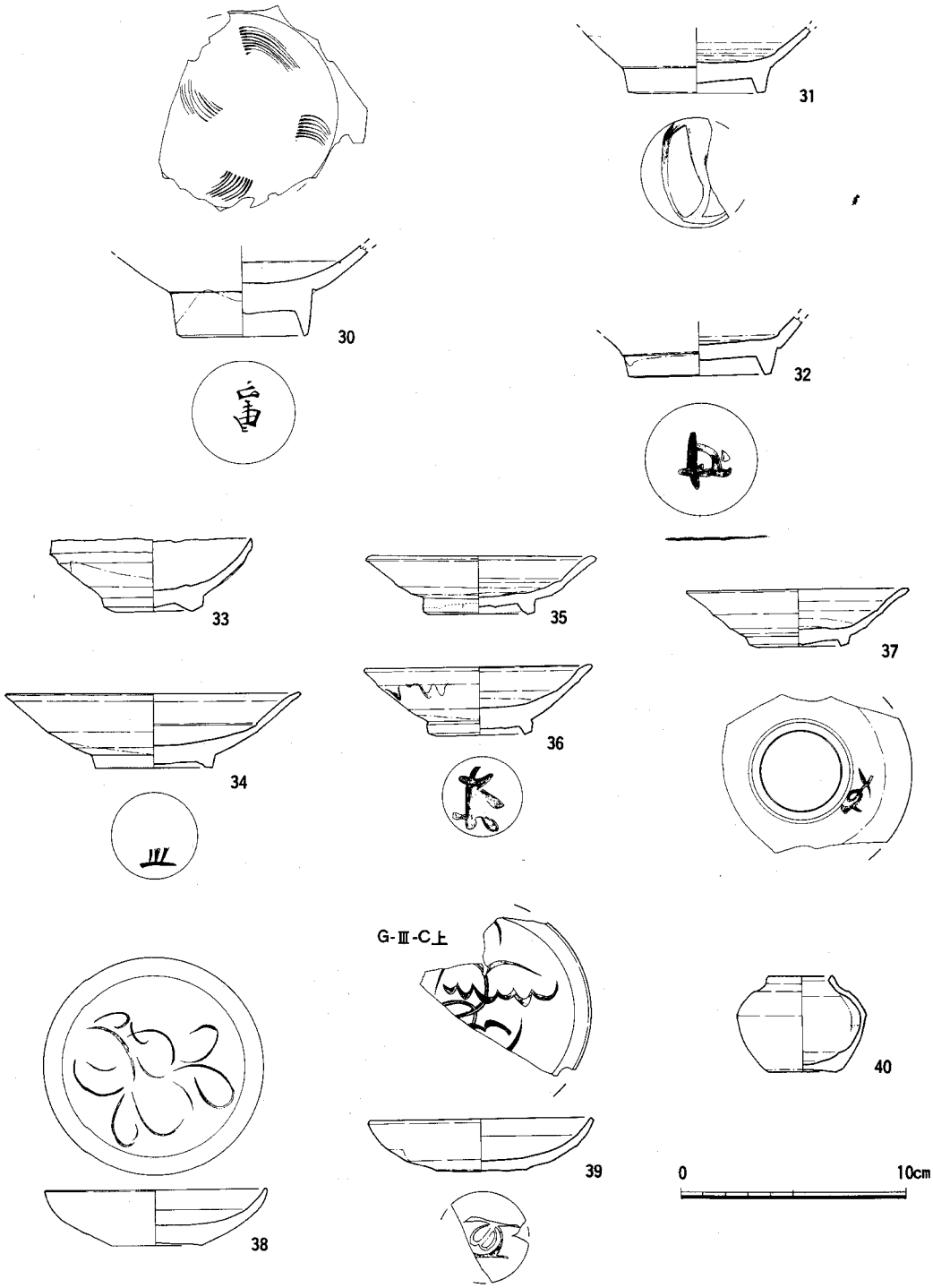


Fig.107　G区 遺構外出土遺物(4)

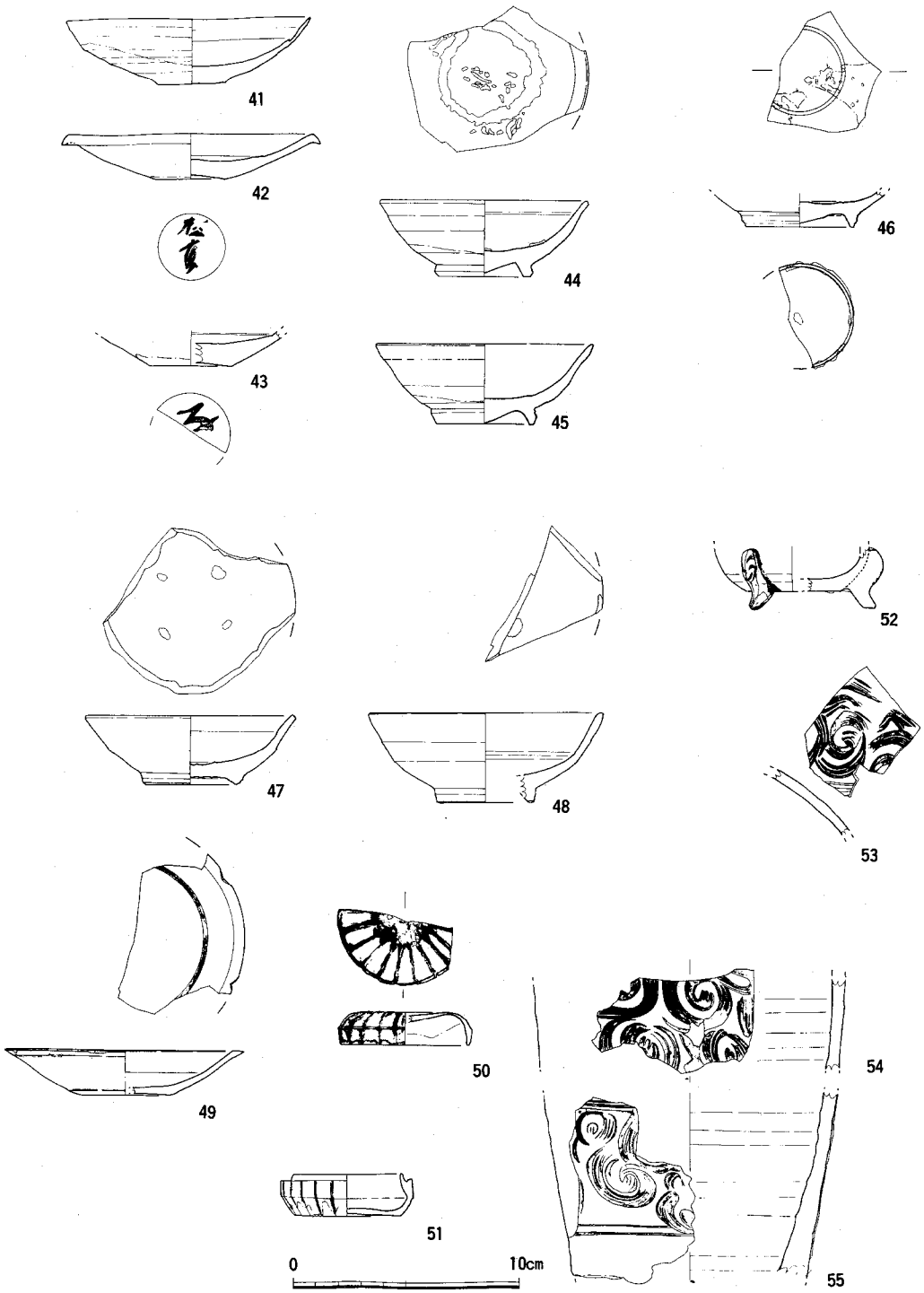


Fig.108　G区 遺構外出土遺物(5)

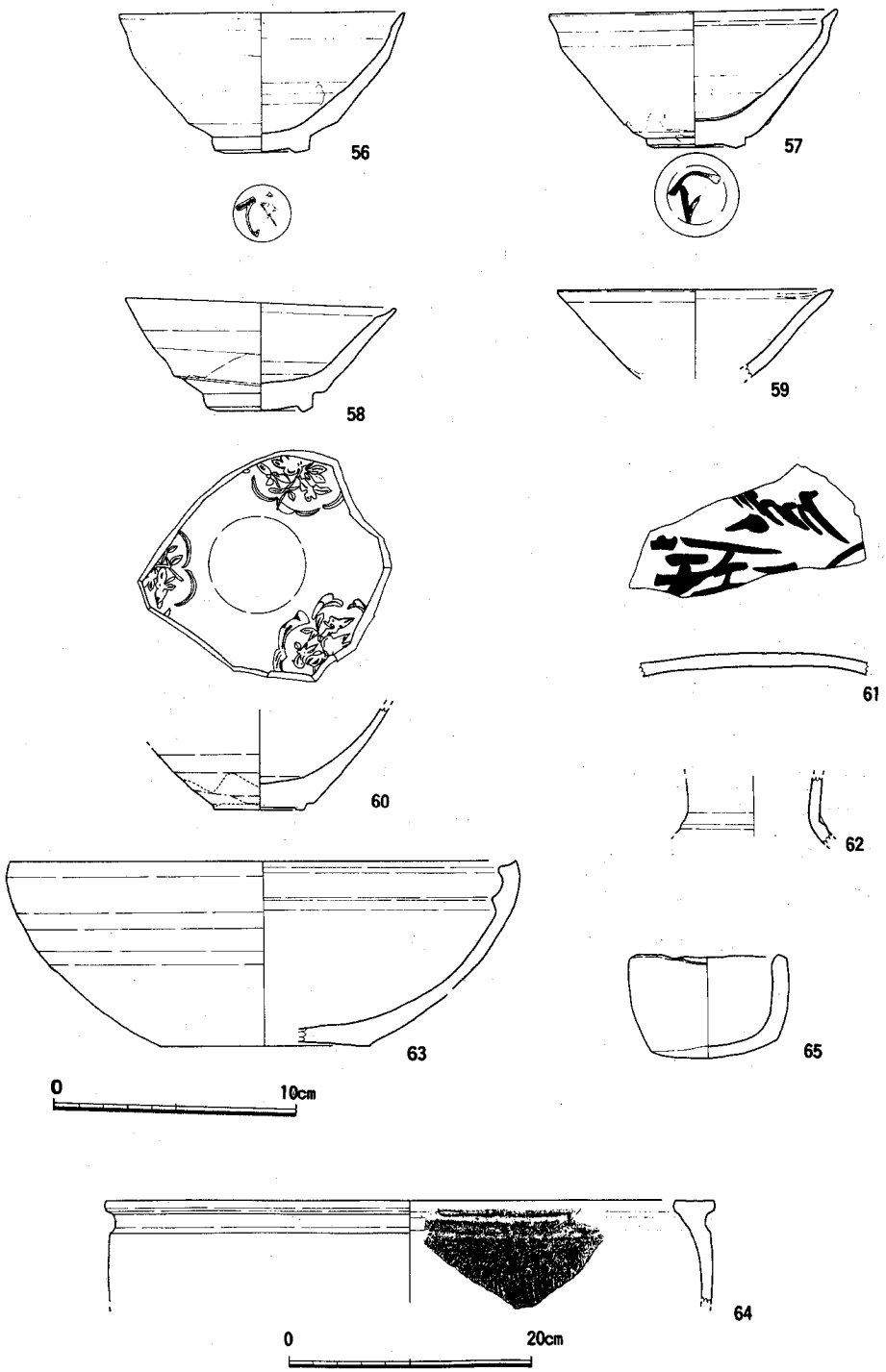


Fig.109　G区 遺構外出土遺物(6)

れる厚手の破片で、13～14世紀の梅瓶である。

黒釉磁　56は胎土暗灰色、57はやや薄めで灰色を呈し細かい。露胎は両者とも薄茶色で、57には一部下釉をかけたと思われる茶色の部分が残っている。釉は黒く、表面に茶色の禾目ができかかっている。建盞タイプの茶碗である。58、59は広東省広州西村窯、もしくは潮州窯製品と思われる茶碗である。胎は灰色、黒褐色のガラス釉がかかるが、口縁では黒褐色釉は削りとり、透明釉をかけている。60は江西省吉安のいわゆる吉州天目である。胎は肌色がかったベージュ色で、ザラついた感じがある。器内及び器外の高台近くまで黒釉をかけ、釉の及ばない部分には更に一度薄い釉汁をかけていると思われる。その後に狭く平坦な高台脇を削り出し、外底を浅くくっている。器内壁に窓でかこんだ花文を３箇配している。文様は同一モチーフを切り紙細工で切りとり、藁灰をしませて黒釉の上に貼りつけ焼いたものであろう。62は60に比して濃い色の胎であるが、印象はよく似ている。天目のような黒い不透明な釉がかかっている。瓶の頸であろう。

李朝陶器　47、48は李朝の陶器と思われる。いずれも砂目の杯であるが、47はもろい黄白色の砂まじりの胎に青い透明釉がかかり、48は暗灰色の胎にうすく透明釉がかかっている。

陶器　61は黄釉褐彩盤。胎は褐色の細かい土に同色の砂粒が見える。通常のＡ群の土ではなく、ｃ群の土である。釉は不透明で灰オリーブ色である。鉄絵文は文字の一部と思われる。63は灰褐色の土に、白い大粒の砂粒を多量に含んだ無釉の鉢。すりこ木を用いて擂鉢として用いているため、器内は磨滅して平滑になっている。64、Ｔ字口縁の大形甕である。ｃ群の陶器であるが還元炎で焼かれ、釉は不透明灰オリーブ色、胎は白黒の砂粒混じりですっかり暗灰色に焼けている。内外に細かいたたき目が見える。

土師質土器　65は手捏ね整形の小型容器である。内外面ともに黒褐色に焼け、外面にはススが付着している。滑石製品にも同様の器形が見うけられる。煮沸用であろう。

６．まとめ

以上、博多遺跡群における地下鉄１号祇園町工区Ｅ、Ｆ、Ｇ区の調査概要を述べてきた。ここで調査成果について若干まとめておきたい。

今回の調査地点は、現標高5.0ｍ前後であり、最下遺構検出面（地山白色砂層検出面）の標高は3.2～3.5ｍ前後であり、地表下1.2ｍ前後は、近世以降の攪乱や建物基礎によってほぼ壊滅状態であって、中世遺物包含層は非常に薄い。これは上呉服町付近の標高６ｍ程の地点である博多駅築港線関係調査区などでの遺物包含層の厚さ（地表下４ｍ前後）に比べると雲泥の差である。このようなうすい包含層をもちながら、遺構自体は多く、しかも旧博多駅前の繁華街であったためか近現代の攪乱土壙も多く、遺構自体の検出状況は良好でないといわざるを得ない。

遺構は廃棄物処理用と思われる土壙と井戸掘方が大半を占めている。これらの遺構からは多くの遺物が出土しているが、単一時期の一括遺物を出土する例は少なく、多少の差こそあれ、掘削時以前の遺物が混入しているのが通例である。また遺物を殆ど含まない土壙もあり、性格を把握できない。今回の調査区では明確な埋葬遺構は少なく、わずかに２基程の土壙墓らしきものが検出されたのみである。時代的な吟味は今のところ行っていないが、これは、Ａ～Ｄ区において比較的多くの墓が検出されていることも含め、中世各期における土地利用の違いを示すものであろう。Ｆ区で馬の埋葬遺構が検出されている（237号土壙）。馬骨についてはこれまでの出土例では埋葬遺構をもつものはなく、殆どが溝から散在して出土するものである。幼馬に対する哀惜の情によるのであろうか。

これらの遺構によって寸断されつつも、溝遺構が検出されている。これまでの路線内調査区Ａ～Ｄ区でも溝が検出されており、雨落ち溝等の小規模な溝を除き、まとめてみたのがFig. 110である。このうちＡ区３号溝は、南東側立上りしか検出されていないがFig. ２の地形図に見られるように、この付近から櫛田神社方面に開析している谷状地形が見られ、その自然谷の一部と思われ厳密には溝といい難い。Ａ区からＢ区にかけて、調査区を斜断する５号溝は、主軸を真北よりＮ－88°－Ｅのほぼ東西方向をとる。この溝は上下２層に分けられ、上層では14世紀前半代の糸切底土師皿類がほぼ完形の状態で大量に廃棄されており、これが溝廃絶の時期を明確にしている。また、溝最下面では遺物量は上層より少ないものの、糸切底を全く含まない、ヘラ切底のみの土師皿類が出土しており、この溝の造営年代は少なくとも11世紀後半代に求められる。Ｂ区６号溝は現町筋に直交し、Ｎ－41°－Ｅの方向をとる。出土遺物には16世紀終末期の古唐津があり、豊臣秀吉によるといわれる太閤町割（1587年）の際のものかと思われる。Ｃ区７号溝は、多くの遺構に切られ必ずしも良好な状態ではないが、主軸方位は真北よりわず

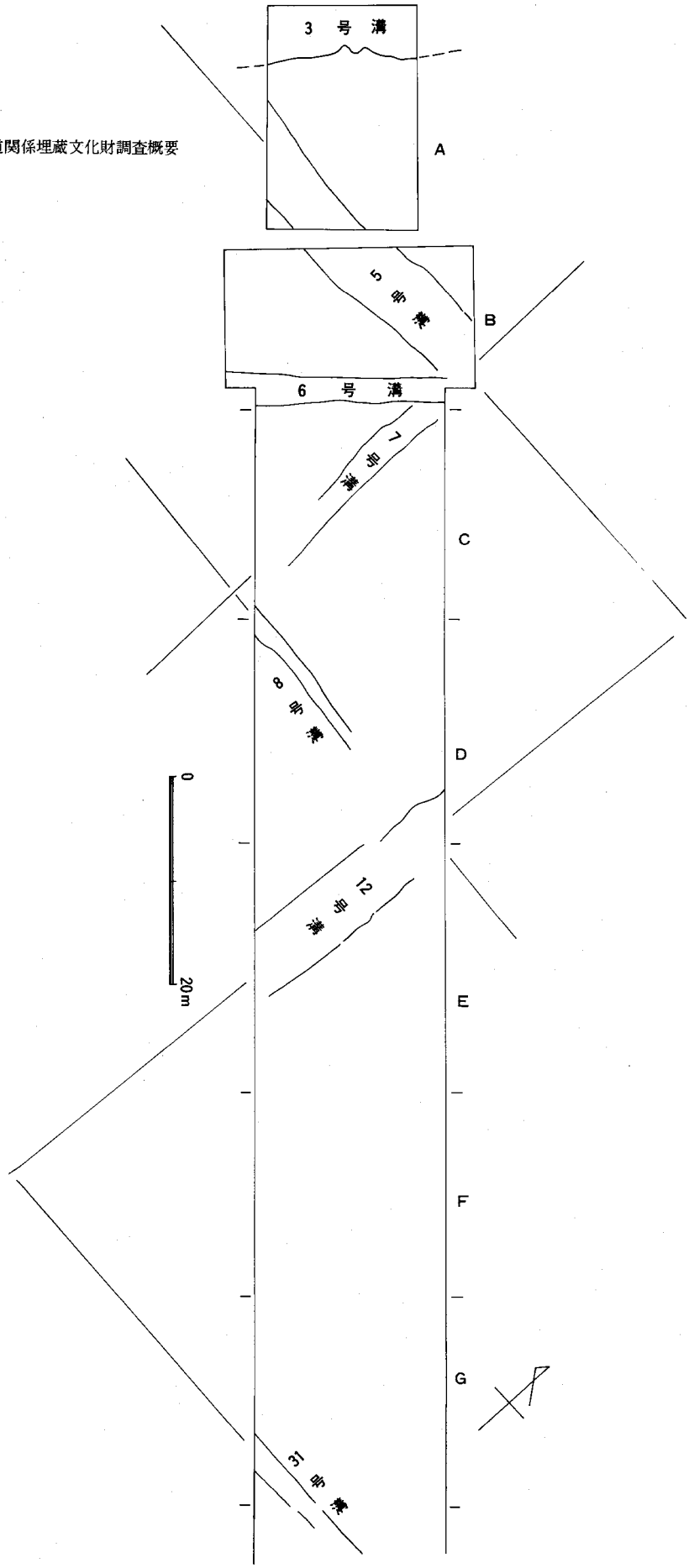


Fig.110　A～G区内検出主要溝概念図(1/600)

かに西に傾き磁北方向に近い。５号溝同様14世紀前半代の土師皿類が上層部分に多量に見られ、廃絶年代もこの時期に求められる。Ｄ区８号溝はやや小規模な溝である。わずかに歪みを見せるが、主軸方位は真北の東西方向よりわずかにずれ、７号溝とは約100°程の角度をなす。この溝の最上面には、火葬頭骨110体分の集積する遺構があり、この遺構は1333年、菊池武時の鎮西探題襲撃の際の菊池方将兵の首級である可能性が強く、８号溝の廃絶年代も14世紀前半代である。Ｄ区からＥ区にかけて検出された12号溝は、５号溝とほぼ同大でかなり大規模なものである。主軸は真北にほぼ近く、５号溝とはほぼ直角をなす。この溝も14世紀前半代に廃絶されたものであろう。Ｇ区31号溝は、やや小規模な溝であるがＨ区側に伸び、Ｈ区においては数回の作り変えが観察される。方位はほぼ真北に対し東西方向を向く。12世紀後半から13世紀前半頃の時期が考えられる。これらの路線内で検出された溝は、14世紀前半代以前に営まれているほぼ東西南北を向くものと、現町割と平行もしくは直交する16世紀終末以降のものとが見られた。東西南北を向く溝は規模の大小こそあれ広く分布しており、鎌倉期以前の博多の地割を示すものといえよう。また、太閤町割以前の博多の町割を示すものとして、永禄６（1563）年以前に描かれたとされる「聖福寺古絵図」がある。この古絵図は、聖福寺を中心に寺内町まで描かれており、明確な方位こそ示されないが、基本的な方向については、のちの太閤町割の町筋に近いものである。近年、博多駅築港線の調査において、太閤町割を良好に残すという現町筋より、わずかに西偏する15、16世紀代の溝が確認され、また東に隣接する博多第35次調査地点では、幅６ｍ程の基幹道路と思われる道路遺構が検出されており、道路方向も築港線検出溝等と同一方向で、現町筋より20°程西偏する。道路は両側に側溝をもち、たび重なるかさ上げ工事により道路面は版築のような層の堆積を見せている。また側溝も少なくとも６回の改修．築を行っている。この道路遺構の初源は今のところ不明であるが、14世紀から16世紀末までは継続使用されている。この方向の道路は、14世紀以前の東西南北の町筋と、太閤町割との間を埋めるものであり、また、「聖福寺古絵図」と同一期の町筋を示すものとして極めて重要な知見である。

出土遺物は多種多様である。遺物の数量および比率については後日を期したいが、既に報告した店屋町工区の場合と概ね同様であろう。弥生時代の遺物は殆ど認められず、周辺で発見されている甕棺墓地の分布から見ると東長寺付近から櫛田神社付近にかけて開析する谷状地形の谷頭部周辺にのみ集中するようである。古墳時代の遺物は少ない。前方後円墳が確認された第28次調査地点に近接しているが、関連遺構、遺物は見られず、少量の須恵器、土師器等が見られるのみである。奈良時代の遺物は調査区全域から出土している。主として８世紀前半から半ばにかけてのものである。これらの遺物は後世の攪乱を受け、プライマリーな状態で出土する例は少ない。わずかに168号土壙が見られるのみである。外底に「福」の墨書をもつ須恵器杯

も見られた。周辺調査地点でもかなりの遺物が出土しており、また石帯、帯金具等も各地で見られ官衙的性格の建物の存在も予想されている。平安時代前中期の遺物は少なく、遺構は確認されない。11世紀後半代から遺物は増え、12～13世紀代では膨大なものとなる。とりわけ中国製陶磁の量は圧巻である。博多の貿易都市としての面目躍如たるものがある。この時期の磁器には外底部に墨書をもつものが少なからずあり、今回の調査地点では、Fig. 7に示す花押墨書が7点まとまっており、この他Fig. 83のような「恵」の略字と思われる墨書3点、「林」1点、「四郎」1点、「丁綱」1点などが目立つ。この花押墨書は店屋町工区C、D区に2点見られるが、「丁綱」墨書を多数出した第4次調査地点には認められない。これらの墨書の意味については、亀井明徳氏によって「陶磁販売の所有権者を区別する表示である」という明確な解釈がなされている。(『綱首・綱司・綱の異同について』日本貿易陶磁史の研究　1986)。14世紀以降の貿易陶磁については量、質ともに衰える傾向を見せるが，博多駅築港線調査区をはじめとする上呉服町付近では、かえって量、質ともに豊かなものがあり、博多遺跡群における中心的な区域が、時代とともに移っていくのかもしれない。

以上、簡単にまとめてみたが、今回報告した地点は博多遺跡群全体からするとわずかな面積でしかない。その成果については周辺地点の調査結果を踏まえて総合的に見る必要がある。発掘調査件数は増え、それなりの成果は得られているが、まだまだ充分な体制とはいいがたい。また、遺物・遺構の多いこともあって整理報告が進んでいない部分も多い。今後いっそう整理報告の体制も整え、博多遺跡群の調査成果の総合的な把握をすることが必要であろう。

写真図版
PLATES

※縮尺不同
遺物番号は挿図と一致する。

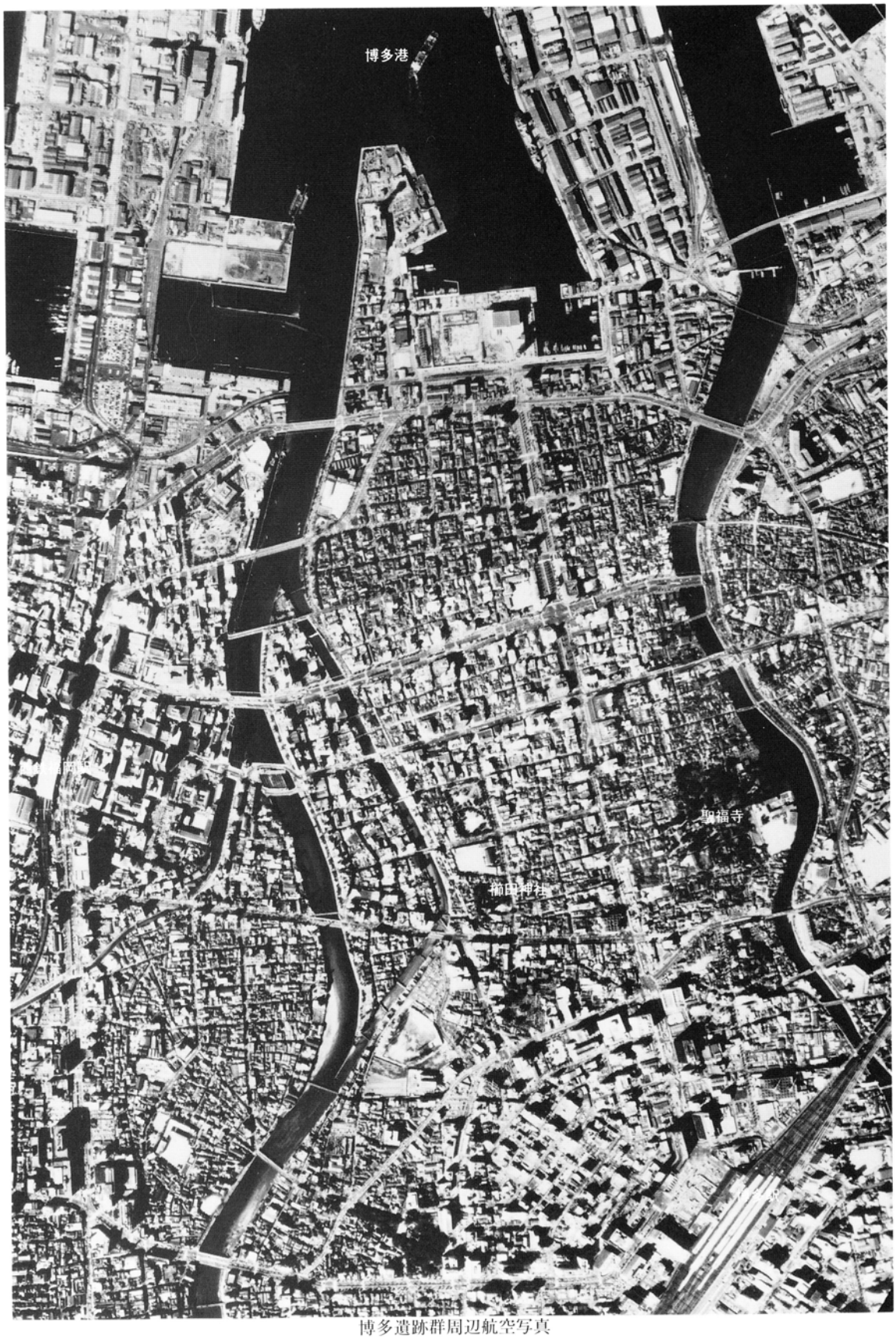
吉州天目碗　G区遺構外出土　底径3.77cm

青白磁灯明台　362号土壙出土

口径 6.75cm

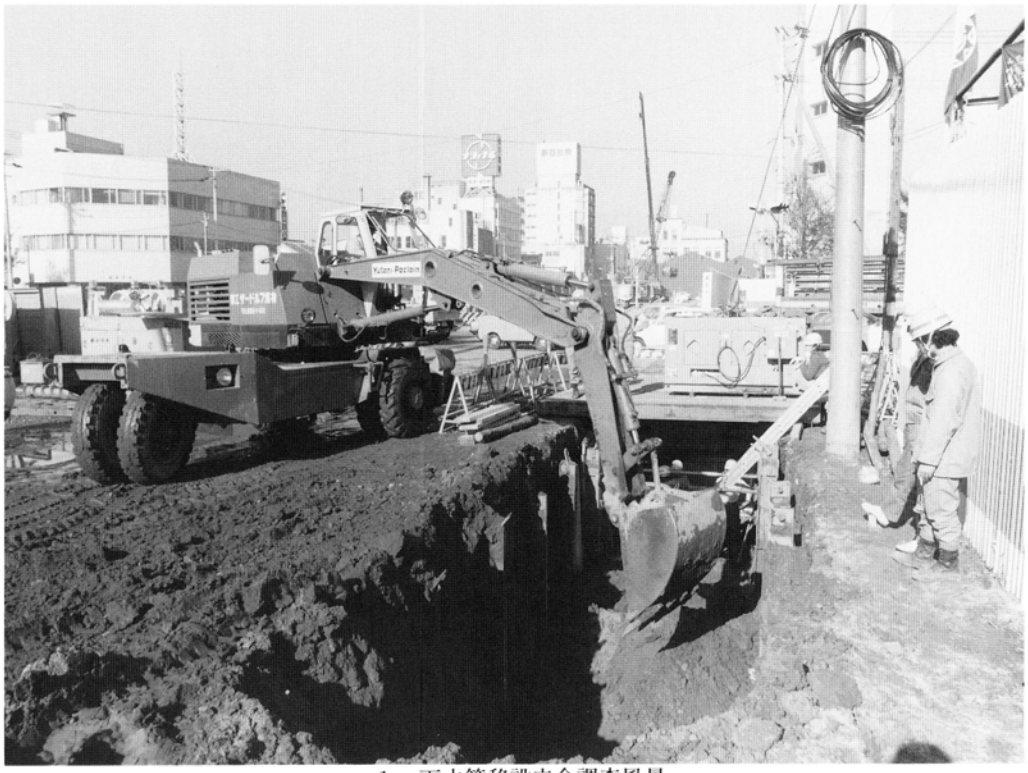
底径 4.23cm

器高 4.72cm

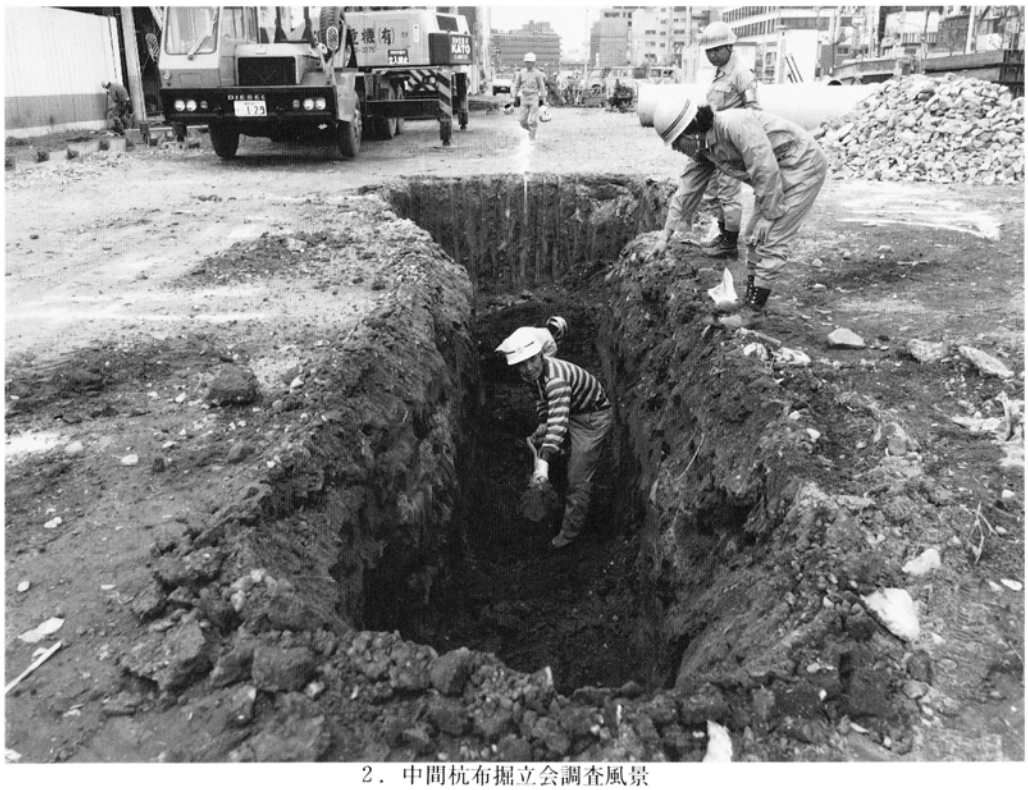


博多遺跡群周辺航空写真

博多眺望（博多駅上空より）



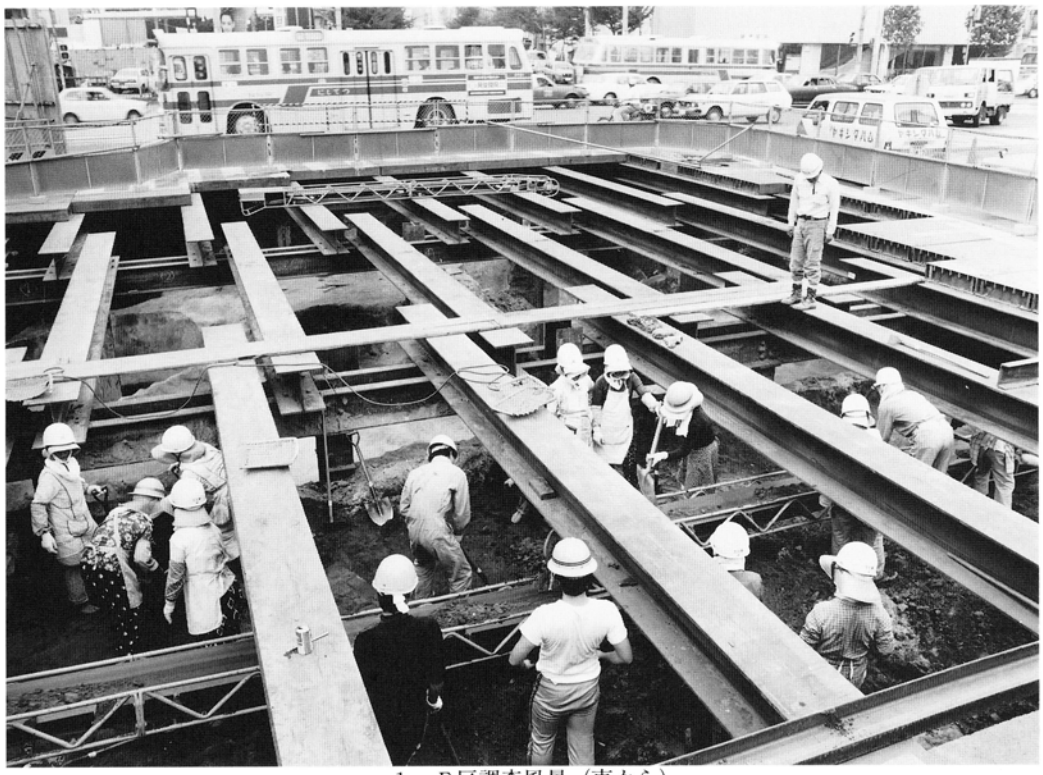
1．下水管移設立会調査風景



2．中間杭布掘立会調査風景

1．祇園町工区遠景（北から）

2．G区調査風景（南東から）

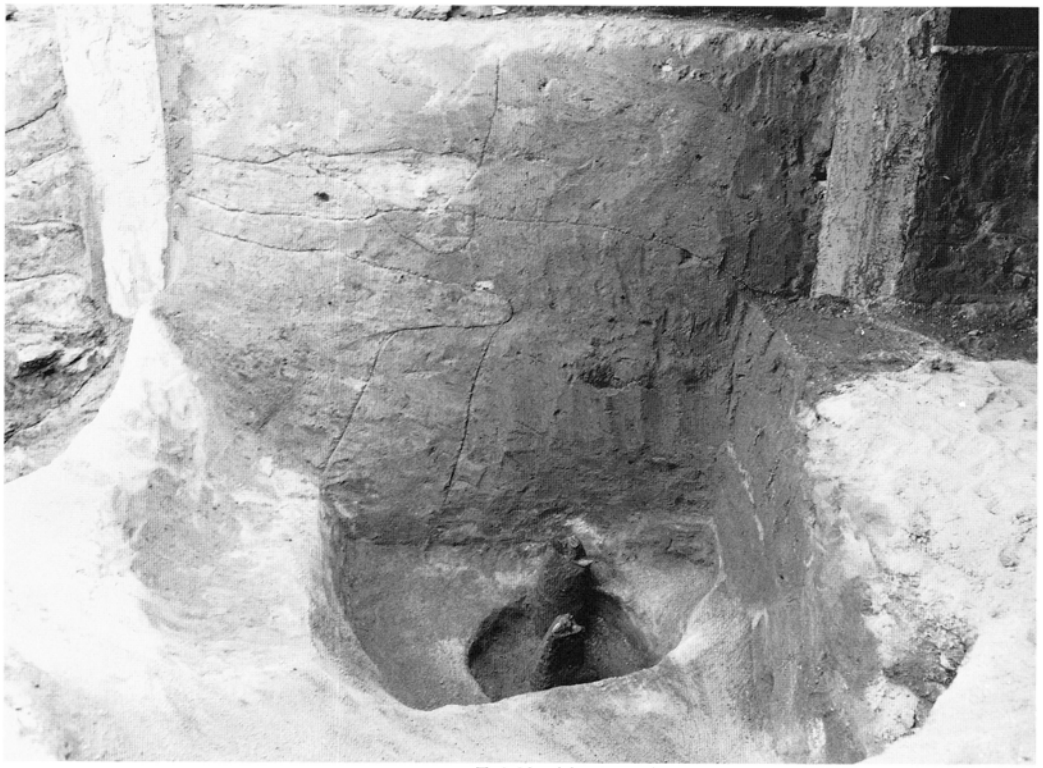


1．E区調査風景（東から）

2．E区12号溝調査風景（南から）

1．103号土壙（東から）

2．113号土壙（西から）

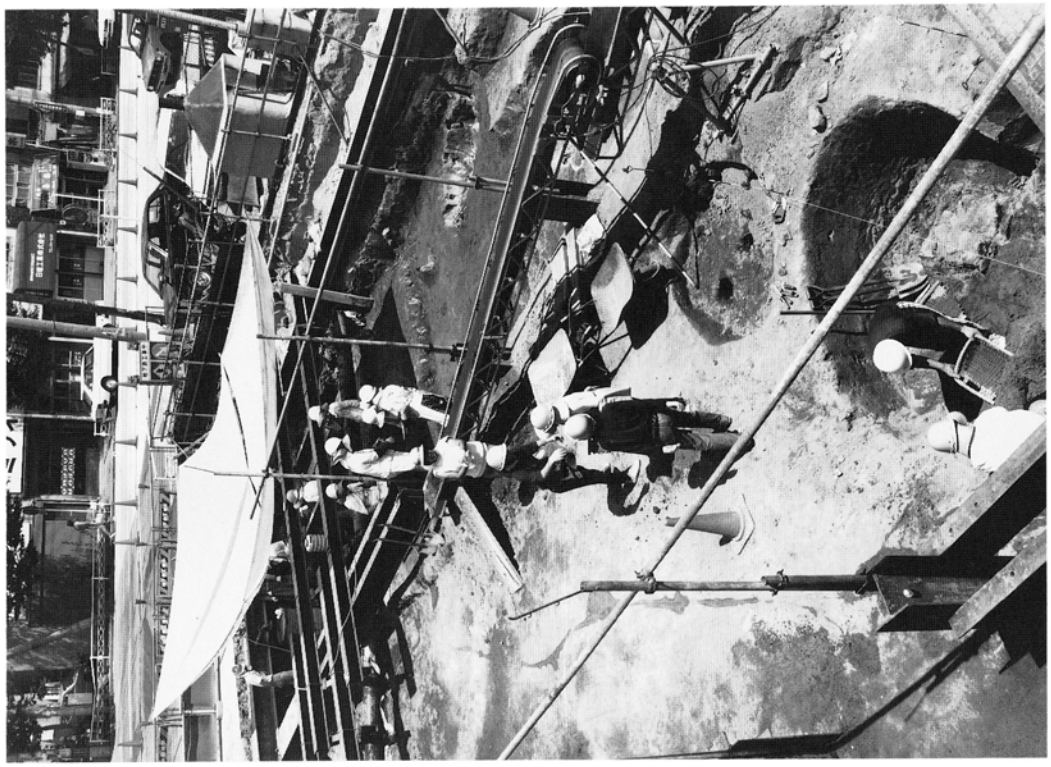


1．114号土壙（南西から）

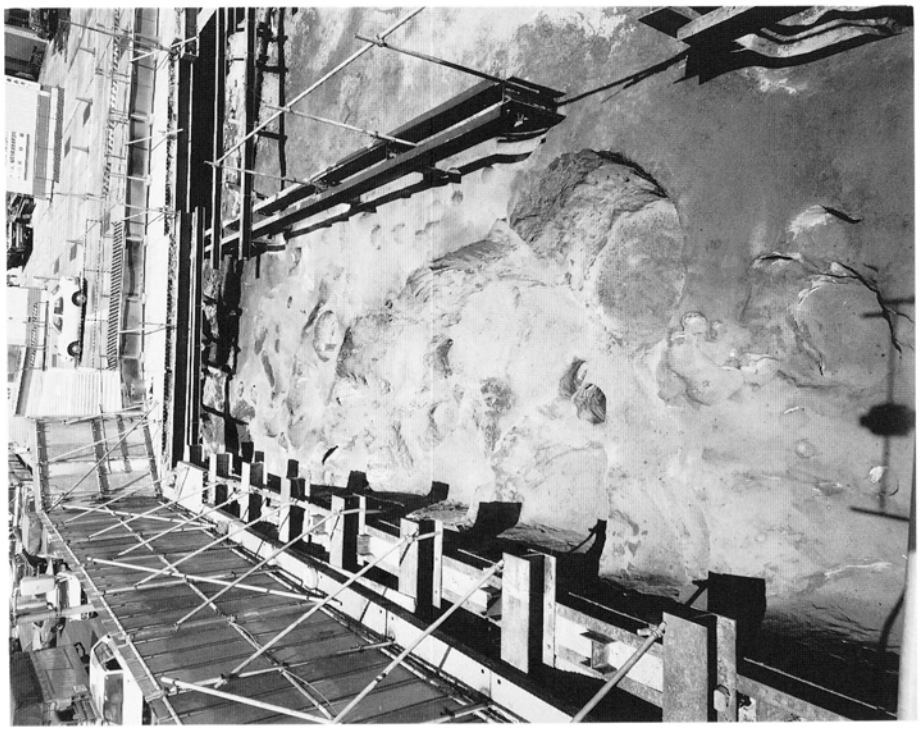
2．117号土壙（北から）

1．12号溝全景（南から）

2．12号溝土層断面（南から）

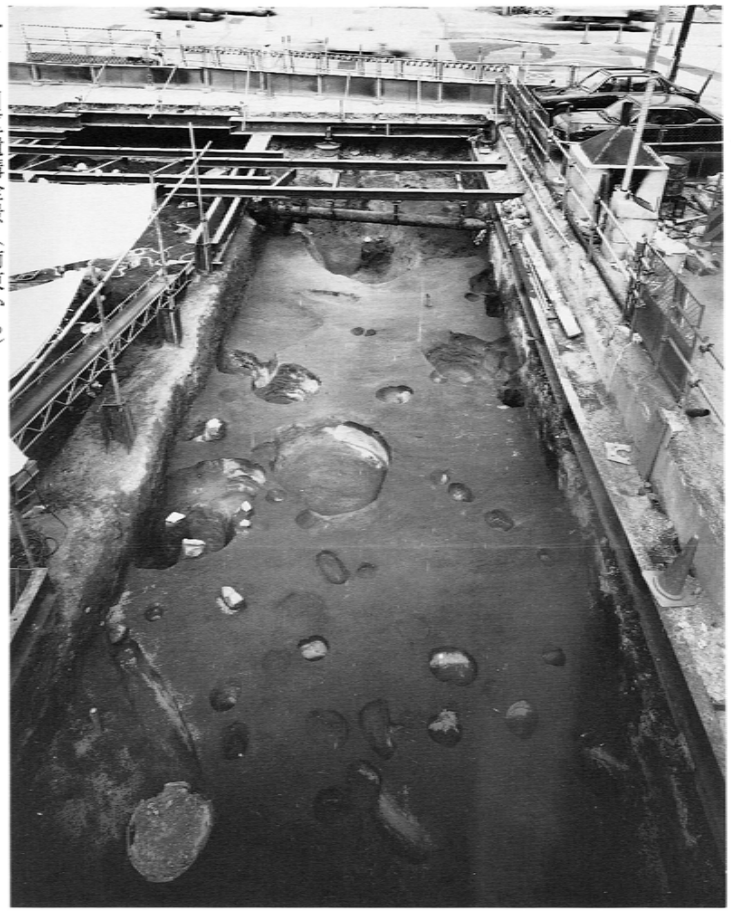


1. F区調査風景（南から）



2. F－I区遺構全景（南東から）

1. F－Ⅱ区遺構全景（南東から）



2. F－Ⅲ区遺構全景（南東から）

1．F－Ⅲ区21号溝（北東から）

2．237号土壙馬骨検出風景

1．237号土壙上面、馬骨出土状況（南西から）

2．237号土壙下面、馬骨出土状況（南西から）

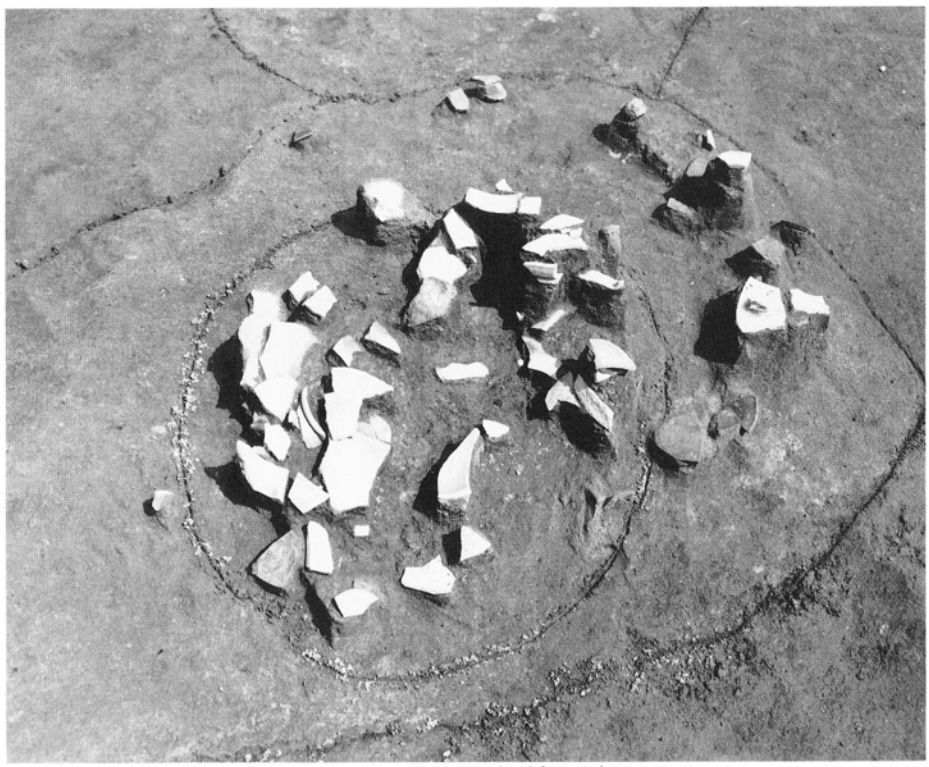
1. G－I区上部遺構全景（北西から）

2. G－I区下部検出遺構全景（北西から）

1. G－Ⅱ区下部遺構全景（北西から）

2. G－Ⅲ区下部遺構全景（北西から）

1．311号土壙（南西から）



2．313号土壙（南から）

1．316号土壙（北から）

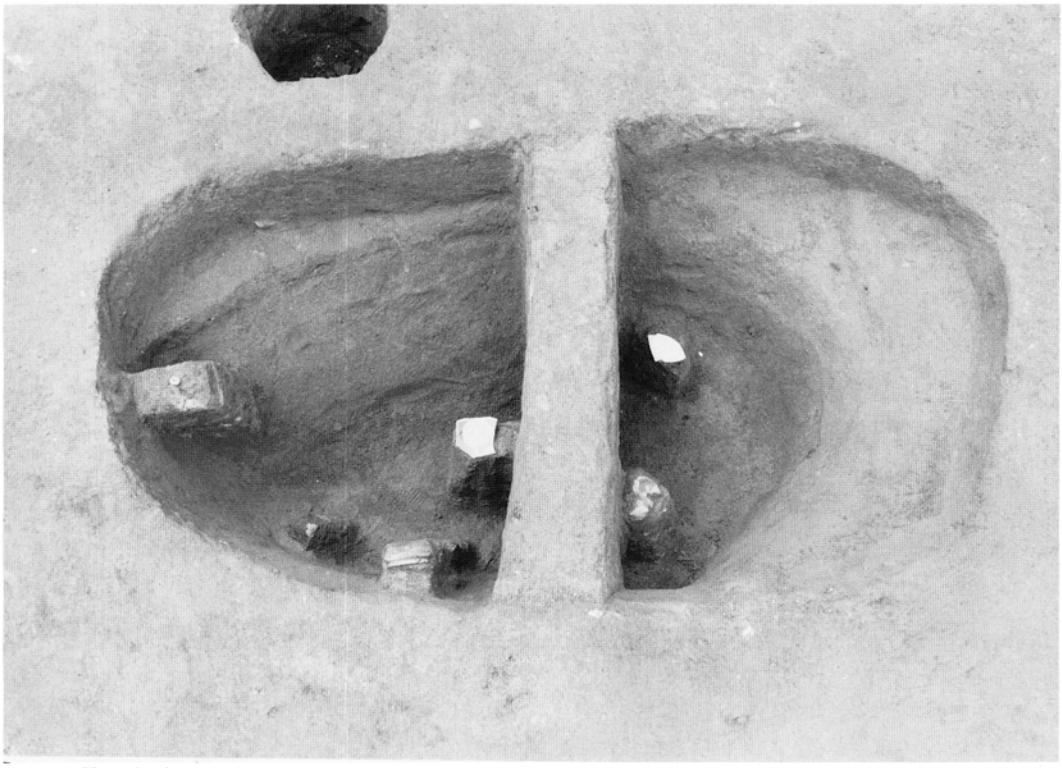
2．332号土壙（北から）

1. 334号土壙（西から）

2. 335号土壙（北から）

1．337号土壙（北西から）

2．337号土壙、墨書白磁出土状況（北西から）



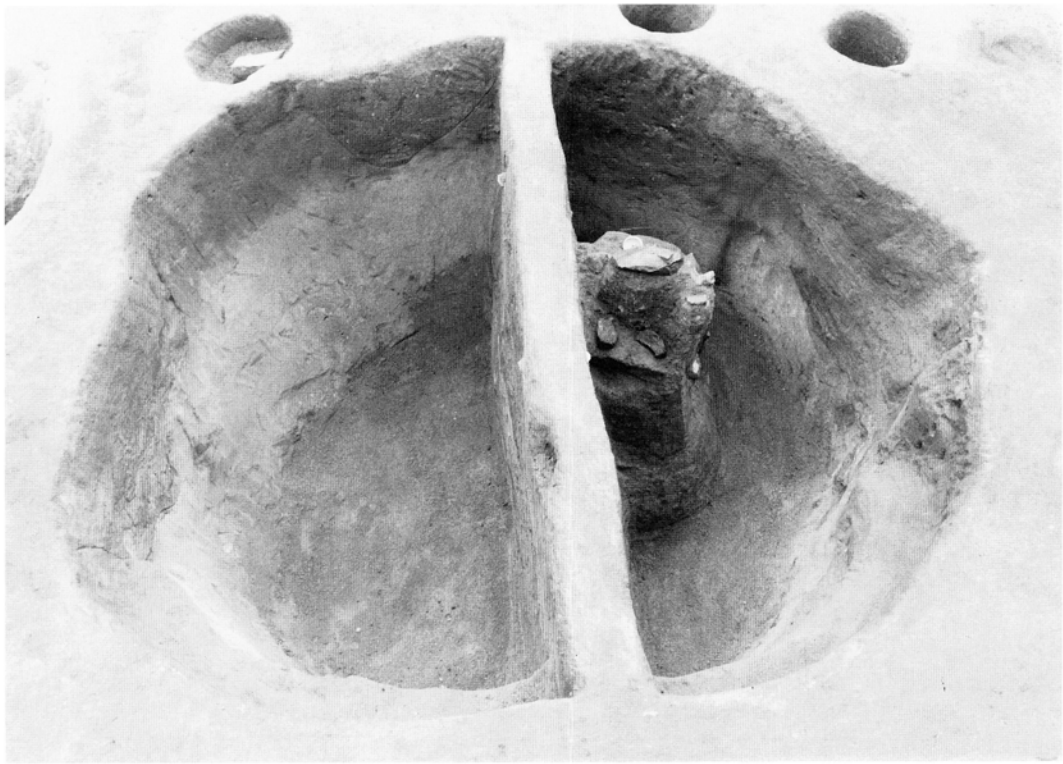
1．341号土壙（北から）

2．341号土壙土層断面（西から）

3．341号土壙ガラス玉出土状況（西から）

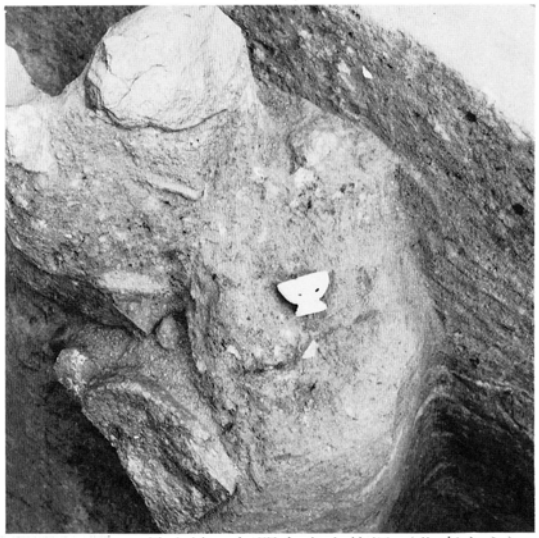
1．357号土壙（東から）

2．358号土壙（北から）

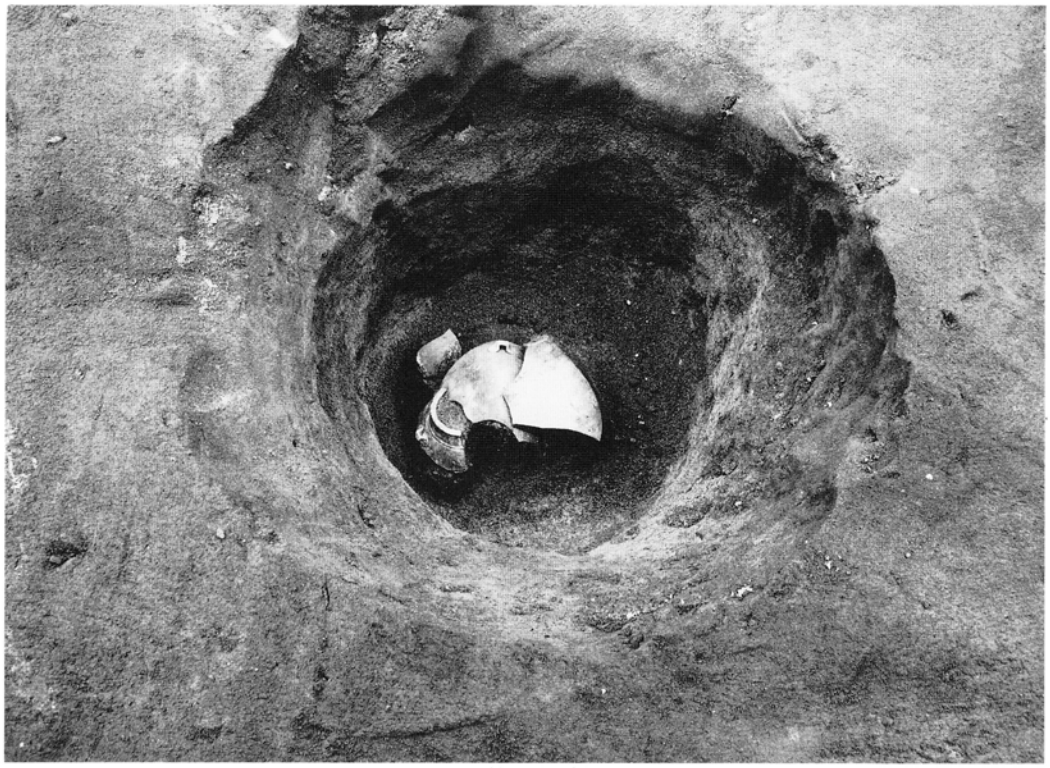


1．362号土壙（西から）

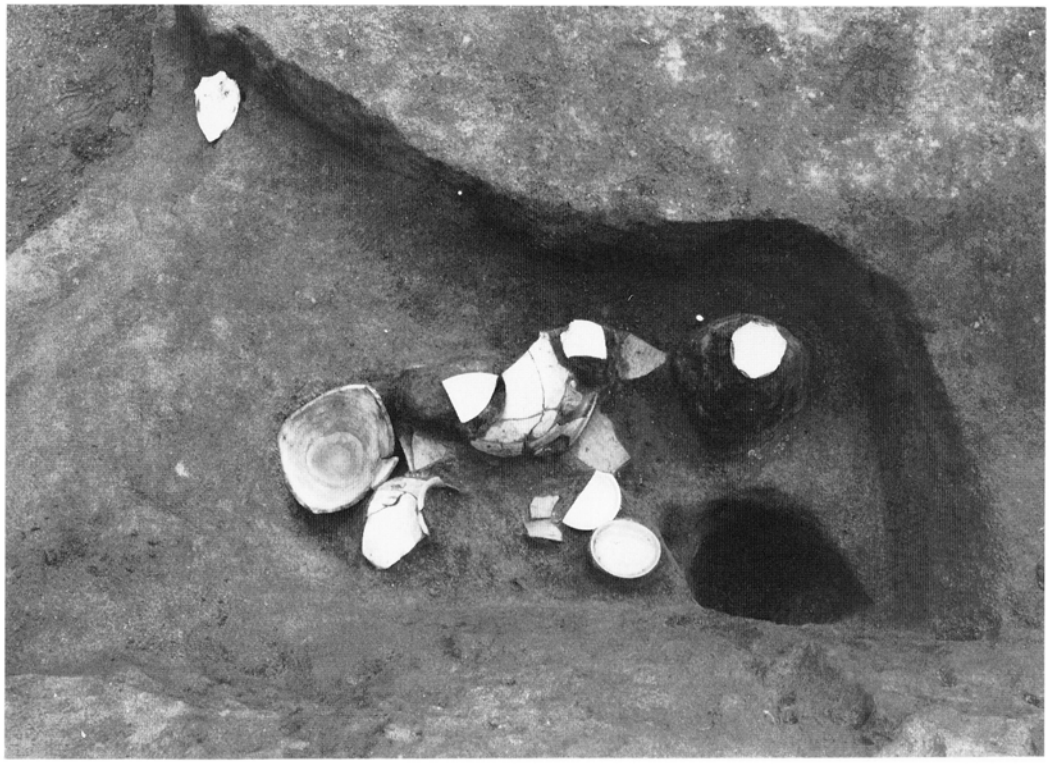
2．362号土壙土層断面（北から）



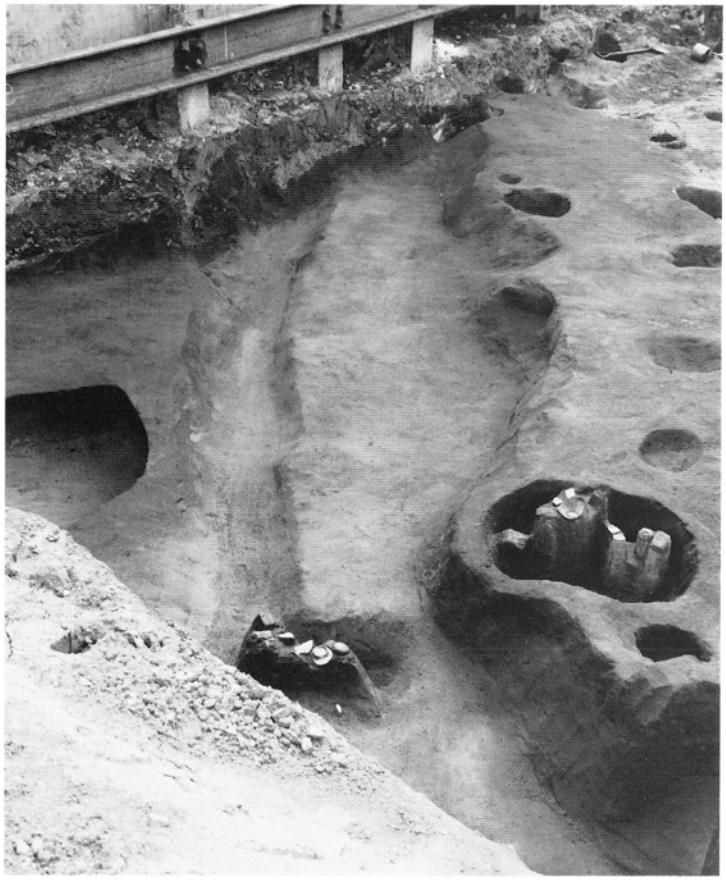
3．362号土壙、灯明台出土状況（北東から）



1．373号土壙（南から）



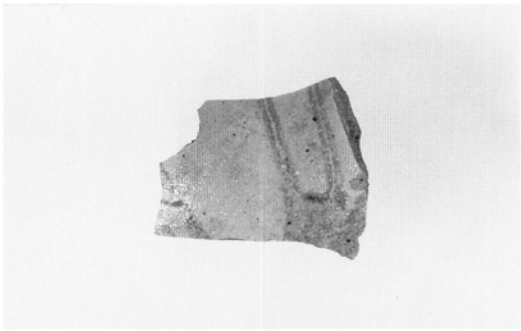
2．374号土壙（北から）

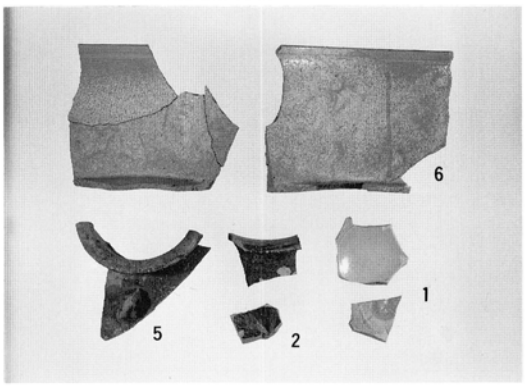


1. 31号溝（東から）

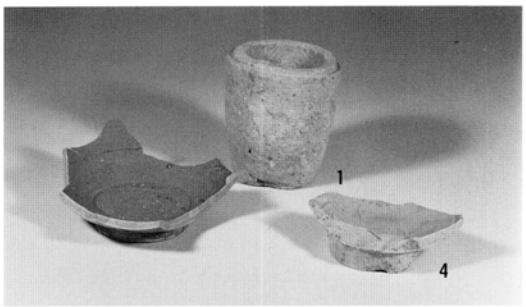
2. 31号溝（南から）

103号土壙出土遺物

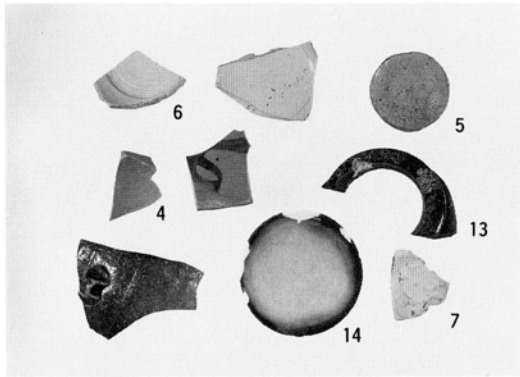


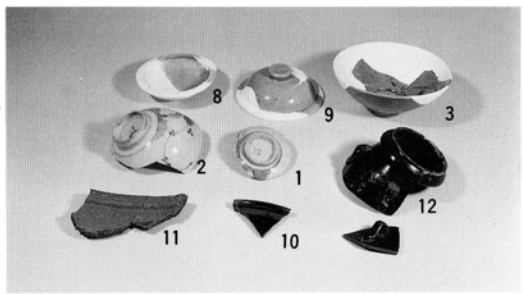


104号土壙出土遺物

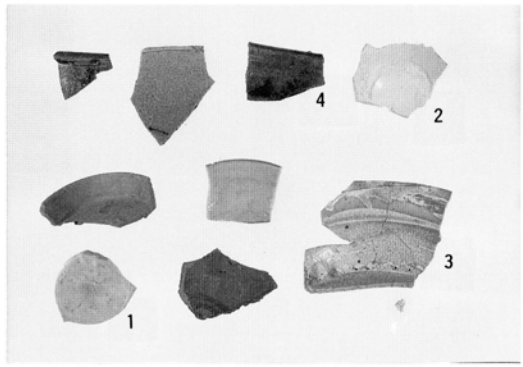


105号土壙出土遺物

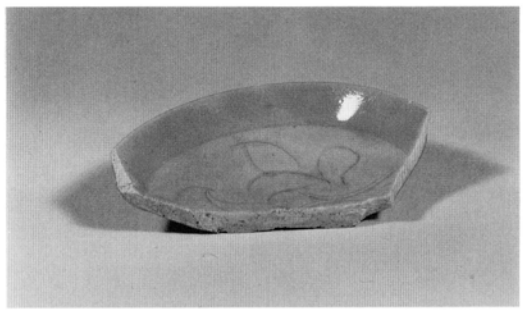




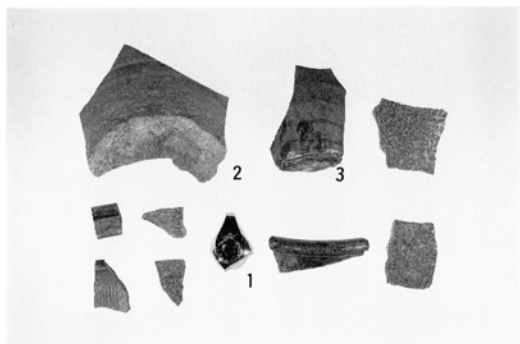
107号土壙出土遺物



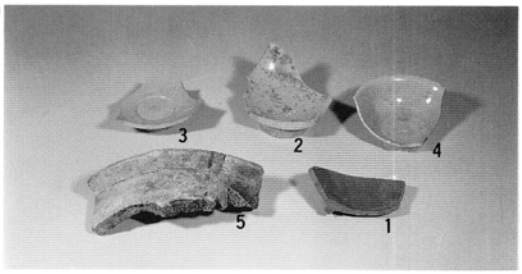
108号土壙出土遺物

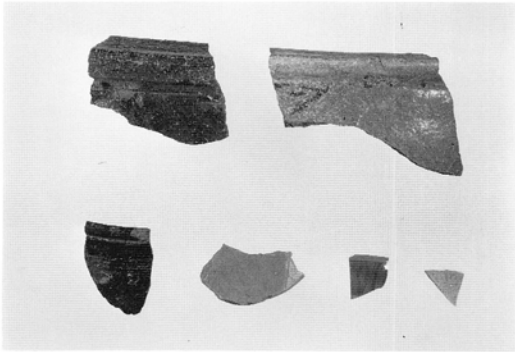


109号土壙出土遺物

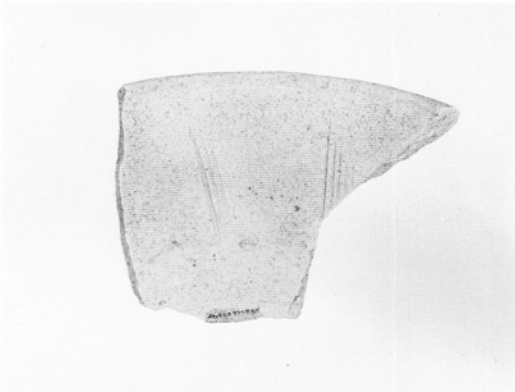


110号土壙出土遺物



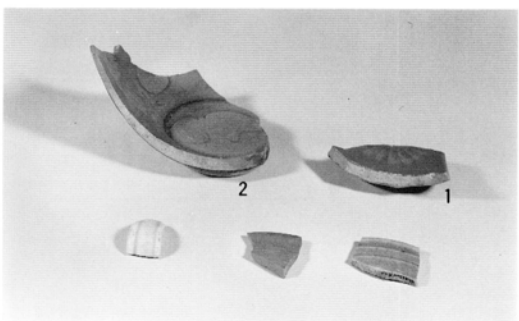


111号土壙出土遺物

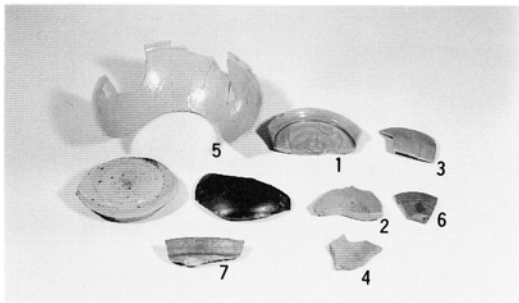


112号土壙出土遺物

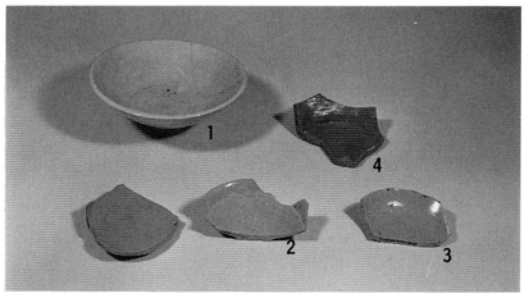
113号土壙出土遺物

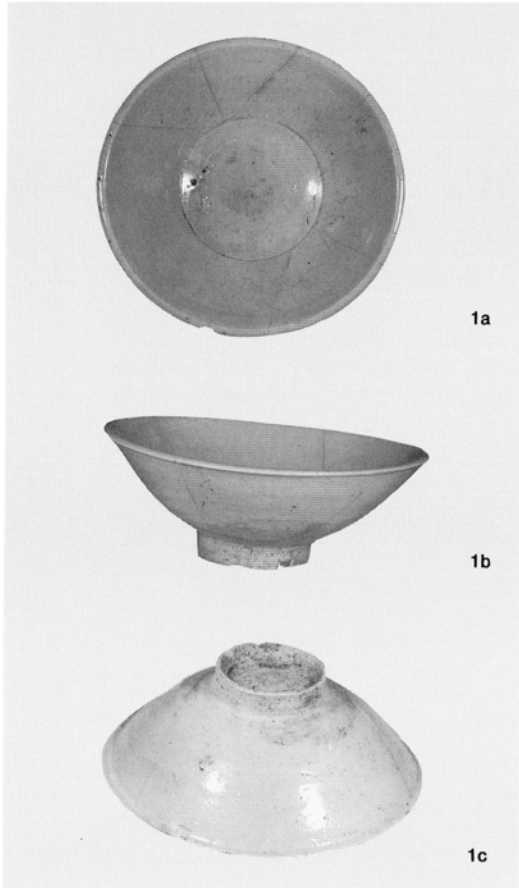


114号土壙出土遺物

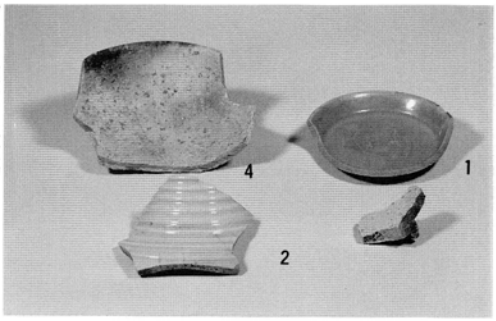


115号土壙出土遺物

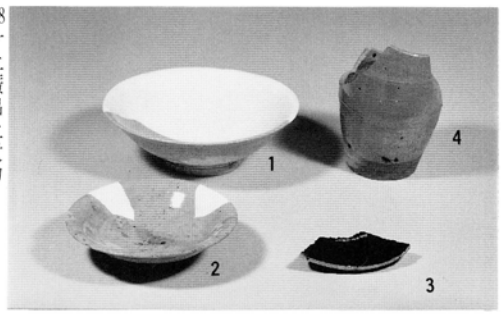


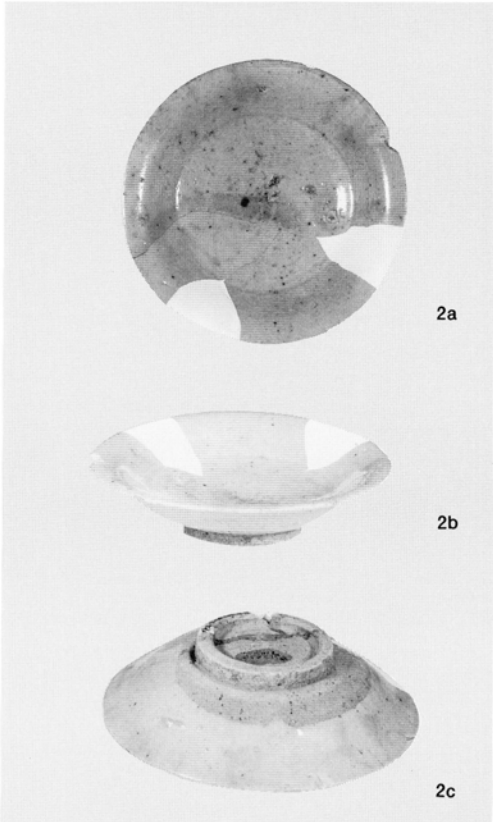


117号土壙出土遺物

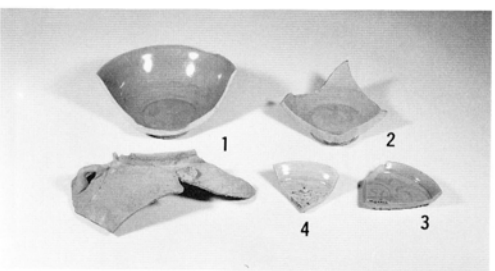


118号土壙出土遺物

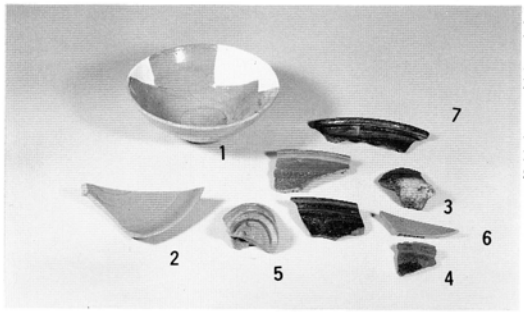


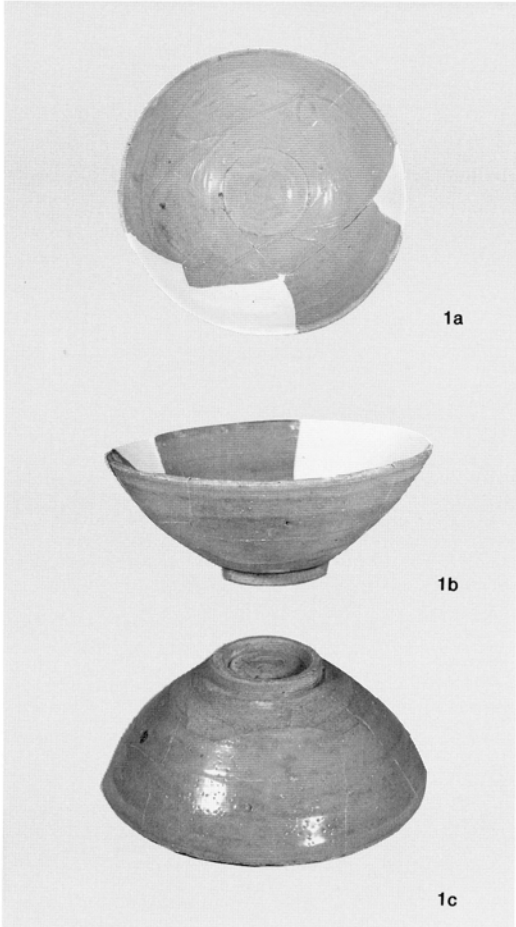


119号土壙出土遺物

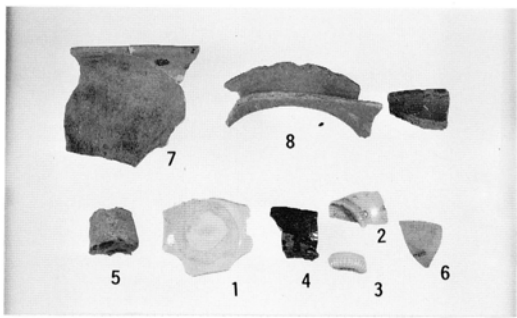


120号土壙出土遺物

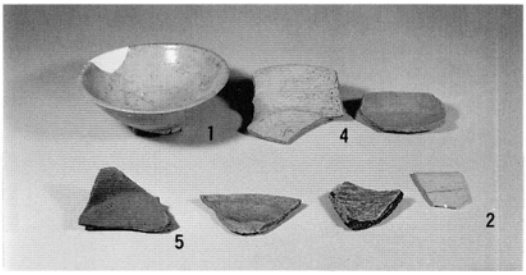


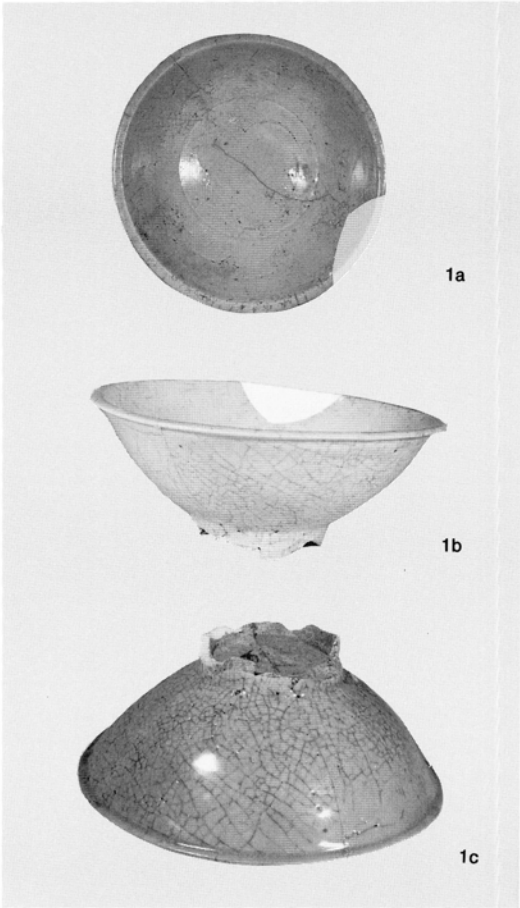


121号土壙出土遺物

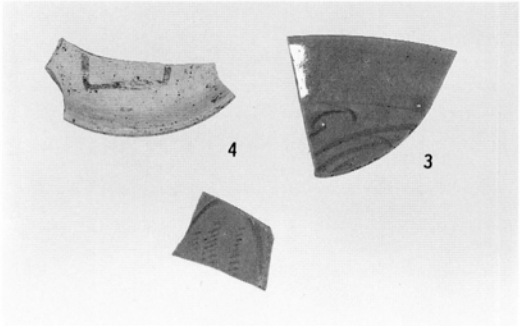


122号土壙出土遺物

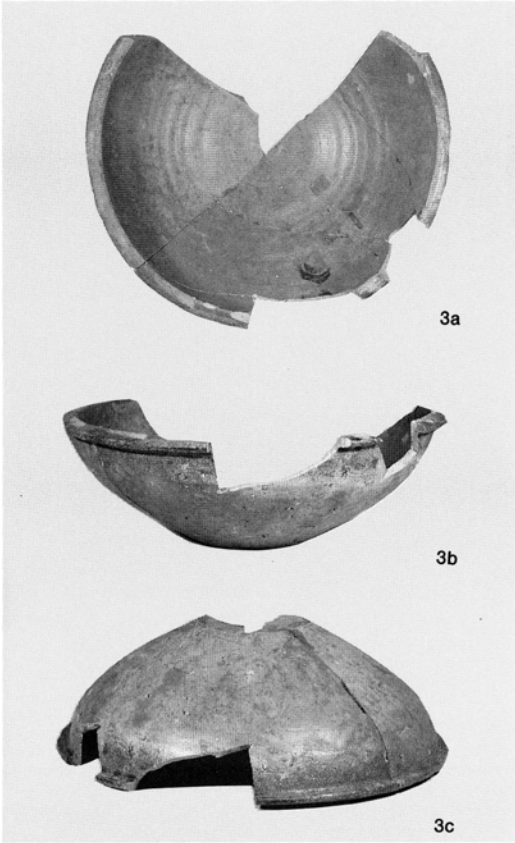




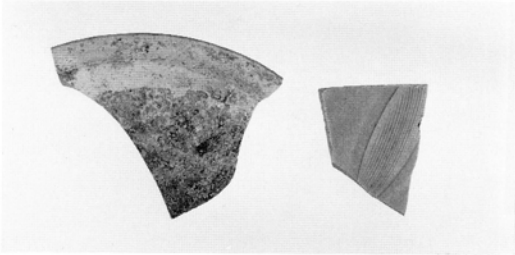
125号土壙出土遺物



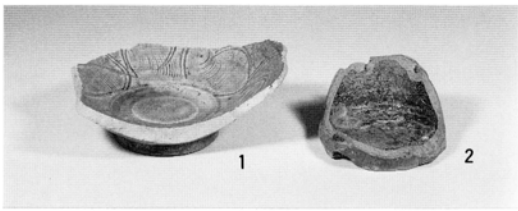
123号土壙出土遺物



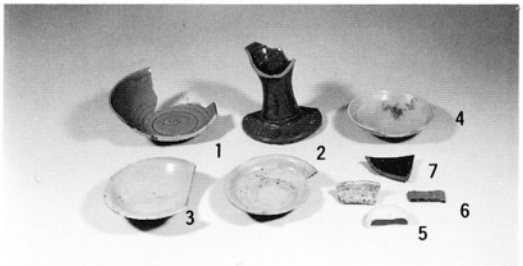
126号土壙出土遺物



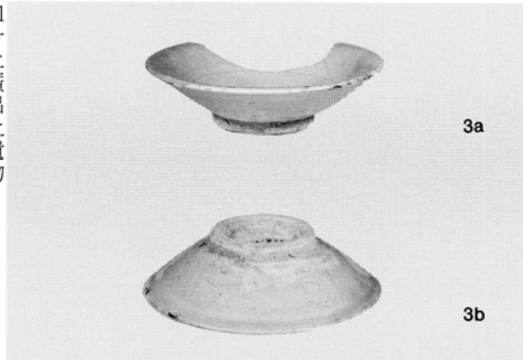
129号土壙出土遺物

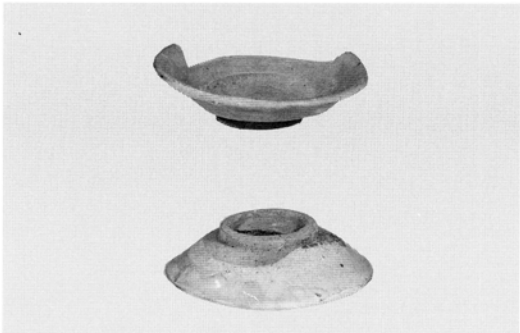


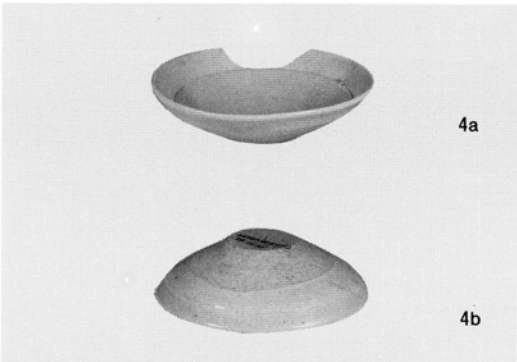
131号土壙出土遺物



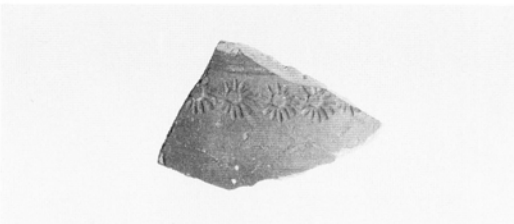
131号土壙出土遺物



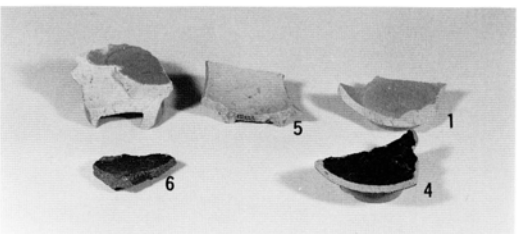




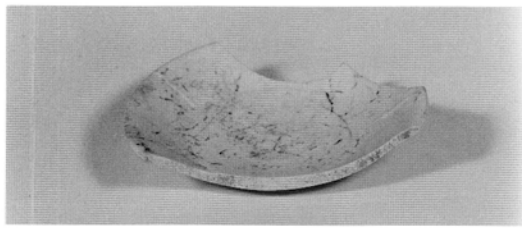
138号土壙出土遺物



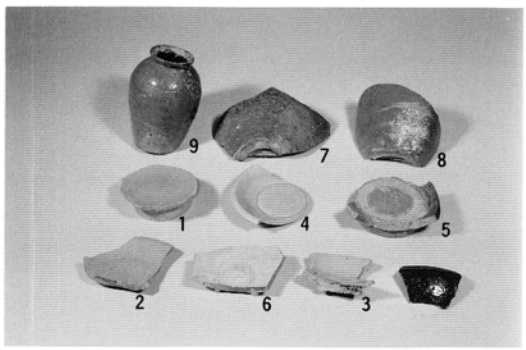
141号土壙出土遺物



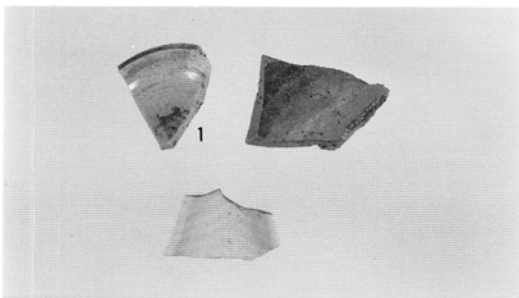
143号土壙出土遺物

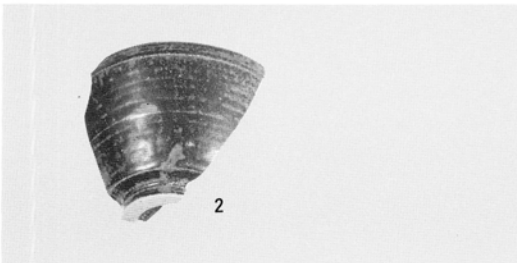


146号土壙出土遺物

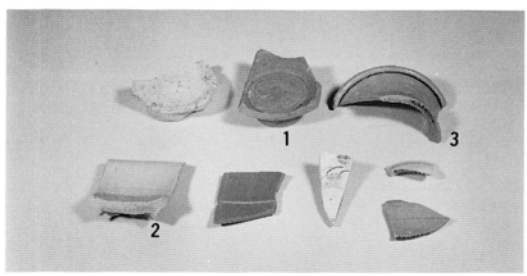


148号土壙出土遺物



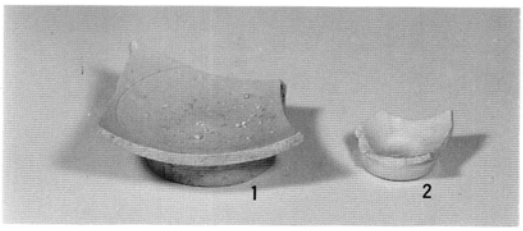


150号土壙出土遺物

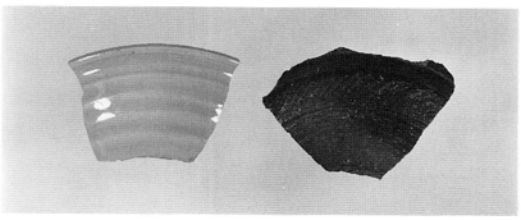


156号土壙出土遺物

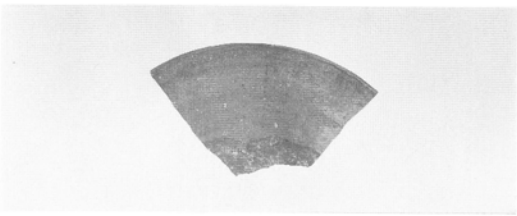
157号土壙出土遺物



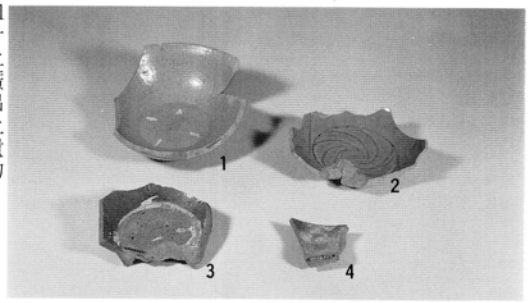
158号土壙出土遺物



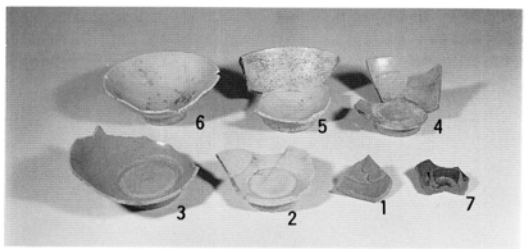
160号土壙出土遺物



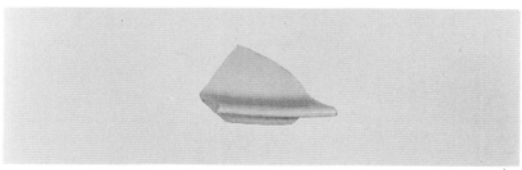
161号土壙出土遺物



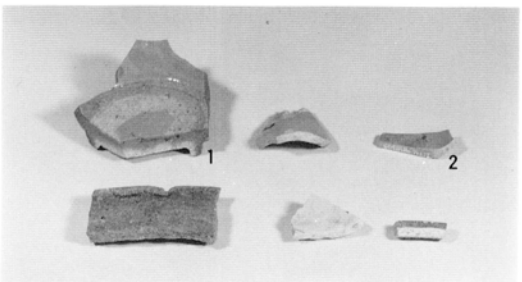
162号土壙出土遺物



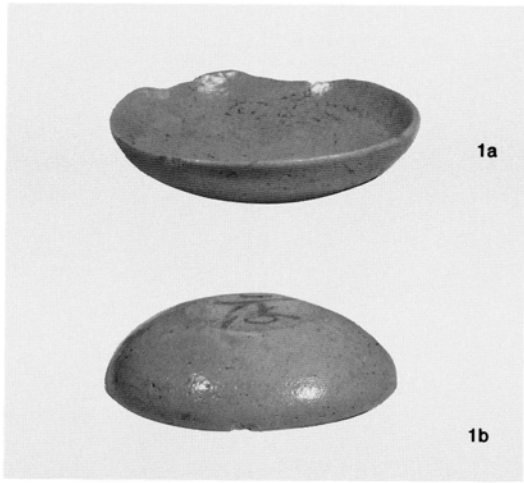
165号土壙出土遺物

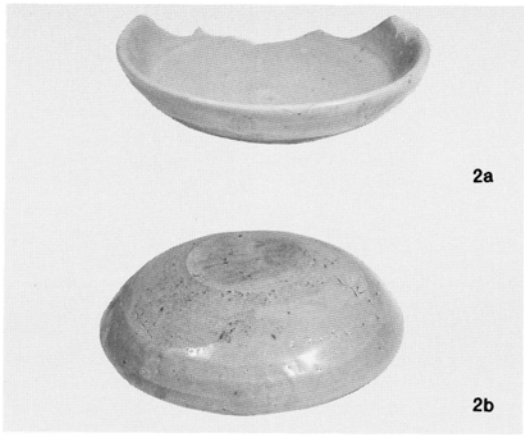


166号土壙出土遺物

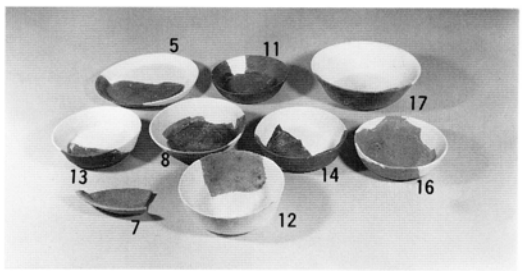


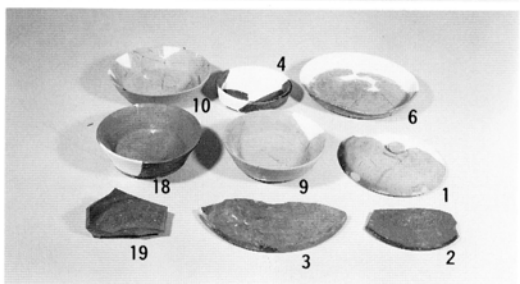
167号土壙出土遺物



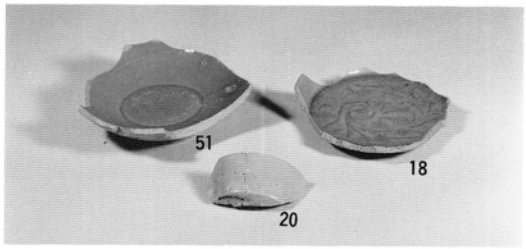


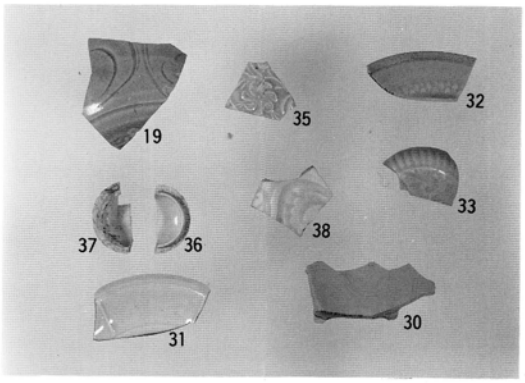
168号土壙出土遺物

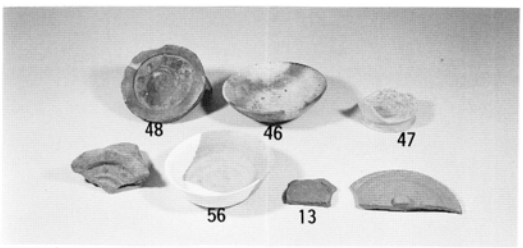


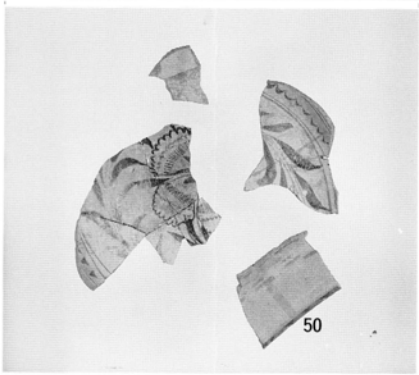


12号溝出土遺物

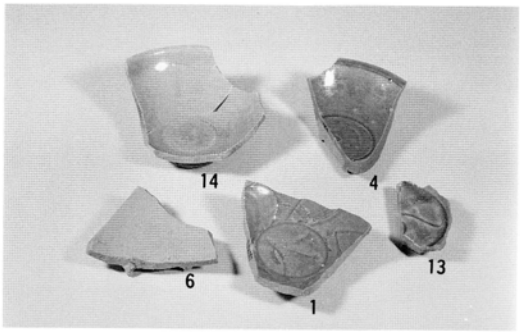


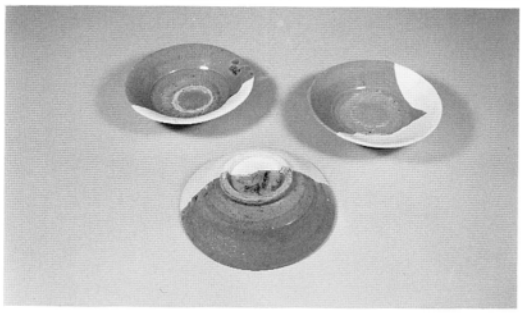


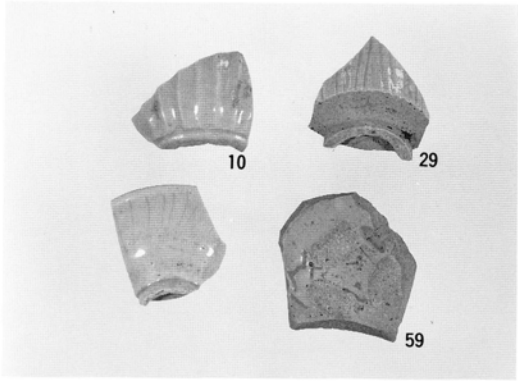


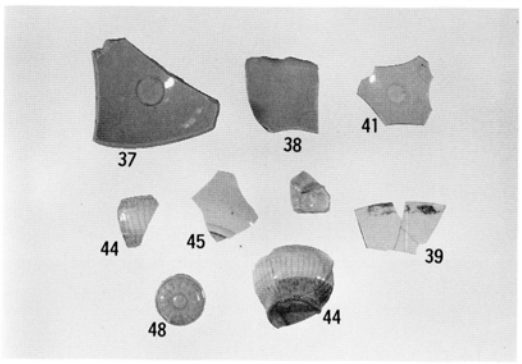


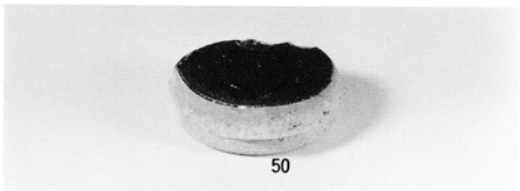
E区遺構外出土遺物



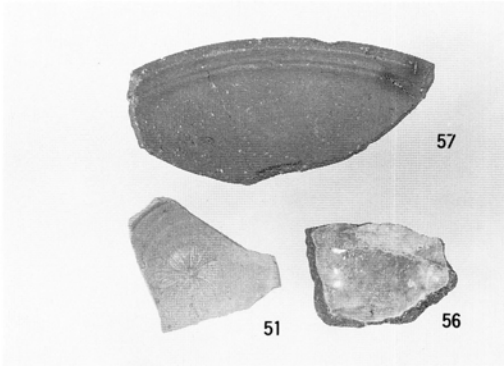


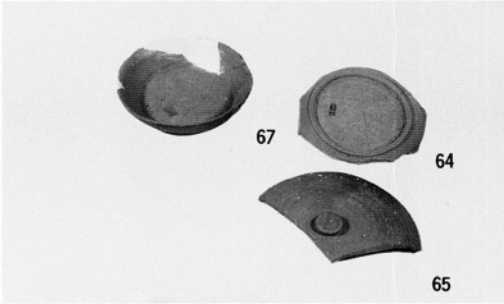


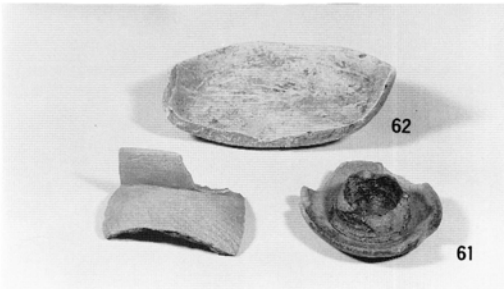


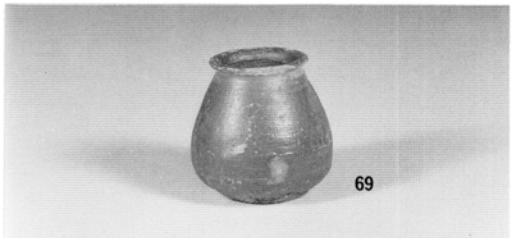


E区遺構外出土遺物

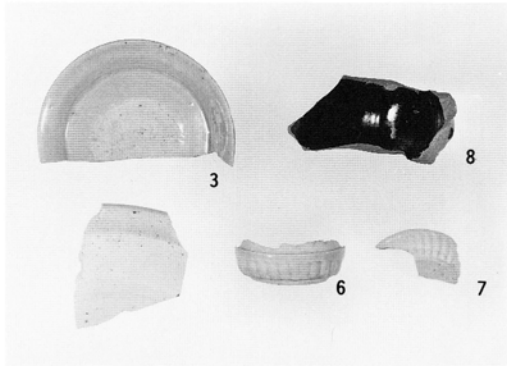




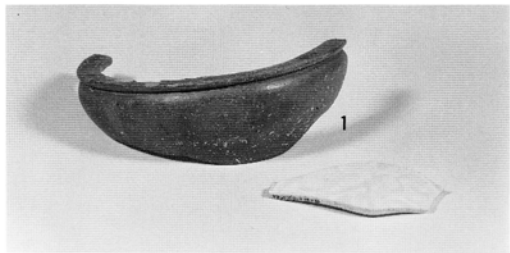




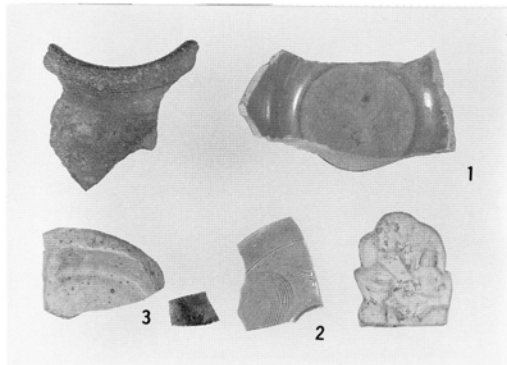
203号土壙出土遺物



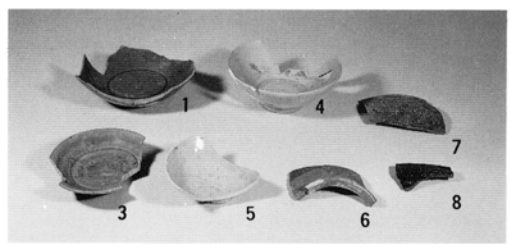
204号土壙出土遺物



207号土壙出土遺物

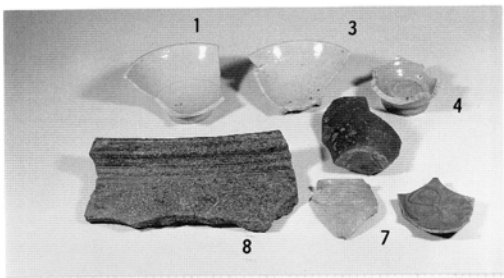


208号土壙出土遺物



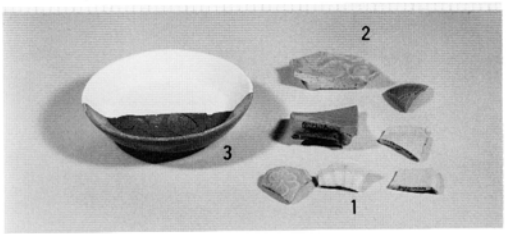
208号土壙出土遺物

214号土壙出土遺物

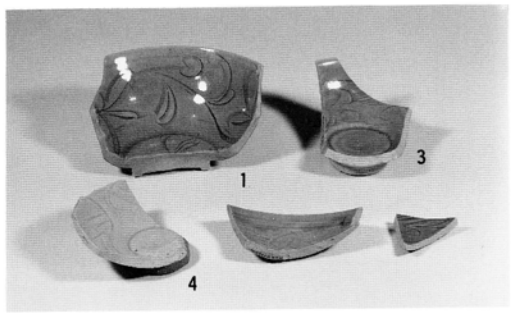


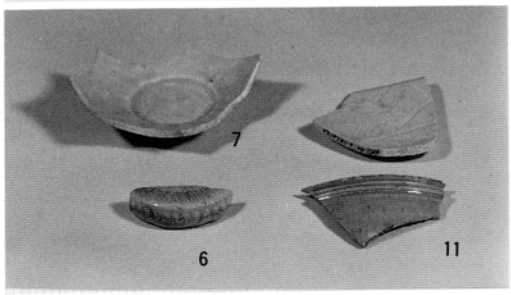
215号土壙出土遺物

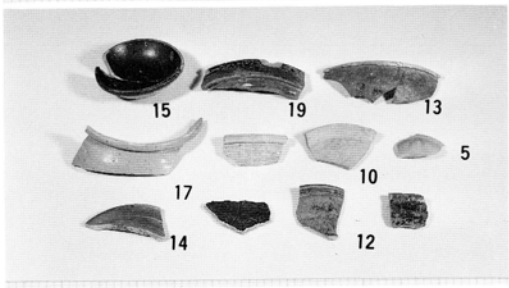
216号土壙出土遺物



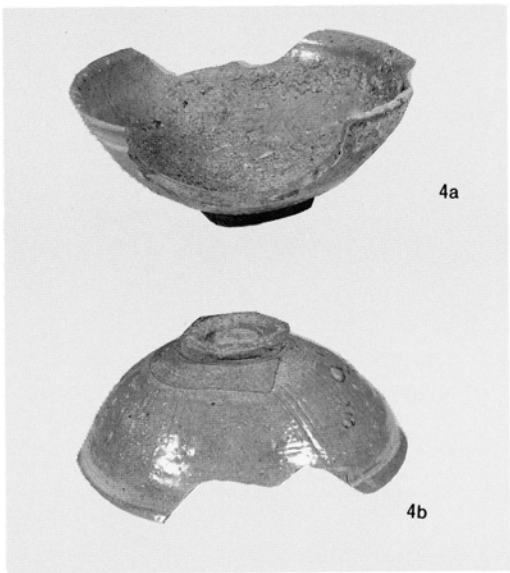
217号土壙出土遺物



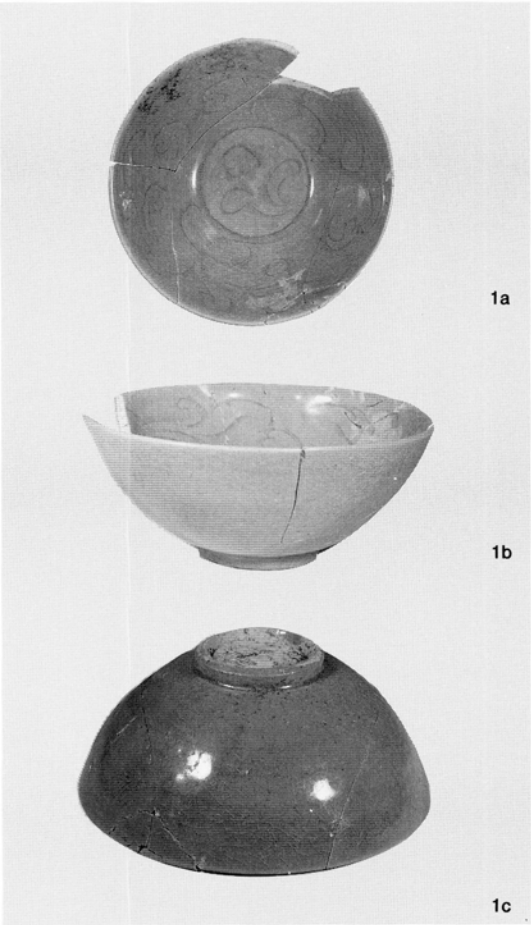




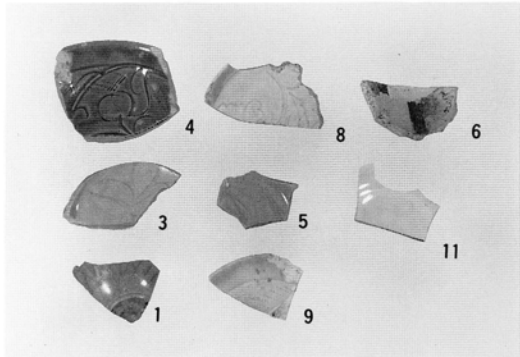
218号土壙出土遺物

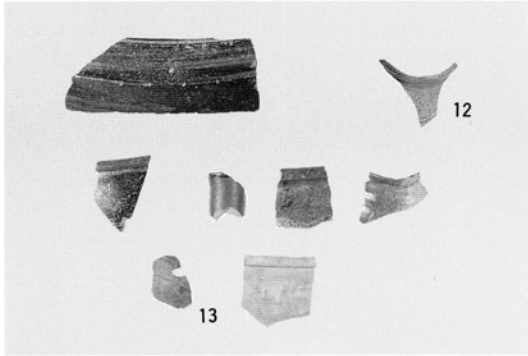


218号土壙出土遺物

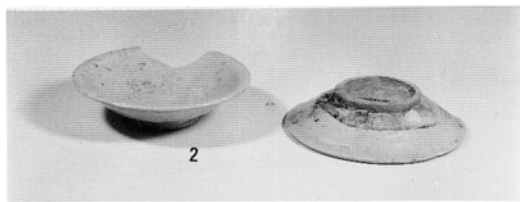


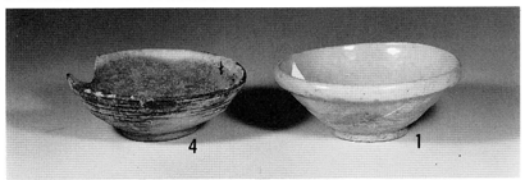
219号土壙出土遺物



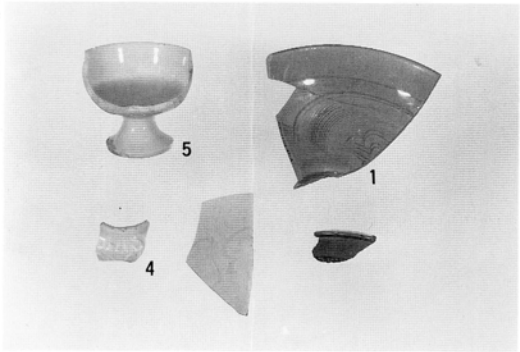


220号土壙出土遺物

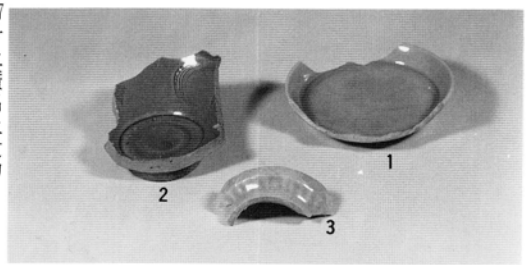




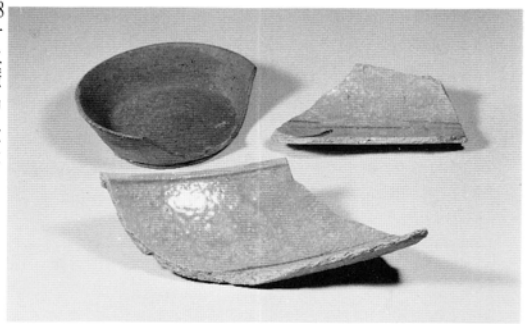
224号土壙出土遺物



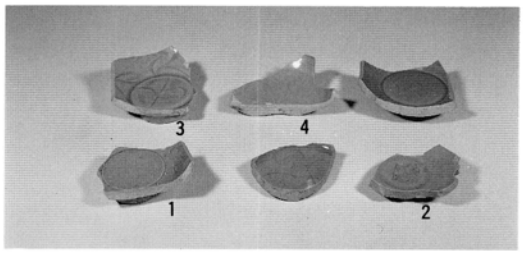
227号土壙出土遺物

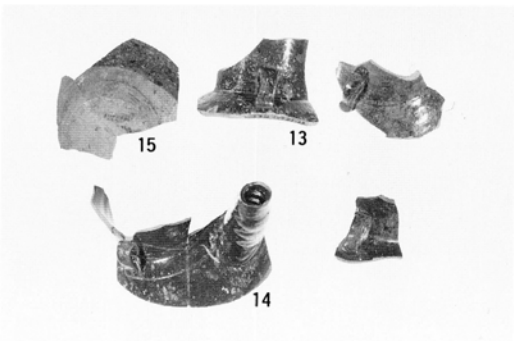


228号土壙出土遺物

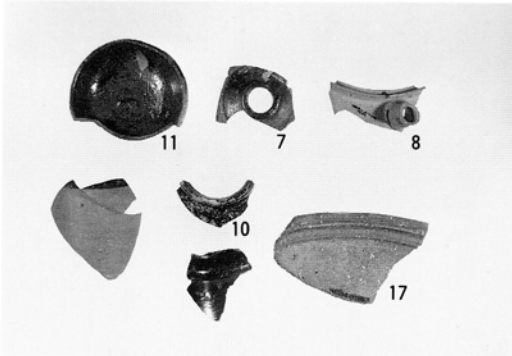


231号土壙出土遺物

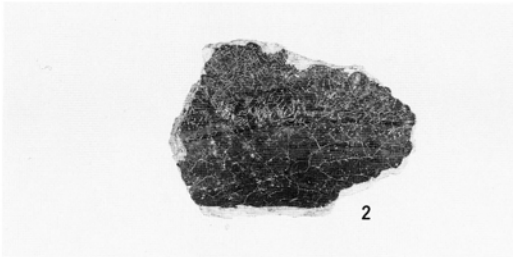




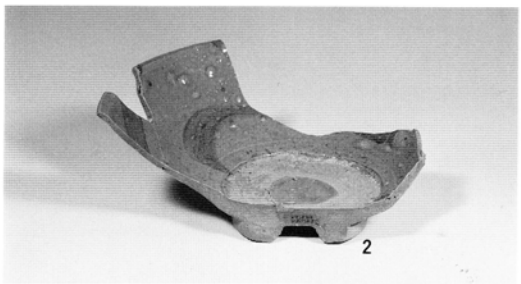
231号土壙出土遺物

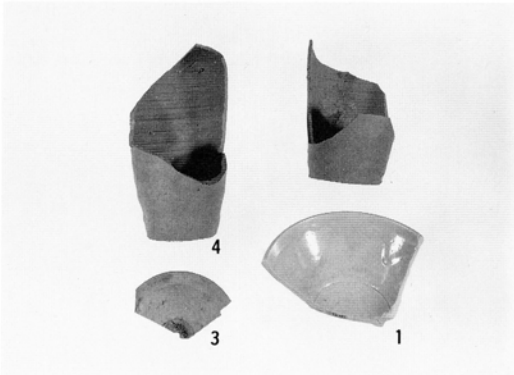


232号土壙出土遺物

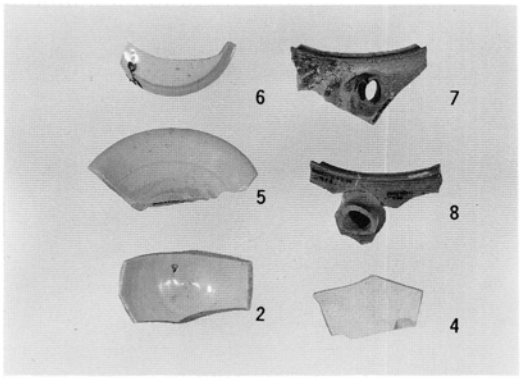


236号土壙出土遺物

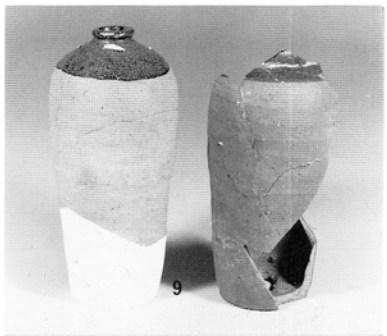


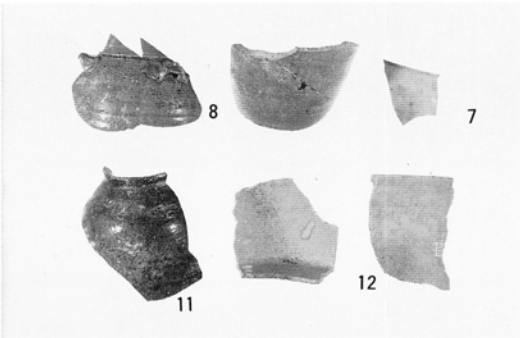


237号土壙出土遺物

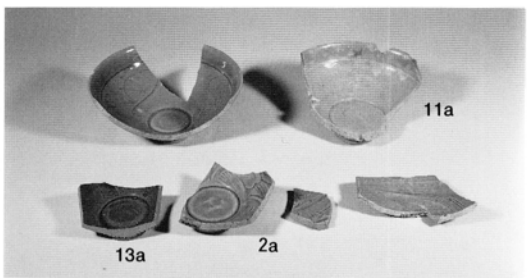


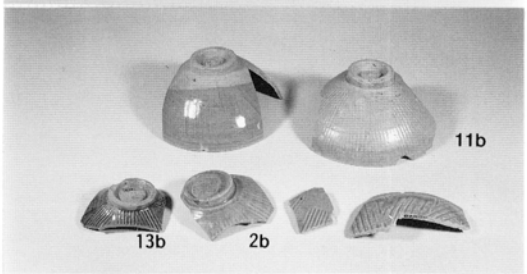
239号土壙出土遺物



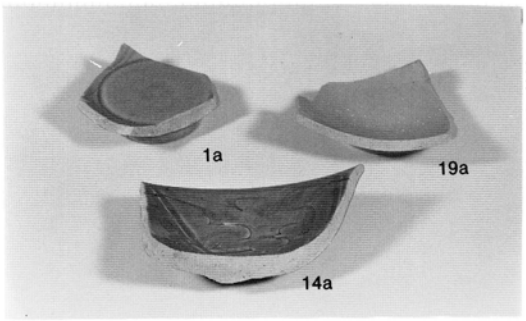


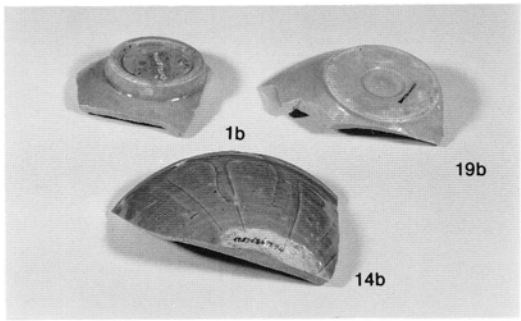
F区遺構外出土遺物

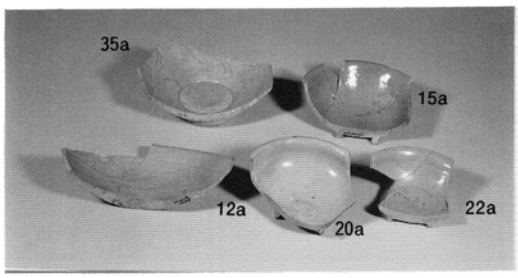


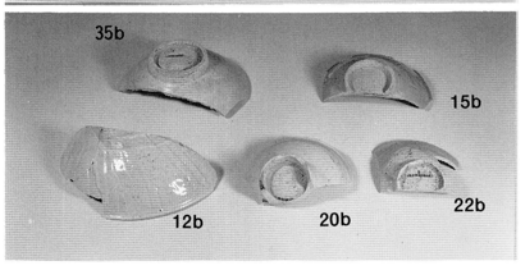


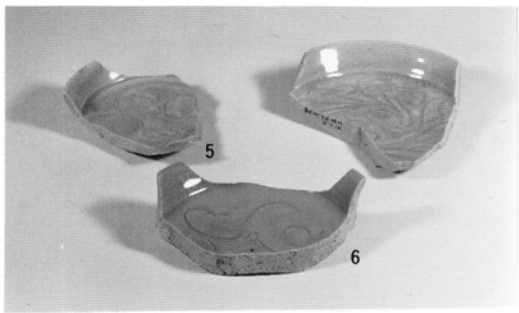
F区遺構外出土遺物



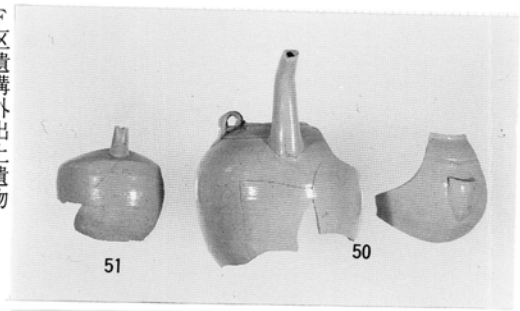


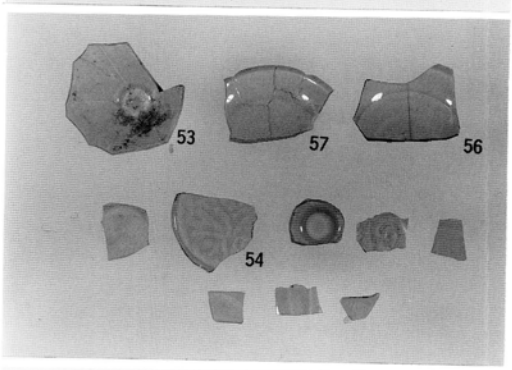


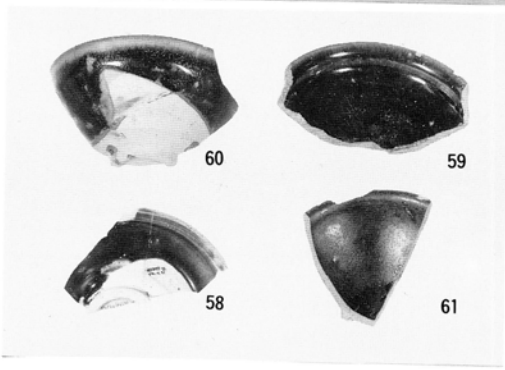


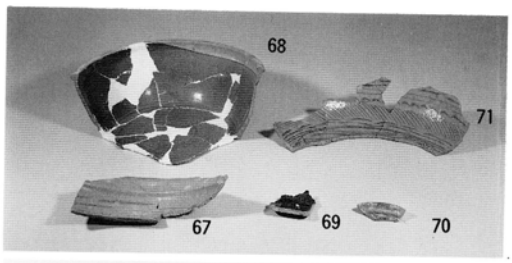


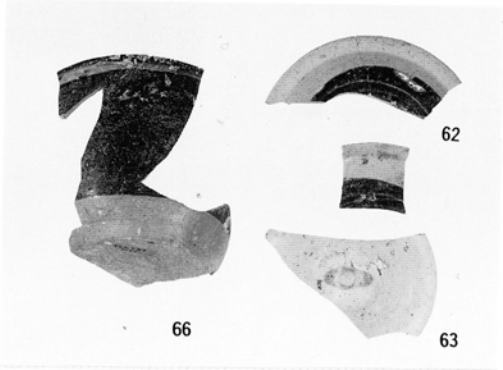
F区遺構外出土遺物



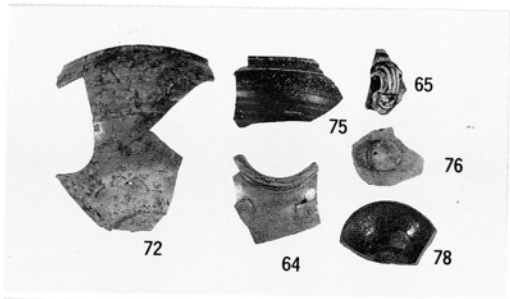


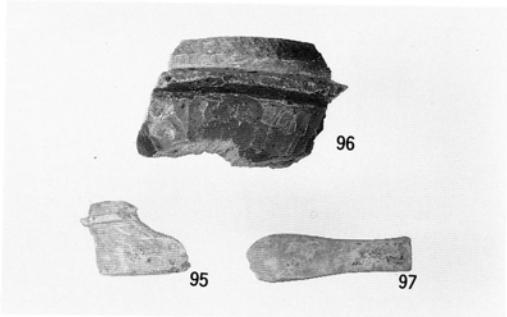




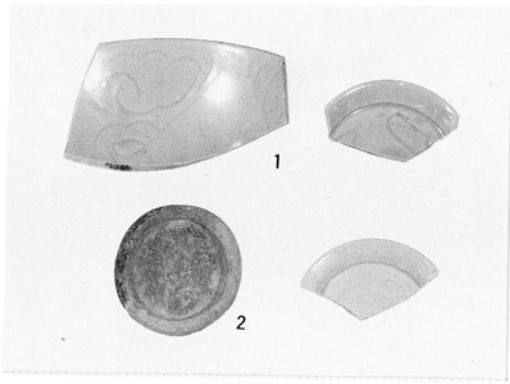


F区遺構外出土遺物

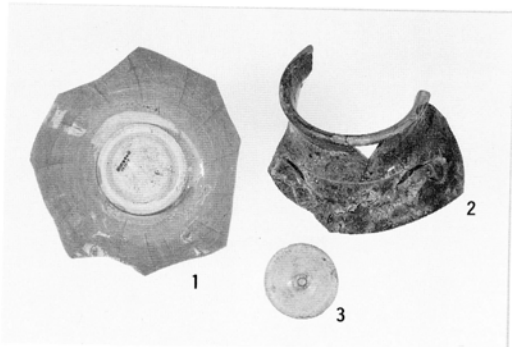




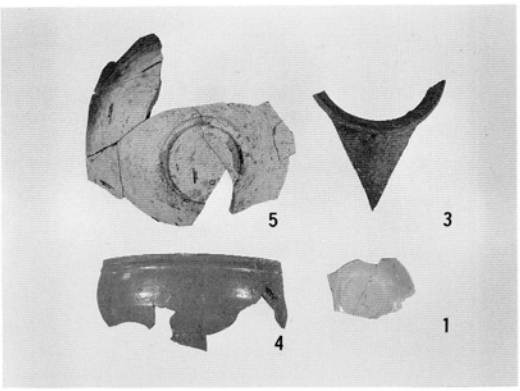
301号土壙出土遺物



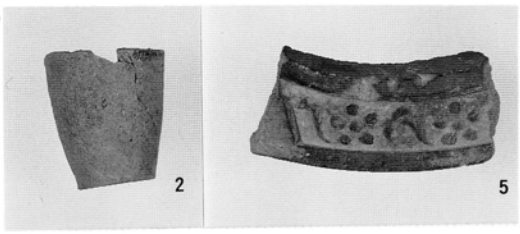
306号土壙出土遺物



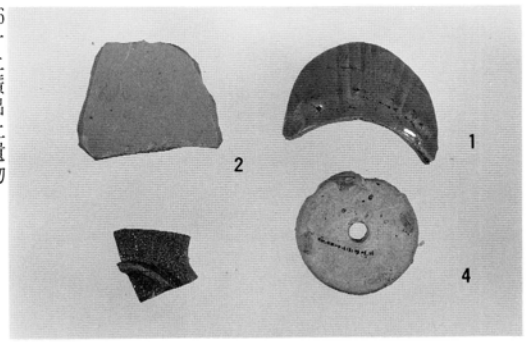
313号土壙出土遺物



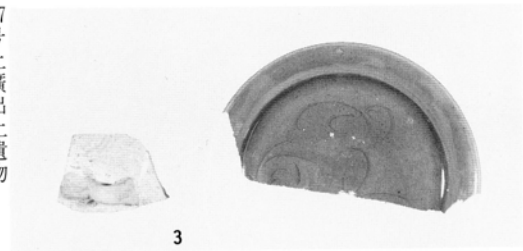
315号土壙出土遺物

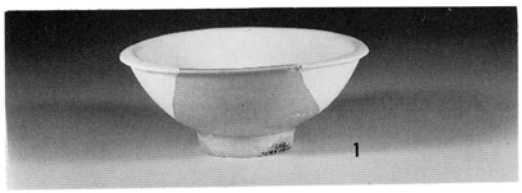


316号土壙出土遺物

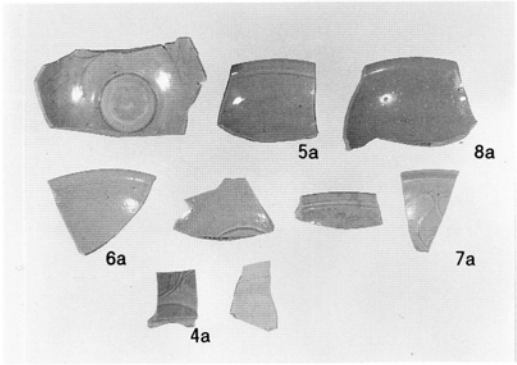


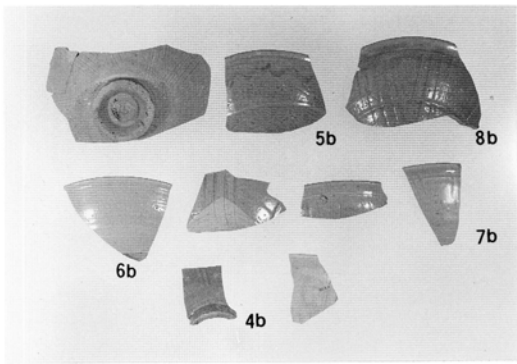
327号土壙出土遺物



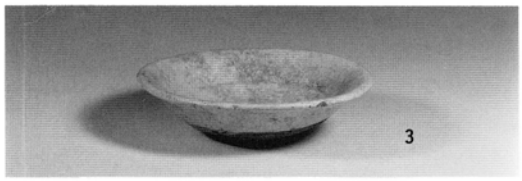


327号土壙出土遺物

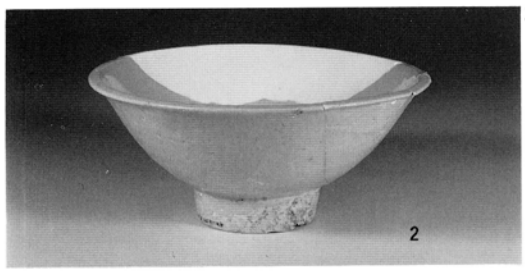


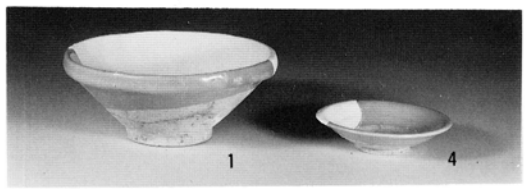


336号土壙出土遺物



337号土壙出土遺物

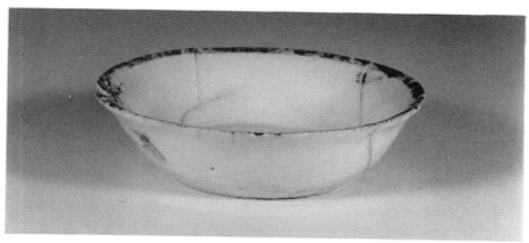




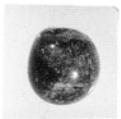
338号土壙出土遺物

339号土壙出土遺物

345号土壙出土遺物



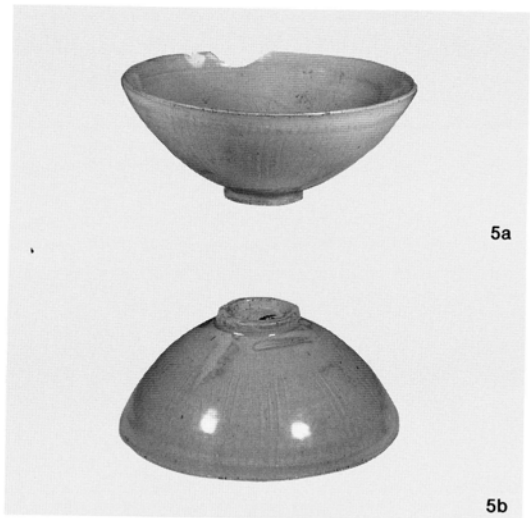
341号土壙出土遺物

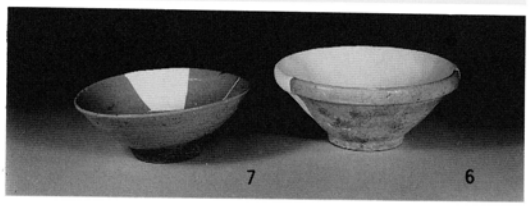


341号土壙出土遺物

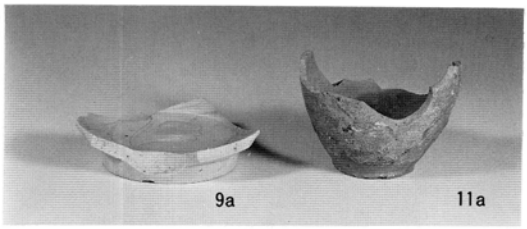
357号土壙出土遺物

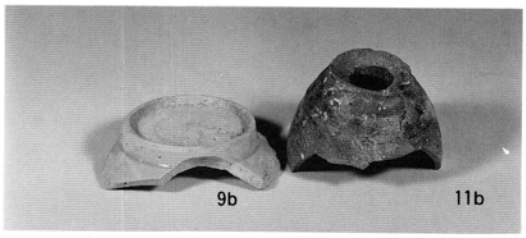
358号土壙出土遺物

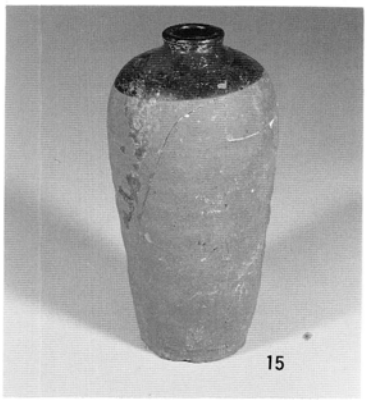




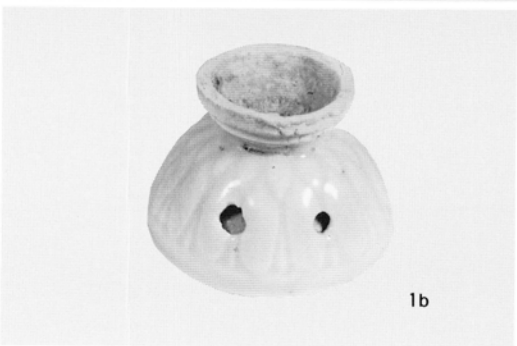
358号土壙出土遺物



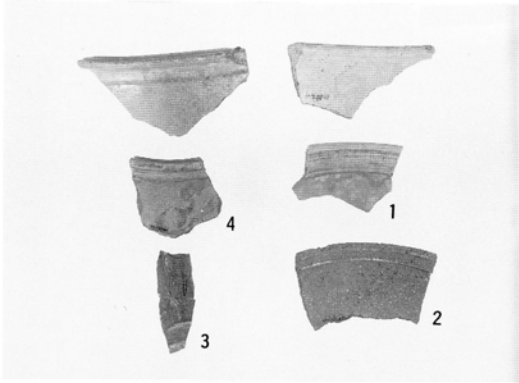




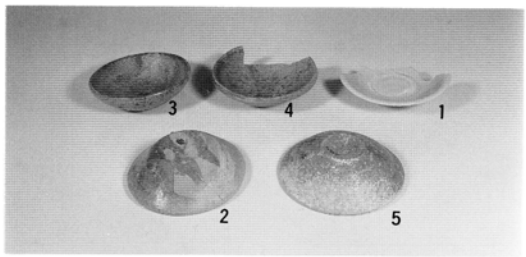
362号土壙出土遺物



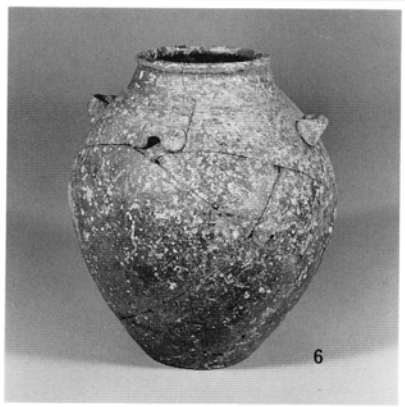
363号土壙出土遺物

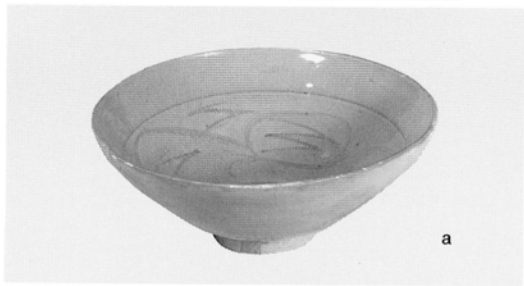


365号土壙出土遺物

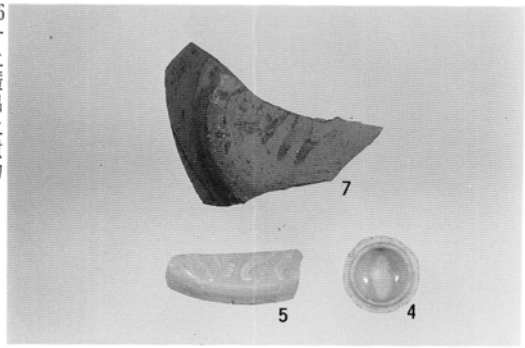


366号土壙出土遺物



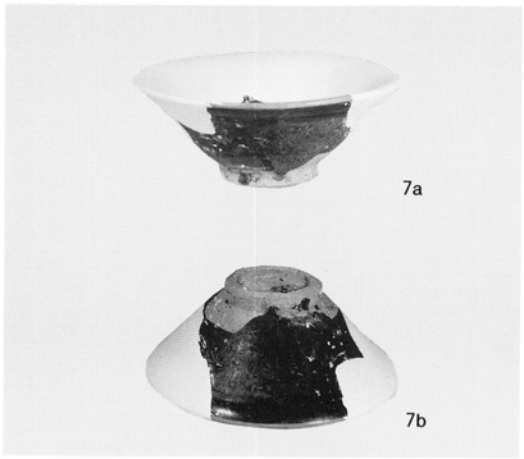


366号土壙出土遺物

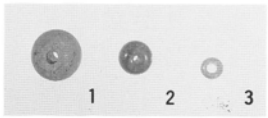


373号土壙出土遺物

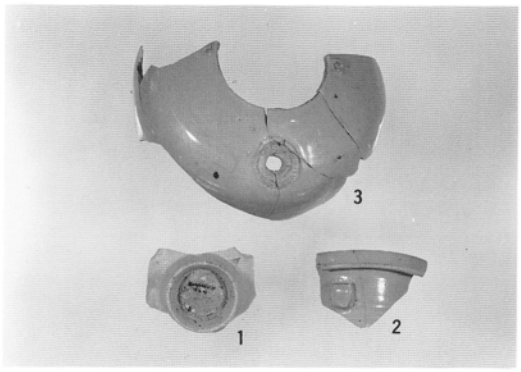
374号土壙出土遺物



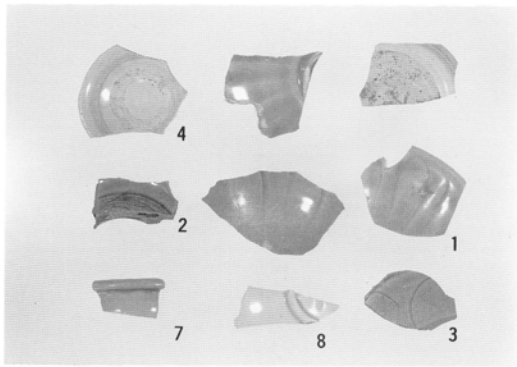
374号土壙出土遺物



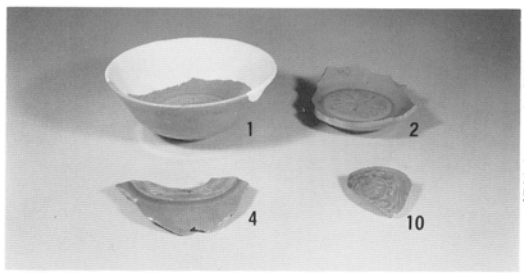
375号土壙出土遺物

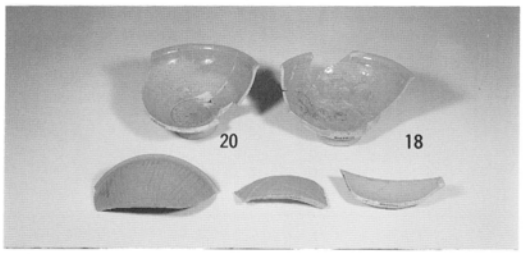


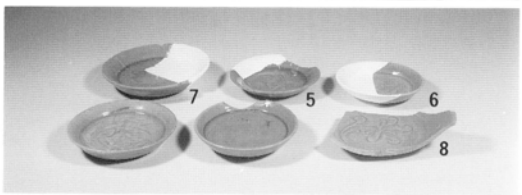
378号土壙出土遺物



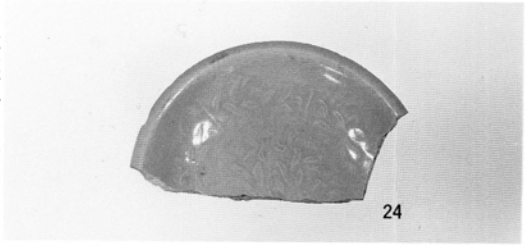
G区遺構外出土遺物

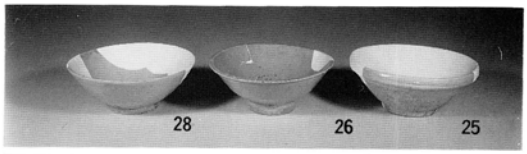


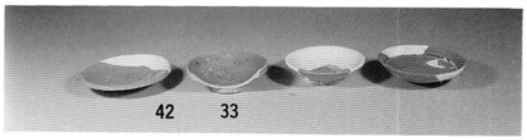


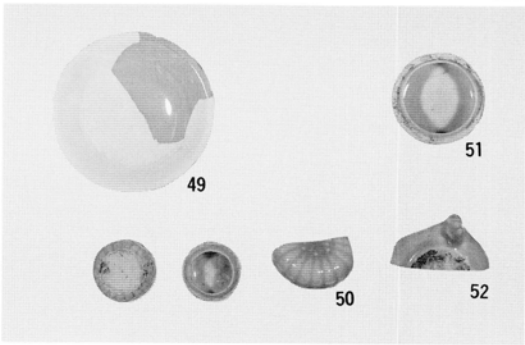


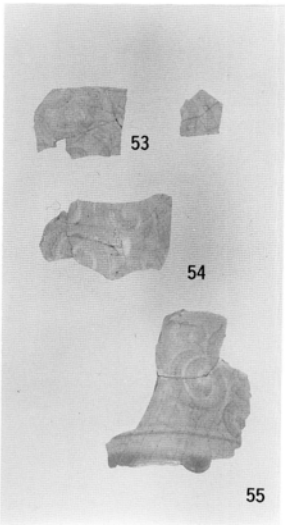
G区遺構外出土遺物



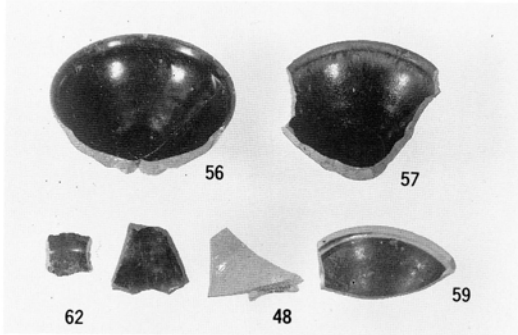


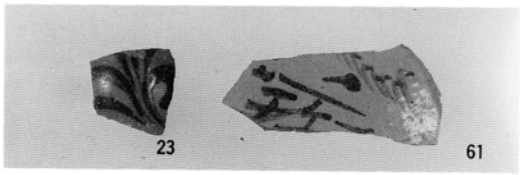


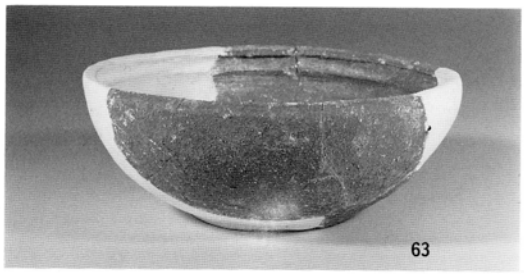




G区遺構外出土遺物

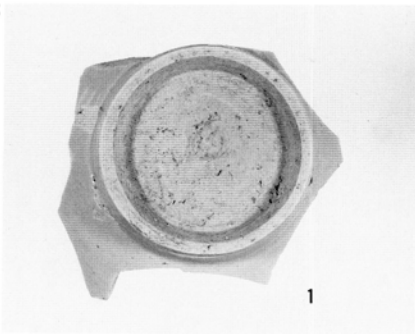




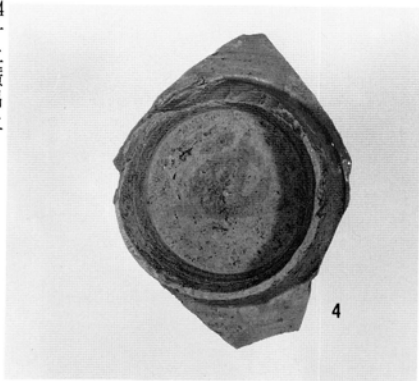


101号土壙出土

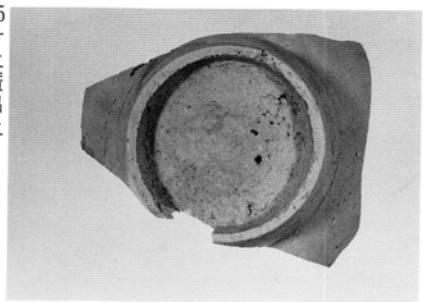
103号土壙出土

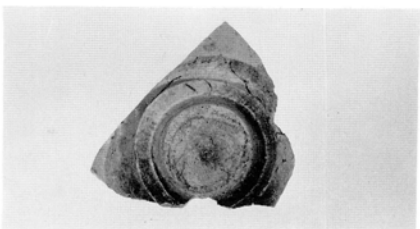


104号土壙出土



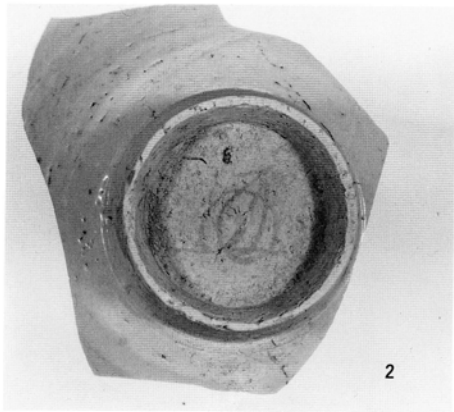
105号土壙出土

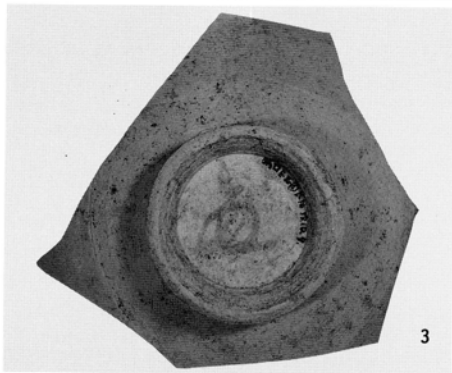


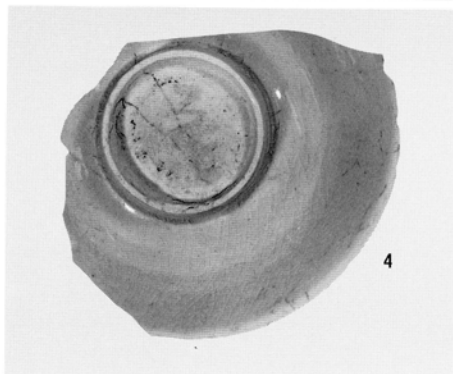


107号土壙出土

110号土壙出土

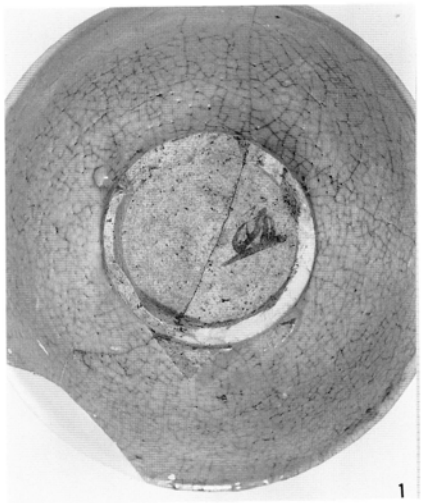




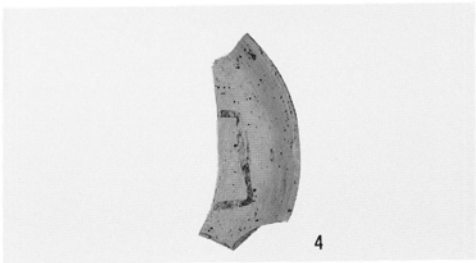


115号土壙出土

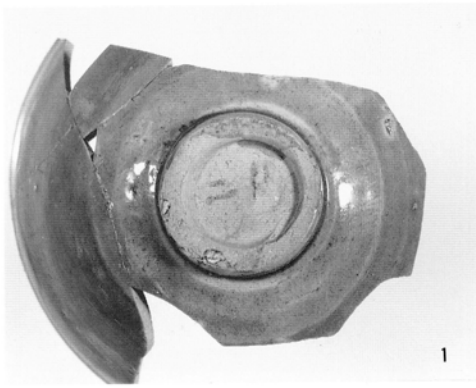
122号土壙出土



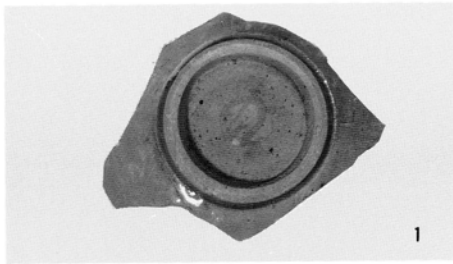
125号土壙出土



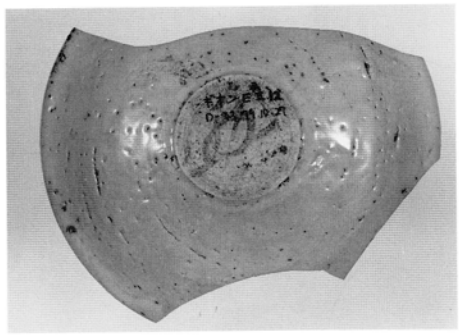
131号土壙出土



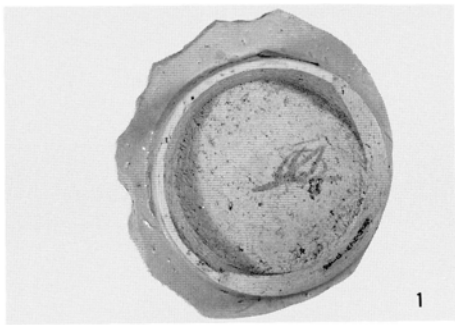
141号土壙出土



143号土壙出土



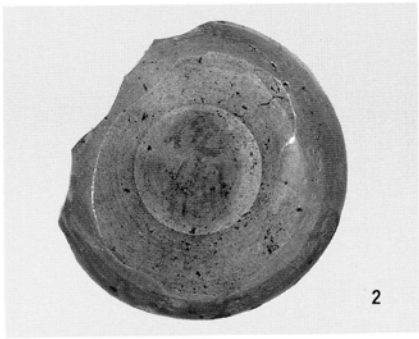
146号土壙出土



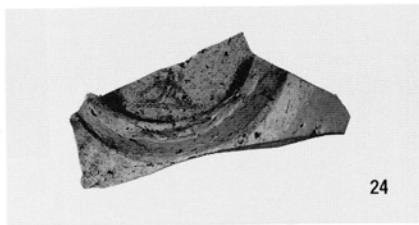
156号土壙出土

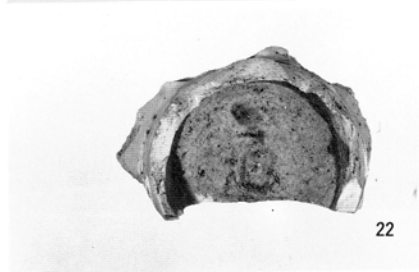
161号土壙出土

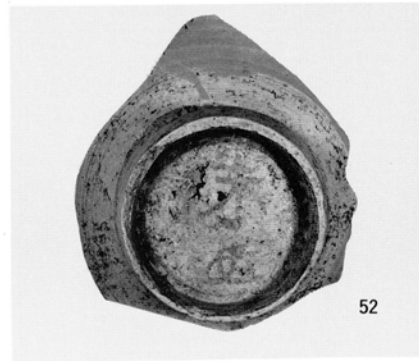
167号土壙出土



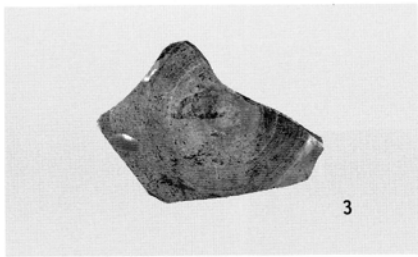
12号溝出土

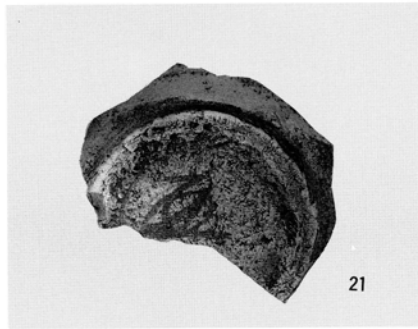


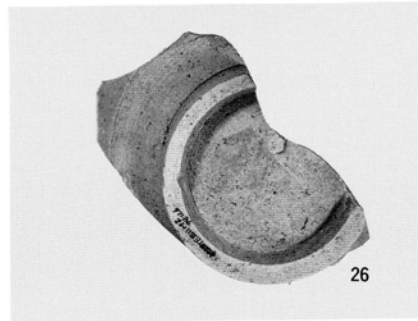


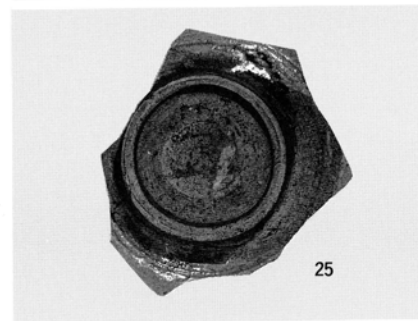


12号溝出土

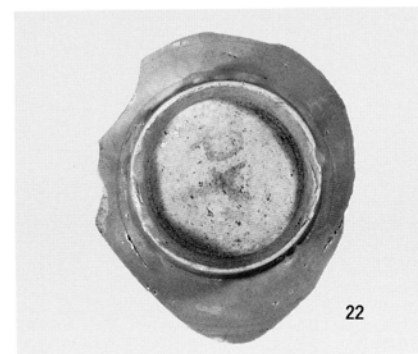




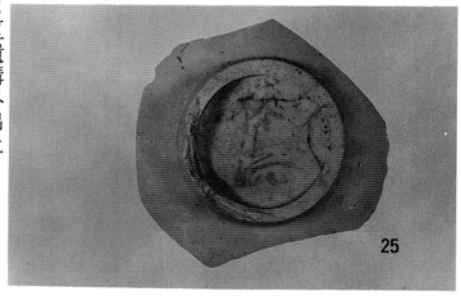


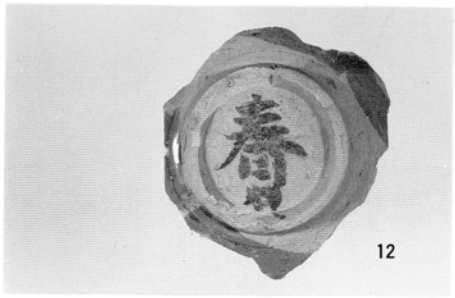


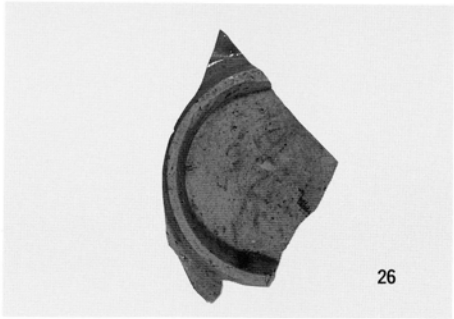
E区遺構外出土

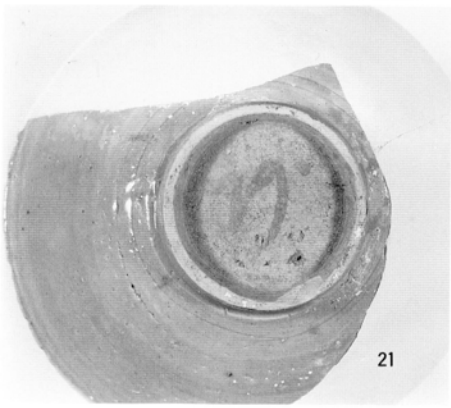


E区遺構外出土



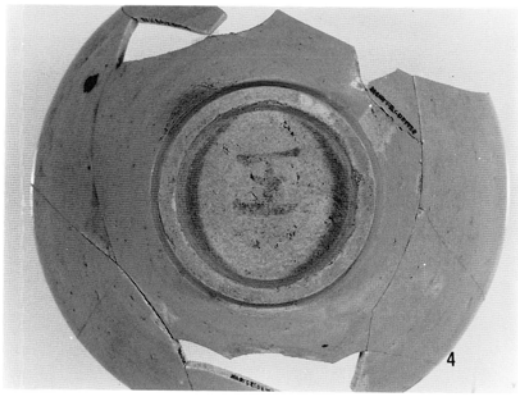






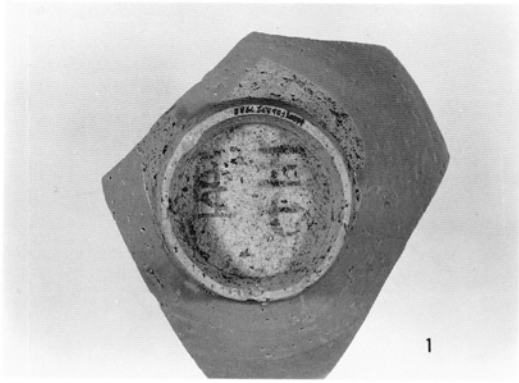
203号土壙出土

208号土壙出土

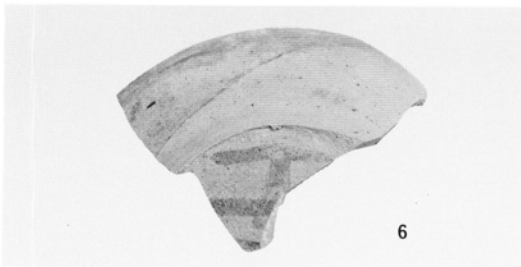


231号土壙出土

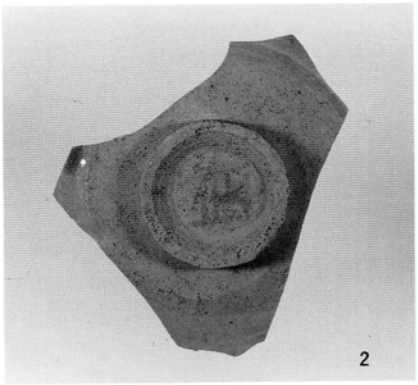
237号土壙出土



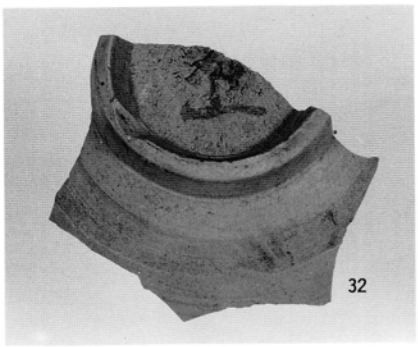
239号土壙出土物

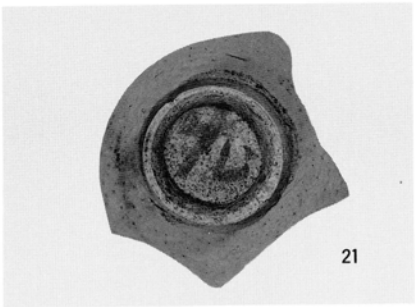


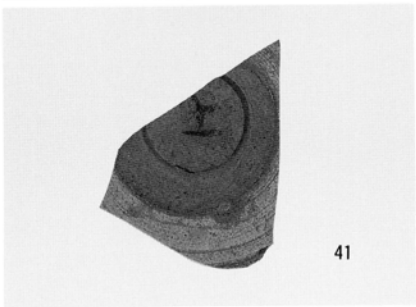
239号土壙出土遺物



F区遺構外出土遺物

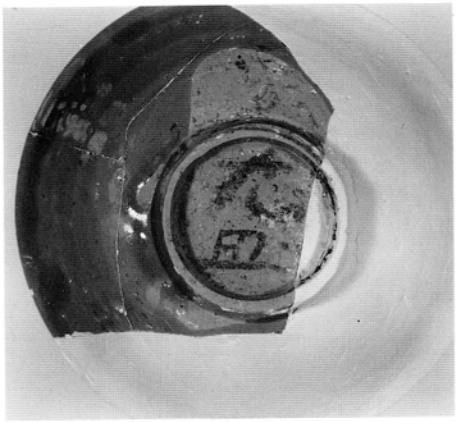




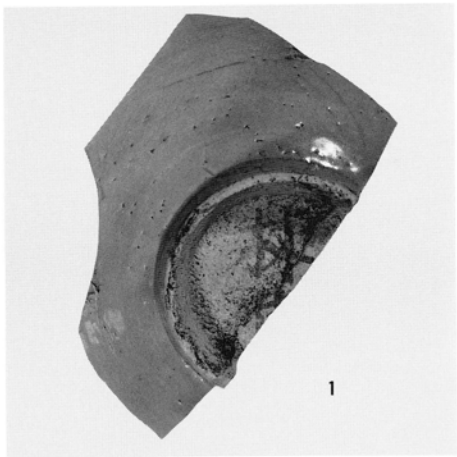


310号土壙出土遺物

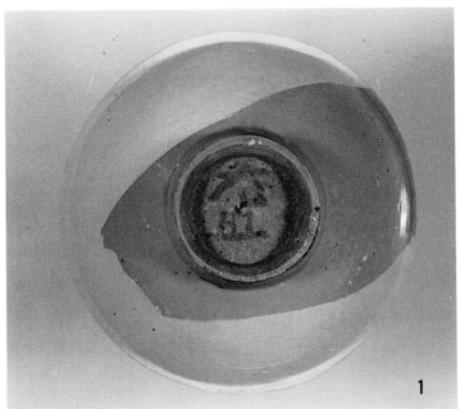
312号土壙出土遺物



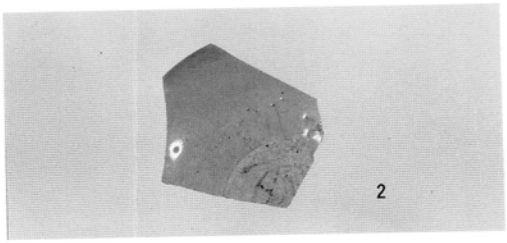
315号土壙出土遺物



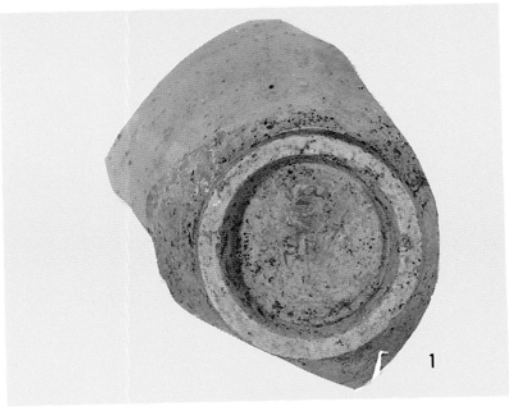
327号土壙出土遺物



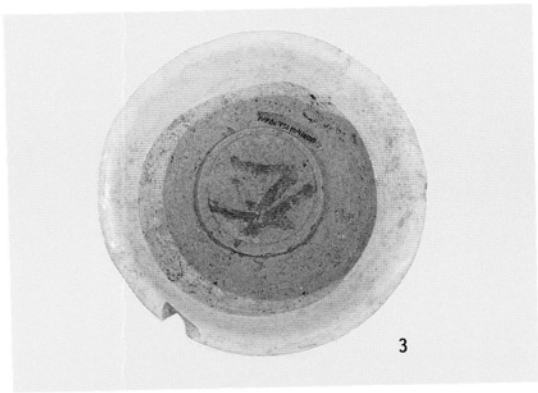
327号土壙出土



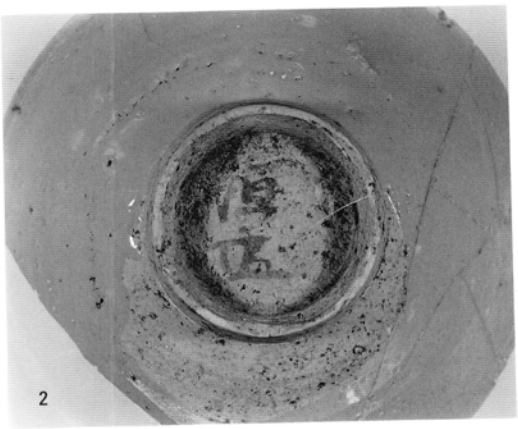
332号土壙出土



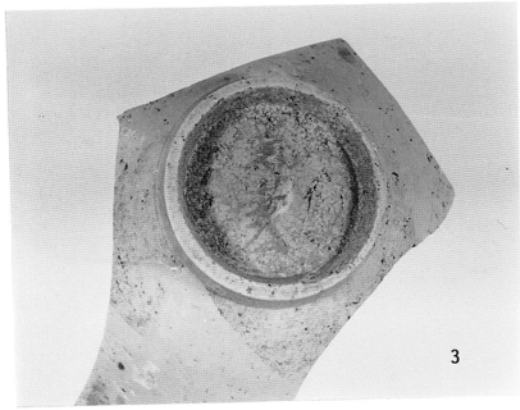
336号土壙出土



337号土壙出土

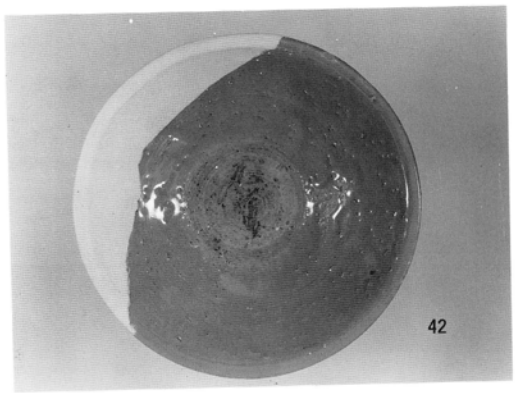


337号土壙出土

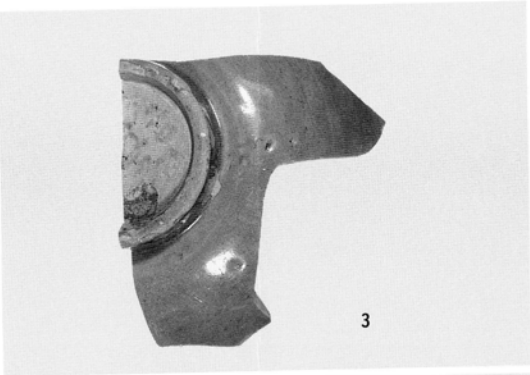


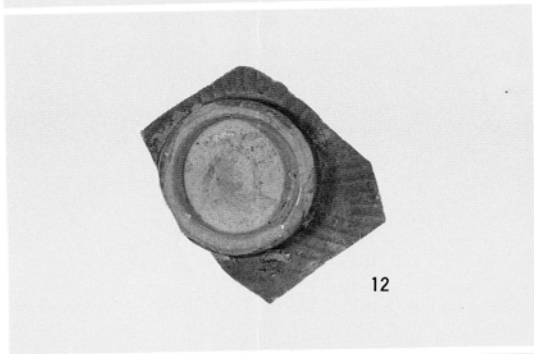
374号土壙出土

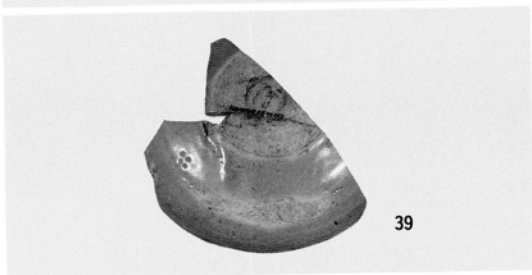
G区遺構外出土



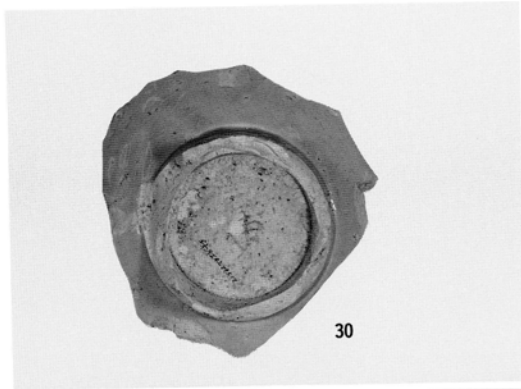
G区遺構外出土遺物

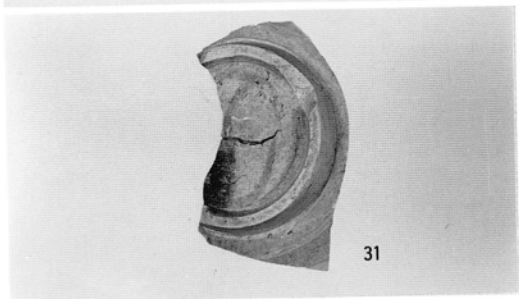

3

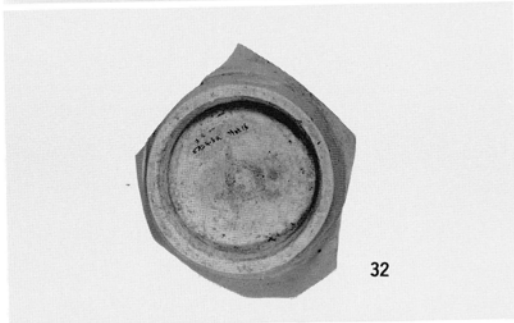

12


39

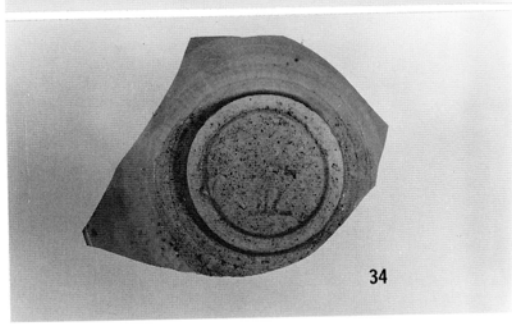
28


30


31


32

36


34

多は沖の浜なるべしといへり。憾らくは他に当時の現況を記せしものなく、筑前続風土記以下渾て百年の後に書けるもの故、甚判然ならす。続風土記等の説信ずべしといへども、博多記等の云へる処も又捨かたければ、爰に両説を掲けて後人の考定を待つ。今伝ふる処の博多古図の如きも少しく疑ひなきに非らず。或は後世の作なるへし。僅に前の博多の面影を見るべきものは、再興より百八年前、文明十二年宗祇法師博多へ来りし時、其宿所なる龍宮寺より出て一見なしたる博多の形状左の如く、明ぬれは文明十二年九月二十一日也此所のさまを見侍るに、前に入海はるかにして志賀の島を見渡して沖には大船多くかゝり、もろこしの人も乗りけんと見ゆ、左は夫となき山ども朝霧にかさなり、右箱崎の松原遠くつらなり、仏閣僧坊数をしらず、人民の上下門を並へ軒を争ひて其境四方に広しと書けり。

袖の湊之事

袖の湊の事、筑前続風土記に天文二十一年より博多へ大明西蕃の諸国より商船の来る事止ぬ、其後袖の湊も埋もりつらんとあれと、宗祇紀行博多の状況をいへるに、沖に大船の多くかゝりたるさまを書き、袖の湊の事をいわさるを見れは、文明の頃既に袖の湊はなきか如し。されと其趾は天正の頃迄も纔に残りしものと見え、細川幽斎玄旨法印と号道の記中日たかく侍りけれは天正十五年五月廿五日、の事也博多見にまかりけるに、爰を袖の湊と里人のおしへけれは

いさゝらはともにぬらさんたひころも
袖のみなとのなみのまくらに

日もくれぬいさ船よせてねもしなん
ひしきものには袖のみなとを

又豊臣勝俊羽柴下総守長嘯子と号九州道の記に、博多と云処に四五日ありける内に、袖の湊とこと〳〵しくいはれたるはいつくそ尋はやと申けれは、あるし心ある人にてしるへしけるに、あるしの云、今こそ潮のさし来て水もすこし侍れ、常はむけにいふかいなくさふらふものをとそ在ける、まことに唐土船よせつくへき浦とも覚へすとあり。此道の記は博多再興の後天正二十年の事也。

高シ。是昔入海ナリシ時、南北ノ地ヲ穿ツ事深ケレハ、漂澪或ハ船具ノ類出ル事多シ。此水道呉服町の東側、一時埋レテ平地トナリシ事アリ。是ハ年行司勝野次郎左衛門ト云者、水難ヲ恐レ、藩ニ請ヒ、己カ宅地ニアル所ヲ埋ム。ソレヨリ、流水東西ニ貫通セスナリヌ。明和元年甲申七月、松屋利八ト云者、此所ニ住シケルカ、此水道ハ、元来古跡ナリシニ、勝野カ所為ニテ埋メシ事、本意ナラサル事ナリトテ、元ノ如ク決リ通サン事ヲ請フ。藩是ヲ許シ、又雑費ノ料トシテ、銀子ヲ与ヘラル。是ニ依テ、己カ屋下ヲ埋樋ニシテ、裏手東町ノ界マテ、貫通スル事ヲ得タリ。今アル所、凡東西長六町余、幅一間許ナリ。博多ニ、宋人ノ伝ヘシトテ、隠語ヲ今モ、商家ニ用ヒ来レリ。長崎ノ手令ノ類ナリ。

11　『筑前旧志略』

袖　港

袖港ハ博多ノ入海ニシテ、古唐船ノ着シ港ナリ。一説ニ此港今ハ埋レテ人家トナリ、其跡市街中央ノ東西ヲ貫キテ、僅ニ横一間計リノ水道ト成レリトゾ。（博多人是ヲ大水道ト云ヘリ）或ハ博多ノ東西ニ入海アリ。唐船ナドモ其所ニ繫ケリ。此港博多ノ左右ニ有リテ衣ノ袖ノ如クナレハ、袖港ト名付シモノナラントモ云ヘリ。此港ニ唐船ノ来リ初シ頃ハ詳ナラズト雖共、天文二十年マデハ正ニ来泊セリト云ヘリ。其後ハ豊後国府内ニ異船ヲ着ル事トナレリ。

新拾遺　　前大納言為定

いかにせん唐船のよる方もしらぬにさわく袖の港を

12　『石城遺聞』

豊太閤再興以前の博多の事

天正十五年豊太閤再興以前の博多の位置に二説あり。筑前続風土記元禄年中貝原篤信著、同拾遺天保年中青柳種信著、石城志明和年中津田元顧著共に今の博多を前の博多の地なりとし、今の大水道を以て大水道は那珂川石堂川貫通す、今は呉服町より起り、西町土居町を経、片土居町掛町麹屋町川端町下新川端町の境を通り、那珂川支流に入る。之を袖の湊の趾と云ふ。溝巾一間乃至一間二三歩あり。此下水溝筋下土居町より川端町に至る処、明治十三年津内有志の寄附金をもつて石蓋を覆ひ便路を開く。其道線病院前寿橋ニ接するをもつて寿小路と号す。寿橋ハ明治十二年福博有志者にて新にこれを架したり。袖の湊の趾とする説なれとも、博多古説拾遺元文年中熊本敬郷著には矢倉門の外側を袖の湊の趾となし、今の博多は以前の沖の浜にして、守護領は比恵村犬飼村辺なるへし、比恵村田地に百堂の址及ひ町名残り、比恵の土手を今も百堂土手と云、住吉村の内字ならひ松ならびまつは瓦町往還の右瓦町口石橋の下り口より住吉の宮森見合の辺迄を云フと云処、櫛田宮の旧社地なりしと云ひ、又博多記享保年中鶴田自反著にも、古しへの博多は比恵村あたり今簑島塩原辺にして櫛田の杜も同所ならんか、比恵村辺田の字に牛町鷺町社家町等の町名あり、今の博

川ハ、昔ハ住吉ト博多ノ間ヲ流レテ、瓦町ノ西ニテ、那珂川ニ入レリ。博多ノ東北ニハ、川ハナクテ、袖港ノ入海アリシナリ。古来中国ハサラナリ。異国舟モ来リ集ヒシ所ニテ、詠歌多シ。

新続撰恋　波コユルソテノミナトノウキ枕
ウキテソ独ネハ流レケル　惟宗忠宗

続千載　思ヒツヽイハヌハイトヽ心ノミ
サハクハ袖ノ湊ナリケリ　後深草院少将内侍

同　シラレシナソテノ湊ニヨル波ノ
ウヘニハサワク心ナラネハ　中臣祐臣

続千載　泪ソフ袖ノミナトヲタヨリニテ
月モウキネノ影ヤトシケリ　津守国助

続後拾遺　年月ハナミタノサハク我ソテノ
湊ヤコヒノトマリナルラム　従二位行家

新千　芦間ナキ泪ノソテノミナトニモ
サハルハ人ノヨルヘナリケリ　国助

新拾遺十二　イカニセン唐土船ノヨルカタモ
シラヌニサハク袖ノ湊ヲ　前大納言為定

千五百　ウトカリシ唐土船モ寄ルハカリ
ソテノ湊ヲアラフ白波　三宮

続古今冬　千鳥ナクソテノ湊ヲトヒユカシ
モロコシ船ノヨルノ寝覚ニ　定家

新続古今　恋ワフル袖ノミナトノ波マクラ
夜ノウキネノ数ツモルラム　前大納言忠良

夫木　日クルレハ袖ノミナトヲユク蛍
サワク思ヒノ程見ユラム　光俊

同　松浦潟ソテノミナトニコキ寄ン
唐土フネノトマリモトメハ　有家

同　トコノ海ニナカレテヲツル泪川
袖ノ湊ノサワク名モウシ

続後撰　影ナレテヤトル月カナ人シレス
ヨナ〳〵サワク袖ノ湊ニ　式子内親王

菅公モ、筑紫ニ下リ玉フ時、博多ヨリ宰府ニ移シマイラセントテ、先此所ニ、暫留メケレハ、

流レ来テ涙ナカラニカタシキノ
袖ノ湊ノ礒寝ワヒシキ

ト読玉ヒシト言伝ヘタリ。慶長五年庚子春、博多ノ市中、火災アリテ、広野トナリシカハ、国主小早川秀秋、其臣桂主水、三井四郎左衛門ニ命シ、其焼灰ヲ以テ、入海ヲ埋メラル。又港橋モ、焼落タリシヲ、三間短クシテ掛タリ。同十八年癸丑ノ冬、黒田長政、又寺田茂兵衛、坂井六兵衛ニ命シテ、埋メ残セシ所ヲ埋メ、其上ニ町家ヲ立。湊橋ヲモ、更ニ短ク掛替サセラル。東町、呉服町、西町、等ノ地ハ甚低クシテ、魚町筋、石堂筋ハ

此町と新川端鏡天神(満)宮の側迄東西に通れる溝也、昔の入海の埋れしハ、金吾中納言(ミ)秀秋の時の事なりしといふ。

○湊橋(一名冷泉橋是ハ昔の名にハ非るべし)　古へ入海に架して澳浜に通ひしと云。今鏡天神の側にある石橋の辺也と云。此橋の長八十弐間有しとそ。又は百弐拾間なりしとも。今は石橋長僅に二間余なり。

光泉寺(本編に見えたり時宗)

袖湊山と号す。称名寺に属す。始は同寺の境内にありしか、いつの頃爰に移せしならん。寺内に文殊堂有(今此寺。見えず)むかし此町に上原紹意(俗名詳ならず)と云者有。年行司十二人の内也。

10　『福岡県地理全誌』博多

港橋址

古へ袖湊ノ入海ニ架シテ、澳浜ニ通ヒシ橋ナリ。其址今鏡神社ノ側ニアル、石橋ノ辺ナリト云。又片土居町ノ石橋アル所共云ナリ。一説ニ、今ノ呉服町ノアタリヲ、中島ト云ヒテ、此所ニ港橋アリ。博多ヲモ、中島ノ郷ト云ケル由、云伝ヘリ。昔府ノ大道ヨリ、澳浜ヘ往還ノ順路ナレハ、左モアルヘシ。聖武天皇、釈行基ニ勅シテ、諸国ノ経界ヲ定メ玉ヒシ時、此橋の朽タリシヲ、掛替シ事アリ。本朝高僧伝(七十巻)ニ、太宰府本山寺釈高明、播州書写山性空上人弟子也、住太宰府本山寺、三衣一鉢、不畜(蓄)余資、念仏誦経之外、勧興建、而造博多橋トアリ。此博多橋、即港橋ナルヘシ。又冷泉橋ト云ルモ、此橋ノ事ナリト云。是ハ後世ノ名ナルヘシ。古ヘハ、橋ノ長サ八十二間アリシト云ヘリ。(一記ニハ、百二十間。博多古図ニハ、百間橋トアリ。)今ノ石橋ハ、享保ノ頃マテハ、三間程ノ板橋ナリ。元文四年己未六月、改テ石橋トス。

（中　略）

袖湊址

古ハ、博多ノ東北守護領ト、澳浜ノ間ニ、入海アリテ、西北ヨリ入テ、東南ニ至り、住吉村(堅)粕村ノ辺マテモ、斥地ナリシトカヤ。博多ノ西南モ、今ノ片原町港橋ノ辺マテ、皆西北ノ海ニ臨メリ。海水此辺ノ少シ東ニ止リ、猶其東南ハ、斥地長ク続キテ、那珂川ハ、斥地ノ中ヲ流レテ海ニ入ル。入海ハ、今ノ寺町ノ西北ヨリ、港橋ノ辺マテ、博多ノ中間ヲ打廻リ、東北ノ入海ト、西北ノ大海ト相通ス。是ヲ中海ト云テ、唐船ノ入シ所ナリ。中頃、奥浜ト云シ所ハ、入海ノ中ニ在シ洲ナリ。中海東北ノ方ハ狭シ。西北ノ方、今湊橋アル辺ニ、長キ橋有テ、通路トセリ。此入海、博多ノ中ヲ打廻リテ、袖ノ形ノ如クナリシカハ、袖ノ湊ト名付シナルヘシ。今蓮池入定寺本岳寺ノ間ヨリ、東町、呉服町、西町、土居町、片土居町ヲ経テ、川端町鏡神社ノ側ニ至ルマテ、東西幅一間許ノ溝通レリ。是ヲ大水道ト云。是袖港ノ残レルナリ。港橋ト云モ、袖湊ノ残レル溝ニ掛シ故ナリ。石堂

せらる。此時宗門始て九州に行ハる。道場に住せし僧も、此事を伝え聞て大坂に登り、蓮如の門徒となりて宗旨を改め、蘆原山妙行寺と号す。其後故有て山号を袖湊山とあらたむ。此僧本寺に願ひて当寺を輪番とせり。本州及諸国の同宗の寺は、皆此輪番に来し僧支配せり。天正年中兵燹に罹りて什物等悉く焼失す。其時裏粕屋郡三苫村に在し願念と云僧、焼跡に残りし本尊を奉持して己か草舎に安置せり。其後此所に道場を仮に構へ、仲言と云僧（肥後国菊池の一族）を住持たらしむ。此時門跡より檀越に当寺再興の事請れし書を、左証として遂に本堂成就す。兵乱の後にて輪番の僧も来さりしかは、原田の臣笠大炊助興長か末子彦兵衛と云者を後住とし、名を従善と改む。其比、織田信長公本願寺と不和なりしかは、門跡大坂に籠城す。従善馳登りて城中に力を合す。門跡悦て感状を与へらる。次の僧を教善と云。文禄元年大閤名護屋御在陣の時、教如上人大閤に候問の為彼地に下向あり。当寺に一宿せらる。此時門跡の印書并其家宰よりの書翰あり。慶長五年長政公御入国有し時、門跡より使者を差て贈り物あり。これを当寺に託して捧しむ。（如水公よりの御回翰の写しなりとて二通の書翰を蔵せり。）慶長七年台命ありて関東及北国の同宗の寺は、教如の門下に属せしめ給へり。此時東西二派に分るといへとも、末子は其心に任すへしとなり。住持松安たまたま在京して居たりしか東派に属す。予メ改派の事を相議せさりし故に、本州及其余の末寺ハ、皆西門跡の直末寺となりしといふ。

川端町

大水道（本編に、古ハ東西に通れる入海有て、袖湊と号せり云々。又横一間斗なる溝東西に通せり。今是を大水道と号す。）

此水道は蓮池町の入定寺と本嶽寺の間より数町（東町・呉服町・西町・土居町・片土居町）を経て、此町と新川端鏡天神の側まて東西に通れる溝なり。昔の入海の埋れしは金吾中納言秀秋の時の事なりしと云。

湊橋（一名冷泉橋と云。是は昔の名には非るべし。）

此橋は古入海に架して澳浜に通ひしといふ。今鏡天神の側にある石橋の辺なりといふ。此外言伝ふる地あれとも一定しかたし。故に茲に洩しぬ。此橋の長サ八十弐間有しといへり。又は百弐十間なりしともいふ。今は石橋の長さ僅に二間余なり。此町に寒具屋数戸あり。土産考に出す。（中　略）

光泉寺（本編に見えたり。時宗）

袖湊山と号す。称名寺に属す。始は同寺の境内にあり。いつの比こゝに移せしにや。寺内に文珠堂あり。

9　『筑前国続風土記拾遺』

川端町

○大水道（本編に古は東西ニ通れる入海有て袖湊と号せり云々。又横一間許りなる溝東西に通せり。今是を大水道といふ。）　此水道ハ蓮池町入定寺と本岳寺の間より数町（東町・呉服町・西町・土居町・片土居町）を経て

は、宝暦四年甲戌の冬再興せり。其来由は、社地の東家に住る円庵安井氏、一日元顧が許へ訪ひ来りて語りけるは、我過し神無月廿一日の夜、不思議の霊夢を得たり。其あらましは、わが西隣なる楊池の辺に逍遙せしに、酒掃いと清らか也。かたはらにひとりの異人ありしに、いかなる故にやと尋ね侍りしに、かの人答て曰、汝しらずや、此所こそかけまくもかしこき少彦名命の鎮りいます地也、委しき事をしらんと思はゞ、吾子に問ふべしと聞へて、夢覚ぬ。吾子いかんしてしれる事ありや。予答て曰。抑、楊池は霊址なる事、土人の口碑に在、殊に此御神は、大巳貴命と御心を一にし、力を戮て、天が下をみそはなし、病を療るの方を定め、又、鳥獣・昆虫の災異を攘はんが為に、禁厭の法を定めて、万民を救ひ玉ひし事、載て日本紀に詳也。されは、本朝の医の祖神にてましますゆへ、予、つねに京都五条天神、紀州粟島大明神、及び当国儀崎明神など、殊に尊崇し奉りぬ。是皆、少彦名命にておはしませば也。かゝる夙志あるにより、夢中にも予が事を示し玉ひしならんか、神詫疑ふべきにあらずとて、安井氏と共に、彼所に至りて点検するに、風色おのづから物ふりて、叢祠も既に荒廃に及べり。かくたうとき御神霊の、艸露にうづもれさせおはしますをみるに忍びず、且は霊夢の告のおごそかなりしを感じて、御社を再造し奉らん事を相議り、同志の輩につのりしかば、諸方より寄附の捧げものありて、財用乏しからず、神殿・拝殿・鳥居・玉垣に至るまで、かたの如く作り出せり。かくて、同六年丙子閏十一月、落成を告ければ、同廿八日酉刻、神鬮によりて正遷宮の規式あり。櫛田の神主祝部山城守利寛、其子出雲守利雄等、是をつとむ。以来当社を司らしむ所也。又、末社三区建立す、大国、大巳貴命也、後に本社に合せ祭る。夷子、事代主命也。稲荷、倉稲魂命なり。又、埋もれし小池も、土をうがち、石をたゝみて、めぐりに、玉垣を造り、云。当社の祭は、二月十一日、八月十一日にて、神楽、及び宮坐等あり。又、節分には、追儺の祭ありて神物出る也。又、月毎に、朔日・十一日・廿一日・是を三節といひて、詣る人多し。余は、当社の記事に詳也。これはさいつごろ、神官利寛が需によりて、元顧ひそかに是を撰せり。神領は従二位高辻大納言菅原家長卿御染也、延寿王院菅原久磨寄附、安井氏と予と、是を修飾し、明和元閏十二月十一日、広前に掲げ畢ぬ。

8　『筑前国続風土記附録』

土居川口町（マヽ）

妙行寺　本編に見えたり。真宗東仏堂七間四面

袖湊山と号す。東本願寺に属す。寺伝にそのかミ冷泉津の辺蘆原なりし比、一宇の道場あり。天台宗にて寺号もなく、唯蘆原道場とのミいへり。明応の比、本願寺の蓮如上人大坂にて教化

させ玉へと、二なう所望ありける故、鐙容（アブミカタ）とて、御秘蔵の硯に墨すり流させ、千万緒の御心をこめて、筆をとらせられし画像に、硯を取そへ、泣々僧正へ伝へ玉ふ。其画影ともに、梶井宮の宝物に伝りて、今、御境内の社の神像是也。世に菅公自画の像といふ者多し、何ぞ多く画伝へ玉ふべきや。かゝる深き由縁有てこそ伝りもせめ。予彼御所に仕へて神像を拝し来るに、誠に覚へずも感涙しけるは、自然の応なるべし。藁蓋に坐し玉ふてい、畳をかゝせ玉はぬは、謙譲の御心よりと、いとゞ恐れみおもへりと云々。此説、当社の事にあづからずといへども、世の人の惑を解に足りぬれば、しるし侍りぬ。元禄の頃、綱敷御影、並に沖浜の神詠、京都に在しを、松下見林、当社に寄附せられしと云。松下翁は、本朝の神籍に博洽の人なれば、其来由を押極めてこそ遙に寄納せられしなるべし。又、大賀如心が自記の略に云。元禄癸未正月廿九日、博多市中焼亡しける頃、四方の在家は悉く焼失けるに、此御社は烟のあとだにも無りければ、人々不思議の思ひをなして、いとゞいやまひける。此趣は、卍山和尚の東林後録のうちにもしるし置れぬ。其時社僧周栄、御社をむかしの跡に移し奉る。則今の社所也。神前に古井ありしかど、埋れありしを、某、力を用ひて穿ち改め、詣来る人の手洗ひ口嗽ぎ、身を清むるたよりとなし置しに、今年享保十八年癸丑十月十九日午刻はかりに、社僧の奴、此水を汲しに、天神の御尊像上らせ玉ひぬ。社僧良州驚きおそれみて、則、神殿に移し入奉ひぬ。此井泉は某が再興し置けるに、かゝる奇瑞不可思議なる事の、有難くおぼへ侍りければ、此度広前に神燈をかゝげ奉りて、いよ〳〵和光の天に満、地に輝き、御社いやましに繁栄し玉はん事を、いのり侍る也。

時しあれば神のみかげをくみてしる古井の水のきよきためし

癸丑霜月、自得庵慈渓如心、行年八十二、謹テ書ス。今按に、此記と、博多記の説とは、齟齬せり。既に東林録にもしるされぬれば、博多記恐らくは非なるべし。又、八百五十年御忌の時、東長寺鳳山、院家の需により、詩歌二十五首、紳縉家より奉納有。

楊池社

西町上東側に在、所祭少彦名命也。此所、むかしは袖の湊の入江なりしが、滄桑相変りて、わづかばかりの小池なりもて行しも、なを年を逐ふて埋もれたりしかど、岸の柳は世々に植変しにや、今に一圍余りの大木ありて、土人、柳が池と称し侍る。後堀河院貞応元年四月十四日、此所より海夫人（テンギョ）を網引し侍りしと云事は、仏寺門、龍宮寺の下に詳也。合せ考ふべし。今の社

ともに巡見ありて、願の旨を許し玉ふ。猶又雑用の類として、銀子を賜ぬ。是より、己が屋下を埋樋にして、裏手東町の堺まで、貫通する事を得たり。惣じて東西の水筋、所によりて広狭浅深あり。見渡関の名、諸書におゐていまだ見侍らず、只九州軍記に処々出たり、又古図には、今の作り出町の東、堅粕村の西にあたりて、見渡関あり。しかれども、其址さだかならず。文明の頃、宗祇法師の筑紫記行(紀)にも、刈萱の関の事は書たれども、此関の名はあらず。按ずるに、むかし府大道より、博多へ往来の非常をいましめん為に、仮に関所をもうけしなるべし。

湊　橋

いにしへより入海に架して、澳浜へ通ひし橋也。其址、今、鏡天神のかたはらにある石橋の辺なりともいひ、又、片土居町の石橋のある処也ともいふ。一説に、今の呉服町のあたりを中島といひて、此所に湊橋あり、博多をも中島の郷といひけるよしいひ伝へり。むかし、府大道より澳浜へ往還の順路なれば、左もあるべし。聖武天皇、釈の行基に勅して、諸国の経界を定め給ひし時、此橋の朽ゐたりしを、かけ直せし事あり。詳に仏寺門観音寺の下にしるせり。本朝高僧伝七十巻ニ曰。太宰府本山寺釈ノ高明ハ播州書写山ノ性空上人ノ弟子也。住ス太宰府本山寺ニ。三衣一鉢。不レ蓄二余資ヲ一。念仏誦経之外。勤二典建ヲ一。而造二博多橋一。下略今按ニ、博多橋ハ即湊橋ナラン歟、又、冷泉橋といへるも、此橋の事なりといふ、是は後世の名なるべし。いにしへ此橋の長さ八十二間ありしといへり。或説には、百二十間なりともいふ。川端の石橋、享保の頃までは三間程の板橋なり、元文巳未四年六月、石橋になる。

綱輪天神

続風土記曰。綱輪天神、綱場町にあり。菅丞相左遷の時、袖湊にて船より揚らせ玉ひしが、海辺にてしかせ玉ふべきものもなくて、佇みおはしましけるに、所の海人、舟の綱をたぐり、輪の如く重ねしを敷せまいらせければ、暫く御休みましくける。後に、此所に御社を建て、綱輪の天神と号す。今、綱場と称するは、よこなまれる也。此社、始は袖湊の入海の側にあり。慶長元年、今の地に移せり。社僧の寺を成就院と云、真言宗なり。十一月廿五日祭礼あり。博多記に曰。此社、昔は土居町鍛冶の住ける家の裏にあり。後、今の所に遷せり。中頃綱場町より門ありて、乾に向へり。其後、巽にむかひて宮造せり。後に又大水道を前にして、乾に向ひ建たりしが、元禄十六年正月廿八日、須崎町より出火せし時、此社も焼亡せり。是よりむかしの宮所に移して、巽にむかふ云々。末社是を略す、以下是に倣ふべし。

桂秋斎が南嶺子ニ曰。菅贈大相国、思ひかけずも太宰ノ権帥に貶任ましくし時、天台坐主法性坊尊意僧正、多年御交り深かりしかば、比叡山より下られ、せめての御遺言に御姿を書留め

の古歌を挙たり。しかれども、正しき処なければ、附会に近し。

大水道

蓮池町入定寺、本岳寺の間より、川端町鏡天神のかたはらまで、東西に溝通れり、今、是を大水道と云。いにしへ、袖の湊の入海の址也。貝原翁曰、天文廿一年より、異国の舟絶て来らず、此時より袖湊も漸あせて埋もれり。長政公此国を初て領し玉ひし慶長五年まで、わづかに四十九年なりしが、此袖湊は既になくなりぬ、土地変遷の速なる事かくの如し、と。今按に、此入海は自然に埋もれたるにはあらず、人力を以て埋められし也。或記曰、博多、中の海埋められしは、慶長五年正二月の事也、其頃、市中焼て広野となりしかば、国主金吾中納言秀秋、桂主水・三井四郎衛門に命じ、其焼灰を以て入海を埋められしが、又、湊橋も焼落たりしを、三間短めて懸たり。同十八年の冬、長政公、寺田茂兵衛・坂井六兵衛に命じて、先年埋め残せし処をうめ、其上に町家を立て、湊橋をも又みじかめて掛直させ玉ふ云々。此説を以て証とすべし。又、熊本氏おもへらく、いにしへ入海ありし跡は、今博多の東南の外郭、田となりし所にて、今、大水道といへるは、房州堀なるべしと。是は大なるあやまり也。臼杵安房守が濠をほりしは、博多の外郭要害の為也。市中に濠を構へて、何の益あらんや、殊に房州などが住せし処は、矢倉門なりしといへば、論ずるにも及ばず。もし此溝を以て入海の跡とする時は、沖浜の地狭くして、彼海東諸国記(紀)にいへる、西北四千戸の説にかなはず、とおもへるか。今、方十町の境地なれども、町並によりて屋敷の入りの間数、三十間に余れる処多かれば、往古繁栄の時、透間もなく民屋作り並べしならば、さばかりの戸数にも侍りぬべし。たとへば、今長崎のごときも、境地は博多より狭しといへども、甍を並べ、軒をきしりて、所せく家造せし故、民戸は四千に余り、竈は一万に及べりと云。是を以て見る時は、此溝より西北、何ぞ四千戸の地にあらずといふべけんや。加之、海東諸国記は、吾邦の書に非ず、朝鮮人の作れる処なれば、徴とするにたらず。世の人往々かの説を以て、博多の考証とせるは、未だ深く思はざればなり。又、東町・呉服町・西町等の地は、甚低くして、魚町筋・石堂筋は高し。是むかし入海なりし時、南北の両岸なりし事、いちじるし。殊に、西町・呉服町辺の地を穿つ事深ければ、漂澪、或は船具の類出る事まゝ多し。是又其証也。此水道、呉服町東側、今は埋もれて平地となれり。是は年行司なりし勝野次郎右衛門といふ者、水難を恐れ、公訴して、おのれが宅地にある所を埋みけるとなん。それより流水東西に貫通せずなりぬ。明和元申年七月、今の家主松屋利八は、此水道は元来古跡なりしに、勝野氏が所為にて埋め置るよし、本意ならざる事也とて、本の如く決り通さんよしを、公に訴へけるに、町奉行、森氏・時枝氏

るへし。今の博多は澳の浜・北浜の四千戸なるへし。比恵村田地の内杯にも百堂の跡、町の名共残り、比恵の土手を百堂土手と今も云也。瓦町口も春吉村田地にして、ならひ松と云ほのけ有り、是を櫛田の宮跡と聞伝ふ。元弘の頃菊地[池]入道姪浜に通りし道、宰府よりの海[海]道・見渡し関等考るに右の説ならんや。

一、いにしへの筑石垣、博多の北、松原の沖より入江有て濡衣嶋まて入海有、是を袖の湊と聞伝る。守護領と澳の浜の間、中海の入江有り、是は今はかたの外側に東南に古川の跡有り。是ならんや。川端より蓮池町に通りし溝は後に掘たる川筋ならん。大友家臣臼杵新助と云人、志摩郡紺[柑]子岳に在城ス。後に安房守と云たる由、此人掘たる故房州堀と名付ルと成。一説に矢倉門口の堀を房州堀と云由なれ共、此堀は博多の町司徳永宗弥と云人掘たる故、宗弥堀と名付たると聞伝ふ。然共川端よりの溝房州堀の説ならんや。湊橋と云事古図に見へす。冷泉橋迚博多の西に有り。古図を考るに瓦町の裏手と見へ侍る。西の入海の内に長浜・須崎辺陸地有り。福崎山の根迄唐浦と云有。今考るに福岡六町通りと見へ侍る。管弦橋迚有り。此橋櫛田宮と住吉の宮の間に見へたり。博多の西、入海ゟ住吉につゝきて小烏・警固村の際まで塩入にして塩浜有りて塩を焼たりしとかや。姪浜の海道も管弦橋、櫛田宮の前より塩廻り道、潟道有て警固村のやうに通りしとかや。是宰府ゟの海道と見へたり。

7　『石城志』

袖湊

いにしへ、唐船の入し港也、むかし、比恵の川は、博多の東には流れず、住吉と博多の間を通りて那珂川に入、其古川の跡、今に残りて見ゆ。博多の東に入海あり、それより西の方那珂川まで、入海通りたりしを、袖の湊といへり。此入海、北より西へうちめぐりて、袖の形の如くなれば、名づけしにや。今、入定寺と本岳寺の間より、片原町といふ所の湊橋まで、東西に溝通れり、今、是を大水道と云。是袖湊の残れる水筋也。湊橋といふも、袖の湊の旧跡によれる名也。

新後撰　浪こゆる袖湊のうき枕うきてはひとりねはなかれぬる　惟宗忠宗

続千載　思ひつついはぬはいとと心のみさくは袖の湊なりけり　後源草院少将内侍

今按に、末永氏早鑑云、浦と湊は附属して体用の所なれば、袖湊の浜辺は、則袖の浦といひつべし、出羽国に袖の浦ありといへども、諸国に同じ名所のある事めづらしからずとて、袖の浦

有　家

同
松浦潟袖の湊にこきよせん
唐土舟の泊り求めて

為　家

同
とこの海に流て落る泪川
袖湊のさハく名もうし

徹書記

草根集
名残たる波にやぬらす唐人の
袖湊のあけのそほ舟

正徹書記ハ東福寺白雲派下の僧也、正徹字ハ清岩、童名ハ幸菊丸、後花園院長禄二年五月九日七十九歳にて死去す。此僧和歌ハ冷泉院為尹卿の門弟にして、今川貞世ノ指南也と云う。よめる歌二万六千首有り。

天正十五年夏細川玄旨幽斎此所にきて立出る袖の湊の夕すゝみ
片敷程の浦風そふく
いささらハ共にぬらさんたひ衣
袖湊の波の枕に
日も暮ぬいさ舟寄むねもしなん
ひしき物にハ袖湊を

5　『博多記』

袖の湊之事

袖の湊　此所往昔唐船の入湊也。昔比恵川ハ博多の東ニハ流れす、住吉と博多の間を通り那珂川ニ入ル。其川の跡今も残れり。博多の東ニ入海あり。夫より西の方那珂川迄入海通たりしを袖の湊と云り。此入海北より南東より西へ打廻て袖の形の如ク、夫故に名とす。今博多の入定寺と本岳寺との間より片原町と云所の湊橋迄東西溝通し、今ハ是を大水道と云り。呉服町勝野氏の家の側を通りて大水道有しを、勝野氏の家の内に水仕入塞、呉服町南迄大水道通り、東町も大水道通り、勝野屋敷ふさかり、今ハ東西に通らさる也、袖の湊入海中絶たり。

6　『博多古説拾遺』

博多初り之事并唐舟不来事

（中　略）

一　博多の古図を見るに、弘安弐年蒙古国より数千艘此津に来りし時、博多の沖に有し筑石を再興ありしとかや。此時絵図又其後の図を見るに、守護領は今の犬飼村・春吉村の田地な

醍醐入道前太政大臣女

続古今
人しれぬ袖の湊のあた波ハ
名のミさハけとよる舟もなし

定　家

同
千鳥なく袖の湊をとひ来かし
唐土舟の夜のねさめに

前大納言忠良

新続古今　又　千五百番
恋佗る袖の湊の波枕
いく夜うきねの数つもるらん

前大納言為定

新拾遺　十二
いかにせん唐土舟のよる方も
しらぬにさハく袖の湊もを（ママ）

惟宗　忠宗

同
波こゆる袖の湊のうき枕
うきてそ独（ひとり）ねハなかれける

源家長朝臣

新勅撰
こき帰る袖の湊の蜑小舟
里のしるへを誰かおしえし

後嵯峨院

続拾遺
おなしくは唐土舟もよりならん
しる人もなき袖の湊に

津守　国助

続千載
泪そふ袖の湊を便にて
月もうきねの影宿しけり

後深草院少将内侍

同
思ひ筒いはねハいとゝ心のミ
さハくハ袖のみなと也けり

中臣　裕臣

同
しられしな袖の湊による波の
上にハさハく心ならねと

津守　国助

新千載
蘆まなき泪の袖の湊にも
さハる人のよるへなりけり

従二位行家

続後拾遺
年月ハ泪のさハく我か袖の
湊や恋のとまりなるらん

三　宮

千五百番歌
うとかりし唐土舟もよる許
袖の湊をあらふしら波

光　俊

夫木
日暮れハ袖の湊を行蛍
さハく思ひの程や見ゆらむ

さはくおもひの程や見ゆらん

有　家

同

まつら潟袖の湊にこきよせん

唐土船のとまりもとめは

為　家

同

とこの海の流れておつる泪川

袖の湊のさはく名もうし

式子内親王

続後撰

影なれてやとる月かな人しれす

夜な〳〵さはく袖のみなとに

（中　略）

網輪天神

網場町にあり。菅丞相左遷のとき、袖湊にて船よりあからせ玉ひしか、海辺にてしかせ玉ふへき物もなかりしかは、所の海人舟の網をたくり、輪のことくかさねしを、しかせまゐらせければ、しはらく御休ましくける。後に此所に御社を立て、網輪の天神と号す。今網場と称するは、よこなまれるなり。豊前国筑城郡高塚村の海辺にも、網敷の天神の社あり。菅丞相左遷の時、先此浦に上り、網をしきて坐し玉ふ所なりと云。博多の網輪の天神の故事のことし。摂津国須磨の浦にも、網屋の天神とあり。此社始は袖湊の入海の側にありしといふ。其地分明ならず。大かた今の社地の辺なるへし。近古兵燹にかゝりて、所々に社地をかへ、後にはあるかなきかのごとくなりしを、世静りて後、慶長元年正円といふ僧、御社を再興して、今の地にうつせり。十一月廿五日祭礼あり。社僧の寺を網輪山梅松寺成就院といふ。真言宗なり。東長寺に属す。

4　『筑前国名所記』上巻

袖　湊

博多の内なり。むかしは今の袖のみなと橋より北の方へ大なる入海有て、もろこし船を繋ぎしとなん。其入江のかたち袖に似たりしゆへに、大古より袖のみなとゝいひしとかや。篤信編集せし新名寄に曰、むかし箱崎松原の西南博多の東北に入海あり。それより南の方那珂川迄入海つゝきたりしを袖の湊といへり。いつしか入海はなくなりぬ。今博多の入定寺と本岳寺の間より片原町の湊橋まて南北に溝通れり、是袖のみなとの残れる水筋なり。今湊橋と名付しも袖湊の旧跡によれる名なり。

式子内親王

続後撰

影馴て宿る月かな人しれは

夜な〳〵さはく袖湊に

前太政大臣

続後撰

海土小舟よる方もなし涙せく

袖の湊ハ名のミさハけと

の方はひろく、西北の方はせはし。西北の方、今の港橋ある辺に、長き橋ありて、通路とせり。此入海博多の中を打めくりて、袖のかたちのことくなりしかは、袖湊と名付しにや、今博多の入定寺と本岳寺の間より、港橋迄、東西に溝とほれり。今是を大水道と云、是袖湊の残れる也。唐土船の泊りし所なれは、さばかり大なる港なるへきに、古今の変替かくの如し。港橋と云も、袖湊の残される溝にかけし故也。今博多と松原との間に流るゝ比恵川は、むかしは住吉と博多の間を流れて、瓦町の西の辺にて、那珂川に入ぬ。博多の東北には、昔は川はなくて、袖湊の入海ありし也。

新後撰恋
浪こゆる袖のみなとのうきまくら
うきてそひとりねはなかれける
惟宗　忠宗

続千載
おもひつゝいはぬはいとゝこゝろのみ
さはくは袖のみなとなりけり
後深草院少将内侍

同
しられしな袖の湊による波の
うへにはさはくこゝろならねは
中臣　祐臣

同
泪そふ袖の湊をたよりにて
津守　国助

月もうきぬの影やとしけり
従二位　行家

続後拾遺
年月は泪のさはく我か袖の
湊やこひのとまりなるらん
国　助

新千
蘆間なき泪の袖の湊にも
さはるは人のよるへなりけり
前大納言　為定

新拾遺十二
いかにせんもろこし舟のよる方も
しらぬにさはく袖のみなとを
三　宮

千五百
うとかりし唐土船もよるはかり
袖の湊をあらふしらなみ
定　家

続古今冬
千鳥なく袖の湊をとひこかし
唐土船のよるのねさめに
前大納言　忠良

新続古今
こひわふる袖の湊のなみまくら
いく夜うきねの数つもるらん
光　俊

夫木
日暮れは袖のみなとを行く螢

かしは瓦町のうらより、袖の湊迄南北に通りてありしが、いつのほとにかうつもれて、今はわつかに残り、片原町のうらにあり。博多の南方に門を立たる所をは、今も矢倉門と云て、其名のみ伝はれり。（其昔承天寺盛なりし時は、彼寺の南門此所に在しといふ）秀吉公の此町を再興し玉ふ時も、奉行人むかしの故実を尋、南北を縦とし、道を広くす。屋宅も広くして、おほくは富人おれり。是を本町とす。縦町凡九筋有。むかし太宰府へ通し、且又唐船の着し海辺に通するかために、南北の路を広くせしなるへし。東西を横として道せはし。屋宅もせはくして、富人はまれなり。今博多町数百十三町あり。町の名は、既に提要上巻に記したれは。爰に記さす。（長政公福岡の城を築、東西に外郭をかまへ、大門をひらき、博多の間、那珂川に中島を築き、博多に通し、博多より石堂口を出て、箱崎にいたる。是他国往来の通路也といへとも博多の内道のははは、東西にて横町なれは、ふるきによりてせはし。）秀吉公如此すたれたるをおこし、絶たるをついで、博多の町を立玉ひしかは、博多の者共、再世に出たる心地して、各本土に立帰り、思ひ〳〵に居宅を立並へ、人のあつまる事もとのことし。此時博多の富人神屋宗堪、島井宗室両人ともに、表口十三間半に屋宅を給はり、永く丁役を除かれしかは、今に至るまて、此両家は免除を蒙る。其後世すてに無事に属しけれは、人々安堵の思ひをなし、近き者は悦ひ、遠き者も来り集しかは、いよ〳〵むかしに立帰り、繁栄の地とそ成にける。

（中　略）

博多の入海は、いにしへよりもろこし船の来る所にて、袖湊と号す。近古は大明勘合の印大内家にありて、博多に大明及西蕃の国よりも商船来り集れり。天文二十年義隆其臣陶尾張守に弑せられし後、勘合の印失ぬれは、翌二十一年より大明の船、日本の渡海やみぬ。此後は博多に異船の来る事なし。其後大友義鎮威勢をふるひし時、永禄二年より豊後府内に異船を著たり。かゝりしかは、袖湊もやうやくあせて埋もれ、長政公此国を初て領したまひし慶長五年まて、其間わつかに四十九年なりしか、此時袖湊はなくなりぬ。土地変遷の速なる事かくのことし。天文二十一年より今宝永六年までは、凡百五十八年になれり。

（中　略）

袖　湊

いにしへ博多にありし入海を袖湊といふ。唐船の入し港なり。昔博多の東北に入海あり。西北より入て、東南にいたり、住吉の辺、堅糟のあたりまても、斥地（かた）なりしとかや。又博多の西南も、今のかたはら町、港橋の辺までは、皆西北の海に臨めり。海水此辺の少東南にとゝまり、猶其東南は、斥地なかくつゝき、那珂川は斥地の中を流て、海に入る。入海は今の寺町の西北より、港橋ある辺まて、博多の中間を打めくり、東北の入海と、西北の大海と相通す。是を中海といひて、唐船の入し所なり。中比奥浜（おきの）といひし所は、入海の中にありし洲なり。中海東北

残りし民屋さへ、又兵火に焼れて焦土と成ぬ。住なれし里の、立さりかたくおもへる者は、わら屋を結ひ、昔をしたふ輩も有しに、天正十五年春三月豊臣秀吉公、島津義久の服せさるを攻んとて、九州に下向し給ふ。島津ほとなく降参ありしかは、帰りのほらせ給はんとて、六月三日箱崎にいたり玉ひ、二十余日逗留したまひしが、同十日博多の址を見玉はんとて、南蛮船にのり、博多に至り給ふ。此時博多の富商神屋宗湛と云者、兵賊の難をさけて、かりに肥前松浦郡唐津に客居せしか、博多に来り、秀吉公を拝謁し、進物をさゝく。此宗湛はもとより茶会を好みけるか、其比天下に名を得し茶人千の利休、天王寺屋宗及等に会し、我数奇の程をも、世上にあらはさんとおもひ立、去年の十月の末に、唐津を出、長州赤間関より舟に乗り、仲冬半に京着して、京大坂境（堺）にて茶道に名ある僧侶に会せり。秀吉公此事を聞召て、甚感し玉ひけるか、翌天正十五年正月三日大坂御城におゐて、諸大名を招き、茶の会あり。此時宗湛をも同しく召て、茶を賜はる。其時石田治部少輔取持、所々の錺（かざり）名器共見せしむ。さて進物を献し、秀吉公を拝謁す。（進物は虎皮二枚、豹皮一枚、照布二端、沈香一斤也。）此時天王寺屋宗及是を取つぐ。又、秀吉公の命にて、錺の道具共拝見す。是より甚寵をうけて、度々茶会に召れて、近侍しける。諸大名にも招請せらる。又、秀吉公の弟大和大納言秀長卿、大和の郡山に在城し玉ひけるにも、参謁し、懇遇を蒙る。如此兼てより、秀吉公の恩顧有し者なりしかは、今年、秀吉公筑紫に下り給ひし時も、侍候しける。六月十一日より、秀吉公博多町を立んとて、指図を書せ玉ひ、翌十二日より町わりをし玉ふ。其経営は黒田孝高に仰付らる。奉行は瀧川三郎兵衛、長束大蔵大輔、山崎志摩守、小西摂津守等也。下奉行三十人あり、此所の老人共を呼出し、博多の町を十町四方に定め、竪横の小路をわり、民屋を営み作らせられける。（秀吉公博多町わりの指図をし給ふ時、孝高に仰付られしに、孝高是を家臣久野四郎兵衛に商量せしめ、四郎兵衛うけ給はり、下人にもたせ置たる銭をとりよせ、秀吉公の御まへにて、即時に銭をならへて、町わりの模様をなしける。孝高見給ひ、処々増損して、秀吉公の御覧に入給ひしに、秀吉公甚心にかなひ、且久野か心匠の工にして、其才の敏捷なる事を称美し給ひ、すなはち其趣に依て、町わりを定めたまふ。）凡博多の津は、当昔異賊防禦の所として、且太宰府への通路なれは、北を外面とし、南を内面とし、町わりは、南北を縦とし、東西を横とせり。又南の方の外郭に、横二十間余の堀の跡ありて、瓦町の西南のすみより、辻堂の東に至る。是南方の要害の固なり。其土堤今もあり。此堀を房州堀と号す。臼杵安房守鑑康といひし人ほらせたる故なりといふ。然れは元亀天正の比、始て堀しなるへし。或は其前大内家守護の時よりも、此要害有しを、臼杵氏修補せしにや、いまた詳ならす。（臼杵安房守は大友宗麟の一族にて、立花道雪の母養孝院の兄なり。大友氏の命をうけて、天文より元亀の始まて、志摩郡柑子岳の城に居、志摩郡の政所と号して、郡中の事を司どる。道雪立花山の城にうつりし後、助のため、博多に砦をかまへ、堀をほり、鑑康を置き、柑子か岳には、其弟臼杵新介鎮次を被置、鑑康鎮次共に天正六年十一月十日、日向耳川にて薩摩の兵と戦て死す。）明暦の初やうやく田と成しかと、其堀の形残りて、今もあらはに見ゆ。又西一面の堀も、む

神宝　天神尊像御自作長九寸二歩座像　不動明王伝教作長三尺冷泉寺本尊　釈迦像唐仏出山之像伝教唐より携来と云　阿弥陀像唐仏長壱寸弐分右同上　十一面観音像唐仏座像長七寸右同断城下三十三所巡礼七番也　天神真筆経ノ切　天神御衣ノ切レ　同御詠歌集一冊　老松の松かさ　縁起二巻　石鳥居、宮守北ノ坊天台宗太宰府支配

3　筑前国続風土記　巻之四

博多（那珂郡に属す）　（中略）

今此所の形勢を見侍るに、東は箱崎の松原につらなり、西は橋をへたて、、福岡につゝき、南は住吉に隣り、北は海に向ひ、那太の白浜、志賀島、唐泊、能古浦なと、はるかに見えわたりて、海つぐのなかめきはまりなし。今も他国の商船、爰にあつまれり。三方は地廣平にして、隣国に道通せり。就中南は平原の地長くつゝき、肥前筑後豊前豊後に通して、往来しけし。西に那珂川あり。東に石堂川あり。市の中には編戸の民軒をならへ、富人門をつらね、いちくらにはよろつのたからおほく、民生日用の食貨ともしからす。且古寺名刹また多し。まことに四方輻輳の地にして、天府の邑といひつへし。此所南北の中程に、古は東西に通れる入海ありて、袖湊と号せり。是唐船の入し港也。此入海より北を、澳（おき）の浜といふ。今は入海なくなり、其跡のみわつかに残りて、横一間許なる溝、東西に通せり。今是を大水道と号す。又むかしは澳の浜の北なる海つらには、石塁長くつらなりて、東は箱崎、多々良にいたり、西は今津に及へり。是は上古より此辺の海浜に、異賊のふせきのため、石壁を築きしが、くつれたりしを、文永弘安の比、蒙古の賊兵しは〳〵来りて、日本をせめしかは、防の備のため、石壁を修補しける也。其事は古戦場の記に、詳にしるし待る。大内家繁栄の時は、袖湊の入海より南を、守護領と号して、大内氏より治む。澳の浜は大友の領なりしといへり。海東諸国記（紀）には博多の居民万余戸、小弐殿、大友殿と分ち領せり。小弐は西南四千余戸、大友は東北六千余戸とあり。此海東諸国記といへる書は、朝鮮人の筆作にて、成化七年に成る。我朝の文明三年に当れり。此時の治むる所、かくのことくなりしにや。然るに此時博多全盛なりといへとも、今の繁栄に及ふへからす。今は袖湊の入海もこと〳〵く人家となり、北の海浜も築出して、其地甚廣まれり。今を以入海より此の地を見れは、昔の奥の浜に倍すへし。然とも猶六千余戸を容るへき地なし。諸国記に記せる所は、おそらくは当昔わか国の人、其事を張皇して、異客にかたれるを聞伝て、妄に信し、かく書たるならん。十里松の事を、武備志に百里のつ、けりと書る類なるへし。文明より後、度々焼失し、天正の時に至りて、又大友家と龍造寺度々合戦ありしかは、わつかに

1　『筑前名寄』

袖の湊　博多にあり。古唐船の入し湊也。昔箱崎の松原の西、博多の東に入海あり。それより西の方、那珂川まで入海つゞきたりしを、袖の湊といへり。いつしか入海はなくなりぬ。今博多の入定寺と本岳寺の間より、片原町と云所の港橋まで東西に溝通れり。是袖のみなとの残れるなり。港橋と名づけしも、そでの湊の旧跡によれる名なり。

式子内親王

かけなれてやどる月かなひとしれず
夜な〳〵さはぐ袖のみなとに

（続後撰集）

定　家

ちどりなくそでのみなとをとひこかし
もろこしふねのよるのねざめに

（続古今）

忠　良

恋わぶる袖のみなとの波まくら
幾夜うきねの数つもるらん

（千五百番歌合）

為　定

いかにせんもろこしぶねのよる方も
しらぬにさはぐそでのみなとを

（新拾遺）

2　『筑陽記』

〝袖湊（自上古名所也）　往昔唐船を繋し所也。今ハ川端町と云所に織き溝川に小橋あり。古の湊の遺跡也とて湊橋と号す。此川筋市中を北に流れて石堂川に入ル。昔ハ此川より西ハ入海にて其形衣の袖に似たるとて号けるとかや。又の名ハ冷泉津と云。八十五代後堀河院貞応元年人魚と云怪き大魚此湊に標寄る。達叡聞天下吉兆の勘文也とて冷泉の亜相下向也。因而爾云と也。（中　略）

〝沖　浜　博多西浜を云。往昔袖の湊の沖に有故云来る成へシ。

（中　略）

○鏡天満宮（在袖湊川端町）　縁起云、菅承相綱輪より此所に移り座まし、暫休らひ鏡に向ひ給ひて

鏡にもなき罪科は見えやらてやつれ姿のかすむ春かな

肖像を自刻置玉ふ。因て宮居を営み鏡天神と祠之。嘗而此所伝教大師草創の名藍の地也。延暦年中大師入唐の為当地に下向、連日風波あれて出帆の期なし。大師心中に大聖不動に祈願す。明王の加護掲焉にして矜加羅制多迦虚空に現し忽順風に大洋を渉て顕密の順を得。帰朝の時明王の尊像を一刀一礼に彫刻し建寺て明王山冷泉寺と榜して安置之。其後代変り年移り寺院廃絶して今は其跡もなし。

目次

	編者	書名	成立時期	刊本	頁
1	貝原益軒	『筑前名寄』	元禄四年(一六九一)	『益軒全集』四巻	4
2	安見有定	『筑陽記』	宝永二年(一七〇五)	聖福寺文庫(巻一・二のみ)	4
3	貝原益軒	『筑前国続風土記』	宝永六年(一七〇九)	『益軒全集』四巻・『福岡県史資料』続四輯	5
4	末永虚舟	『筑前国名所記』	〃	なし	9
5	鶴田自反	『博多記』	享保十七年(一七三二)ごろ	〃	11
6	熊本敬郷	『博多古説拾遺』	元文元年(一七三六)ごろ	『日本都市生活資料集成』港町Ⅱ	11
7	津田元顧・元貫	『石城志』	明和三年(一七六六)	『筑紫史談附録』	12
8	加藤一純・鷹取周成	『筑前国続風土記附録』	寛政十年(一七九八)	文献出版刊	16
9	青柳種信ほか	『筑前国続風土記拾遺』		影印本(同刊行会)	17
10	臼井匡胤ほか	『福岡県地理全誌』	明治十年(一八七七)	なし	18
11	末永茂世	『筑前旧志略』	明治十九年(一八八七)	『筑前史料叢書』	20
12	山崎藤四郎	『石城遺聞』	明治二十二年(一八八九)	福岡市三養堂刊	20

は「東北の方はひろく、西北の方はせはし」として、「東北の入海」が「西北の大海」に通じていたという理解をしている（七～八頁）。つまり、益軒が考えた袖ノ湊は、博多の東側の方に大きく口をあけていたのである。その他の地誌もおおむねこの理解によっているが、2の『筑陽記』はこれとは逆の理解をしている。すなわち、博多の西端の川端町に「織き溝川」があり、「昔ハ此川より西ハ入海にて其形衣の袖に似たるとて号けるとかや」（四頁）として、袖の湊は博多の西側に大きく口をあけていたとするのである。近世の博多絵図には、袖ノ湊の位置を記したものがあるが、博多の東側にあったとするものが多い。しかし、古い絵図の中には、西側にその位置を記したものもあり、その位置の画定には、さらに綿密な検討が必要であろう。

また益軒は、袖ノ湊の現状について、「今は入海なくなり、其跡のみわつかに残りて、横一間許なる溝、東西に通せり。今是を大水道と号す。」と記している（五頁）。つまり、宝永期には袖ノ湊はなくなり、博多の東西を貫流する溝＝大水道がその名残りとして存在するというのである。この大水道と称された溝は、その後呉服町の勝野氏の屋敷地のために、呉服町付近で一部埋め立てられ、享保期には貫流しなくなっていたが（十一頁『博多記』）、明和元年（一七六四）松屋利八がこれをいたみ、貫通せんことを藩に訴え、それが許されて本来のように貫通したという（十三頁『石城志』）。近世後期にもこの溝は博多の東西を貫流していた（十七～八頁）。その後、明治十三年に至り、博多の有志の寄附金をもって、この溝の一部に石蓋を覆い、「便路を開」いた（二〇頁『石城遺聞』）。また、博多の片原町にある港橋（湊橋）は、袖ノ湊にかつて掛かっていた橋の名残りであるとするが（八頁）、その位置については必ずしも一定していない（十四頁『石城志』）。

袖の湊に関する記事は、『石城志』が最も詳しいが、この『石城志』は貝原益軒の説を下敷にして、それと相反する理解をする『博多古説拾遺』を批判している。このほか、博多の地形についてのべ、「殊に、西町・呉服町辺の地を穿つ事深ければ、漂澪、或は船具の類出る事ま、多し。」と考古学的知見を記していることは注目される。

以上、簡単に、袖の湊に関する地誌の理解を記したが、その時期についていずれの地誌も明示していない点は、問題であろう。今後検討されるべきである。また、袖ノ湊の理解は、古代・中世における博多周辺の地形認識と深く関わっている。近世において博多と箱崎松原の間を流れた比恵川（石堂川）は、昔は住吉と博多の間を流れ、瓦町の西で那珂川と合流し、博多の東北には元来川はなく、袖の湊の入海があった、という貝原益軒の見解に代表されるように（八頁）、袖ノ湊の位置及び時代を画定するためには、同時に、博多周辺の河川や入海の状況といった地理景観の復元を余儀なくさせられるのである。これは極めて困難な問題であり、文献史学のみで解決するものではない。その究明には、考古学、地理学、地質学、国文学といった隣接諸科学との交流が不可欠であることは言うまでもない。

（佐伯弘次）

解　題

博多の袖ノ湊に関する資料は、大別すると文献史料、文芸資料、地誌、絵図の四つに分かれる。その中で最も記事の豊富なものは、近世から近代にかけての地誌類であり、これを「博多袖ノ湊関係史料集(1)地誌編」として本書に収録する。

博多袖ノ湊に関する近世・近代の地誌は多数あるが、本史料集では、それらの中から代表的なものを十二編選び収録した。もとよりこれらの地誌の記事をそのまま史実とすることはできないが、地誌の編纂者が、伝承や歴史学・地理学的な知見にもとづき、袖ノ湊をどのように認識したかが如実に示されている。そのような近世・近代の袖ノ湊観は、今日の袖ノ湊研究にも大きな示唆を与えるものと考えられる。

博多に関する近世地誌は、時代的に三期に分類される。第一期のものは、元禄～宝永期に編纂された1～4であり、3の『筑前国続風土記』（以下『続風土記』と略す）を代表とする。第二期のものは5～7であり、第一期の地誌類のように筑前一国にわたるものではなく、博多のみを記述の対象とする点に特色がある。それらを代表するのは7の『石城志』であろう。第三期のものは、近世後期の福岡藩による『続風土記』再吟味の結果として成立した8・9である。いずれも叙述の網ら性・客観性を主眼としており、その史料的価値は高いが、博多に関する記事は『続風土記』を出ないものが多い。伊藤常足の『太宰管内志』は藩撰地誌ではないが、成立時期からするとこのグループに入れられる。

1～9の近世地誌を代表するのは『続風土記』である。その博多に関する記事は、網ら的ではないが、内容は詳細で、達見に満ちており、博多研究の嚆矢とも言うべきものである。後世の地誌の多くはこれを参照しており、その影響は極めて大きい。この『続風土記』を中心に、近世における袖ノ湊観をみてみよう。

袖ノ湊（袖湊）は「いにしへ博多にありし入海」（七頁）であり、その名称の由来については、「此入海博多の中を打ちめくりて、袖のかたちのことくなりしかは、袖湊と名付しにや」と記している（八頁）。往昔博多にあった入海が、着物の袖の形をしていたので「袖湊」と称したというのであり、他の地誌もこの説と同一である。また、袖ノ湊については、「唐船の入し港なり」（七頁）という性格規定をしている。しかし、その規定は文献史料から具体的に導きだされたものではなく、和歌などの文芸資料の分析結果によるものであろう。ただし、いずれの地誌も、袖ノ湊の存在時期については明示していない。

次に、袖ノ湊の具体的な位置・形状について、貝原益軒は、博多の「南北の中程に、古は東西に通れる入海あり」とし（五頁）、この「入海」＝「中海」

付編

博多袖ノ湊関係史料集(1)

地誌編

神奈川県立金沢文庫
福島　金治
福岡大学
佐伯　弘次

福　岡　市
高速鉄道関係埋蔵文化財報告VI
博　　多
1987(昭和62)年3月31日

発　行　福岡市教育委員会
福岡市中央区大名1丁目7-23

印　刷　祥文社印刷株式会社
〒812 福岡市博多区博多駅南4丁目15-17